中室田岩城遺跡

榛名南麓2期地区農山漁村地域整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

群馬県高崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

中室田岩城遺跡

榛名南麓2期地区農山漁村地域整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

群馬県高崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

群馬県が実施する榛名南麓２期地区農山漁村地域整備事業による広域農道は、すでに１期地区と２期地区箕郷工区の高崎市箕郷町矢原から中室田町に至る約12.7㎞の区間が供用されているところです。

高崎市上室田町から中室田町に至る延長約3.8㎞の２期地区榛名工区区間内に所在する中室田岩城遺跡の発掘調査は、平成30年度に実施され、翌令和元年度に整理事業を実施し、このほど、発掘調査報告書刊行の運びとなりました。

中室田岩城遺跡の発掘調査では、縄文時代早期の屋外炉、縄文時代中期の竪穴建物、時期不明の土坑、ピットなどの遺構が発見されました。とりわけ、高崎市室田地区においてはじめての事例となった縄文時代中期の敷石竪穴建物の発見や、群馬県内において出土が極めてまれな弥生時代前期の土器がまとまって出土したことは特筆すべきであり、地域の歴史を紐解く上での貴重な資料が、また一つ加えられるに至りました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでには、群馬県県土整備部、群馬県高崎土木事務所、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、地元関係者等の皆様方に多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げますとともに、本書が地域における歴史の解明や、文化財の保存・活用、地域文化の振興に広く役立てられますことを願いまして、序といたします。

令和元年11月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理　事　長　　中 野 三 智 男

例　　言

1．本書は、平成30年度榛名南麓２期地区農山漁村地域整備事業に伴い発掘調査された中室田岩城遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡は群馬県高崎市中室田町942-1、947、948-1、948-2、961-1、962、966-1、967、971-2に所在する。

3．事業主体は群馬県高崎土木事務所である。

4．調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

5．発掘調査の期間と体制は次のとおりである。

履行期間：平成30年９月１日～平成31年１月31日

調査期間：平成30年10月１日～平成30年11月30日

調査担当：黒田　晃(主任調査研究員)、麻生敏隆(専門調査役)

遺跡掘削工事請負：(株)飯塚組

地上測量委託：アコン測量設計株式会社

6．調査面積は3,187㎡である。

7．整理事業の期間と体制は次のとおりである。

履行期間：令和元年５月１日～令和元年11月30日

整理期間：令和元年５月１日～令和元年９月30日

整理担当：高島英之(専門員(総括))

8．本書作成担当は次のとおりである。

編集　　高島英之

本文執筆　　高島英之

遺物観察・遺物写真撮影

縄文、弥生土器：関口博幸(主任調査研究員)

石器・石製品　：津島秀章(資料２課長)

土器・陶磁器　：矢口裕之(資料１課長)

デジタル編集　：齊田智彦(主任調査研究員・資料統括)

9．石材同定は飯島静男氏(群馬地質研究会)に依頼した。

10．２区２面遺構外出土弥生時代前期深鉢(第34図64)の放射性炭素年代測定業務はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その成果は本書第５章に示した。

11．弥生土器については、当事業団大木紳一郎(専門調査役)からも指導・助言を得た。

12．出土遺物および写真・図面等記録類は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

13．発掘調査および報告書作成には、次の関係機関にご助言をいただいた。

群馬県教育委員会、高崎市教育委員会

凡　例

1．本報告書に用いた遺構名称は、発掘調査時の名称を踏襲した。

2．本報告書に用いた座標・方位は、すべて国家座標第Ⅸ系(世界測地系)による。主軸方位等の計算にもこれを用いた。

3．本報告書の遺構図版縮尺は以下の通り。

遺構平面図　　竪穴建物1/30・1/60、屋外炉1/30、河道1/100、柵列1/40、土坑1/40・1/60、ピット1/40

遺構断面図　　竪穴建物1/30・1/60、河道1/50、柵列1/40、土坑1/40・1/60、ピット1/40

4．本報告書の遺物図版縮尺は以下の通り。ただし、遺物によってはこの限りではない。

縄文・弥生時代土器１/3・1/4、石製品1/1・1/2・1/3、陶磁器・近世土器1/3

5．本報告書のスクリーントーン表現は以下の通り。

［攪乱］ 　［土器］ 　煤　［石器］ 　弱い磨り面　 　強い磨り面

6．本報告書中の遺構断面図の標高値は、原則として断面図上に「Ｌ＝○○m」のように表記した。

7．本報告書における土層断面図及び遺物観察表に記した色調表現は、農林水産省水産技術事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』1988によった。

8．本報告書におけるテフラ(火山噴出物)名称は町田　洋・新井房夫編『火山灰アトラス』(東京大学出版会1992)によった。なお、略号は以下の通りである。

As-A…浅間A、As-B…浅間Ｂ、As-C…浅間C　、As-YP…浅間板鼻黄色、Hr-FP…榛名二ツ岳伊香保

目　次

序
例言
凡例
目次
挿図・表・写真図版目次

第１章　調査に至る経緯、方法と経過 ・・・・・・・・・1
　第１節　調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・3
　第３節　発掘調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・5
　　第１項　座標の設定 ・・・・・・・・・・・・・・・5
　　第２項　調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・5
　　第３項　遺構測量・・・・・・・・・・・・・・・・5
　　第４項　遺構写真撮影 ・・・・・・・・・・・・・・5
　第４節　整理作業の経過と方法・・・・・・・・・・・5
第２章　周辺の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　第１節　地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・7
　　第１項　地理・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　　第２項　地勢・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　第２節　歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・10
　　第１項　旧石器時代・・・・・・・・・・・・・・・10
　　第２項　縄文時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・10
　　第３項　弥生時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・11
　　第４項　古墳時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・12
　　第５項　古代・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
　　第６項　中世・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
　　第７項　近世・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　第３節　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第３章　検出された遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・24
　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
　第１節　時期不明の遺構・・・・・・・・・・・・・・25
　　第１項　柵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　　第２項　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　　第３項　ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・42
　　第４項　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・47
　第２節　縄文時代の遺構・遺物と
　　弥生時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・51
　　第１項　竪穴建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・51
　　第２項　屋外炉 ・・・・・・・・・・・・・・・・・64
　　第３項　河道・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
　　第４項　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
　　第５項　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・68
第４章　旧石器確認調査 ・・・・・・・・・・・・・・・80
第５章　２区２面遺構外出土弥生時代前期深鉢
　　下半部片放射性炭素年代測定結果・・・・・・81
第６章　調査成果の整理とまとめ ・・・・・・・・・・・83
　第１節　時期不明の遺構・・・・・・・・・・・・・・83
　第２節　弥生土器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・84
　第３節　縄文時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・85
まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
遺物観察表・非掲載遺物集計表 ・・・・・・・・・・・・88
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡の位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２図　調査区設定図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第３図　周辺地形分類図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第４図　周辺遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第５図　基本土層模式図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第６図　１区１面全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第７図　２区１面全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
第８図　１区１号柵列 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第９図　１区１～５号土坑及び５号土坑出土遺物 ・・・・・・・・・・・ 30
第10図　１区６・８・９号土坑、２区12・13号土坑
　　及び９号土坑出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第11図　１区14・15・17・20・21・25号土坑、
　　２区16号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第12図　１区26～29号土坑及び26号土坑出土遺物 ・・・・・・・・・・・ 37
第13図　１区30～32号土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第14図　１区33～36号土坑、２区37号土坑・・・・・・・・・・・・・・・ 41
第15図　１区５～11・19号ピット、２区12・13号ピット ・・・・・・・・ 44
第16図　２区14・15・17・18号ピット、
　　１区16・20～23号ピット・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
第17図　２区30号ピット、１区42・43号ピット ・・・・・・・・・・・・・ 49
第18図　１区１面遺構外出土近世遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第19図　１区２面全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
第20図　１区２号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
第21図　１区２号竪穴建物出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第22図　１区２号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
第23図　１区３号竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
第24図　１区３号竪穴建物出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
第25図　１区５号竪穴建物、出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・ 63
第26図　１区５号竪穴建物出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
第27図　１区１号屋外炉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
第28図　２区１号河道 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
第29図　４区10・11号土坑、１区19号土坑・・・・・・・・・・・・・・・ 67
第30図　１区１面遺構外出土縄文時代遺物・・・・・・・・・・・・・・・ 68
第31図　１区２面遺構外出土縄文時代遺物（１）・・・・・・・・・・・・ 69
第32図　１区２面遺構外出土縄文時代遺物（２）・・・・・・・・・・・・ 70
第33図　１区２面遺構外出土縄文時代遺物（３）・・・・・・・・・・・・ 71
第34図　２区２面遺構外出土弥生時代前期深鉢・小型壺 ・・・・・・・・ 74
第35図　２区２面遺構外出土縄文時代土器（１）・・・・・・・・・・・・ 75
第36図　２区２面遺構外出土縄文時代土器（２）・・・・・・・・・・・・ 76
第37図　２区２面遺構外出土縄文時代土器（３）、
　　縄文時代石器、弥生時代土器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
第38図　３区１面表土出土弥生時代土器 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 78
第39図　４区２面遺構外出土縄文・弥生時代土器 ・・・・・・・・・・・・ 79
第40図　旧石器確認調査トレンチ配置図、
　　６号トレンチ土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80
第41図　暦年代較正結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
第２表　検出遺構数集計表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第３表　放射性炭素年代測定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82
第４表　遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
第５表　非掲載近世～近・現代陶磁器・土器類集計表・・・・・・・・・・ 94
第６表　非掲載縄文・弥生土器集計表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
第７表　非掲載縄文時代石器・剥片集計表・・・・・・・・・・・・・・・・ 95

写真図版目次

PL.1　1．調査区から東側施工済み箇所を望む(西から)
　　2．調査区周辺風景(西から)
PL.2　1．調査着手前(東から)
　　2．調査着手前(西から)
PL.3　1．1区東半部1面全景(北東から)
　　2．1区西半部1面遺構検出状況(西から)
PL.4　1．2区北半部1面検出状況(南から)
　　2．2区南半部1面検出状況(西から)
PL.5　1．3区南東部1面検出状況1(西から)
　　2．3区南東部1面検出状況1(南から)
PL.6　1．3区1面検出状況(東から)
　　2．3区1面検出状況(東から)
PL.7　1．1区1号柵全景(南から)
　　2．1区1号柵ピット1全景(南から)
　　3．1区1号柵ピット1土層断面A－A′(南から)
　　4．1区1号柵ピット2全景(南から)
　　5．1区1号柵ピット2土層断面A－A′(南から)
　　6．1区1号柵ピット3全景(南から)
　　7．1区1号柵ピット3土層断面A－A′(南から)
PL.8　1．1区1号柵ピット4全景(南から)
　　2．1区1号柵ピット3土層断面A－A′(南から)
　　3．1区1号土坑全景(西から)
　　4．1区1号土坑土層断面A－A′(西から)
　　5．1区2号土坑全景(南西から)
　　6．1区2号土坑土層断面A－A′(南西から)
　　7．1区3号土坑全景(西から)
　　8．1区3号土坑土層断面A－A′(西から)
PL.9　1．1区4号土坑全景(東から)
　　2．1区4号土坑土層断面A－A′(西から)
　　3．1区5号土坑全景(南から)
　　4．1区5号土坑土層断面A－A′(南から)
　　5．1区6号土坑全景(南から)
　　6．1区6号土坑土層断面A－A′(西から)
　　7．1区8号土坑全景(西から)
　　8．1区8号土坑土層断面A－A′(南から)
PL.10　1．1区8・9号土坑全景(東から)
　　2．1区8・9号土坑土層断面A－A′(南から)
　　3．2区12号土坑全景(西から)
　　4．2区12号土坑土層断面A－A′(北から)
　　5．2区13号土坑全景(北から)
　　6．1区14号土坑全景(南から)
　　7．1区14・15号土坑土層断面A－A′(南から)
　　8．1区15号土坑全景(南から)
PL.11　1．2区16号土坑全景(西から)
　　2．2区16号土坑土層断面A－A′(西から)
　　3．1区17号土坑全景(南から)
　　4．1区17号土坑土層断面A－A′(東から)
　　5．1区21号土坑全景(南から)
　　6．1区25号土坑全景(南から)
　　7．1区25号土坑土層断面A－A′(東から)
　　8．1区26号土坑全景(南から)
PL.12　1．1区26号土坑土層府断面A－A′(西から)
　　2．1区27号土坑全景(西から)
　　3．1区27号土坑土層断面A－A′(西から)
　　4．1区29号土坑全景(南から)
　　5．1区29号土坑土層断面A－A′(北から)
　　6．1区30号土坑全景(南から)
　　7．1区31号土坑全景(北西から)
　　8．1区31号土層断面A－A′(北西から)
PL.13　1．1区32号土坑全景(南西から)
　　2．1区32号土坑土層断面A－A′(南西から)
　　3．1区33号土坑全景(南西から)
　　4．1区33号土坑土層断面A－A′(南西から)
　　5．1区34号土坑全景(西から)
　　6．1区34号土坑土層断面A－A′(西から)
　　7．1区35号土坑全景(南西から)
　　8．1区35号土層断面A－A′(南西から)
PL.14　1．1区36号土坑全景(西から)
　　2．1区36号土坑土層断面A－A′(西から)
　　3．2区37号土坑全景(西から)
　　4．2区37号土坑土層断面A－A′(南西から)
　　5．1区5号ピット全景(南から)
　　6．1区5号ピット土層断面A－A′(南から)
　　7．1区6号ピット全景(南から)
　　8．1区6号ピット土層断面A－A′(南西から)
PL.15　1．1区7号ピット全景(南から)
　　2．1区7号土坑土層断面A－A′(南から)
　　3．1区8号ピット全景(南から)
　　4．1区8号ピット土層断面A－A′(南西から)
　　5．1区9号ピット全景(南から)
　　6．1区9号ピット土層断面A－A′(南から)
　　7．1区11号ピット全景(南から)
　　8．2区12号ピット全景(西から)
PL.16　1．2区12号ピット土層断面A－A′(西から)
　　2．2区13号ピット全景(西から)
　　3．2区13号ピット土層断面A－A′(西から)
　　4．2区14号ピット全景(西から)
　　5．2区14号ピット土層断面A－A′(西から)
　　6．2区15号ピット全景(西から)
　　7．2区15号ピット土層断面A－A′(南西から)
　　8．2区17号ピット全景(西から)
PL.17　1．2区17号ピット土層断面A－A′(西から)
　　2．2区18号ピット全景(西から)
　　3．2区18号ピット土層断面A－A′(東から)
　　4．1区19号ピット土層断面A－A′(南から)
　　5．1区20号ピット土層断面A－A′(南から)
　　6．1区22号ピット土層断面A－A′(南から)
　　7．1区23号ピット土層断面A－A′(南から)
　　8．2区30号ピット全景(西から)
PL.18　1．2区30号ピット土層断面A－A′(西から)
　　2．1区42号ピット全景(北から)
　　3．1区42号ピット土層断面A－A′(北から)
　　4．1区43号ピット全景(北から)
　　5．1区43号ピット土層断面A－A′(北から)
PL.19　1．1区南半部2面検出状況(北から)
　　2．1区南半部2面検出状況(北西から)
PL.20　1．1区南半部2面検出状況(西から)
　　2．3区2面検出状況　(北から)
PL.21　1．1区2号竪穴建物全景(南から)
　　2．1区2号竪穴建物敷石検出状況1　(東から)
PL.22　1．1区2号竪穴建物敷石検出状況2(南西から)
　　2．1区2号竪穴建物土層断面A－A′　(西から)
　　3．1区2号竪穴建物炉全景(東から)
　　4．1区2号竪穴建物炉土層断面F－F′(東から)
　　5．1区2号竪穴建物炉下層土層断面F－F′(東から)
PL.23　1．1区2号竪穴建物下部構造全景(南から)
　　2．1区2号竪穴建物炉掘方全景(南から)
　　3．1区2号竪穴建物ピット1土層断面B－B′(南から)
　　4．1区2号竪穴建物ピット2全景(南から)
PL.24　1．1区2号竪穴建物ピット2土層断面C－C′(南から)
　　2．1区2号竪穴建物ピット3全景(南から)
　　3．1区2号竪穴建物ピット3土層断面D－D′(南から)
　　4．1区2号竪穴建物ピット4全景(南から)
　　5．1区2号竪穴建物ピット4土層断面E－E′(南から)
　　6．1区2号竪穴建物ピット5土層断面M－M′(南から)
　　7．1区2号竪穴建物ピット6土層断面N－N′(南から)

８．１区２号竪穴建物ピット７土層断面(西から)
PL.25　１．１区３号竪穴建物全景(南から)
２．１区３号竪穴建物土層断面Ａ－Ａ′(北から)
３．１区３号竪穴建物炉全景(西から)
４．１区３号竪穴建物炉全景(南から)
５．１区３号竪穴建物炉土層断面Ｉ－Ｉ′(西から)
PL.26　１．１区３号竪穴建物炉掘方土層断面Ｉ－Ｉ′(西から)
２．１区３号竪穴建物炉解体状況(西から)
３．１区３号竪穴建物炉掘方全景(西から)
４．１区３号竪穴建物ピット１全景(西から)
５．１区３号竪穴建物ピット２全景(西から)
６．１区３号竪穴建物ピット２全景(南から)
７．１区３号竪穴建物ピット２土層断面Ｄ－Ｄ′(東から)
８．１区３号竪穴建物ピット3・４全景(西から)
PL.27　１．１区３号竪穴建物ピット５全景(西から)
２．１区３号竪穴建物ピット６全景(西から)
３．１区３号竪穴建物ピット７全景(西から)
４．１区３号竪穴建物ピット８全景(西から)
５．１区３号竪穴建物下部構造検出状況(東から)
PL.28　１．１区５号竪穴建物全景(南から)
２．１区５号竪穴建物炉周囲全景１(西から)
３．１区５号竪穴建物炉周囲全景２(西から)
４．１区３号竪穴建物炉周囲全景３(西から)
５．１区３号竪穴建物遺物出土状況(南から)
PL.29　１．１区５号竪穴建物炉、敷石検出状況(東から)
２．１区５号竪穴建物炉土層断面(東から)
３．１区５号竪穴建物炉掘方全景(東から)
４．１区３号竪穴建物炉検出状況１(西から)
５．１区３号竪穴建物炉検出状況２(西から)
PL.30　１．１区１号屋外炉全景(南から)
２．１区１号屋外炉土層断面(東から)
３．１区１号屋外炉解体状況(南から)
４．１区１号屋外炉掘方全景(西から)
５．１区１号屋外炉掘方土層南面(南西から)
PL.31　１．３区10号土坑(縄文時代)全景(西から)
２．３区10・11号土坑(縄文時代)土層断面Ａ－Ａ′(南から)
３．３区11号土坑全景(南から)
４．１区19号土坑全景(西から)
５．１区19号土坑土層断面Ａ－Ａ′(北から)
６．２区１号河道土層断面Ａ－Ａ′(南から)
７．２区１号河道河床検出状況１(北から)
８．２区１号河道河床検出状況２(西から)
PL.32　１．２区１号河道全景(南から)
２．２区弥生時代前期壺型土器出土状況(西から)
PL.33　１．１区旧石器確認調査４号坑(南から)
２．１区旧石器確認調査５号坑(南から)
３．１区旧石器確認調査６号坑(南から)
４．３区旧石器確認調査１号坑(東から)
５．２区北壁土層断面(南から)
６．２区南壁土層断面(北から)
PL.34　１．１区東壁土層断面(西から)
２．３区南壁土層断面(北から)
３．３区北壁土層断面(南から)
PL.35　１区５・９・26号土坑出土遺物、１区１面遺構外出土近世遺物
PL.36　１区２号竪穴建物出土遺物(１)
PL.37　１区２号竪穴建物出土遺物(２)、３号竪穴建物出土遺物(１)
PL.38　１区３号竪穴建物出土遺物(２)、５号竪穴出土遺物、１面遺構外出土縄文時代遺物
PL.39　１区２面遺構外出土遺物(１)
PL.40　１区２面遺構外出土遺物(２)
PL.41　２区２面遺構外出土遺物(１)
PL.42　２区２面遺構外出土遺物(２)
PL.43　２区２面遺構外出土遺物(３)
PL.44　３区１面表土、４区２面遺構外出土遺物

第１章　調査に至る経緯、方法と経過

第１節　調査に至る経緯

群馬県が平成30(2018)年３月に策定した「はばたけ群馬・県土整備プラン2018-2027」は、群馬が未来に向けて大きくはばたいていくために、平成30(2018)年度から平成39(2027)年度までの10年間において、道路や河川・砂防施設、県立公園、下水道、県営住宅など、ぐんまの社会資本の整備や維持管理を、「どのような考え方で、どのように進めていくか」を示す、群馬県の県土整備分野の最上位計画である。

その基本目標の３として掲げられた「魅力：もっと県土に魅力を」では、「人口減少と高齢化が同時に進行する局面でも都市部から中山間地域に至るまで、誰もが買物や通院など生活に必要なサービスを享受しやすく、安心して豊かな暮らしを持続できるよう、『まちのまとまり』の維持と、それらをつなぐ『多様な移動手段の確保』に取り組み、生活の質の高い魅力ある県土づくりを推進しま

第１図　遺跡の位置図(国土地理院1/200,000地勢図「長野」平成24年５月１日発行、「宇都宮」平成23年６月１日発行を使用)

す。」とし、
政策６「持続可能な地域づくり・まちづくり」
政策７「多様な移動手段の確保」
政策８「良好なまち並みと快適なすまいづくり」
政策９「八ッ場ダム関連事業の促進」
の４項目の政策が提示されている（『はばたけ群馬・県土整備プラン2018-2027』64頁）。

この中の政策６の「持続可能な地域づくり・まちづくり」では、「人口減少と高齢化が同時に進行する局面でも、都市部から中山間地域に至るまで、買物や通院など生活を支えるサービスが享受しやすい『まちのまとまり』を維持し、それらをつなぐ『多様な移動手段の確保』に取り組みます。」として、
施策１「まちのまとまりとネットワークの形成」
施策２「観光ネットワークの構築」
の２施策が示されている（同書65～72頁）。

その中の施策１「まちのまとまりとネットワークの形成」については６項目の要素が示されているが、その一つに「『まちのまとまり』をつなぐ道路」として、「円滑な移動を確保するため、「まちのまとまり」や地域間を結ぶ道路ネットワークの整備・強化に取り組みます。」とあり、平成31年度の主要事業の一つとして「農地までの移動時間や農産物出荷時間の短縮のため、農道をつくります。」ということで、「榛名南麓２期地区（フルーツライン）農道事業（高崎市）」が位置づけられている。

「榛名南麓フルーツライン」は総延長約15㎞の広域農道で、中山間地域では人口流出が続き、森林・里山の荒廃や耕作放棄地の増加が懸念されることから、農林業や観光業など中山間地域における地場産業の振興を図ることを目的とした路線である。

平成６（1994）年に事業採択となり、平成12（2000）年度の公共事業見直しにより１期地区約11.2㎞と２期地区約3.8㎞に分割となったが、１期地区である高崎市箕郷町善地の一般県道榛名山箕郷線との交差点から同中室田町の市道との交差点までの区間は平成15（2003）年度予算をもって完了した。

また、２期地区である高崎市上室田町～中室田町の榛名工区と、箕郷町善地～箕郷町矢原の箕郷工区は、平成15（2003）年に採択となった後、計画の大幅な見直しが行なわれ、平成20（2008）年度から本格的に事業着手され、平成24（2012）年４月21日に箕郷工区が開通した。これによって、現在、約13㎞が完成・供用されており、中室田町の岩城川付近から終点となる一般県道安中・榛名湖線の中室田小学校交差点までの約２㎞のみとなっていた。

事業計画の対象地点が、周知の埋蔵文化財包蔵地である「高崎市H32遺跡（中室田岩城遺跡）」として高崎市の遺跡台帳に登録されている範囲に該当するため、平成27（2015）年２月12日付け高土第863-10号にて、群馬県県土整備部高崎土木事務所長（以下、県高崎土木事務所）から群馬県教育委員会文化財保護課長あて、高崎市中室田町地内の榛名南麓２期地区農山漁村地域整備事業対象地の一部における埋蔵文化財試掘調査が依頼された。

これを承けて群馬県教育委員会文化財保護課（以下、県文化財保護課）が、同年３月16日に第１回目の埋蔵文化財試掘調査を実施したところ縄文時代中～後期頃のものとみられる竪穴建物の一部が検出され、土器片等も出土したため、埋蔵文化財の包蔵を確認した。これによって、県文化財保護課長は同年３月23日付け文財第706-121号にて県高崎土木事務所長に宛てて工事に先立って埋蔵文化財発掘調査が必要な旨を回答した。

その後、第１回目の埋蔵文化財試掘調査が行われた地点以外の工事対象範囲における埋蔵文化財試掘調査の依頼が、平成30年６月11日付け高土第363-１号によって県高崎土木事務所長から県文化財保護課長宛て発給され、同月22日に県文化財保護課が第２回目の埋蔵文化財試掘調査を実施した。その結果、ピットや浅間山を給源の軽石の堆積が確認出来たので、同月26日付け文財第706-43号にて県文化財保護課長は県高崎土木事務所長宛て、今回の試掘調査の対象箇所においても工事に先立って埋蔵文化財発掘調査が必要な旨を回答している。

この後、県文化財保護課、県高崎土木事務所、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下、県埋蔵文化財調査事業団）の３者によって、現地における発掘調査着手にむけての具体的協議に入った。

県高崎土木事務所は同年８月９日付け高土第363-７号により高崎市教育委員会文化財保護課宛文化財保護法94条による周知の埋蔵文化財包蔵地における工事の通知を提出、それを承けて高崎市教育委員会文化財保護課は同日付け第131-22号にて県文化財保護課宛進達した。

県文化財保護課の調整のもと、県高崎土木事務所を委

託者、県埋蔵文化財調査事業団を受託者とする発掘調査の委託契約が締結され、平成30(2018)年10月１日から現地での発掘調査に着手した。

第２節　発掘調査の経過

発掘調査は平成30(2018)年10月１日より開始され、同年11月30日に終了した。調査期間は２箇月間であった。

調査区は北東―南西方向に細長い総延長約150m、幅は約10～22mの範囲で、調査面積は3,187㎡である。調査区の幅が大きく異なるのは、丘陵にかかる部分ではオープンカット工法となるため、必然的に調査区の幅は広くなるのである。

調査対象地は、南北に縦断する生活道路及び地境により便宜的に４区に分割して調査を実施した。

調査は最も北東側に位置する１区から着手されたが、最も検出遺構数が多く、長い時間をかけて調査されたのも１区であった。なお、排土の置き場を確保するため、各調査区の全域を掘削することを避け、各調査区とも順次部分的に表土を掘削・除去しながら遺構の確認及び調査を実施した。

最初に１・４区の調査に着手し、順次２・３区へと調査を拡大していったのであるが、遺構量が多かった１区と２区の調査に、結果的に多くの時間がかけられたというのが実情であった。遺構が検出されたのは最も北東側の１区、北東寄りの２区、最も南西側の４区であった。

南西側の３区からは遺構は全く検出されなかったが、本県では出土がまれな弥生時代前期相当の土器片が20点出土した。１区からは時期不明の柵１条、土坑25基、ピット15基、縄文時代の竪穴建物３棟、屋外炉１基、土坑１基が検出された。

２区からは時期不明の土坑４基とピット７基、縄文時代の河道１条が検出された。また、遺構には伴わないが、本県では極めて類例が少ない弥生時代前期の深鉢及び完形の小型壺各１点が出土しており、注目される。

４区からは縄文時代の土坑２基が出された。

調査日誌抄

10月

１日(月)遺跡視察、打ち合わせ。

２日(火)準備。事務。

４日(木)１区北半部表土掘削。

５日(金)１区北半部表土掘削。

９日(火)１区北半部土坑・ピット調査、写真撮影。
４区表土掘削。

10日(水)１区北半部土坑・ピット調査、写真撮影。
４区表土掘削。

11日(木)１区北半部、４区土坑・ピット調査、写真撮影。１区北半部・４区遺構測量。

12日(金)１区北半部、４区土坑・ピット調査、写真撮影、４区遺構測量。

15日(月)１区北半部、４区土坑・ピット調査、写真撮影、遺構測量。

16日(火)１区旧石器確認調査開始。１区北半部土坑・ピット調査。４区埋め戻し着手。

17日(水)１区旧石器確認調査継続。土坑・ピット調査、写真撮影。

18日(木)１区旧石器確認調査終了、旧石器は確認されなかった。４区土坑調査、写真撮影、調査終了。２・３区表土掘削。

19日(金)２区縄文時代面遺構確認作業。３区近世面遺構確認作業。３区南半部表土掘削。

22日(月)１区南半部表土掘削。２区縄文時代面遺構確認作業。３区近世面遺構確認作業。４区土山整備。

23日(火)１区南半部遺構調査。２区縄文時代面遺構確認作業。４区土山整備。

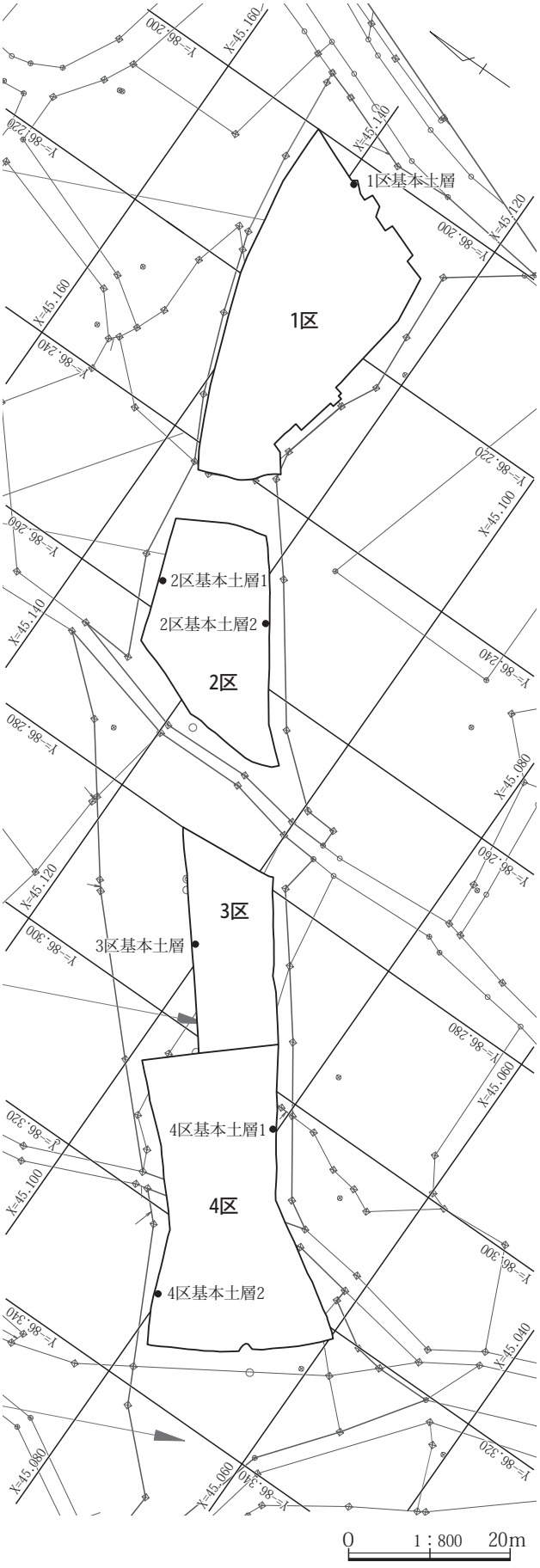
24日(水)１区南半部、２区縄文時代面遺構確認作業。
３区下層遺構確認作業。２・３区土山整備。

25日(木)１区南半部遺構調査。２区弥生時代土器出土、写真撮影。３区下層遺構確認作業。

26日(金)１区南半部遺構調査。２区縄文時代面遺構確認作業。３区東半部下層遺構確認作業、調査終了、埋め戻し着手。

29日(月)１区南半部遺構調査。２区縄文時代面遺構確認作業。３区東半部下層遺構確認作業、埋め戻し。

30日(火)１区南半部遺構調査。２区縄文時代面遺構確認作業。３区東半部下層遺構確認作業、埋め戻し。



第２図　調査区設定図

31日(水) １区南半部遺構掘削。２区縄文時代面遺構確認作業。３区東半部下層遺構確認作業、埋め戻し。

11月

１日(木) １区南半部遺構調査。２区縄文時代面遺構確認作業。３区調査終了、埋め戻し。

２日(金) １区南半部遺構調査。２区南半部・３区埋め戻し。２区北半部表土掘削着手。午後、高崎市教育委員会文化財保護課長視察。

５日(月) １区南半部遺構調査。２区北半部近世面全景写真撮影および測量。

７日(水) １区南半部遺構調査。２区北半部近世面全景写真撮影および測量。１区東半部調査終了、埋め戻し着手。

８日(木) １区南半部遺構調査。２区下層掘削。

９日(金) １区南半部遺構調査。２区下層掘削。

12日(月) １区南半部遺構調査。２区縄文時代面調査着手。１区東半部埋め戻し。

13日(火) １区南半部遺構調査。２区縄文時代面調査。

14日(水) １区竪穴建物掘方、29号土坑等実測。２区北壁土層断面写真撮影・実測、縄文時代面河道調査。

15日(木) １区すべての調査を終了。２区縄文時代面河道調査。

16日(金) １区埋め戻し着手。２区縄文時代面河道調査。

19日(月) ２区全景写真撮影。

20日(火) ２区縄文時代面河道調査。

21日(水) ２区縄文時代面河道調査、全景写真撮影・実測。縄文土器出土状況写真撮影、遺物取り上げ。午後職員会議、担当者１名出席。

22日(木) ２区縄文時代面河道調査、２回目の全景写真撮影・実測。２区のすべての調査を終了し、埋め戻し着手。夕方、モルタルセメントによる道路修復作業。

26日(月)現場撤収準備。

27日(火)現場撤収作業。

28日(水)現場撤収作業。

29日(木)現場撤収作業完了、事業団本部にて残務処理。

30日(金)事業団本部にて残務処理。

第３節　発掘調査の方法

第１項　座標の設定

発掘調査に用いた座標は世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第Ⅸ系)であり、10m×10mを基本とし設定した。遺構図中の座標については、座標値の下３桁を「X軸－Y軸」の順で記し、「Ｘ＝38300、Ｙ＝－85000」の場合、「300－000」のように略記した。

第２項　調査の方法

調査対象地は、北東－南西に細長い道路の路線幅内の調査であった。

天明３(1783)年に起こった浅間山大噴火によって降下した軽石As-Aの一次堆積物は検出されず、表土の下にAs-Aを多く含む層が、あるいはブロック状に含む層が存在するに過ぎない状況であった。このAs-Aを多く含む層ないしはブロック状に含む層の下から時期不明の柵、土坑、ピットなどの遺構が検出された。

さらにその下層から検出されたローム面から縄文時代の竪穴建物、土坑等の遺構を検出した。

各区とも調査に際しては近代の盛土をバックフォーによって掘削・除去し、盛土の下からは発掘作業員の人力による掘削を行った。人力で盛土を取り除いた下からは近世の遺構を確認した。１・２・４区では、さらにその下層から縄文時代の遺構を確認した。

確認された遺構は、順次、埋没土層確認用ベルトを任意に設定するか、あるいは半截し、発掘作業員が移植鏝等で掘削した後、遺構断面及び平面測量及び写真撮影等を行い、実測図及び写真によって記録した。

遺構確認、遺構掘り下げの指示、土層観察、遺構及び土層断面の写真撮影は調査担当者が行った。

各遺構の土層断面図、遺構平面図、遺物出土位置の記録・図化は、調査担当者の指示と立ち合いの下、測量業者に委託して行った。

遺構番号は､今次調査における通し番号とした。また、調査過程において出土した遺物については、出土した遺構ごとに出土地点を記録し、整理・集約した上で、洗浄および出土遺跡・遺構・出土地点等に関するデータを注記する作業を業者委託し、業者から提出を受けた成果品については、発掘調査担当者が逐次、点検・照合し、受領した。

調査終了後の埋め戻しの作業は、基本的にバックフォーを主体とする重機によって行った。

第３項　遺構測量

遺構平面実測図の作成に当たっては、単価契約した測量会社にデジタル測量を委託し、データ及び打ち出し図面の提出を受けた。

遺構断面実測図は、遺構図と同様、データ及び打ち出し図面の提出を受けた。

上記、委託先測量会社により作成されたデジタルデータ成果品および実測原図等は、調査記録として保存されている。

遺構図の縮尺は、断面実測図は1/20、平面実測図は1/40を基本とした。

第４項　遺構写真撮影

発掘調査において、すべての遺構の写真は発掘調査担当者が撮影した。発掘調査の過程で検出されたすべての遺構及び発掘調査に係る各種作業の進捗状況をデジタルカメラで撮影し、ハードディスクにデータを保存、検索用データを作成した。

また、調査記録として、遺構ごとに土層断面、遺物出土状態、遺構全景等の写真撮影を行い、さらに必要に応じて遺構の各部分について接写を行った。

第４節　整理作業の経過と方法

整理作業は、令和元年５月１日から同年９月30日までの５箇月間、県高崎土木事務所の委託を受けて県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理業務の対象となった発掘調査時に作成された遺構図面は、計155枚、記録写真はデジタル画像で計4,124カットであった。

まず、調査現場から搬入された出土遺物コンテナ計７箱分の基本的な分類・仕訳と登録、集計作業を実施した後、石製品の実測、分類、観察作業を実施した。発掘調査記録については、台帳整備、写真記録のチェックを行い、遺構図と写真記録の修正作業を行なった。また、数

度に亘って発掘調査担当者からの調査所見や土層注記について聞き取りを行い、遺構遺物についての理解の深化に努めた。

発掘調査時に作成された遺構平面図・断面図の点検、修正・整合・編集を行い、発掘調査報告書に掲載する遺構図版のデジタルデータ化を図った。

出土遺物については、発掘調査時に洗浄・注記をすべて終えていた遺物を選別、接合・復元し、その後、必要に応じて順次、写真撮影、実測及びトレース、採拓等の作業を実施した。

発掘調査時に撮影された各種遺構写真は、発掘調査報告書に掲載するものを選別し､写真図版の編集を行った。また、これらの作業と並行して、本文原稿・遺物観察表等の執筆を順次進めていった。

遺構図・遺物図・遺構写真・遺物写真・本文原稿・遺物観察表等のレイアウトを作成した後にデジタル編集を行い、本報告書の原稿を作成した。

作成された原稿は、指名競争入札によって落札した業者に委託し、印刷・製本の業務を実施した。なお、業者委託した印刷業務の推移の中で、原稿の校正作業を実施し、完成後、納品を受け、納品された発掘調査報告書は、検品の上、完了検査を実施し、活用に資するために関係各機関へ発送する作業を行う。

また、これらの作業と並行して、調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物の各種図面・写真等の記録類を収納する作業を実施した。

発掘調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物にかかる各種図面及び写真等の調査記録資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに収納・保管されている。

第１章参考文献

群馬県2018『はばたけ群馬・県土整備プラン2018-2027』
https://www.pref.gunma.jp/contents/100059826.pdf
群馬県県土整備部HP、「よくわかる公共事業～榛名南麓２地区フルーツライン」
https://www.pref.gunma.jp/contents/100085263.pdf
群馬県高崎土木事務所HP「農道事業」
https://www.pref.gunma.jp/contents/100106882.pdf
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2018『年報』37、2018
群馬県統合型地理情報システム「マッピングぐんま」
http://mapping-gunma.pref-gunma.jp/pref-gunma/top

第２章　周辺の環境

第１節　地理的環境

第１項　地理

中室田岩城遺跡が所在する高崎市は、関東平野の北西部、群馬県の中央からやや南西に位置する県内では最大の約37.5万人の人口を有する北関東有数の地方都市である。西側は長野県北佐久郡軽井沢町、群馬県吾妻郡長野原町、安中市、富岡市、甘楽町に、南側は藤岡市、東側は佐波郡玉村町、前橋市、北群馬郡吉岡町、榛東村に、北側は吾妻郡東吾妻町にそれぞれ隣接し、群馬県南西部をほぼ横断する地域を占め、市域面積は 459.41㎢である。

市域の西側は、標高1,449mの榛名山掃部ヶ岳山頂を含む榛名山南麓の傾斜地で占められ、榛名山南面の大部分が市域に含まれている。 また市内南西部には利根川が北西－南東方向に流れ、その支流の烏川や碓井川などの大河川が西から東へと流れている。とくに烏川は、その流域のほとんどが高崎市域となっている。

高崎市の中心市街地は、海岸より100㎞以上離れた内陸に位置するにも関わらず、標高は約100m前後と、然程に高いわけではないが、榛名山が位置する市西部には標高1,000m以上の地点も存在している。市域の北西端付近の東吾妻町及び長野原町との境界では標高は約1,700m前後にもなるが、市域の南東端付近である新町の烏川河川敷では標高約60mと、市域内における標高差は1,600m以上と大きい。

高崎市は古くから交通の要衝であり、江戸時代には中山道と三国街道の分岐点、現在の道路交通では、国道17号と18号及び関越自動車道と北関東自動車道の分岐点であり、また鉄道では、上越新幹線と北陸新幹線の、さらには高崎線と上越線、信越本線との分岐点となるなど、全国有数の交通拠点都市である。

平成17(2005)・18(2006)年、近隣町村との合併によって広大な市域を擁するようになり、群馬県内最多の人口を抱える自治体となった。平成23(2011)年４月１日には、群馬県内で２番目の中核市に指定された。

平野部に展開する中心市街地とその周縁部では、北東側に位置する前橋市街地まで続く、典型的な地方中核都市的様相を呈しているが、市域北西側の榛名・箕郷地区や倉渕地区では農山村地域が占める割合が大きくなっている。

高崎市の中心市街地は、江戸時代には高崎藩の城下町として、また、中山道69次中４番目に規模が大きい宿場町として、物資の集散地・商業都市として大いに賑わってきた。

調査対象地である高崎市中室田町を含む高崎市榛名地区は、旧榛名町域に当たる高崎市街地中心部の北西に位置する農山村地域で、高崎市箕郷町、同沖町、同下大島町、同町屋町、同若田町、同倉渕町、渋川市伊香保町、安中市上秋間町、同下秋間町、同板鼻町、吾妻郡東吾妻町に接している。

旧榛名町は、榛名山の火口湖である榛名湖を北境として、榛名山西南域のほとんどを占め、烏川右岸に沿った里見丘陵の尾根を西南境とする地域で、明治21(1888)年の市町村制施行によって建制された群馬郡室田町、群馬郡久留馬村、碓井郡里見村の１町２村が合併し、昭和30(1955)年に発足した。その後、平成18(2006)年10月１日、高崎市に合併された。

第２項　地勢

高崎市榛名地域は、群馬県中西部に聳える榛名山の南麓から西麓に位置している。

群馬県中西部のシンボルともいうべき榛名山は、群馬県域のほぼ中央部に赤城山と並んで県域の地形形成の要とも言える。とくに約５万年前に起こった榛名八崎軽石を噴出したプリニー式噴火では、大規模な室田火砕流が山麓を下った。この時、大量のマグマが噴出したため、噴火口は「榛名カルデラ」と呼ばれる凹地になった。なお、よく知られているように、榛名山は古墳時代後期の６世紀初頭と中葉の２回、大規模な噴火を起こしているが、６世紀中葉に榛名二ツ岳伊香保テフラHr-FPを噴出した噴火を最後に、現在までのところ噴火は確認されていな

い。

高崎市榛名地区は、榛名山の山頂部から南半分の地域に当たり、南は里見丘陵尾根筋までの地域である。この地域の南寄りを烏川が東西に横断して流れ、その南側には河岸段丘が形成され、さらにその南側には里見台地と丘陵が続く。北側は榛名山南麓の傾斜地及び台地が占めている。

この地域の地形形成に大きな影響を及ぼした烏川は、長野県との県境に近い鼻曲山の山麓に源を発し、下流で碓氷川、鏑川、神流川等と合流し利根川へと注ぐ。高崎市榛名地区は、この烏川の上～中流域に当たる。烏川は、榛名地域の西側では狭く深い谷を形成しており、東側ではやや幅広い氾濫原を形成する。

烏川北岸は、榛名山の南麓地形に属している。山体の裾野は高原状の地形を呈し、そこから烏川へと急激に落ち込む崖線となっている。崖線の下には数段の河岸段丘が形成されているわけであるが、室田、久留馬地区では一部に下位段丘面が認められるものの、上・中位段丘面の存在は明らかではない。最下段の氾濫原は河原となっており、農耕には不向きな土地と言える。下位段丘面に上がるとやや安定した平地が形成されており、段丘面が涌出する地下水が集まって台地の下端に沿って小河川を形成しており、水田耕作が可能である。

一方、烏川中流域では山麓地形は長く広く延び、台地には小規模な谷津が細かに開析されている。

また、烏川南岸の里見地区では河岸段丘が形成されているが、里見丘陵の北側に上位段丘面が認められるが、その形成年代は明らかではない。中位段丘面は里見地区に東西に延びる、約５万年前の榛名山の大規模な火山活動によって発生した室田火砕流によって形成された里見台地の下になっているとみられている。

下位段丘面は高崎市下室田町高権や本郷地区で確認できるが、段丘面上に約2.4～2.6万年前の関東ローム層が堆積しているので、室田火砕流の発生時期からかなり時間が経ってから形成されたものと考えられる。

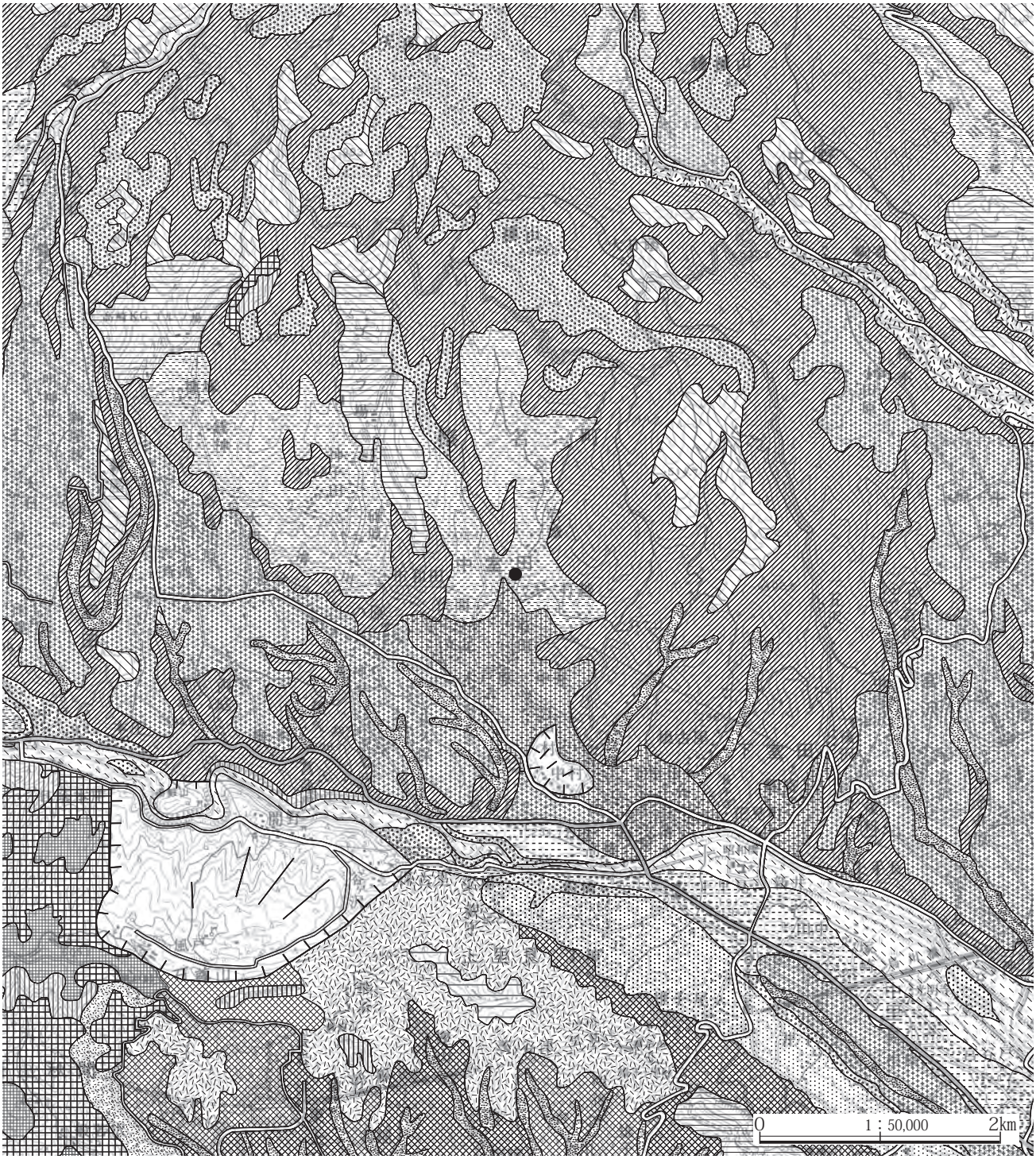
このように、河岸段丘と火砕流台地が複雑に入り組んだ地形となった原因は、室田火砕流によってそれ以前の地形が覆い尽くされてしまったからであるとみられている。この室田火砕流は、榛名山を源とする中小河川に乗って上室田・中室田から宮沢・十文字・本郷にかけての地域を流れ下り、烏川を越えて里見地区まで押し寄せた。

まさに、高崎市榛名地域における後期旧石器時代から現在に至る人類の営みの基盤となっている土地のほとんどが、この室田火砕流の上にあるといってよい。この室田火砕流によって形成された丘陵・台地上には、その後に起こった榛名山の噴火、あるいは周辺の赤城山、浅間山等の活発な火山活動によって、さらに厚く火山噴出物が堆積していった。縄文時代以降も、浅間山では少なくとも４～５回の火山活動があったことが確認されている。室田火砕流によって形成され、その後も厚く周辺火山の噴出物が堆積した台地を、大小の河川が長い年月に亘って浸食を繰り返し、大小の谷を造り出していった結果、形成されたのが、現在の榛名山南麓に展開する、丘陵の間を縫うように谷戸が入り組んだ独特の地形と言うことができる。

烏川の谷筋はこの地域の重要な交通路となっており、上流の倉渕地域を介して吾妻地域と、さらに群馬郡、碓氷郡などの地域と直接繋がっていたことも、地域の生業や人々の交流、地域社会形成などに重要な役割を果たしていたものと考えられる。

中室田岩城遺跡は、室田火砕流によって形成された榛名山南麓の室田台地の間を南流する岩城川東岸の台地上に位置し、標高は約328～334mである。西側の岩城川に向かう緩やかな傾斜地に立地している。

なお、上記は『榛名町誌　通史編』に依った。



第３図　周辺地形分類図（国土交通省国土政策局国土情報課５万分の１都道府県土地分類基本調査（榛名山）を使用）

第２節　歴史的環境

第１項　旧石器時代

榛名山麓の丘陵地帯で人類が生活するようになったのは約３万年前の氷河時代の頃からと考えられている。厳しい自然環境の中で、榛名山麓や里見丘陵の広大な山麓原野が、人々の活動の格好の舞台となったとは想像に難くないが、本遺跡の周辺地域で旧石器が検出されたのは、現在までのところ、本遺跡の南東約5.3㎞に位置する三ツ子沢町三ツ子沢中遺跡と、本遺跡の南東約6.1㎞に位置する白岩町白岩民部遺跡の２遺跡のみである。いずれも北陸新幹線建設に伴う発掘調査によって平成６・７(1994・95)年度に当事業団によって発掘調査され、浅間室田軽石層のさらに下層から後期旧石器時代のナイフ形石器を中心とする多くの遺物が出土した。

三ツ子沢中遺跡は烏川左岸の十文字台地上、榛名山麓を南北に流れる頭無川と谷津川によって解析された舌状台地の一つに立地し、暗色帯上面に堆積する姶良Tn火山灰(AT)層直下から出土した小形ナイフ形石器を中心に、ドリル、スクレイパー、局部磨製石斧などと共に敲石、磨石、凹石等計500点以上が出土し、石器が集中するブロックが10単位確認された。

白岩民部遺跡は、前述の三ツ子沢中遺跡と同様、十文字台地上に立地しており、東西両川はそれぞれ北西-南東方向に流れる小堀川と見立川によって開削されている。

旧石器は２地点から出土し、浅間-板鼻褐色軽石(As-BP)層下のローム層からは黒曜石製のエンドスクレイパーが１点出土した。このローム層の下層に浅間-室田軽石(As-MP)層と暗色帯が堆積しているが、この暗色帯から比較的小形のナイフ形石器を主体とし、彫刻刀形石器や敲石など計700点以上の石器が出土した。この暗色帯から出土した石器群は、前述の三ツ子沢中遺跡出土の石器群と同時期のもので、ブロックは９単位検出された。

両遺跡出土の旧石器は、いずれも群馬県編年第Ⅰ期に属するものである。

第２項　縄文時代

高崎市榛名地域における縄文時代遺跡の分布は、概ね、榛名山体に源を発し南流する榛名川、滑川、駒寄川、谷津川、頭無川、高浜川、見立川、小堀川等の小河川に沿った台地上に立地している。

１．草創期

縄文時代草創期の爪形文土器片が１点、本遺跡から南東に約６㎞の白岩町の白岩大門下遺跡から出土している以外、この地域における縄文時代草創期の遺構・遺物は現在のところ発見されていない。

２．早期

遺跡数と遺物の量は少なく、集落の存在を明確にするようなものではない。発掘調査で縄文時代早期の土器が出土した遺跡としては、本遺跡の南東約5.5㎞に位置し、平成７(1995)年度に榛名町教育委員会が発掘調査した高浜町中尾根遺跡、旧石器が出土した前掲の三ツ子沢中遺跡、本遺跡の南東約6.4㎞に位置し、当事業団が北陸新幹線建設に先立って平成５・６(1993・94)年度に発掘調査した白岩町白岩浦久保遺跡などが挙げられる。いずれの遺跡においても、縄文時代早期の土器は遺構外からの出土である。

中尾根遺跡からは早期前半の撚糸文系土器・押型文系土器から早期中葉の沈線文系土器が出土している。三ツ子沢中遺跡からは早期前半の撚糸文系土器が、白岩浦久保遺跡からは早期後半の条痕文系土器が出土している。

３．前期

この時代になると群馬県内でも遺跡数が急に増加する。榛名山の山裾の小規模な台地に集落が点在するようになる。縄文時代早期～前期前半の時期は気候が温暖化し、定住化が促進された。

本遺跡の南南東約２㎞に位置する下室田町中村遺跡は烏川北岸の、室田火砕流によって形成された台地上に立地する遺跡であるが、平成元(1989)年度に榛名町教育委員会が行った発掘調査で前期中葉の羽状縄文系土器を多数出土した竪穴建物が３棟検出され、当該期の良好な資料が得られた。他に前掲の三ツ子沢中遺跡や高浜向原遺跡でも前期中葉の集落が検出されている。

前期後半の諸磯式土器が出土する集落は、本遺跡の東南東約2.6㎞に位置し、昭和60(1985)年度に榛名町教育

委員会が発掘調査した下室田町根古屋遺跡や、本遺跡の南約1.7㎞に位置し、平成５・７(1993・1995)年度に榛名町教育委員会が発掘調査した下室田町弁天原遺跡などから検出されている。とくに下室田町弁天原遺跡から検出された8Ｔ－１号竪穴建物は、軸長約４ｍ程度の小型の竪穴建物ながらも残存状態も良く諸磯ｂ式土器11個体が出土した。また、前掲の白岩浦久保遺跡から検出された土坑からは諸磯ｂ式土器の良好な一括資料が検出され、さらに前期後半の玦状耳飾りが遺構外ながらも出土している。

高崎市榛名地域では、この時期の拠点的な大集落はまだ発見されてはいないものの、尾根上の小規模集落が群在するなかで、ある程度の規模を保った集落は存在していたようである。

４．中期

高崎市榛名地域では、現在までのところ中期の大型環状集落遺跡は検出されていない。

本遺跡周辺における縄文時代中期前半～中葉の代表的な集落遺跡としては、本遺跡の南東約3.3㎞に位置し、平成３(1991)年度に榛名町教育委員会が調査した宮沢町岡谷戸遺跡と、本遺跡の西北西約2.1㎞に位置し60・62(1985・1987)年度に榛名町教育委員会が発掘調査した上室田町岡谷戸遺跡が挙げられる。両遺跡とも中期初頭から中葉末の土器が豊富に出土しており、大型の環状集落遺跡ではないものの、山麓斜面に弧状を呈するように竪穴建物が営まれており、中期環状集落の先駆けの段階のものと考えられている。

宮沢町岡谷戸遺跡は､馬の背状の狭い台地上に立地し、斜面に展開する縄文時代中期集落の例として稀有な存在である。４棟の竪穴建物は南側の急斜面に、33基の土坑は北側の斜面からそれぞれ検出され、竪穴建物群と土坑群の占地が明確に分別されていた。出土土器のほとんどは中期前半の阿玉台式であった。

上室田町大和田遺跡は、前述の宮沢町岡谷戸遺跡より若干新しい時期である中期中葉から中葉末にかけての集落で、検出された竪穴建物１棟と土坑31基は、岡谷戸遺跡と同様、斜面に立地しているが、岡谷戸遺跡のように、竪穴建物と土坑群との明瞭な占地区分は見出し難い。勝坂３式終末段階の土器が出土している。

中期後半の遺跡としては、前掲の三ツ子沢中遺跡や高浜広神遺跡、本遺跡の南西約1.4㎞に位置し、平成５年度に榛名町教育委員会が発掘調査した中室田町又倉遺跡などが挙げられるが、集落のごく一部や遺物包含層の調査に止まっており、遺跡の全容は不明である。

中室田町又倉遺跡からは、土坑より加曽利Ｅ３式の土器が出土している。

また、この、中期後半の時期には、群馬県内では他の地域に先駆けて柄鏡形敷石竪穴建物が造られており、当該期の柄鏡形敷石竪穴建物が高浜広神遺跡から検出されている。

この時期の集落としては、中期弧状集落から環状集落への変化を僅かながらでも垣間見れるのではないかと考えられている。榛名地域における縄文時代集落の特性として、内陸山間地ないし丘陵性集落における定住と移動の反復を見ることができる。

５．後・晩期

縄文時代後・晩期の遺跡は、高崎市榛名地域では少ない。前掲の三ツ子沢中遺跡や高浜広神遺跡からは、称名寺式期の土器が出土した後期初頭の敷石竪穴建物が検出されている。この地域では、堀之内式や加曽利Ｂ式土器の出土は少なく、安行１・２式などの後期後葉段階の土器の出土はさらに少ない。

晩期の遺跡はさらにと少なく、前掲の大和田遺跡と、本遺跡の南東約4.7㎞に位置し、平成４～７(1992～1995)年度に当事業団が北陸新幹線建設に先立って発掘調査した中里見根岸遺跡では、晩期終末千網式や氷式を中心に、長野県の佐野２式などの土器片が若干出土している。

第３項　弥生時代

１．前期

高崎市榛名地域における弥生時代前期の様相は、検出遺構はほとんどなく、遺物もほとんど出土していないので、あまり明らかではない。そうした中で、本遺跡において遺構から出土したわけではないものの、完形の小型壺を含む、弥生時代前期の土器片が多数出土していることの意義は、当該地域のみならず群馬県域における弥生時代前～中期研究に重要な資料を加えたことになる。

平成４～６(1992～94)年度に当事業団及び榛名町教育委員会が発掘調査した、本遺跡の南東約4.5㎞に位置す

る中里見中川遺跡からは、弥生時代前期沖式土器片や石鏃が出土し、湿地に遺る人の足跡が検出された。弥生時代前期に水田耕作が行われていた可能性が示唆されている。この遺跡からは弥生時代中期後半の栗林式土器も僅かながら出土しており、さらに古墳時代前期の３世紀後半～末に降下した浅間Cテフラ(As-C)下から明瞭な畦畔を有する水田の遺構が検出され、縄文時代晩期末或いは弥生時代前期から連綿と水田が営まれてきた可能性が考えられる。

烏川北岸に位置する前掲の大和田遺跡からは炉を中心として、円形状にピットが廻る状態で検出され、縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけての土器片が僅かに出土している。縄文時代晩期末～弥生時代前期の掘り込みが浅い竪穴建物か、平地建物である可能性が指摘されている。

２．中期

高崎市榛名地域における弥生時代中期の様相も前期と同様、あまりよくわかっていない。

本遺跡の南東約4.5㎞に位置し、当事業団が北陸新幹線建設に先立って平成４～６(1992～94)年度に発掘調査した里見台地上の中里見原遺跡や、本遺跡の南約2.3㎞に位置し、烏川左岸の下位段丘面に立地する下室田宮谷戸遺跡などでは、中期の再葬墓が検出されている。

また、本遺跡の南東約８㎞に位置する、烏川南岸の里見台地上の下里見中原遺跡では、町道建設に伴って掘り込まれた崖面から弥生時代中期中葉の土器が出土する竪穴建物状の掘り込みが発見され、一部に床面らしき硬化面も見られたことから、弥生時代中期の竪穴建物であった可能性が考えられている。果樹栽培に伴う掘削で大半が破壊され、さらに町道建設に伴う掘削で破壊され、辛うじて断面のみの検出であったため、不明瞭な点も少なくない。

このような弥生時代中期前半～中葉の再葬墓も、住居らしき痕跡も、いずれも烏川を臨む台地の北縁に位置しており、台地上に生活拠点を置き、台地下の低地を開発し、台地の崖面から涌出する水を利用して水田耕作を営んでいたものと考えられる。

弥生時代中期後半の様相についても不明瞭な点が多い。下室田出土の栗林式の単品の壺や、前掲の中里見中川遺跡から検出された低地の溝から出土した当該期の土器片若干程度である。

３．後期

弥生時代後期になると、とくに榛名地域南東部において遺跡数が増えてくる。発掘調査された遺跡は、現在のところ、烏川北岸本郷地区に集中している。いずれも本遺跡の南東側約７～８㎞も離れた遺跡群であり、本遺跡との直接の関連は薄いと考えられる。烏川北岸の下位段丘に立地する稲荷森遺跡や、本郷台地の北側斜面に展開する蔵屋敷遺跡群などでは大型の長方形竪穴建物を中心とする集落が検出されている。本郷町の道場遺跡では、現在のところ榛名地域で弥生時代最大の竪穴建物が検出されている。

第４項　古墳時代

榛名地域における古墳の分布は、烏川北岸の本郷地区と南岸の里見地区に集中しているが、いずれも本遺跡からは南東側へ約６㎞以上も離れた地域である。昭和10(1935)年に行われた、群馬県下一斉古墳所在調査の結果をまとめた『上毛古墳綜覧』では、旧久留馬村域で39基、旧里見村域では60基の古墳が登録されているが、本遺跡が所在する旧室田村域には全く古墳の存在は知られていない。平成21(2009)年度に刊行された『榛名町誌 資料編１ 原始古代』では、現存する古墳を新たに40基確認することが出来たとしているが、それでも室田地区においては古墳の存在は知られていないのである。本遺跡が所在する室田地区においては、古墳時代には一貫して生産性が低く、古墳を造営することが可能な有力者が出現出来なかったほどに地域社会が成熟していなかったとみられている。

１．前期

①古墳

本遺跡の南東約4.5㎞に位置した里見原遺跡からは、里見台地の縁辺に張り出した突端から約24m四方の大型の方形周溝墓が１基検出されている(中里見原１号墳)。弥生時代の周溝墓のように群在せず、烏川に面した低地部の生産域を臨むような位置に営まれ、多様な系譜の葬送用の土器を伴うことや、浅間Ｃテフラ(As-C)によって埋没していることから、古墳時代初頭の小首長の墳墓と考えられている。榛名地域において最も早い時期の古墳時代墳墓の事例であるが、榛名地域には大中規模の前方

後方墳は存在していない。

本遺跡の南東約6.7㎞に位置し、烏川北岸に沿って張り出した本郷台地の尾根上に立地する本郷大塚古墳は、前方後円墳としては古式のスタイルに属する４世紀前半代に造営された全長約73.0m・前方部幅約32.6m・括れ部幅約21.4mの墳丘プランを有する前方後円墳である。浅間Ｃテフラ(As-C)の堆積層直上に構築され、主体部は長さ約4.9m・最大幅約3.3m・深さ約0.5～0.8mの規模を呈する川原石積みの竪穴式石室である。昭和45(1970)年度に実施された発掘調査では、石室内から「位至三公」銘内行花文鏡１面と管玉２点、ガラス製小玉多数が出土した。

②集落

榛名地域では弥生時代後期以来の樽式系土器が４世紀まで部分的に残存しており、旧来の弥生系文化が濃厚に残存していたことが知られている。

本遺跡の南東約8.4㎞に位置する本郷稲荷森遺跡からは古墳時代前期の竪穴建物が５棟検出されている。在来の樽式系土器に交じって、東海系や北陸系、南関東系など外来系の土器も出土している。

本遺跡の南東約４.2～4.3㎞に位置し、北陸新幹線建設に先立って平成４～６(1992～94)年度に当事業団が発掘調査した中里見中川・根岸遺跡からは、長期にわたって連続して水田耕作が営まれていたことが判明している。特に中川遺跡からは、古墳時代初頭に降下した浅間山火山灰As-C下の水田が明瞭に検出された。

２．中期

①古墳

榛名地域では、本遺跡の南東約８～９㎞に位置する本郷地区を除けば５世紀代の古墳も集落も少ない。その反面、古墳時代後期６世紀後半以降の遺跡は急速に増加している。５世紀代に榛名山南麓の山麓扇状地末端に広がる沖積平野の開発が進む中で、榛名地域への人口移動がなされていったものと考えられている。

本遺跡の南東約8.4㎞に位置する本郷稲荷森遺跡からは、５～６世紀の集落と小石槨古墳８基が検出されている。それらの古墳の墳丘は失われているが、積石塚スタイルの、ほとんど墳丘を有しない小規模なものであったと考えられる。主体部の竪穴式小石槨は、いずれも浅い穴状の掘り込みに扁平な河原石を立て並べて構築している。烏川対岸の八幡台地には、５世紀中葉の積石塚群が検出され、多くの渡来系遺物が出土した剣崎長瀞遺跡群が所在しており、本郷地域側に居住した渡来系の人々の墳墓と考えられている。

本遺跡の南東約7.9㎞の本郷丘陵の突端に位置する本郷蔵屋敷遺跡からは、北辺長約88m・南辺長約110m・西辺長約111ｍの規模を呈する、西南隅が張り出した不等辺四角形の平面形状を呈する古墳時代中期後半～後期初頭頃の環濠居館が検出されている。榛名山南麓の井野川上流域沖積平野の西縁に当たる久留馬地区に広がる山麓丘陵地域を支配した豪族の居館とみられる。

②集落

４世紀後半から５世紀前半にかけての集落は、榛名地域ではあまり明瞭には検出されていない。

榛名地域において集落が増加してくるのは５世紀後半以降である。本遺跡の南東約７～8.5㎞付近に位置する本郷蔵屋敷遺跡、本郷道場遺跡、本郷麻干原遺跡、本郷供養塚遺跡、本郷寺内遺跡などからは５世紀後半以降の竪穴建物が検出されている。本郷麻干原遺跡、本郷供養塚遺跡、本郷寺内遺跡などからは軟式韓式系土器が出土しており、烏川対岸に位置する剣崎長瀞遺跡群とも共通し、烏川両岸に渡来系氏族が集住していたことが推測できる。

３．後期

①古墳

榛名地域では、埴輪は５世紀後半から６世紀初頭頃に広まってきたようである。埴輪が樹立された古墳が検出されたのは、本遺跡の南東側約６～９㎞も離れた位置に所在する本郷地区と下里見地区においてのみである。

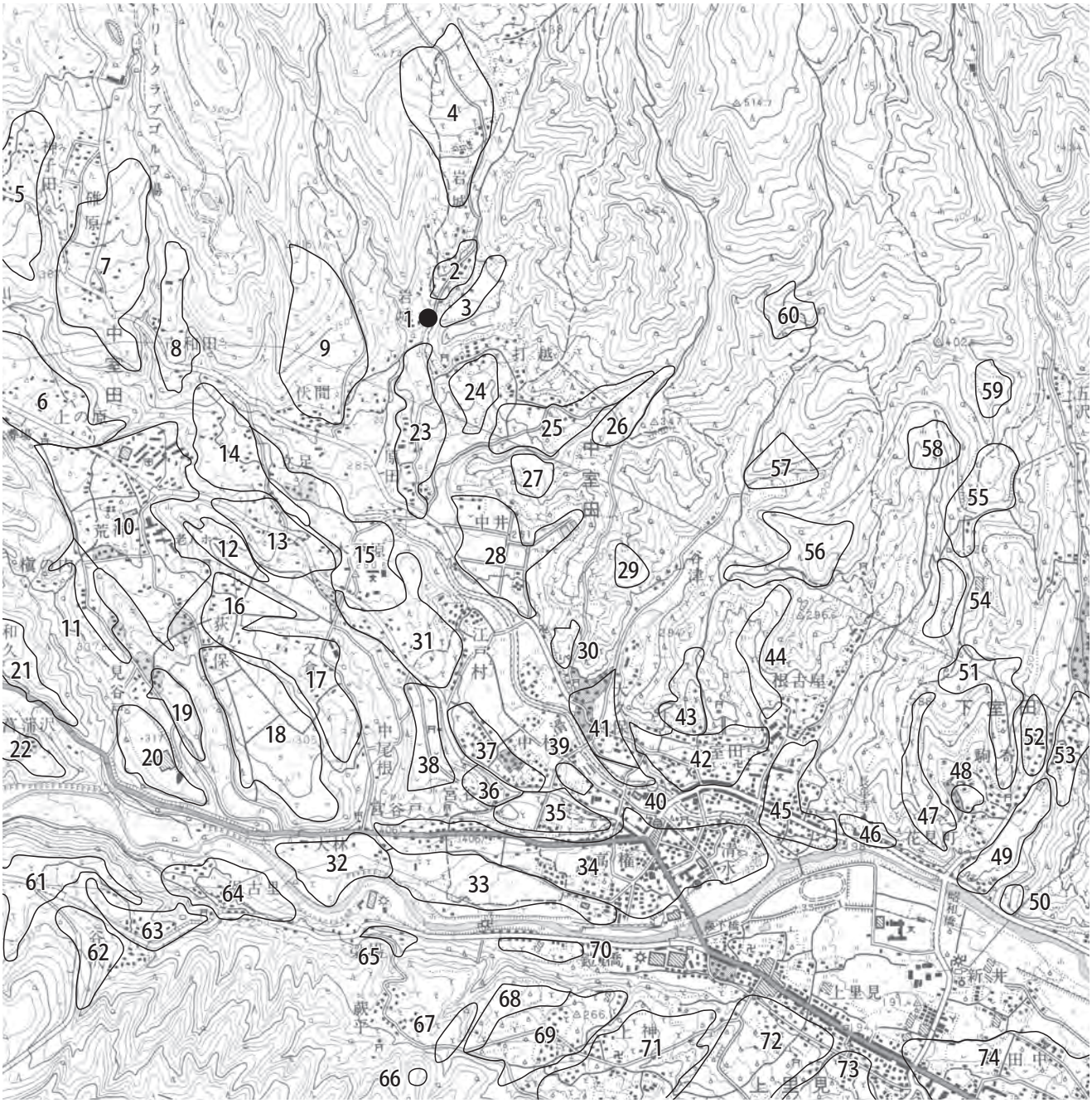
本遺跡の南東約8.4㎞に位置する本郷稲荷森遺跡は、昭和62(1987)年度に榛名町教育委員会が発掘調査しているが、３号墳からは方形に埴輪類が並べ立てられて検出された。しかしながら後世に墳丘ごと殆ど削平されてしまっており、明確ではない。

本遺跡の南東約6.7㎞に位置し、昭和45・46(1970・71)年度に群馬用水土地改良地域埋蔵文化財調査委員会によって発掘調査された本郷奥原古墳群のうち、本郷奥原12号墳は、５世紀後半～６世紀初頭頃の円筒埴輪が樹立された古墳である。7世紀代に造営された横穴式石室主体の古墳群の中で、唯一、５世紀後半～６世紀初頭の

竪穴式石室であり、墳丘の周囲には断面Ｕ字形の周溝が巡り、墳丘には葺石が貼られている。円筒埴輪列は、墳丘下段の上縁に巡らされていた。

この本郷奥原12号墳のような埴輪樹立古墳が榛名地域にも広がった後に、本遺跡の南東約7.5㎞に位置する本郷稲荷塚古墳や、本遺跡の南東約６㎞の烏川南岸に位置する下里見諏訪山古墳など、形象埴輪が立てられた古墳も榛名地域に出現する。両古墳以外にも、本郷地域と里見地区からは埴輪を有する古墳の存在が確認されているが、本郷稲荷塚古墳は、昭和45(1970)年、群馬用水土地改良に伴って発掘調査がなされ、全長約33.0m、墳丘径約29.0m、周溝幅約6.2mの規模を呈し、西側を掘り残して撥状に張り出し部を有する帆立貝式古墳である。撥状に張り出した造り出し部からは人物埴輪や馬形埴輪片が出土した。主体部は全長約5.5m、奥壁幅約1.15mの規模を呈する袖無型横穴式石室で、副葬品はほとんど失われていたが、鉄製小刀片、管玉、須恵器片等がごく少量出土した。

本郷稲荷塚古墳とほぼ同時期か、或いは若干遅れて築造されたとみられる下里見諏訪山古墳は、『上毛古墳綜



第４図　周辺遺跡分布図(国土地理院1/25,000電子地形図「下室田」令和元年６月９日発行、「三ノ倉」平成31年３月29日発行を使用)

第１表　周辺遺跡一覧表

	遺跡	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世	種別・概要	文献
1	中室田岩城遺跡(高崎市H32遺跡)		○	○				○	縄文時代中期後半～末葉の集落(竪穴建物3、屋外炉1、土坑3)・河道1、弥生時代前・中期遺物散布地、近世柵列1・土坑29・ピット22等検出。	本報告書、1・2
2	中室田岩城・竹ノ平包蔵地(高崎市H32遺跡)		○				○	○	縄文時代・近世遺物散布地。	1・2
3	中室田岩城包蔵地(高崎市H33遺跡)		○						縄文時代前・中期遺物散布地。	1・2
4	中室田岩城入・岩城・背場谷津包蔵地(高崎市H149遺跡)		○				○	○	縄文時代、中・近世遺物散布地。	1・2
5	中室田神子田包蔵地(高崎市H16遺跡)		○	○		○		○	縄文時代前期、弥生時代、奈良・平安時代、近世遺物散布地。	1・2
6	中室田大和田向・牛ヶ淵・追分・源慶坊・上ノ原包蔵地(高崎市H17遺跡)		○	○	○	○	○	○	縄文時代早～後期、弥生時代中期、古墳時代～奈良・平安良時代遺物散布地。	1・2
7	中室田碓原包蔵地(高崎市H18遺跡)		○		○	○		○	縄文時代前・中期、古墳時代、奈良・平安時代、近世遺物散布地。	1・2
8	中室田中込・市和田包蔵地(高崎市H19遺跡)		○						縄文時代遺物散布地。	1・2
9	中室田伏間入・伏間包蔵地(高崎市H20遺跡)		○	○	○	○	○	○	縄文時代早・前・晩期、弥生時代中期～近世遺物散布地。	1・2
10	立足城、中室田上ノ原・荒神平・又倉・荻窪包蔵地(高崎市H21A遺跡)		○			○			**立足城**：戦国期城郭。 **中室田上ノ原・荒神平・又倉・荻窪包蔵地**：縄文時代、奈良・平安時代遺物散布地。	1～5
11	中室田荒神平・見谷戸包蔵地(高崎市H21B遺跡)		○	○		○			縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代遺物散布地	1・2
12	中室田又倉包蔵地(高崎市H22遺跡)		○			○	○	○	縄文時代前期、古墳時代～奈良・平安時代、近世遺物散布地	1・2
13	立足城、中室田立足・上木戸原・又倉包蔵地(高崎市H23遺跡)		○			○	○		**立足城**：戦国期城郭。 **中室田立足・上木戸原・又倉包蔵地**：縄文時代早～中期、奈良・平安時代・中世遺物散布地。	1～5
14	立足城、中室田立足・上木戸原包蔵地(高崎市H24Ａ遺跡)		○				○		**立足城**：戦国期城郭。 **中室田立足・上木戸原包蔵地**：縄文時代前期遺物散布地。	1～5
15	中室田立足・麓・江戸村・下木戸原包蔵地(高崎市H24B遺跡)				○	○	○	○	縄文時代前・後期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
16	又倉遺跡、中室田又倉包蔵地(高崎市H25A遺跡)		○		○	○		○	**又倉遺跡**：平成5年度榛名町教育委員会発掘調査、縄文時代中期後半土坑1、平安時代(9～10C)集落(竪穴建物12・土坑1)・鍛冶工房1 **中室田又倉・中尾根包蔵地**：縄文時代中期、古墳時代～奈良・平安時代、近世遺物散布地。	1・2
17	中室田又倉・中尾根包蔵地(高崎市H25B遺跡)		○	○	○	○	○	○	縄文時代前・中期、弥生時代前・中期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
18	中室田又倉・大野原・荻窪・中尾根包蔵地(高崎市H26遺跡)		○		○	○	○	○	縄文時代前～後期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
19	中室田見谷戸包蔵地(高崎市H30遺跡)		○						縄文時代前期遺物散布地。	1・2
20	中室田見谷戸・滝山包蔵地(高崎市H31遺跡)		○		○	○	○	○	縄文時代、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
20	上室田和久包蔵地(高崎市H28遺跡)		○		○	○		○	縄文時代前～後期、古墳時代～奈良・平安時代、近世遺物散布地。	1・2
21	中室田大久保・中井包蔵地(高崎市H38遺跡)		○			○	○	○	縄文時代前～中期、奈良・平安時代～近世遺物散布地。	1・2
22	上室田菖蒲沢包蔵地(高崎市H29遺跡)			○	○	○		○	弥生時代後期～奈良・平安時代、近世遺物散布地。	1・2
23	中村田岩城・打越・十二包蔵地(高崎市H34遺跡)		○		○	○	○	○	縄文時代早・前期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
24	中室田打越包蔵地(高崎市H35遺跡)				○	○		○	古墳時代～奈良・平安時代、近世遺物散布地。	1・2
25	中室田打越包蔵地(高崎市H36遺跡)		○		○	○	○	○	縄文時代前～中期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
26	中室田大久保・佐貫山包蔵地(高崎市H37遺跡)		○		○	○	○	○	縄文時代中期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
27	中室田大久保・中井包蔵地(高崎市H38遺跡)		○			○	○	○	縄文時代前・中期、平安時代～近世遺物散布地。	1・2
28	中室田中井・大久保包蔵地(高崎市H39遺跡)		○	○	○	○	○	○	縄文時代後期、弥生時代後期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
29	下室田谷津・大久保包蔵地(高崎市H40遺跡)					○		○	奈良・平安時代、近世遺物散布地。	1・2
30	中室田大久保包蔵地(高崎市H遺跡)				○	○	○		古墳時代～奈良時代、中世遺物散布地。	1・2
31	中室田江戸村・下木戸原・麓遺物散布地(高崎市H42遺跡)		○		○	○	○	○	縄文時代前・中期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
32	中室田大林包蔵地(前橋市H43遺跡)		○		○	○	○	○	縄文時代中・後期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
33	下室田宮谷戸・高権包蔵地(高崎市H44遺跡)		○	○	○	○	○	○	縄文時代早期～後期、弥生時代後期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
34	下室田宮谷戸遺跡、下室田宮谷戸・高権・清水包蔵地(高崎市H45遺跡)		○	○	○	○	○	○	**下室田宮谷戸遺跡**：耕作時に発見された弥生時代中期中葉再葬墓(壺1・甕2・台付甕脚部片1・磨製石斧1点出土)。 **下室田宮谷戸・高権・清水包蔵地**：縄文時代前・中・晩期、弥生時代前期～近世遺物散布地。 高権地区では1957年、工事中に敷石住居を確認し、縄文時代中～晩期の遺物が採集される。	1・2
35	中村遺跡、下室田中村包蔵地(高崎市H46遺跡)		○			○	○		**中村遺跡**：平成元年度榛名町教育委員会発掘調査、縄文時代前期中葉集落(竪穴建物3棟、羽状縄文系土器主体)及び平安時代(9～10C)集落(竪穴建物63棟等)。 **下室田中村包蔵地**:縄文時代前期、平安時代～中世遺物散布地。	1・2
36	中村遺跡、下室田弁才・中村包蔵地(高崎市H47遺跡)		○		○	○	○	○	**中村遺跡**：平成元年度榛名町教育委員会発掘調査、縄文時代前期中葉集落(竪穴建物3、羽状縄文系土器主体)及び平安時代(9～10C)集落(竪穴建物63等)。 **下室田弁才・中村包蔵地**：縄文時代、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
37	下室田弁才・中村・江戸村包蔵地(高崎市H48遺跡)		○						縄文時代中期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
38	弁天原遺跡、下室田弁才・又倉・宮谷戸包蔵地(高崎市H49遺跡)		○						**弁天原遺跡**：榛名町教育委員会平成5・7年度発掘調査、縄文時代前期後半集落(竪穴建物5棟等、諸磯b式主体)。 **下室田弁才・又倉・宮谷戸包蔵地**：縄文時代前期遺物散布地。	1・2
39	下室田中村包蔵地(高崎市H150遺跡)					○			奈良・平安時代遺物散布地。	1・2
40	中室田大久保・高権包蔵地(高崎市H51遺跡)		○		○	○			縄文時代前期、古墳時代～奈良・平安時代遺物散布地。	1・2
41	大久保の砦、中室田大久保包蔵地(高崎市H52遺跡)					○	○	○	**大久保の砦**：戦国期城郭。**中室田大久保包蔵地**：奈良・平安時代～近世遺物散布地。	1～5
42	松山城、下室田町・松山包蔵地(高崎市H55遺跡)		○	○	○	○	○	○	**松山城**：戦国期城郭、本郭は東西約32m・南北約17mの楕円形状を呈する。本郭の東側に第2郭があり、その周囲に階段状に郭が形成される。16世紀末、後北条家家臣上田氏が築城。高崎市指定史跡。 **下室田町・松山包蔵地**：縄文時代後期、弥生時代～近世遺物散布地。	1～5
43	下室田松山包蔵地(高崎市H54遺跡)		○		○	○			縄文時代中期、古墳時代～奈良・平安時代遺物散布地。	1・2
44	下室田根古屋包蔵地(高崎市H53遺跡)		○		○	○	○	○	縄文時代早・前期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
45	室田の内出、下室田町・根古屋包蔵地(高崎市H57遺跡)				○	○	○		**室田の内出**：戦国期城郭。**下室田町・根古屋包蔵地**：古墳時代～奈良時代、中世遺物散布地。	1～5
46	下室田町・根古屋・下村包蔵地(高崎市H58遺跡)						○	○	中・近世遺物散布地。	1・2
47	下室田下村・駒寄包蔵地(高崎市H62遺跡)				○	○	○	○	古墳時代～近世遺物散布地。	1・2

	遺跡	旧石	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世	種別・概要	文献
48	駒寄の砦(高崎市H140遺跡)						○		戦国期城郭、中世遺物散布地。	1～5
49	下室田駒寄包蔵地(高崎市H64遺跡)		○		○	○		○	縄文時代前期、古墳時代～奈良・平安時代、近世遺物散布地。	1・2
50	下室田駒寄包蔵地(高崎市H66遺跡)		○				○	○	縄文時代中期、中・近世遺物散布地。	1・2
51	下室田下村・駒寄包蔵地(高崎市H61遺跡)		○	○	○	○	○		縄文時代中期、弥生時代前･中期、古墳時代～中世遺物散布地。	1・2
52	下室田駒寄包蔵地(高崎市H63遺跡)					○			奈良・平安時代遺物散布地。	1・2
53	下室田駒寄包蔵地(高崎市H65遺跡)		○	○	○	○	○	○	縄文時代前期、弥生時代～近世遺物散布地。	1・2
54	下室田根古屋包蔵地(高崎市H60遺跡)		○			○	○	○	縄文時代前・中期、奈良・平安時代～近世遺物散布地。	1・2
55	根古屋遺跡、下室田根古屋・駒寄包蔵地(高崎市H59遺跡)		○			○	○	○	**根古屋遺跡：**榛名町教育委員会昭和60年度発掘調査、縄文時代前期後半集落(竪穴建物4等、諸磯b・c式主体)。 **下室田根古屋・駒寄包蔵地：**縄文時代前～後期、奈良・平安時代～近世遺物散布地。	1～5
56	鷹留城、下室田根古屋・谷津包蔵地(高崎市H139遺跡)						○		**鷹留城：**榛名町教育委員会平成11年度発掘調査。15世紀末～16世紀初頭頃築城か。城の規模は、南北約430m・東西約30m、県内有数の中規模山城で、本丸以下の曲輪、虎口、大手口、搦手口、井戸、掘切跡等が認められる。高崎市指定史跡。 **下室田根古屋・谷津包蔵地：**中世遺物散布地。	1～5
57	下室田谷津包蔵地(高崎市H148遺跡)		○						縄文時代前・中期遺物散布地。	1・2
58	下室田根古屋包蔵地(高崎市H145遺跡)		○			○	○	○	縄文時代、奈良・平安時代～近世遺物散布地。	1・2
59	下室田駒寄包蔵地(高崎市H144遺跡)		○						縄文時代遺物散布地。	1・2
60	下室田細坂包蔵地(高崎市H147遺跡)		○			○	○	○	縄文時代中期、奈良・平安時代～近世遺物散布地。	1・2
61	上里見東間野・矢ヶ沢包蔵地(高崎市H91遺跡)		○		○	○		○	縄文時代、古墳時代～奈良・平安時代、近世遺物散布地。	1・2
62	上里見矢ヶ沢包蔵地(高崎市H133遺跡)		○		○	○	○	○	縄文時代、古墳時代～奈良時代、中・近世遺物散布地。	1・2
63	上里見矢ヶ沢・保古里包蔵地(高崎市H92遺跡)		○		○	○	○	○	縄文時代中期、古墳時代～奈良時代、中・近世遺物散布地。	1・2
64	上里見保古里包蔵地(高崎市H93遺跡)		○		○	○	○	○	縄文時代前期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
65	上里見簗場包蔵地(高崎市H94遺跡)		○		○	○		○	縄文時代前･中期、古墳時代～奈良･平安時代、近世遺物散布地。	1・2
66	蕨平の砦(高崎市H136遺跡)						○		戦国期城郭、中世遺物散布地。	1・2
67	上里見蕨平包蔵地(高崎市H96遺跡)		○		○	○	○	○	縄文時代前～後期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
68	上里見森平包蔵地(高崎市H97遺跡)		○						縄文時代中期遺物散布地。	1・2
69	上里見田ノ入・房坂・森平包蔵地(高崎市H98遺跡)		○	○		○	○	○	縄文時代前～晩期、弥生時代、奈良・平安時代～近世遺物散布地。	1・2
70	上里見天水包蔵地(高崎市H100遺跡)		○	○	○	○	○	○	奈良・平安時代、近世遺物散布地。	1・2
71	上神遺跡、上里見諏訪ノ原・東上神・上神・天水包蔵地(高崎市H99遺跡)		○	○	○	○	○	○	縄文時代前～後期、弥生時代前・中期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
72	上里見城、上里見町通・町西・八幡・和泉・伊勢山・東上神包蔵地(高崎市H101遺跡)		○	○	○	○	○	○	**上里見城：**中世城館。**上里見町通・町西・八幡・和泉・伊勢山・東上神包蔵地：**縄文時代前・中期、弥生時代前期～近世遺物散布地。	1～5
73	上里見町南・峯山・雉子ヶ尾包蔵地(高崎市H102遺跡)		○	○	○	○	○	○	縄文時代早～後期、弥生時代前期、古墳時代～近世遺物散布地。	1・2
74	上里見田中・新井・町東・中沖包蔵地、中里見根岸遺跡、中里見中川遺跡(高崎市H106A遺跡)		○	○	○	○	○	○	**上里見田中・新井・町東・中沖包蔵地：**縄文時代前～後期、古墳時代～近世遺物散布地。 **里見根岸遺跡：**当事業団平成6年度発掘調査。縄文時代晩期遺物包含層、平安時代10 ～ 11C集落(竪穴建物3・溝状遺構3・土坑35基等)・鍛冶炉1基・水田(As-B層下)。 **中里見中川遺跡：**当事業団平成4・5年度発掘調査。縄文時代晩期遺物包含層、弥生時代中期後半遺物包含層、古墳時代水田(As-C層下)・溝状遺構4条、奈良・平安時代集落(竪穴建物11棟)・鍛冶炉7基・溝状遺構8条・水田(As-B層下)、近世畑	1・2

文献
1　榛名町誌編纂委員会編2010『榛名町誌　資料編１　原始古代』
2　榛名町誌編纂委員会編2011『榛名町誌　通史編上　原始古代・中世』
4　群馬県教育委員会編1988『群馬県の中世城館跡』
5　山崎　一1971～79『群馬県古城塁址の研究』上・下、同補遺編上・下

覧』に、里見村第41号墳として登録され、存在は早くから知られていた。『榛名町誌』編纂に伴って実施された調査によれば、全長約141m、墳丘径約11m、西側に長さ約３m、幅約10mの撥状の張り出し部が取り付く帆立貝式古墳である。主体部は長さ約5.9m、奥壁幅約1.1m、羨道入口幅約0.7mの乱石積横穴式石室である。撥状の張り出し部からは円筒埴輪、馬形埴輪、人物埴輪で構成される埴輪群像が出土した。

榛名地域では、６世紀中葉～後半の時期に至ってもなお、前方後円墳は造営されない。

古墳時代後期後葉～終末期である７世紀の群集墳は、大部分が径約10m前後であり、大きなものでも径約20m程度の、川原石を壁材とした横穴式石室を有するものである。分布も、前代の古墳と同様、烏川北岸の久留馬地区と、南岸の里見地区に大別でき、分布域は限定している。

烏川北岸では、古墳は、本郷地区を中心として、主に室田火砕流が形成した榛名山南麓末端の丘陵上に造営されている。

先述したように本遺跡の南東約7.9㎞の本郷丘陵の突端に位置する本郷蔵屋敷遺跡からは、古墳時代中期後半～後期初頭頃の環濠豪族居館と考えられる遺構が検出されているが、その一角に、古墳時代終末期である７世紀中葉になって、現在、しどめ塚と称されている古墳が造営される。昭和36(1961)年に群馬大学によって発掘調査された径約20mの円墳で、主体部は全長約8.6m、玄室長約4.1m、奥壁幅約2.19mの、南に向かって開口する両袖型横穴式石室で、勾玉、切子玉、小玉、金銅製耳環、鉄製太刀、小刀、鉄鏃、轡、鞍、鞍金具、壺鐙、金銅製杏葉、鉄地金銅張雲珠、金銅製帯金具などの遺物が出土した。墳丘には葺石が全面的に葺かれているが、埴輪はない。

前記のしどめ塚古墳の北東側約80mに位置した小臼塚古墳は、現在は完全に削平されてしまっているが、約25～30m四方の規模を呈する7世紀末の終末期の方墳であったと考えられている。榛名地域において唯一の終末期の方墳である。

本遺跡の南東約6.7㎞付近に位置し、本郷台地西南端に立地する奥原古墳群では、昭和40年代に実施された群馬用水土地改良事業に伴って36基の古墳が発掘調査されたが、この時の調査で存在が確認された古墳は、東西約290m・南北約320m・面積約773,600㎡の範囲から57基を数える。７世紀前半頃から末までの約70年の間、この地に古墳が造り続けられていたことが判明している。奥原古墳群では、玄門を有する川原石積み横穴式石室の存在が特徴的である。この地域における７世紀代の中核的な村落首長一族の墳墓群と考えられる。

また、烏川南岸の里見地区では、中里見・下里見地区を中心に、里見丘陵の北東側に沿って形成された烏川南岸の下位段丘面に造営された古墳群、里見台地上に分布する古墳群、烏川の上位段丘面に分布する古墳群などにグルーピングできる。里見丘陵西側に当たる安中市秋間地区においては７世紀後半から須恵器生産は始まり、８世紀にかけて上野国内有数の窯業生産地域となっていく。これに伴って、須恵器生産を経営した豪族たち、或いは窯業生産に関わる集団の里見地区への進出を想定する見方もある。

②集落

この地域においては古墳時代後期の拠点的な集落は発見されていない。前掲の蔵屋敷遺跡でも、６世紀代になると竪穴建物数は急速に減少している。その反面、前掲の三ツ子沢中遺跡では、古墳時代後期の６世紀後半になって竪穴建物が造られるようになる。

この地域において、６世紀代に竪穴建物の数が急速に減少していることは、６世紀初頭と前半の２度に亘る榛名山の噴火とそれに伴う大規模な火山災害の発生によるものと考えられている。

第５項　古代

１．律令国家の成立と榛名地域

①国・郡制の成立

律令制下において、群馬県域はほぼ上野国の領域に当たっており、国内には「碓氷・片岡・甘楽・多胡・緑野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐位・新田・山田・邑楽」の14郡が置かれた(当初13郡、和銅４(711)年に多胡郡設置で14郡)。

本遺跡が所在する高崎市榛名地区は、律令制下には上野国府が所在した群馬郡の郡域内に入る。郡域の西南の端、碓氷郡との境界にほど近い位置に当たる。群馬郡は、北は現在の渋川市域、東は現在の前橋市の利根川西側の

地域、中核となるのは現在の高崎市の烏川北側の地域であり、上野国内では中核となった郡である。

『和名類聚抄』によれば、群馬郡には「長野、井出、小野、八木、上郊、畦切、島名、群馬、桃井、有馬、利刈、駅家、白衣」の13郷が置かれていた。所在郷数は、甘楽郡と同数で、上野国内最大の郷数を管下に置く郡の一つである。

本遺跡の所在地が、律令制下の群馬郡内のどの郷に当たるのかについては、明確ではない。群馬郡諸郷のうち、長野郷は現在の烏川左岸一帯の高崎市我峰、菊地、新波、楽間、行力、浜川から久留馬地区に至る範囲と考えられており、本遺跡の地はそのさらに北西側に当たる。旧上郊村一帯である、現在の保渡田付近から旧箕郷町榛名町北西部にかけての地域と考えられる上郊郷が、本遺跡所在地が属した郷としては最も可能性が高いと考えられるが、群馬郡内には、畦切郷や小野郷など、所在地がはっきりしていない郷もあるので、今後、決定的な文字資料などが出土しない限り、本遺跡の所在地が律令制下のどの郷に当たっていたのかということを確実に解明することは難しいと見られる。

②延喜式内榛名神社

万葉集に採録された10首に謳われる伊香保嶺は、平安時代末期の12世紀頃からは確実に榛名山と呼ばれるようになっていく。

名神大社であり、後には上野国三宮となる、現在の渋川市伊香保町に鎮座する伊香保神社は、後に一宮となる貫前神社(現・富岡市一ノ宮)や、二宮となる赤城神社(現・前橋市二之宮町、三夜沢町)と並んで上野国内の最有力神社の一つであり、六国史にもしばしば記事が見えるが、現在の高崎市榛名町に鎮座する榛名神社は、『延喜式』神名帳に、伊香保神社、甲波宿祢神社(現・渋川市川島)と並んで「群馬郡三座」と載るものの、伊香保神社とは異なり、六国史や『類聚国史』等の史書には全く見えない。なお、貫前神社本『上野国神名帳』に「従一位榛名大明神」、総社神社本『上野国神名帳』には「正一位榛名大明神」と掲載されており、14世紀成立の『神道集』には上野国六宮として掲載されている。

「長元３(1030)年上野国不与解由状案」(いわゆる「上野国交替実録帳」)の神社項には、「玉殿一宇」「幣殿一宇」「鳥居二基」「向屋一宇」「美豆垣一廻」「荒垣一廻」「舞人陪従屋一宇」「厨屋一宇」が「無実」として掲載されている「椿榛明神社」が榛名神社を指すものと考えられている。その通りの状況であったとすると、その時点において、主要殿舎や社務施設はおろか、鳥居や垣根までが完全に欠失しており、官社としては壊滅的な状況であったということになるが、格上の伊香保神社と同等の社殿構成であり、その頃には榛名神社の社格がかなり高まっていたことが想像できる。伝統的な宗教的権威である伊香保神社に対して、相対的に榛名神社の社格が上昇していった時期と、専ら、榛名山という名で呼ばれるようになっていく時期がほぼ軌を一にしている点は重要であり、榛名神社信仰の拡大が想定できよう。

２．寺院、豪族居宅の遺跡

本遺跡周辺の古代の遺跡で最も古い時期のものは、本遺跡の南東約6.8㎞に位置する本郷奥原遺跡から７世紀後半の瓦が出土しており、中には、上野国内で最も古い寺院の遺跡である山王廃寺から出土するものとほぼ同型の瓦が含まれるので、小規模ながらも上野国内でも最古級の寺院の遺跡と見られている。

本遺跡の南東約7.9㎞に位置する前掲の蔵屋敷遺跡では、先述した古墳時代の豪族居館の一部とみられる遺構の他に、平安時代９世紀頃のものと見られる方形の区画溝が検出されており、官衙や豪族居宅などの施設の一部である可能性が高いと言われているが、区画内に存在した何らかの施設を構成する建物の跡は全く検出されていない。この遺跡から検出された９世紀代の竪穴建物からは、印面が３㎝四方で高さが3.3㎝の「印」の印面を有する銅印が出土していることが特筆される。

本遺跡の南東約5.5㎞に位置する前掲の高浜広神遺跡は、十文字台地上に立地する遺跡で、南に向かって緩やかに傾斜する台地上から15棟の掘立柱建物、32棟の竪穴建物が検出された。掘立柱建物群の中には、東西３間×南北２間で南側に廂が付く掘立柱建物や、東西２間×南北３間の総柱の掘立柱建物２棟、それらの建物群を区画するかのような柵列等が検出されている。また、７～10世紀代の竪穴建物からは金銅製丸鞆、鉄製のクルル鈎、「第」の印面の焼印、鋤先、鎌などの遺物が出土しており、鉄製品の補修や加工を行った工房の存在が示唆される。掘立柱建物それぞれの規模は小さいので、官衙などのような施設とは考えにくいものの、この地域においては珍しく掘立柱建物群が発見されていることや、特異な出土

遺物等から、首長居宅あるいは在地首長による農業経営の拠点等の可能性が考えられている。

３．奈良・平安時代集落遺跡の展開

榛名地域全体では７・８世紀の集落は希薄である。この地域では、古墳時代５～６世紀にかけての集落の多くが７～８世紀まで継続していない。烏川北岸側で、古墳時代中期頃から平安時代中期頃まで集落が継続していることが確認できたのは、本遺跡の南東約5.5㎞前後に位置する前掲の三ツ子沢中遺跡、高浜広神遺跡、白岩浦久保遺跡など、十文字台地上に所在する遺跡群である。烏川南岸側では、本遺跡の南東約6.5㎞に位置し、里見台地上に立地している前掲の下里見上ノ原・中川遺跡と、本遺跡の南東約4.5㎞に位置する、同じく里見台地上に立地する中里見原遺跡のみである。

①本遺跡周辺の古代集落遺跡

本遺跡の南南東約２㎞に位置する前掲の下室田町の中村遺跡は､古墳時代後期６世紀の集落が一端途切れた後、平安時代前期の９世紀になると再び集落が営まれるようになり、10世紀まで継続している。平安時代の集落は台地全体に展開しており、調査対象範囲のみでも63棟の竪穴建物が検出され、現在までの調査例では、榛名地域最大の平安時代集落である。

本遺跡の南西約1.4㎞に位置する中室田町又倉遺跡は、土地改良事業に伴って、平成５(1993)年度に榛名町教育委員会によって発掘調査された室田台地上に立地する平安時代９～10世紀ごろの集落遺跡である。前掲の下室田町中村遺跡の北西約1.4㎞に位置している。９～10世紀の竪穴建物13棟と土坑１基が検出された。調査範囲においては、平安時代の竪穴建物は密集することなく、散在している｡竪穴建物群の中の１棟は鍛冶工房であったが、榛名地域において初めて確認された本格的な古代の鍛冶工房である。下室田町中村遺跡とは、ほぼ同時期の集落であるが、鍛冶工房を擁してはいるものの、中村遺跡とは対照的な小規模集落である。

②里見地区の大規模集落遺跡

烏川南岸の里見地区における当該期の大規模集落遺跡である前掲の中里見原遺跡では、古代の集落は７世紀から始まり、10世紀に及んでおり、特に８世紀末から９世紀前半にかけて集落が拡大していく｡検出された遺構は、基壇建物１棟、掘立柱建物７棟、竪穴建物72棟、竪穴状遺構４基、土坑1000基等である。調査対象範囲内からは瓦の出土は見られなかったが、基壇状の建物遺構は、台地中央の高所に立地しており、村落内寺院のような小規模仏堂の遺構である可能性が考えられているが、９世紀中葉頃とみられる大型の掘立柱建物である７号掘立柱建物によって掘り込まれ破壊されているので、それ以前の時期のものと考えられる。

本遺跡の南東約4.2㎞の里見台地上に立地し、北陸新幹線建設に伴って当事業団が平成５・６(1993・94)年度に発掘調査した上里見井ノ下遺跡からは、平安時代の掘立柱建物１棟と竪穴建物３棟等の遺構が検出されたが、この遺跡の里見台地西斜面側からは、古代の大型炭窯が５基検出された。大量の炭は、特に製鉄作業に欠かせない燃料であり、榛名山南麓の傾斜地を生かした窯業や製鉄業などの産業の展開が示唆されるところである。

また、台地の尾根部分には９世紀中葉頃のものと考えられる大型の竪穴建物１棟とその両側に大型掘立柱建物各１棟が並立している。東側の大型掘立柱建物である５号掘立柱建物は、一辺約6.3m四方の３間×３間、床面積約40㎡の規模を呈する方形の総柱建物で、倉庫と考えられる｡西側の大型掘立柱建物である７号掘立柱建物は、前記の基壇状建物を掘り込んで造られており、南北３間約6.3m×東西２間約4.2m、床面積約26.5㎡の規模を呈する長方形状の総柱建物で、やはり倉庫と考えられる。

二つの大型の総柱掘立柱建物に挟まれた位置にある大型竪穴建物は、南北約７m、東西約6.1m、床面積約42.7㎡の規模であり、同時期の竪穴建物の平均的な類例から見れば４倍ほどの大きさとなる。この時期の竪穴建物としては破格の規模であり、特異な用途が考えられるが、出土遺物に特徴的なものはなく、この大型竪穴建物の用途は不明である。

４．奈良・平安時代の耕地

①水田

烏川北岸では、本遺跡の南東約5㎞に位置し、北陸新幹線建設に伴って当事業団が平成６・７(1994・95)年度に発掘調査した神戸岩下遺跡、同じく当事業団が平成４～６(1992～94)年度に北陸新幹線建設に先立って発掘調査した中里見中川遺跡、榛名町教育委員会が平成７(1995)年度に発掘調査した、本遺跡の南東約6.5㎞に位置する根岸遺跡では、平安時代後期の天仁元(1108)年

に降下した浅間Ｂテフラ(As-B)によって覆われた水田の遺構が検出されている。いずれも烏川によって形成された低地に造られている水田である。

一方、榛名山南麓から南の烏川に向かって流れる烏川支流の小河川が、火砕流台地を削って形成した谷の平地部分の多くも水田化されたものと考えられるが、纏まった水田遺構が検出された事例は、現段階ではない。

②畠

榛名山南麓の本遺跡周辺では、地形的に水田を作ることが難しいことは自明であり、むしろ、現在まで続く畑作地帯であることから見れば、古代にあっても畠が造られていたであろうことは想像に難くない。しかしながら、本遺跡の周辺で古代の畠地が検出された事例は、現時点では決して多くはない。

本遺跡の南東約6.5㎞の烏川南岸の低位段丘上に立地し、榛名町教育委員会が昭和63(1988)年度に発掘調査した下里見中通遺跡などから検出されている。

第６項　中世

天仁元(1108)年７月21日、浅間山が噴火を起こし、大量の軽石により、上野国内の田畠はほとんど壊滅してしまうほどの被害を受けた。その21年後に当たる大治４(1129)年には亡弊を理由に租税が免除されるなど、天仁元年の浅間山噴火に伴う火山災害の影響はなおも続いていたのであった。

延久元(1069)年に後三条天皇によって発せられた延久の荘園整理令によって、立券不分明な荘園は公領に戻されたが、その反面、確実な荘園は手厚い保護を受けることとなり、国衙の干渉を受けずに地域を支配する領域支配型の荘園として再編されていった。荘園化されなかった公領では、国衙の在庁官人が直接、郡司・郷司・保司となって、徴税を請け負い、さらには荘園化によって減少した公領を拡大するために積極的に開発を行い、国衙の支配が強く及ぶ地域も出現したのである。

古代末期の群馬郡には荘園は皆無であり、国衙が所在したことも相まって、群馬郡は、上野国内で最も重要な公領であったと考えられている。

①中世長野郷

遺跡の所在地もその範囲に含まれていたと考えられる中世長野郷は、旧榛名町の烏川以北、旧箕郷町、旧倉渕村など、高崎市北西部～西部の烏川以北の地域がその範囲であったと考えられている。応永３(1396)年７月23日付上杉憲定宛幕府管領斯波義将安堵状(『群馬県史　資料編７　中世』所収)によれば、上杉憲定の上野国入部以来、長野郷は、烏川対岸の八幡荘などとともに上杉氏領となった。関東管領職に就く上杉氏の当主は、鎌倉府に在ったため、根本被官である長尾氏が在国した。

郷名を苗字とする中世豪族長野氏は、当初は石上氏、後に在原氏後裔を自称していたが、その当否はともかく、国衙在庁官人の出身と考えられている。長野氏は、室町時代前期頃には、上野国を支配する関東管領上杉氏に従う上野国在地武士団のリーダー的存在として頭角を現してきたと考えられている。

本遺跡が所在する「室田」の地名は、応安４(1371)年５月９日付沙弥某奉書(榛名神社文書、『室田村誌』所収)や、応永24～28(1417～1421)年頃のものと見られる鎌倉公方足利持氏書状(榛名神社文書、『群馬県史　資料編７　中世』所収)に見える「毛呂田」が初見である。室田の地は、室町時代前期には榛名神社の別当寺である榛名寺領で、榛名神社の支配を受けていた。「室田」の地名は、榛名神社領であることを意味する「カムロギダ＝神漏岐田」の転訛による地名とする説もある。

②長野氏の台頭と鷹留城

下室田町に所在する長年寺は、本遺跡の南東約4.7㎞に位置しているが、長野業尚が明応元(1492)年あるいは文亀元(1501)年頃に創建したと考えられている長野氏の菩提寺である。

永正９(1512)年６月付の上杉憲房制札(長年寺文書、『群馬県史　資料編７　中世』所収)に「於上州群馬郡室田之内長年寺」と、大永２(1522)年３月付平某禁制写(榛名神社文書、『群馬県史　資料編７　中世』所収)にも「上州群馬郡室田村長年寺之事」と見え、当村内長年寺への濫妨狼藉を禁止している。同年10月付長野憲業壁書(長年寺文書、『群馬県史　資料編７　中世』所収)にて３か条に亘って長年寺内での禁止条項を定めており、菩提寺である長年寺に対して保護する姿勢を示したものである。現在、墓地には長野業尚・憲業・業氏・業政・業固・業茂・業続らの五輪塔が遺っている。

この、長年寺の北側約1.3㎞、本遺跡の南東約1.8㎞には、室田長野氏の本拠となった鷹留城(56)が所在する。

榛名山南麓丘陵の南端を利用した並郭式山城で、範囲は南北約430m・東西約300mに及んでいる。

鷹留城の築城は、長野氏による箕輪城修造とほぼ同時期の15世紀末～16世紀初頭頃と考えられている。長野氏は吾妻郡域の在地武士団とは敵対関係にあったため、吾妻郡側への備えを堅固にする必要があったのであろう。鷹留城は、長野氏本宗家の居城である箕輪城と並んで、長野氏関連の主要な城館となる。

鷹留城の南側約0.6㎞の高台には松山城が、その南側に接して「堀之内」と称される方形居館が存在しており、要害松山城と方形居館のセット構成であったと考えられる。松山城については後北条氏被官の上田氏が天正10年頃に築城したとする伝承があるが、鷹留城とほぼ同時期、あるいは若干後の時代のものと考えられ、平時における室田長野氏の居所であったと考えられる。

なお、周辺の、烏川を臨む榛名山南麓の高台には鷹留城の出城や要害とみられる中世山城跡がいくつも所在しているが、遺構の状態が不明確なものも少なくない。

長年寺墓地内に所在する文亀３(1503)年２月20日の年紀を有する長野氏墓碑銘(『室田村誌』所収)には「鷹留城主長野伊予守業尚」と、また、天文７(1538)年４月14日を有する長野氏墓碑銘(『室田村誌』所収)には、「鷹留城主長野三河守業氏」と見え、鷹留城を本拠とした長野氏がこの地域を実質的に支配していたことがわかる。

③武田領から織田領へ

戦国期のものと推測される年未詳の浦野中務少輔宛武田信玄書状(浦野文書、『群馬県史　資料編７　中世』所収)には、鷹留城に拠る「長野三河入道随令之者八十余人」が武田方に討ち捕られた旨が記されており、長野氏宗家の本拠である箕輪城が落城した永禄９(1566)年９月(長年寺文書)に近い時期のことと推測され、この地は武田氏の支配下に入った。

天正８(1580)年８月５日付武田家定書写(浦野文書、『群馬県史　資料編７　中世』所収)にも、当地が武田氏被官浦野氏の知行であったことが見え、天正10(1582)年の武田氏滅亡まで、武田氏の支配下にあった。

武田氏滅亡後、信濃・甲斐、西上野などの武田旧領は織田信長の支配下に入った。信長は重臣の滝川一益を関東管領に任じて厩橋城に配置、関東の武田旧領の支配を任せると共に後北条氏への備えとしたが、同年、信長が本能寺の変で横死すると、滝川一益は侵攻してきた後北条氏との合戦に敗れ、関東一円は再び北条氏の領するところとなった。

北条氏の西上野支配の拠点は箕輪城であったが、信濃進出のために松井田城が重要視され、北条氏家臣である大道寺政繁が入城した。松井田城はこの時期に大規模な改修を受け大城郭に変貌している。天正18(1590)年の豊臣秀吉による小田原攻めに際して、松井田城は豊臣方の前田利家・上杉景勝軍によって攻められ、落城した。

④八幡荘

一方、烏川対岸の片岡郡側は、八幡宮が鎮座する現在の高崎市八幡町付近を中心に、寺尾町、安中市板鼻町、旧榛名町里見地区に及ぶ八幡荘が立荘される。八幡荘の史料上の初見は、弘長元(1226)年銘を有する東京都府中市染谷不動堂所蔵の金銅阿弥陀如来立像光背銘とかなり後の時期になるが、荘内に含まれる里見の地名を苗字とした里見義俊が平安時代末期～鎌倉時代初期にかけての有力豪族新田義重の庶長子であるので、元来、新田氏の経済基盤一つであったと考えられている。

第７項　近世

豊臣秀吉による小田原北条氏攻略後の徳川家康関東入封に伴い、関東一円は家康の支配するところとなった。江戸に本拠地を構えた家康は、徳川四天王の一人である井伊直政を関東防衛のための西北守護の要として上野国群馬郡の箕輪城に配置した。その後、慶長３(1598)年、井伊直政は、家康の命によって、箕輪から和田に移り、和田の地を「高崎」と改めて高崎城を築城、群馬・碓氷両郡のほぼ全域を所領とした。慶長５(1600)年12月、初代高崎藩主井伊直政は、関ヶ原の戦いにおける戦功によって加増され、かつて石田三成の居城であった近江国坂田郡の佐和山城を与えられ、近江に拠点を遷したが、上野国内の領地も引き続き領有した。

慶長７(1602)年、井伊直政が没すると、嫡子直継が跡を継いで、慶長11(1606)年、新たに彦根城を築城し、井伊家の本城としたが、井伊直継の主君である徳川家康は、直継は病弱かつ将器に欠けるとして、弟の直孝に彦根藩井伊家の家督を継承させると共に、兄・直継には別家を建てさせ、上野領３万石を分知し、碓氷郡安中に封じた。直継は名を直勝と改め、元和元(1615)年、中世安中城の

縄張りの一部を利用して近世安中城を築城し入封した。安中藩には、関東への出入り口である碓氷・牧の両関警固という重大な使命が課せられ、藩にとっての最重要任務とされた。

本遺跡が所在する中室田の地は、近世には中室田村と言われた。

慶長年間に箕輪城主井伊氏が当村を検地した形跡があり(中島文書)、天保９(1838)年の村明細帳(富沢文書)には「承応三年伊奈半左衛門様御検地」とある。

中室田村は、はじめ高崎藩領であったが、元和元(1615)年に安中藩領となり、正保２(1645)年には安中藩領と旗本本多家領が混在となる。寛文４(1664)年の年貢割付状(新井文書)によれば高773石余、うち小物成９石余、反別129町余、年貢米42石余、永87貫余であり、寛文郷帳では、田方268石余・畑方704石余で、206石が三河中島藩領、773石が旗本本多家領とある。元禄郷帳では、村名は見えないが、上室田村に記されている高1025石余は中室田村のものと考えられている。

寛延元(1748)年には上里見藩領となり、宝暦８(1758)年の上里見藩家老小倉又市手控え(中曽根文書)に拠れば、高1034石余で、年貢は米126石、永97貫185文とある。

当地一帯を含む上野国を筆頭に関東平野の広い範囲では、天明３(1783)年には浅間山の大噴火に伴う火山災害による甚大な被害に見舞われた。ただ、本遺跡周辺部では、この時に降下した浅間山火山灰As-Aによって埋没した水田や畑の遺構はあまり検出されていない。

文化９(1812)年、当村は天領と旗本蜷川家領の混在となり、江戸後期の御改革組合村高帳では、104石余が天領で無民家、930石余が旗本蜷川家領で家数237とある。天明３年の浅間山大噴火による火山災害被災以前の生産性にほぼ回復していることがわかる。

天保４(1833)年の人数は467、嘉永７(1854)年は408である(「宗門改帳」中島文書)。幕末期の御改革組合村高帳によれば、当村は板鼻宿の寄場組合に属しており、高1034石余、家数237である。

なお、中室田村を含めて周辺一帯は、明治元(1868)年の廃藩置県により岩鼻県に属し、明治４年には第一次群馬県に属し、明治６(1873)年に熊谷県に属し、さらに明治９(1876)年以降第２次群馬県に属して現在に至っている。

なお、上記は『榛名町誌　資料編』及び『同　通史編』に依った。

第３節　基本土層

(１)１区基本土層(第５図、PL.34)

1　暗褐色土。現代の耕作土及び表土。
2　褐色土。黒褐色粒子、橙色粒子、As-Aを少量含む。
3　黒褐色土。As-Bを多く、橙色粒子を少量含む。

(２)２区基本土層１(第５図、PL.33)

1　暗褐色土。現代の耕作土及び表土。
2　暗褐色土。As-Aを少量含む。
3　黒褐色土。As-Bを多く、橙色粒子を少量含む。
4　黒色土。As-C混じり。
5　黒褐色砂質土。As-C。
6　黒色土。褐色及び橙色粒子を僅かに含む。
7　淡黒褐色土。橙色粒子を少量、褐色粒子を僅かに含む。
8　黒褐色土。
9　黒色土。
10　暗褐色土。橙色粒子を少量、黄褐色粒子を僅かに含む。
11　黄褐色ローム層。

(３)２区基本土層２(第５図、PL.33)

1　7.5YR3/4　暗褐色土。現代の耕作土及び表土。
2　7.5YR3/4　暗褐色土。As-Aを少量含む。
3　7.5YR2/2　黒褐色土。As-Bを多く、橙色粒子を少量含む。
4　黒褐色砂質土。As-B。
5　7.5YR2/1　黒色土。褐色及び橙色粒子、小礫を僅かに含む。

(４)３区基本土層(第５図、PL.34)

1　7.5YR3/4　暗褐色土。現代の耕作土及び表土。
2　7.5YR3/4　暗褐色土。As-Aを少量含む。
3　7.5YR2/2　黒褐色土。As-Bを多く、橙色粒子を少量含む。
4　As-B
5　黒色砂質土。As-C混じり。
6　黒褐色砂質土。As-C。
7　7.5YR2/1　黒色土。褐色及び橙色粒子、小礫を僅かに含む。

（５）４区基本土層１（第５図、PL.）

１　7.5YR3/4 暗褐色土。現代の耕作土及び表土。

２　7.5YR3/4 暗褐色土。As-Aを少量含む。

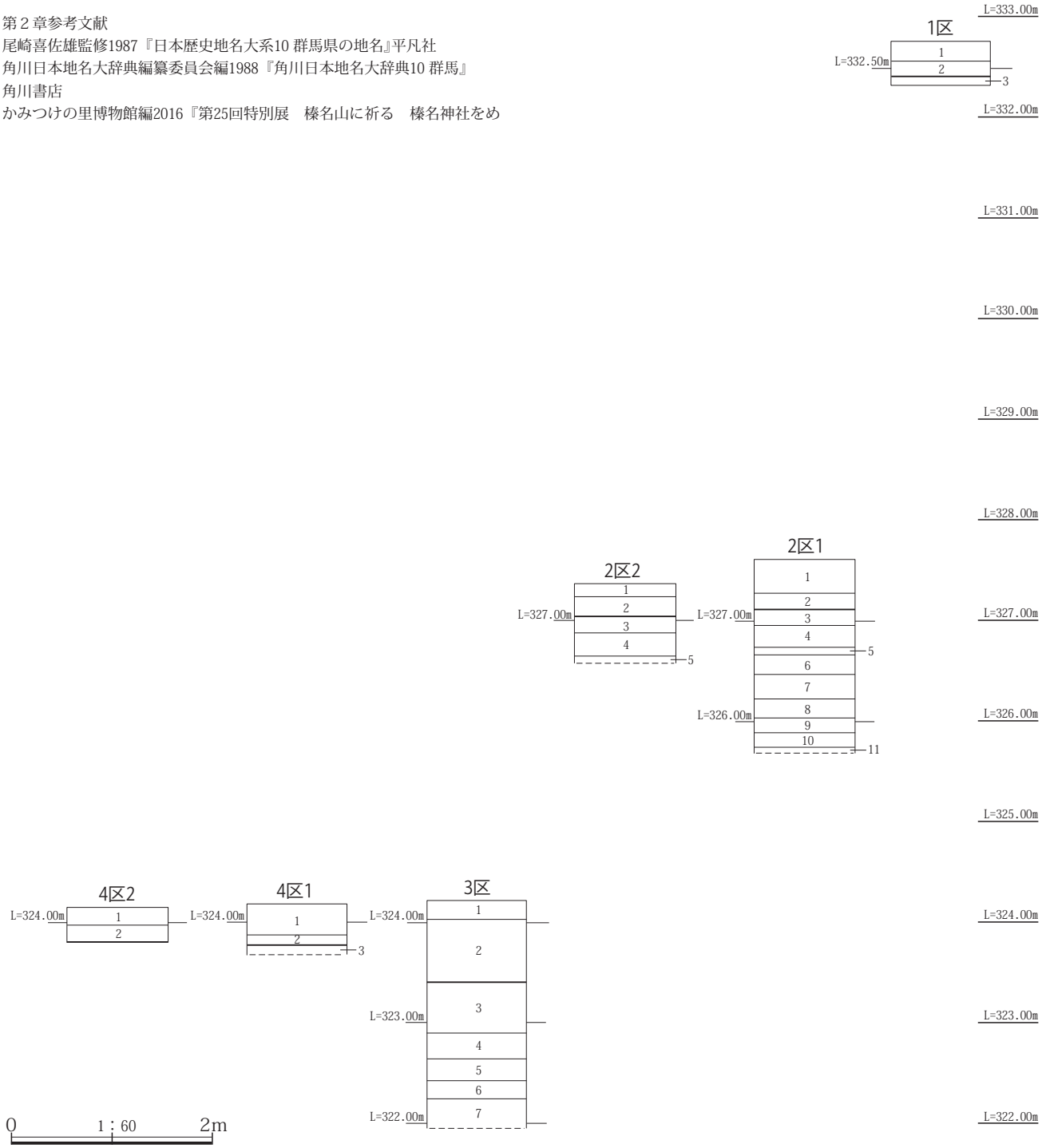
３　7.5YR2/1 黒色土。褐色及び橙色粒子、小礫を僅かに含む。

（６）４区基本土層２（第５図、PL.）

１　暗褐色土。現代の耕作土及び表土。

２　黒褐色土。As-A及び橙色粒子を少量含む。

第２章参考文献
尾崎喜佐雄監修1987『日本歴史地名大系10 群馬県の地名』平凡社
角川日本地名大辞典編纂委員会編1988『角川日本地名大辞典10 群馬』
角川書店
かみつけの里博物館編2016『第25回特別展　榛名山に祈る　榛名神社をめぐるモノとヒト』
群馬県編1938『上毛古墳綜覧』
群馬県編2017『群馬県古墳総覧』
群馬県教育委員会編1988『群馬県の中世城館跡』
群馬県史編纂委員会編1977～88『群馬県史』資料編１～10
群馬県埋蔵文化財調査事業団編1999『群馬県遺跡大事典』上毛新聞社
群馬町誌編纂委員会編1998『群馬町誌 資料編1 原始古代・中世』
群馬町誌編纂委員会編2001『群馬町誌 通史編1 原始古代・中世・近世』
山崎　一1971～1978『群馬県古城累址の研究』上・下・補遺編上・下
群馬県統合型地理情報システム「マッピングぐんま」
http://mapping-gunma.pref-gunma.jp/pref-gunma/top
榛名町誌編纂委員会編2010『榛名町誌 資料編１ 原始古代』
榛名町誌編纂委員会編2011『榛名町誌 通史編上 原始古代・中世』



第５図　基本土層模式図

第３章　検出された遺構と遺物

はじめに

中室田岩城遺跡は、高崎市の周知の埋蔵文化財包蔵地H32遺跡の範囲に含まれ、縄文時代及び中世・近世の遺物散布地とされている。道路建設に伴う調査であるため、調査対象地は北東―南西方向に細長い総延長約150m、幅は約10～22mの範囲で、調査面積は3,187㎡である。北東側から南西側の岩城川に向かって傾斜する地形であり、最も標高が高い１区北東隅付近の標高は333.8m、調査区内で最も標高が低い４区南西隅付近の標高は322.0mで、調査区内における標高差は11.8mに及んでいる。

今回の発掘調査で検出された遺構は、時期不明のものと縄文時代のもので､その他に遺構には伴わないものの、弥生時代前期相当の土器の出土も顕著であった。

基本的に時期不明遺構の下層から縄文時代の遺構が検出されたが、縄文時代の遺構と時期不明の遺構とが、実質的に、ほぼ同一面から確認された箇所もあり、表土や時期不明の土坑から縄文時代の土器片が出土した事例もすくなくない。

また、弥生時代前期、前期相当、中期の土器も出土した。縄文時代遺構の確認面と弥生時代の土器が出土した面とは、明確な上下関係にあったわけではなく、ほぼ同一面から検出されたというのが実情であった。表土や縄文時代の遺構の埋土から弥生時代前期ないしは前期相当の土器片が出土した事例も存在している。今回の調査対象範囲において、弥生時代の遺構は全く検出されなかったが、元来、弥生時代の遺構が存在していたにもかかわらず、後世に削平や攪乱を受けて完全に破壊されてしまったか、あるいは調査区近辺の調査対象地外に弥生時代前期の遺構が存在していた可能性が想定できる。

時期不明の遺構は１・２区から、縄文時代の遺構は１・２・４区から検出された。３区からは遺構は全く検出されなかったが、３区の表土からは表土から縄文時代の土器片２点、黒曜石剥片１点、弥生時代の土器片21点等が出土していることは特筆すべきである。

近世の遺構、縄文時代の遺構とも、１区の検出遺構数が最も多く、２区・４区では遺構は疎らにしか検出されていない。最も標高が高く、安定した台地上である１区に遺構が集中し、縄文時代の竪穴建物や屋外炉が検出されるのは当然である。

傾斜度が高い３区からは、時期不明の遺構も縄文時代の遺構も検出されなかった。また、３区に次いで傾斜度が高く、また、調査対象箇所の中では最も標高が低い４区でも縄文時代の土坑が２基しか検出されなかったのも、地形の状況から見れば当然のことと言えよう。本県では、弥生時代前期の土器が、完形品の壺や大方が復元できた鉢などを含め、これほどまとまって出土した事例はなく、市周辺地域の歴史を考察する上で、新たに、重要な資料が加えられることになった。

第２表　検出遺構数集計表

面	検出遺構の種類	検出数	時期
１面	柵	1	時期不明
	土坑	29	〃
	ピット	22	〃
２面	竪穴建物	3	縄文時代中期後半～末葉
	屋外炉	1	縄文時代早期
	河道	1	縄文時代
	土坑	3	縄文時代早期・縄文時代

第１節　時期不明の遺構

調査区１面から検出された時期不明の遺構は、柵１条、土坑29基、ピット22基である。

天明３(1783)年に起こった浅間山噴火によって降下したAs-Aの一次堆積は確認できず、表土の下側にAs-Aを多く含む層が存在するのみであり、遺構に伴う同時期の出土遺物が皆無であるため、それらの年代を詳細に絞り込むことは難しい。

第１項　柵

１号柵(第８図、PL．７・８)

区・面　１区１面

位置　１区の中央から北西寄りの位置。10・11号ピットの東側に隣接する。X＝45136～140、Y＝－86222～224。

重複　なし。

形状　北北東-南南西方向、３間。

主軸方位　N-15°-E。

規 模　全 長4.38m、P1･2芯 々 間1.42m、P2･3芯 々 間1.37m、P3･4芯々間0.98m。

坑の規模・形状

(１)P1：北西-南東方向に長い楕円形状、長径0.50m、短径0.43m、深さ0.58m。

(２)P2：ほぼ円形状、径0.23m、深さ0.29m。

(３)P3:北北西-南南東にやや長い楕円形状､長径0.27m、短径0.20m、深さ0.27m。

(４)P4:北東-南西方向にやや長い楕円形状､長径0.51m、短径0.47m、深さ0.50m。

埋土　いずれの柱穴にも柱痕が明瞭に確認された。柱痕は確認面から深さ約0.16～0.50m、幅約0.10～0.15m程度で、橙色粒子を少量含む暗褐色土。柱痕の周囲の埋土は概ね橙色粒子及びローム粒子を僅かに含む暗褐色土。

遺物　なし。

所見　１区の中央から北西寄りの位置から１条が検出された。北北東-南南西方向の３間の小規模な柵であり、周辺に建物跡などが全く存在しないため、建物などの障壁とは考えにくい。

遺構は偏り、痕跡すら全く検出できなかったが、俗に「芋穴」と称されることが多い長大な土坑が近接して検出されていることからも、この地には元来、畑などの耕地が存在しており、それらを画する柵であった可能性も考えられるが、この１条しか検出されなかった点に疑問が残る。

時期　不明。

第２項　土坑

本遺跡で検出された土坑の多くは、天明３年の浅間山噴火に伴って降下したAs-Aの二次堆積物を多く含む層の下から検出された。

調査区の一部からは、古墳時代初期の４世紀初頭に降下したと考えられているAs-Cが検出されているものの、土坑が検出された地点では、その上面からAs-Cが明瞭に検出された箇所は皆無であったこと、また、多くの土坑が検出された確認面の下層から検出された土坑も存在しており、中には、埋土中から少量の縄文時代の土器片が出土したような事例も存在しているが、それぞれの土坑の形状や埋土、検出状況等を精査した上で、29基の土坑を時期不明のものとして、報告することとした。

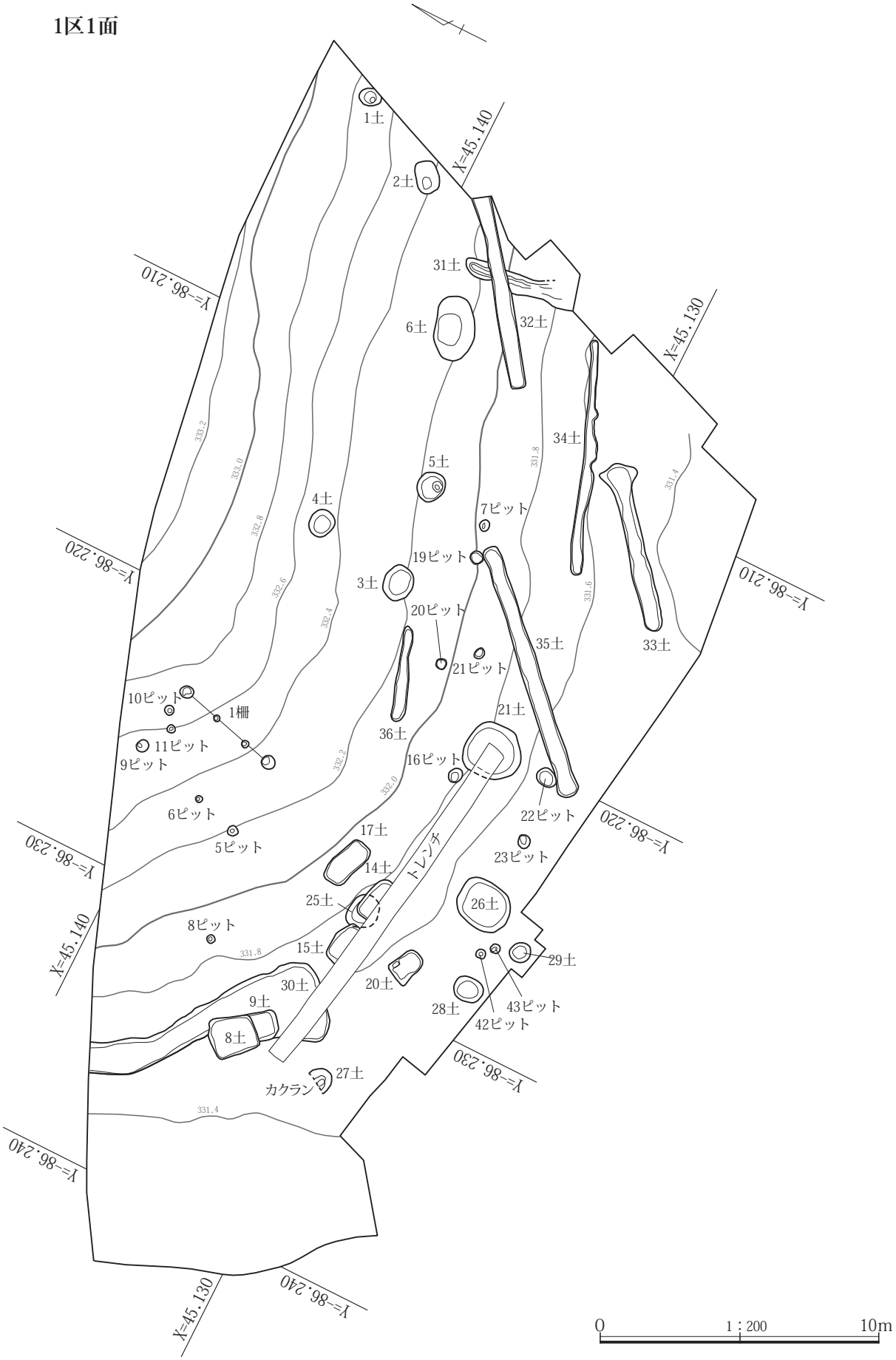
なお、先述したように、これらの土坑から時期がわかる遺物の出土は皆無であったため、遺構の年代を明確にすることはできなかった。

土坑については、これらの他に、第２部で報告するが、明らかに縄文時代のものと考えられる土坑が３基(４区10・11号土坑、１区19号土坑)検出されている。

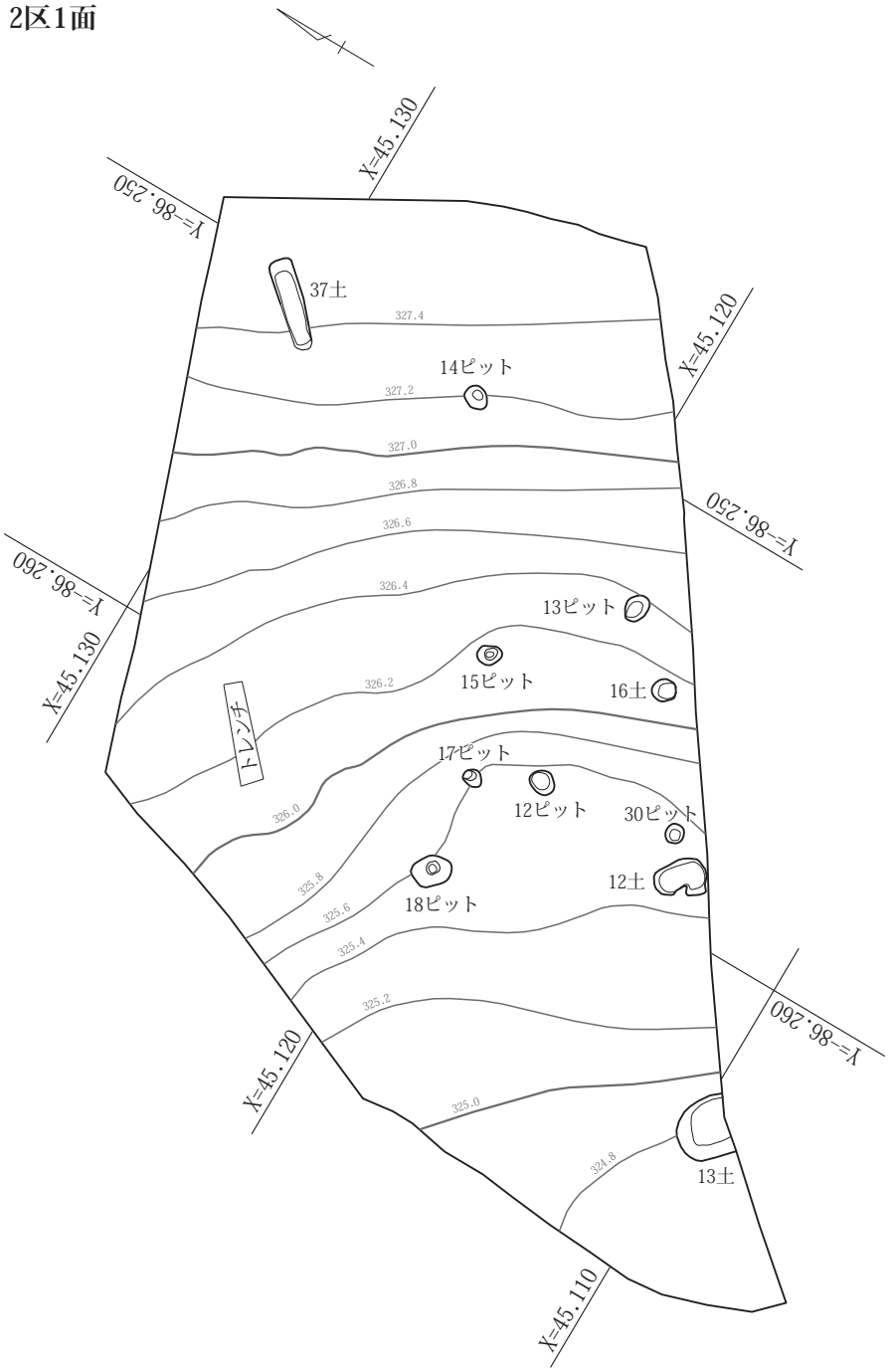
時期不明の土坑は１区から25基、２区から４基である。これらのうち１区からは、30～36号土坑のような、俗に「芋穴」と称されることが多い長大な溝状の土坑が７基検出されている。それらの中でも特に32～36号土坑は、概ね北東-南西方向に長大であるが、規則正しく計画的な配置がなされていたとは考えにくく、ランダムな分布である。

また、等高線に沿って規則正しく分布しているようなものもないため、これらの土坑の中に、動物の捕獲を目的とした所謂陥し穴が存在していたとは考えにくい。

これら時期不明と考えられる土坑の分布の状況には、あまり特徴を見出すことが出来ない。

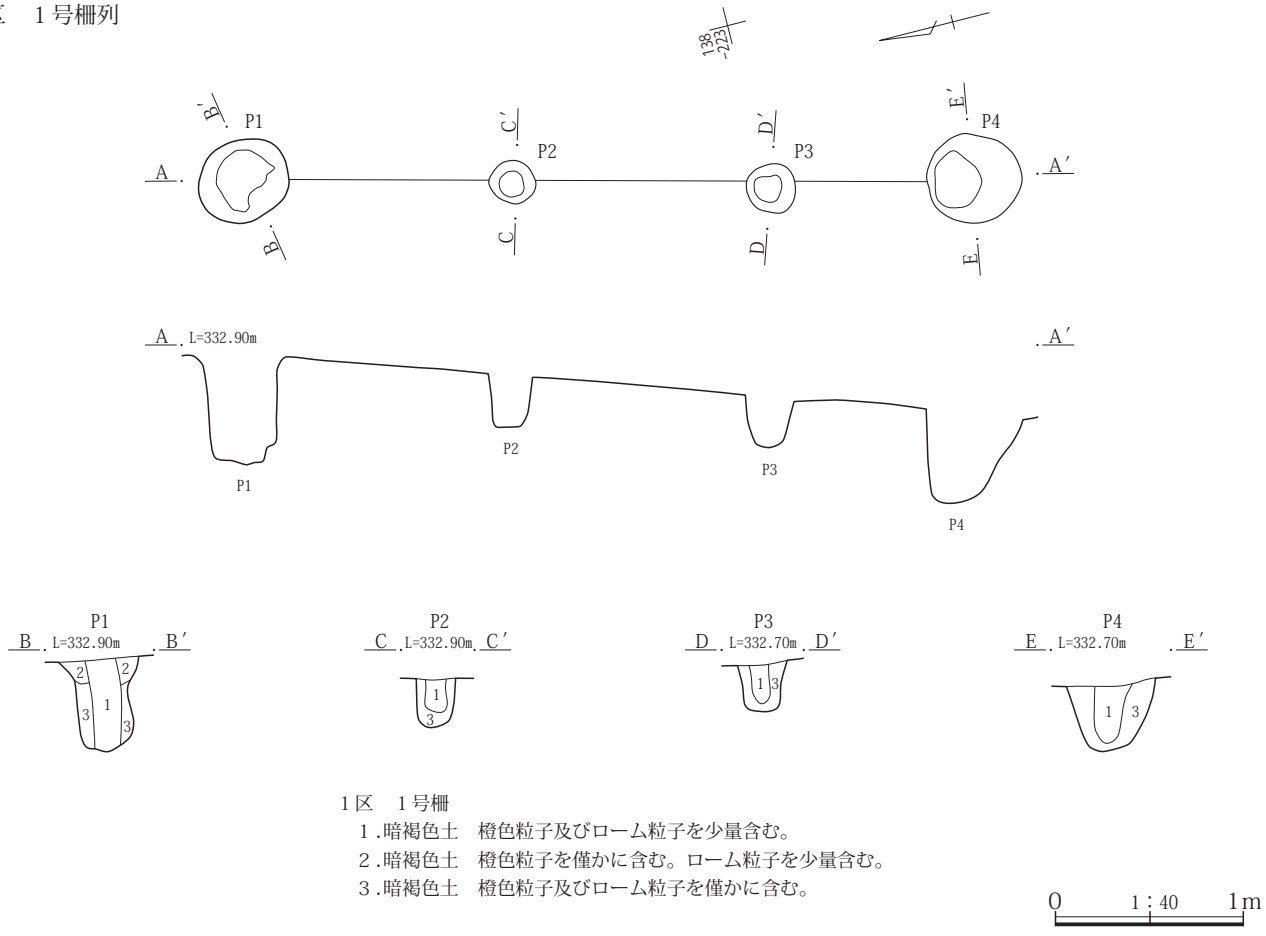

1区1面
1土
2土
X=45.140
31土
32土
6土
X=45.130
34土
5土
4土
7ピット
19ピット
3土
20ピット
21ピット
35土
33土
10ピット
1柵
11ピット
9ピット
36土
21土
16ピット
22ピット
6ピット
5ピット
17土
14土
トレンチ
23ピット
25土
26土
8ピット
15土
29土
30土
20土
9土
28土
43ピット
42ピット
8土
27土
カクラン
X=45.140
X=45.130
Y=86.210
Y=86.220
Y=86.230
Y=86.240
331.8
331.4
0
1：200
10m

第６図　１区１面全体図


2区1面
X=45.130
Y=86.250
37土
327.4
14ピット
327.2
X=45.120
327.0
326.8
Y=86.250
326.6
Y=86.260
326.4
13ピット
X=45.130
15ピット
326.2
16土
トレンチ
17ピット
12ピット
30ピット
326.0
325.8
12土
18ピット
325.6
325.4
325.2
Y=86.260
X=45.120
325.0
324.8
13土
X=45.110
0
1：200
10m

第７図　２区１面全体図

１区　１号柵列



第８図　１区１号柵

１号土坑(第９図、PL.８)

区・面　１区１面

位置　１区北東隅付近、調査区東壁にかかる。２号土坑の北側に位置する。X＝45144、Y＝－86201。

重複　なし。

平面形状　南東側が調査区外へと広がっているため、全容は明らかではないが、北北西－南南東方向にやや長い楕円形状を呈するものと思われる。

主軸方位　N-15°-W。

規模　長径0.81m、短径0.61m、深さ0.53m。

埋土　壁際に橙色粒子を少量、黄褐色粒子を僅かに含む暗褐色土が斜めに流入するように堆積した後に、中・下層に橙色粒子及びローム粒子を僅かに含む暗褐色土が堆積し、上層に橙色粒子及び褐色粒子及びAs-C粒子をそれぞれ僅かに含む黒褐色土が堆積している。

遺物　なし。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、底部南東側が一段と深く掘り込まれている。そのため、断面は、底部が一部突出した、深い逆台形状を呈している。

時期　不明。

２号土坑(第９図、PL.８)

区・面　１区１面

位置　１区北東隅より約４m南側、調査区東壁際。１号土坑の南側に位置する。X＝45140～141、Y＝－86202～203。

重複　なし。

平面形状　北東-南西方向に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方位　N-52°-E。

規模　長径1.18m、短径0.82m、深さ0.33m。

埋土　壁際にローム粒子を多く含む暗褐色土が斜めに流入した上に、中・下層にローム粒子及び褐色粒子を僅かに含む暗褐色土が堆積し、上層に橙色粒子を少量、As-C粒子を僅かに含む黒褐色土が堆積する。

遺物　なし。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、底部南西側が

一段と深く掘り込まれている。そのため、北東-南西方向の断面は、北東側辺がやや段状を呈する逆台形状を呈している。

時期　不明。

３号土坑(第９図、PL.８)

区・面　１区１面

位置　１区の中央部よりやや東寄りの位置。36号土坑の北東側、４号土坑の南側に位置する。X＝45135～136、Y＝－86215～216。

重複　なし。

平面形状　東北東－西南西方向に長い楕円形状を呈する。

主軸方位　N-85°-W。

規模　長径1.25m、短径1.07m、深さ0.35m。

埋土　壁際に橙色粒子を少量及び黄褐色粒子を僅かに含む暗褐色土が斜めに流入した上に、ローム粒子及び褐色粒子及びAs-YP粒子を僅かに含む暗褐色土が堆積する。

遺物　なし。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、東西方向の断面は底部が広い逆台形状を呈している。

時期　不明。

４号土坑(第９図、PL.９)

区・面　１区１面

位置　１区の中央部よりやや北東寄りの位置。３号土坑・の北側に位置する。X＝45138～139、Y＝－86214～215。

重複　なし。

平面形状　東西にやや長い楕円形状を呈する。

主軸方位　N-78°-W。

規模　長径0.98m、短径0.87m、深さ0.41m。

埋土　下層に褐色土及びAs-YP粒を僅かに含む暗褐色土、その上に褐色土及びAs-YP粒を少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物　なし。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、南北方向の断面は、深い逆台形状を呈している。

時期　不明。

５号土坑(第９図、PL.９)

区・面　１区１面

位置　１区の中央部より東寄りの位置。３号土坑の東側、６号土坑の南西側に位置する。X＝45135～136、Y＝－86211～212。

重複　なし。

平面形状　東北東-西南西に僅かに長い楕円形状を呈する。

主軸方位　N-71°-W。

規模　長径1.08m、短径0.96m、深さ0.30m。

埋土　壁際に橙色粒を僅かに含む暗褐色土が斜めに流入しており、その上に、下層に橙色粒子を少量含む暗褐色土が、また、上層に橙色粒子を少量及びAs-YP粒子を僅かに含む暗褐色土が堆積する。上層にはAs-C粒子を僅かに含む黒色土塊を部分的に含み、褐色粒子を少量及びAs-YP粒子を僅かに含む暗褐色土が堆積している。

遺物　埋土中より縄文時代中期後半加曽利Ｅ3式期の深鉢胴部下半片が１点出土。沈線による懸垂文構成。ＬＲを縦位充填施文。

　また、非掲載ではあるが、縄文時代中期後半～末葉加曽利Ｅ3・Ｅ4式期土器片と縄文時代中期後半の土器片が各１点出土している。

所見　比較的しっかりとした掘方を呈しており、東西方向の断面は、深い逆台形状を呈している。

時期　不明。

６号土坑(第10図、PL.９)

区・面　１区１面

位置　１区東寄りのほぼ中央の位置。31・32号土坑の北西側に位置する。X＝45137～138、Y＝－86206～208。

重複　なし。

平面形状　北東-南西に長い楕円形状を呈する。

主軸方位　N-62°-E。

規模　長径2.32m、短径1.47m、深さ1.26m。

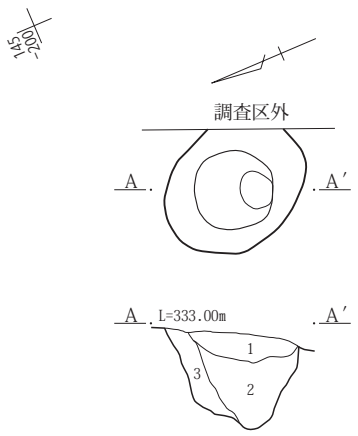
埋土　不明。

遺物　非掲載ではあるが、縄文時代中期後半の土器片が１点出土。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、北東-南西方向の断面は、深い逆台形状を呈している。

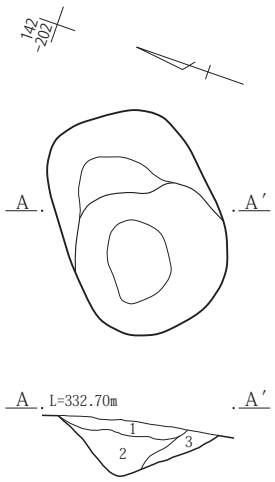
時期　不明。

1区　1号土坑



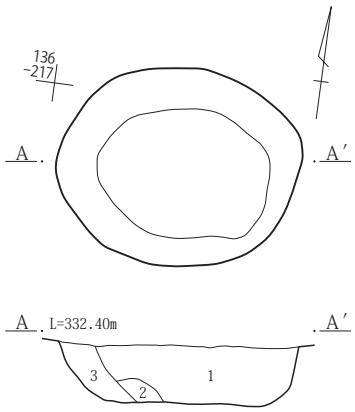
1区　1号土坑
1.黒褐色土　橙色粒子及び褐色粒子及び As-C 粒子を僅かに含む。
2.暗褐色土　橙色粒子及びローム粒子を僅かに含む。
3.暗褐色土　橙色粒子を少量、黄褐色粒子を僅かに含む。

1区　2号土坑



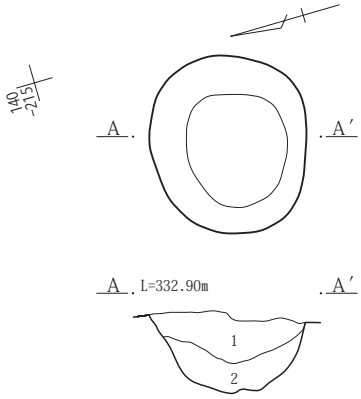
1区　2号土坑
1.黒褐色土　橙色粒子を少量含む。As-C 粒子を僅かに含む。
2.暗褐色土　褐色粒子及びローム粒子を僅かに含む。
3.暗褐色土　ローム粒子を多く含む。

1区　3号土坑



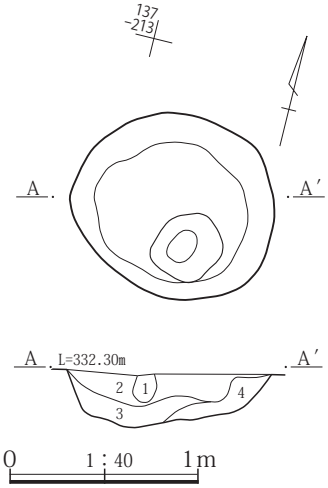
1区　3号土坑
1.暗褐色土　褐色粒子及びローム粒子及び As-YP 粒子を僅かに含む。
2.黒褐色土　褐色粒子及びローム粒子を僅かに含む。
3.暗褐色土　橙色粒子を少量含む。黄褐色粒子を僅かに含む。

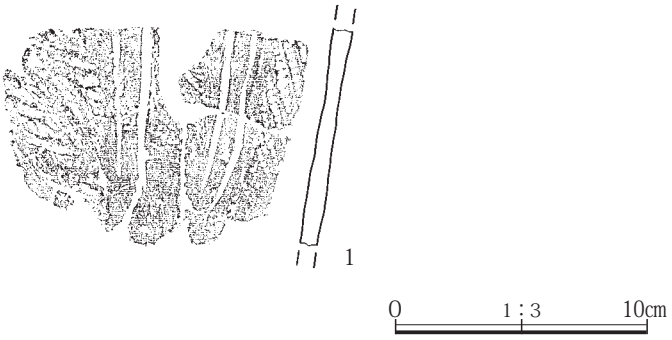
1区　4号土坑



1区　4号土坑
1.暗褐色土　褐色土及び粒子を少量含む。
2.暗褐色土　褐色土及び As-YP 粒子を僅かに含む。

1区　5号土坑





1区　5号土坑
1.黒色土　As-C 粒子を僅かに含む。
2.暗褐色土　褐色粒子を少量含む。As-YP 粒子を僅かに含む。
3.暗褐色土　橙色粒子を少量含む。
4.暗褐色土　橙色粒子を僅かに含む。

第９図　１区１～５号土坑及び５号土坑出土遺物

８号土坑(第10図、PL.９・10)

区・面　１区１面

位置　１区西寄りのほぼ中央の位置。X＝45132～134、Y＝－86232～234。

重複　30号土坑を掘り込む。９号土坑との新旧関係は不明。

平面形状　北西－南東に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方位　N-46°-W。

規模　長径1.67m、短径1.44m、深さ0.47m。

埋土　不明。

遺物　非掲載ではあるが、縄文時代早期条痕文・沈線文系土器片が１点出土している。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、壁は垂直に近い角度で掘り込まれており、北西-南東方向の断面は、幅の広い長方形状を呈している。

時期　不明。

９号土坑(第10図、PL.10)

区・面　１区１面

位置　１区西寄りのほぼ中央の位置。X＝45132～133、Y＝－86231～232。

重複　30号土坑を掘り込む。８号土坑との新旧関係は不明。

平面形状　北西側が８号土坑と重複しているため全容は不明であるが、８号土坑とよく似た形状で、北西－南東に長い隅丸長方形状を呈するものと思われる。

主軸方位　N-41°-W。

規模　検出長径0.84m、短径1.03m、深さ0.30m。

埋土　不明。

遺物　埋土中より縄文時代中期末葉の加曽利Ｅ4式期の深鉢口縁～胴部片２点が出土した。１は、口縁部は横位沈線、胴部は縦位に条線を施す。２は、口縁部に横位隆線を施され、下位に縦位隆線で区画しＬＲを施文。

　また、非掲載ではあるが、縄文時代中期後半の土器片３点、硬質泥岩剥片及び粗粒輝石安山岩礫片が各１点出土している。

所見　相応にしっかりとした掘方を呈しているが、北西側に重複する８号土坑よりやや浅く扁平である。８号土坑と重複しているため、全容は不明であるが、北西－南東方向の断面は、幅の広い逆台形状を呈していたものと推測できる。

時期　不明。

12号土坑(第10図、PL.10)

区・面　２区１面

位置　２区の中央から南西寄りの位置。調査区南壁際。30号ピットの西側に隣接する。X＝45112～114、Y＝－86258～259。

重複　なし。

平面形状　北西－南東に長い楕円形状をベースとし、南西隅側が少し張り出す。

主軸方位　N-44°-W。

規模　長径1.40m、短径1.00m、深さ0.56m。

埋土　下層に橙色粒子を少量、黄褐色粒子を僅かに含む暗褐色土が、その上に褐色粒子及びローム粒子を僅かに含む暗褐色土が堆積し、さらにその上に暗褐色土と軽石粒を少量含む黒褐色土が堆積する。

遺物　なし。

所見　しっかりとした掘方を呈しているが、北西-南東方向の断面は、壁の斜度が高く深い逆台形状を呈している。

時期　不明。

13号土坑(第10図、PL.10)

区・面　２区１面

位置　２区の南西隅寄りの位置。調査区南壁にかかる。X＝45108～110、Y＝－86263～265。

重複　なし。

平面形状　北西-南東に長い楕円形状を呈しているものと推測できるが、南東側が調査区外に出るため、全容は不明である。

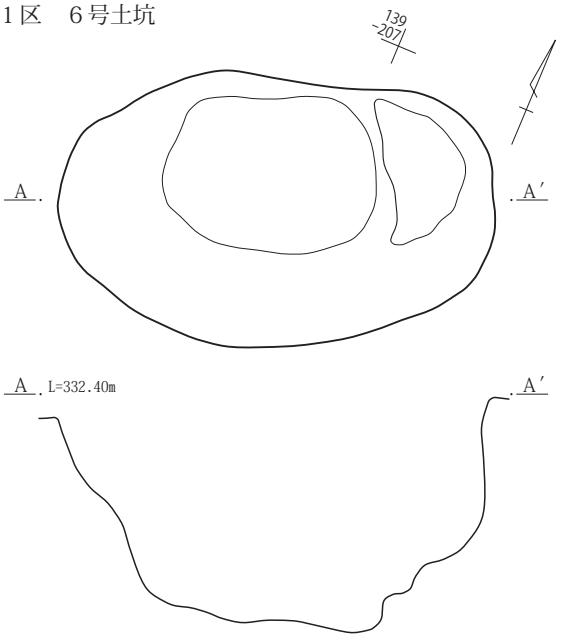
主軸方位　N-46°-W。

規模　検出長径1.36m、短径1.62m、深さ1.08m。

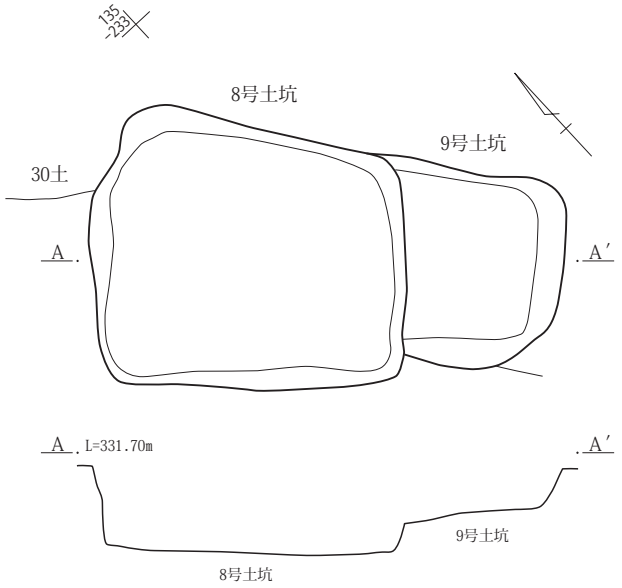
埋土　下層に黄褐色土を僅かに、As-YP粒子を少量含む暗褐色土が、その上に褐色粒子及びローム粒子を僅かに含む暗褐色土が、さらにその上に橙色土を少量、褐色粒子及びローム粒子を僅かに含む黒褐色土が、さらにその上の最上層に暗褐色土を少量含む黒褐色土が比較的薄く堆積している。

遺物　なし。

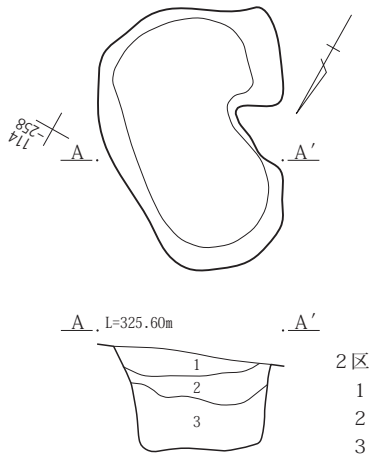
１区　６号土坑



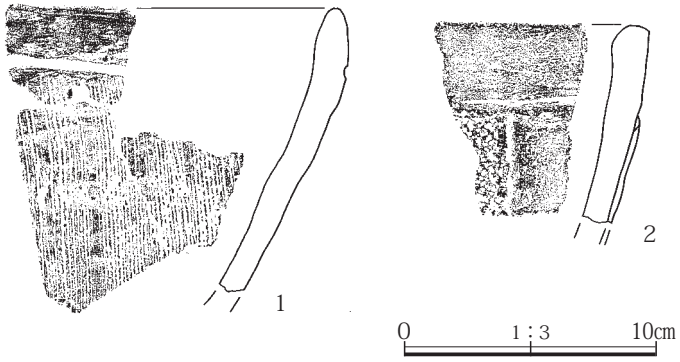
１区　８・９号土坑



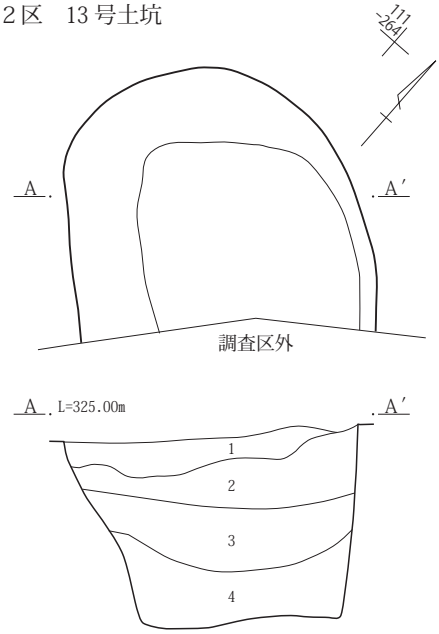
２区　12 号土坑



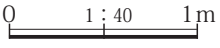
２区　12号土坑
１.黒褐色土　暗褐色土及び軽石粒子を少量含む。
２.暗褐色土　褐色粒子及びローム粒子を僅かに含む。
３.暗褐色土　橙色粒子を少量含む。黄褐色粒子を僅かに含む。



２区　13 号土坑



２区　13号土坑
１.黒褐色土　暗褐色土を少量含む。
２.黒褐色土　橙色土を少量含む。褐色粒子及びローム粒子を僅かに含む。
３.暗褐色土　褐色粒子及びローム粒子を僅かに含む。
４.暗褐色土　黄褐色土を僅かに含む。As-YP 粒子を少量含む。



第10図　１区６・８・９号土坑、２区12・13号土坑及び９号土坑出土遺物

所見　深くしっかりとした掘方を呈しており、北東-南西方向の断面は、壁の斜度が高く深い逆台形状を呈している。

時期　不明。

14号土坑(第11図、PL.10)

区・面　１区１面

位置　１区の南西寄りの位置。17号土坑の南側に隣接し、15号土坑のすぐ東側に近接する。X＝45131、Y＝－86225～227。

重複　直接的な切り合い関係はないが、25号土坑の上層に位置している。

平面形状　現状では東西に長い隅丸長方形状を呈していたものと推測でき、形状は８・９・15・17号土坑などと類似していたと推測出来るが、南側を本調査着手前の試掘の際に破壊されているため、全容は不明である。

主軸方位　N-81°-W。

規模　長径1.60m、検出短径0.54m、深さ0.25m。

埋土　下層に褐色土を少量、褐色粒を僅かに含む暗褐色土、その上に褐色土及び褐色粒子少量含む暗褐色土が比較的薄く堆積する。

遺物　なし。

所見　しっかりとした掘方を呈しているが、深さに比して底面が広いため、東西方向の断面は扁平な逆台形状を呈している。

８・９・15・17号土坑などと類似した形状であり、同類の土坑であると考えられる。

時期　不明。

15号土坑(第11図、PL.10)

区・面　１区１面

位置　１区の南西寄りの位置。30号土坑のすぐ東側、14号土坑のすぐ西側に近接する。X＝45131～132、Y＝－86227～229。

重複　直接的な切り合い関係はないが、25号土坑の上層に位置している。

平面形状　現状では東西に長い隅丸長方形状を呈していたものと推測でき、形状は８・９・14・17号土坑などと類似していたと推測出来るが、14号土坑と同様、南側を本調査着手前の試掘の際に破壊されているため、全容は不明である。

主軸方位　N-78°-W。

規模　長径1.55m、検出短径0.59m、深さ0.43m。

埋土　下層に橙色粒子を僅かに含む暗褐色土、その上に褐色土及び橙色粒子を少量含む褐色土が比較的薄く堆積している。

遺物　なし。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、東西方向の断面は、底面が隅丸長方形状を呈している。

８・９・14・17号土坑などと類似した形状であり、同類の土坑であると考えられる。

時期　不明。

16号土坑(第11図、PL.11)

区・面　２区１面

位置　２区の南端の中央。南壁際。13号ピットの南西側に位置する。X＝45116、Y＝－86254～255。

重複　なし。

平面形状　北西-南東にやや長い楕円形状を呈している。

主軸方位　N-31°-W。

規模　長径0.64m、短径0.60m、深さ0.47m。

埋土　下層に橙色粒子を僅かに含む暗褐色土、その上に暗褐色土及び軽石を少量含む黒褐色土が堆積している。

遺物　なし。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、北西-南東方向の断面は深い逆台形状を呈し、南東壁はほぼ垂直に近い状態で掘り込まれている。

時期　不明。

17号土坑(第11図、PL.11)

区・面　１区１面

位置　１区の中央から南西寄りの位置。14号土坑の北側に隣接する。X＝45132～133、Y＝－86224～226。

重複　なし。

平面形状　北西-南東に長い隅丸長方形状を呈している。形状は８・９・14・15号土坑などと類似していたものと考えられる。

主軸方位　N-70°-W。

規模　長径1.84m、短径0.87m、深さ0.21m。

埋土　褐色土を少量含み、ぼそぼそとした暗褐色土。

遺物　非掲載ではあるが、縄文時代中期後半の土器片が１点出土している。

所見　浅いがしっかりとした掘方を呈している。北東－南西方向の断面は、底面が広く扁平な逆台形状を呈している。

時期　不明。

20号土坑(第11図)

区・面　１区１面

位置　１区の南西寄りの位置。25号土坑の南西側、28号土坑の北側に位置する。X＝45128～129、Y＝－86227～228。

重複　なし。

平面形状　西北西－東南東に長い不整隅丸長方形状を呈している。

主軸方位　N-67°-W。

規模　長径1.18m、短径0.88m、深さ0.27m。

埋土　橙色土を少量含む暗褐色土。

遺物　なし。

所見　浅いがしっかりとした掘方を呈している。北東－南西方向の断面は、底面に凹凸があり、広く扁平な逆台形状を呈している。

時期　不明。

21号土坑(第11図、PL.11)

区・面　１区１面

位置　１区の南端寄りの中央。26号土坑の北東側に位置する。北から南へと緩やかに傾斜する斜面上に掘り込まれている。X＝45128～130、Y＝－86218～220。

重複　なし。

平面形状　南北に長い楕円形状を呈している。

主軸方位　N-12°-E。

規模　長径2.06m、短径1.97m、深さ0.60m。

埋土　下層に暗褐色土を少量含む黒褐色土が堆積し、その上に橙色土を少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物　なし。

所見　本遺跡において検出された楕円形状を呈する近世の土坑としては、６・13・26号土坑などと共に大きな部類に属する土坑である。しっかりとした掘方を呈しており東西方向の断面は､底面が広い逆台形状を呈している。

時期　不明。

25号土坑(第11図、PL.11)

区・面　１区１面

位置　１区の中央から西寄りの位置。20号土坑の北東側に位置する。X＝45130～132、Y＝－86226～227。

重複　直接的な切り合い関係はないが、14・15号土坑の下層に位置している。

平面形状　東西に長い不整楕円形状を呈している。

主軸方位　N-72°-W。

規模　長径1.30m、短径1.07m、深さ0.28m。

埋土　橙色土を少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物　なし。

所見　14・15号土坑の下層に位置している。確認面の層位や埋土の状況からみて、近世の土坑と判断した。

比較的薄く扁平な土坑であり、断面は扁平な逆長半円形状を呈している。

時期　不明。

26号土坑(第12図、PL.11・12)

区・面　１区１面

位置　１区の西寄りの南端付近。29号土坑のすぐ北側に隣接し、20号土坑の東側、28号土坑の北東側、21号土坑の南西側に位置する。21号土坑同様、北から南に向かって緩やかに傾斜する斜面上に位置している。X＝45126～128、Y＝－86223～225。

重複　なし。

平面形状　北東－南西に長い楕円形状を呈している。

主軸方位　N-18°-E。

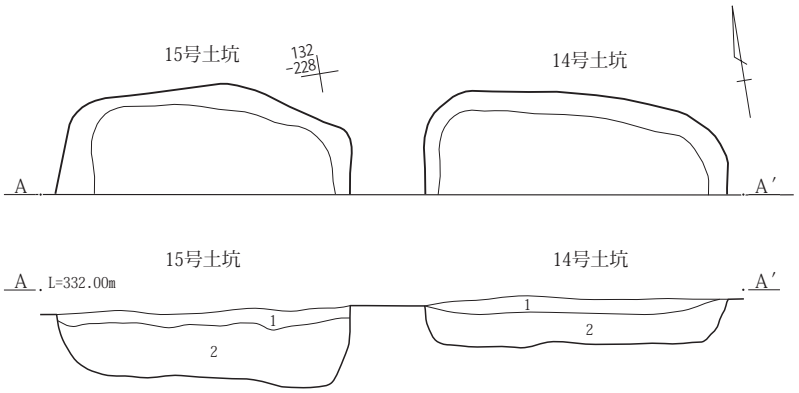
規模　長径2.03m、短径1.66m、深さ0.38m。

埋土　底面付近の一部にローム土を少量と橙色土を僅かに含む黄褐色土が堆積しており、その上に黄褐色土とAs-YP粒子をそれぞれ僅かに含む暗褐色土が堆積しているが、この土層は、底面から堆積している部分の方が大きい。

さらにその上層に褐色及びロームの粒子をそれぞれ僅かに含む暗褐色土が堆積しているが、部分的には暗褐色土を少量と橙色土を僅かに含む黒褐色土が最上層に堆積している箇所も存在している。

遺物　埋土中より縄文時代中期末葉加曽利Ｅ4式期の深

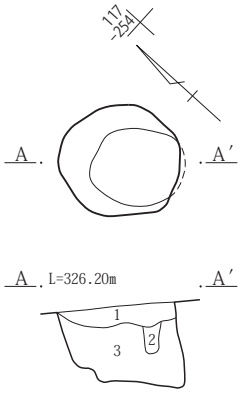
１区　14・15号土坑



１区　14号土坑
１.暗褐色土　褐色土及び褐色粒子を少量含む。
２.暗褐色土　橙色土を少量含む。褐色粒子を僅かに含む。

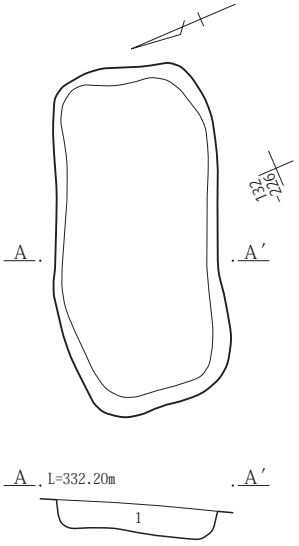
１区　15号土坑
１.褐色土　褐色土及び橙色粒子を少量含む。
２.暗褐色土　橙色粒子を僅かに含む。

２区　16号土坑



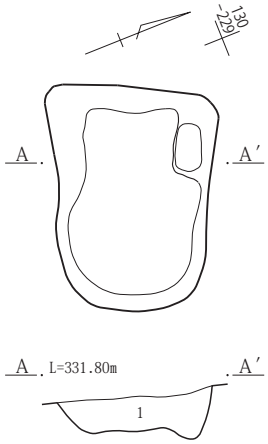
２区　16号土坑
１.黒褐色土　暗褐色土及び軽石を少量含む。
２.暗褐色土　褐色粒子及びローム粒子を僅かに含む。
３.暗褐色土　橙色粒子を僅かに含む。

１区　17号土坑



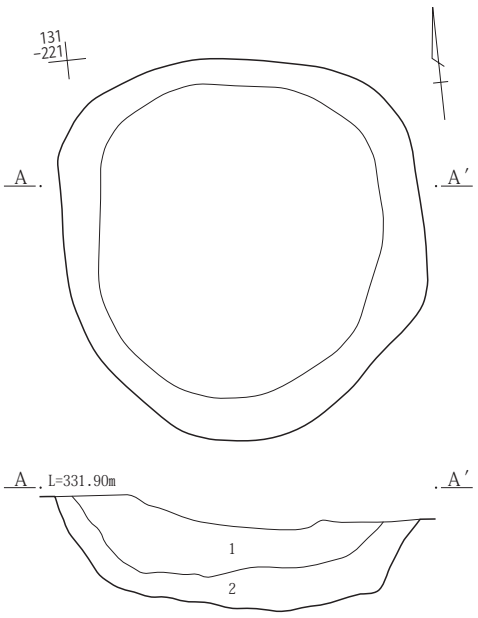
１区　17号土坑
１.暗褐色土　褐色土を少量含む。ぼそぼそしている。

１区　20号土坑



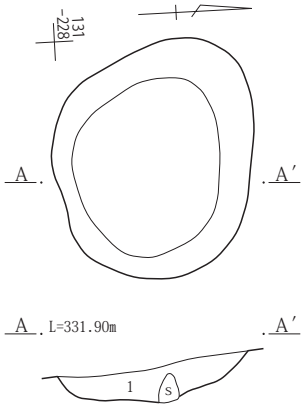
１区　20号土坑
１.暗褐色土　橙色土を少量含む。

１区　21号土坑



１区　21号土坑
１.暗褐色土　橙色土を少量含む。
２.黒褐色土　暗褐色土を少量含む。

１区　25号土坑



１区　25号土坑
１.暗褐色土　橙色土を少量含む。

0　1：40　1m

第11図　１区14・15・17・20・21・25号土坑、２区16号土坑

鉢片２点が出土した。１は深鉢の底部片。２は深鉢の胴部片で、沈線によるＵ字状区画、区画内にＬＲを斜位施文。

また、非掲載ではあるが、縄文時代中期後半の土器片が1点出土している。

所見　本遺跡において検出された楕円形状を呈する近世の土坑としては、6・13・21号土坑などと共に大きな部類に属する土坑である。

やや浅いが、しっかりとした掘方を呈しており北東-南西方向の断面は、底面が広く扁平な逆台形状を呈している。

時期　不明。

27号土坑(第12図、PL.12)

区・面　１区１面

位置　１区の西寄りの南端付近に位置する。X＝45129～130、Y＝－86232～233。

重複　なし。

平面形状　西側を大きく攪乱されているため、全容は不明であるが、北西-南東に長い楕円形状を呈したものと推測できる。。

主軸方位　N-59°-W。

規模　検出長径0.60m、短径0.90m、深さ0.78m。

埋土　底部から中層にかけてローム土を少量及び橙色土を僅かに含む黄褐色土が堆積し、その上に暗褐色土が堆積している。

遺物　非掲載ではあるが、埋土中から縄文時代中期後半の土器片が１点、黒曜石剥片３点が出土している。

所見　西側半分以上が攪乱されているものと考えられる。深く、しっかりとした掘方を呈しており、北東－南西方向の断面は、角が丸みを帯びた不整逆三角形状を呈している。

時期　不明。

28号土坑(第12図)

区・面　１区１面

位置　１区の西寄りの南端、南壁際、29号土坑の南西側、29号土坑の北西側、20号土坑の南側に位置する。X＝45126～127、Y＝－86227～228。

重複　なし。

平面形状　南北に長い楕円形状を呈している。

主軸方位　N-1°-W。

規模　長径1.06m、短径0.87m、深さ0.39m。

埋土　不明。

遺物　なし。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、東西方向の断面は逆台形状を呈している。

時期　不明。

29号土坑(第12図、PL.12)

区・面　１区１面

位置　１区の西寄りの南端、南壁際、26号土坑の南側に隣接し、28号土坑の南東側に位置する。X＝45125～126、Y＝－86225～226。

重複　なし。

平面形状　西北西－東南東に長い楕円形状を呈している。

主軸方位　N-30°-W。

規模　長径0.76m、短径0.70m、深さ0.83m。

埋土　埋土は４層で、ほぼ並行して堆積していた。部分的に暗褐色土塊を含む箇所も存在した。

底面付近に橙色土及びローム土を僅かに、As-YP粒子を少量含む黄褐色土が堆積し、その上に黄褐色土及びAs-YP粒子を僅かに含む暗褐色土が堆積し、さらにその上に褐色粒子及びローム粒子を僅かに含む暗褐色土が堆積し、さらにその上の最上層に暗褐色土を少量及び橙色土を僅かに含む黒褐色土が堆積している。

遺物　なし。

所見　確認面からの深さは0.40～0.45m前後であったが、調査区壁にかかった部分では、0.83mの深さを確認することができた。

全体的に深くしっかりとした掘方を呈しており、北西-南東方向の断面は、深く、底面がやや狭い逆台形状を呈している。

時期　不明。

30号土坑(第13図、PL.12)

区・面　１区１面

位置　１区の西寄り、北壁に懸かる。15号土坑のすぐ西側に隣接する。X＝45130～138、Y＝－86229～236。

重複　８・９号土坑に掘り込まれる。

平面形状　北西端が調査区北壁外に出るため、全容は不明であるが、北西－南東に細長い溝状を呈し、先端部にむかって､やや屈曲･蛇行している。比較的等高線に沿って屈曲している。X=45130.5～132.5・Y=－86230～232付近で止まる。南東側端部付近では、幅が大きく広がっており、約３m近くになる。

主軸方位　N-52°-W。

規模　検出全長8.74m、幅0.88～2.94m、深さ0.24m。

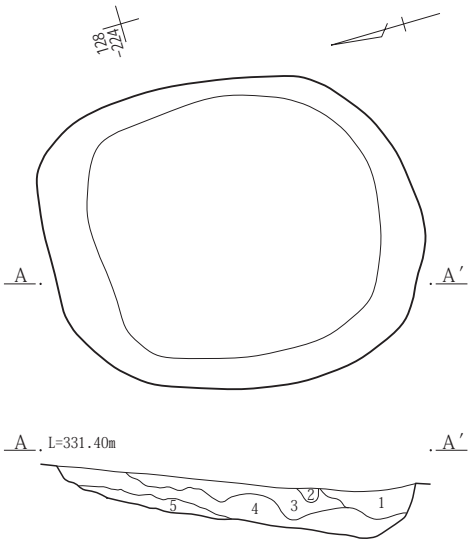
埋土　不明。

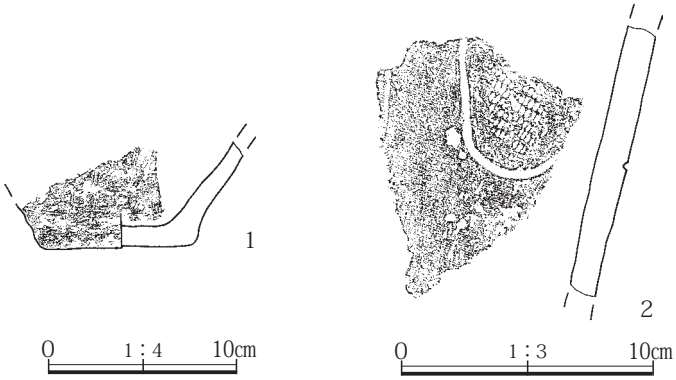
遺物　なし。

所見　31～37号土坑同様、細長い溝状の土坑で、俗に「芋穴」と称されることが多い形状の土坑の一つである。ただし、本遺跡では、32～36号土坑のように北東-南西方向に長大な形状のものがほとんどであるのに対して、本土坑と31号土坑のみは形状も走行も特異である。

大まかに言えば、等高線に沿った走行のため、東壁はしっかりとした掘方であるのに対して、西壁は浅くなっている。北東－南西方向の断面は、浅く、底面の幅が広

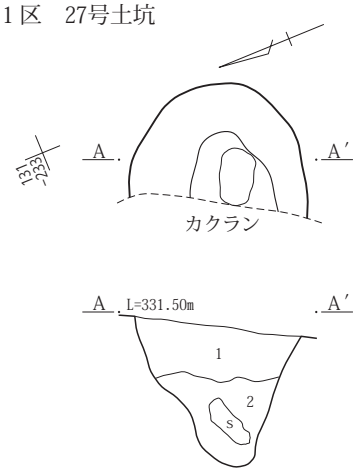
1区　26号土坑





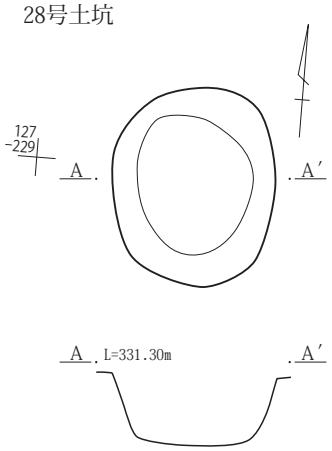
1区　26号土坑
1.黒褐色土　暗褐色土を少量含む。橙色土を僅かに含む。
2.黒褐色土　橙色土を少量含む。ローム粒子を僅かに含む。
3.暗褐色土　褐色粒子及びローム粒子を僅かに含む。
4.暗褐色土　黄褐色土及びAs-YP粒子を僅かに含む。
5.黄褐色土　橙色土を僅かに含む。ローム土を少量含む。

1区　27号土坑

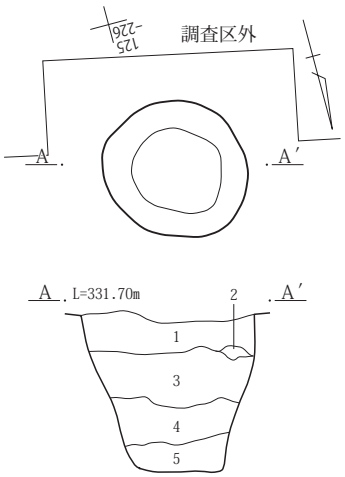


1区　27号土坑
1.暗褐色土
2.黄褐色土　ローム土を少量、橙色土を僅かに含む。

1区　28号土坑



1区　29号土坑



1区　29号土坑
1.黒褐色土　暗褐色土を少量含む。橙色土を僅かに含む。
2.暗褐色土　橙色土を少量、ローム粒子を僅かに含む。
3.暗褐色土　褐色粒子及びローム粒子を僅かに含む。
4.暗褐色土　黄褐色土及びAs-YP粒子を僅かに含む。
5.黄褐色土　橙色土及びローム土を僅かに含む。As-YP粒子を少量含む。

0　1：40　1m

第12図　１区26～29号土坑及び26号土坑出土遺物

い扁平な逆台形状を呈している。

時期　不明。

31号土坑(第13図、PL.12)

区・面　１区１面

位置　１区の東寄り、東壁に懸かる。６号土坑のすぐ南東側、34号土坑のすぐ北東側に隣接する。X＝45134～138、Y＝－86204～205。

重複　32号土坑に掘り込まれる。

平面形状　南東端が調査区東壁外に出るため、全容は不明であるが、北北西－南南東に細長い溝状を呈し、X=46138.7・Y=－86204.9付近で止まる。

主軸方位　N-8°-W。

規模　検出全長3.46m、幅0.59～0.67m、深さ0.08～0.28m。

埋土　底部に砂粒を多く含む褐色土が堆積し、その上に黒褐色土を少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物　なし。

所見　30・32～37号土坑同様、細長い溝状の土坑で、俗に「芋穴」と称されることが多い形状の土坑の一つである。ただし、本遺跡では、32～36号土坑のように北東-南西方向に長大な形状のものがほとんどであるのに対して、本土坑と30号土坑のみは形状も走行も特異である。

底面に砂粒を置く含む褐色土が堆積していたため、水流のある溝であった可能性も想定されたが、北北西端が約0.15mの深さを有しながら明確に止まっているため、32～36号土坑同様の、長大な形状の土坑の一つと判断した。

掘方は明瞭であるが浅く、断面は扁平で各辺が長く伸びた逆二等辺三角形状を呈している。

時期　不明。

32号土坑(第13図、PL.13)

区・面　１区１面

位置　１区の東寄り、東壁に懸かる。６号土坑のすぐ南東側に隣接する。X＝45134～139、Y＝－86204～205。

重複　31号土坑を掘り込む。

平面形状　北東端が調査区東壁外に出るため、全容は不明であるが、北東－南西に細長い溝状を呈していたものと推測できる。

主軸方位　N-52°-E。

規模　検出全長6.97m、幅0.64m、深さ0.66m。

埋土　黒褐色土及び橙色粒子を少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物　なし。

所見　30・31・33～37号土坑同様、細長い溝状の土坑で、俗に「芋穴」と称されることが多い形状の土坑の一つである。

深くしっかりとした掘方を呈しており、両壁はほぼ垂直に落ちている。北西-南東方向の断面は、底がやや狭い長方形状を呈している。

時期　不明。

33号土坑(第14図、PL.13)

区・面　１区１面

位置　１区の南東隅付近、34号土坑のすぐ南側に隣接する。X＝45126～130、Y＝－86209～213。

重複　なし。

平面形状　北東－南西に細長い溝状の形状を呈している。北東端は30号土坑の南東端と同様、大きく幅が広がって1.22mにも達している。

主軸方位　N-50°-E。

規模　全長6.15m、幅0.56～1.22m、深さ0.20m。

埋土　不明。

遺物　なし。

所見　30～32・34～37号土坑同様、細長い溝状の土坑で、俗に「芋穴」と称されることが多い形状の土坑の一つである。

比較的等高線に沿って掘り込まれているため、北壁側が深く、南壁側が浅くなっているものの、しっかりとした掘方を呈しており、断面は、底面が広く、やや扁平な逆台形状を呈している。

時期　不明。

34号土坑(第14図、PL.13)

区・面　１区１面

位置　１区の南東寄りの位置、東壁際。33号土坑のすぐ北側に隣接し、35号土坑の東側、31・32号土坑の南西側に位置している。X＝45130～133、Y＝－86205～212。

重複　なし。

平面形状　東北東-西南西に細長い溝状の形状を呈している。東北東端は、調査区東壁の直前で止まっている。北辺はほぼ直線状であるが、南辺はやや屈曲・蛇行しているが、その理由は不明である。

主軸方位　N-69°-E。

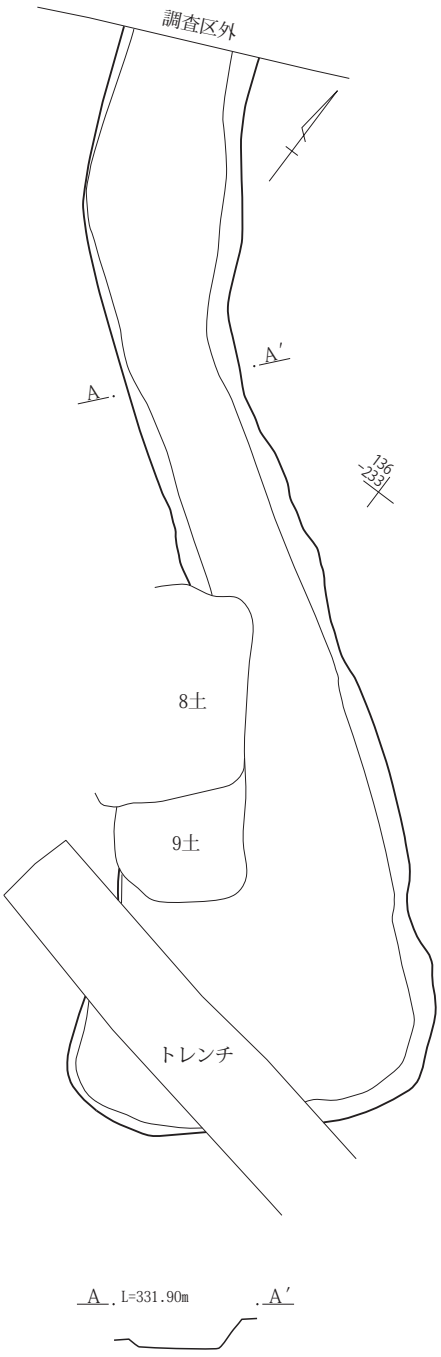
規模　全長8.43m、幅0.43m、深さ0.27m。

埋土　不明。

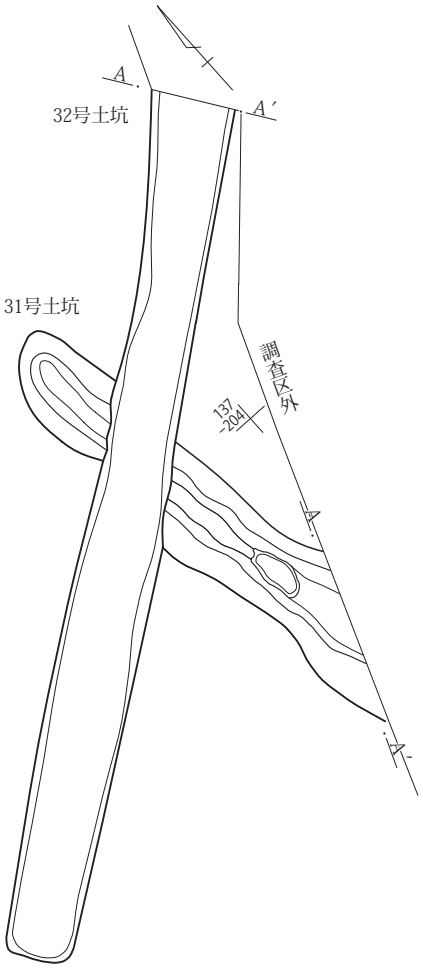
遺物　なし。

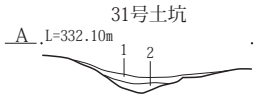
所見　30～33･35～37号土坑同様、細長い溝状の土坑で、俗に「芋穴」と称されることが多い形状の土坑の一つであ

1区　30号土坑

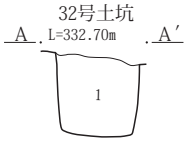


1区　31・32号土坑





1区　31号土坑
1.暗褐色土　黒褐色土を少量含む。
2.褐色土　砂粒を多く含む。



1区　32号土坑
1.暗褐色土　黒褐色土及び橙色粒子を少量含む。

0　1：60　2m

第13図　1区30～32号土坑

る。

等高線に沿って掘り込まれているため､北壁側が深く、南壁側が浅くなっているものの、33号土坑ほどの高低差は見られない。しっかりとした掘方を呈しており、断面は、底面が狭く、深い逆台形状を呈している。

時期　近世。

35号土坑(第14図、PL.13)

区・面　１区１面

位置　１区のほぼ中央から南寄りの位置、南西端は南壁際。19・22号ピットのすぐ東側に近接し、33・34号土坑の西側に位置している。X＝45126～133、Y＝－86213～219。

重複　なし。

平面形状　北東－南西に細長い溝状を呈している。南西端は、調査区南壁のほぼ直前で止まっている。北西辺・南東辺とも、直線的である。本遺跡から検出された土坑の中で、最も長大な土坑である。

主軸方位　N-46°-E。

規模　全長9.36m、幅0.65m、深さ0.35m。

埋土　As-B粒子、橙色粒子を少量含む暗褐色土。

遺物　なし。

所見　30～34・36・37号土坑同様、細長い溝状の土坑で、俗に｢芋穴｣と称されることが多い形状の土坑の一つである。

等高線に直行して掘り込まれているため、両壁の高さはほぼ同一である。しっかりとした掘方を呈しており、断面は、底面が狭く、深い逆台形状を呈している。

時期　不明。

36号土坑(第14図、PL.14)

区・面　１区１面

位置　１区のほぼ中央。３号土坑の南西側、20号ピットの北側に位置している。X＝45133～134、Y＝－86217～220。

重複　なし。

平面形状　東北東-西南西に細長い溝状を呈している。一連の長大な溝状土坑群の中でも、本土坑と37号土坑とは、30～35号土坑に比べてかなり短く33～35号土坑の半分から1/3程度の長さにしか満たない。

主軸方位　N-71°-E。

規模　全長3.44m、幅0.47m、深さ0.27m。

埋土　As-B粒子、橙色粒子を少量含む暗褐色土。

遺物　なし。

所見　30～35・37号土坑同様、細長い溝状の土坑で、俗に｢芋穴｣と称されることが多い形状の土坑の一つであるが、先述したように36・37号土坑は30～35号土坑に比べてかなり短く、小規模であるものの、しっかりとした掘方を呈しており、断面は、やや深い逆台形状を呈している。

時期　不明。

37号土坑(第14図、PL.14)

区・面　２区１面

位置　２区の北東隅付近。X＝45129～131、Y＝－86249～251。

重複　なし。

平面形状　東北東-西南西に細長い溝状を呈している。一連の長大な溝状土坑群の中でも、本土坑と前掲の36号土坑とは、30～35号土坑に比べてかなり短く33～35号土坑の半分から1/3程度の長さにしか満たない。

主軸方位　N-43°-E。

規模　全長2.42m、幅0.65m、深さ0.18m。

埋土　As-B粒子、橙色粒子を少量含むサクサクとした暗褐色土。

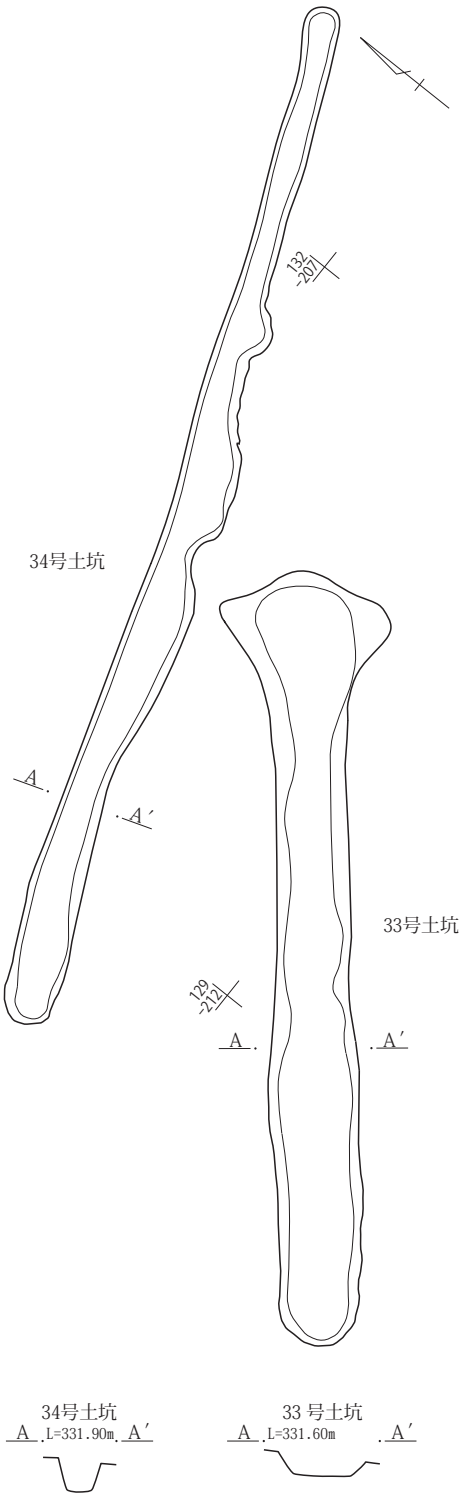
遺物　なし。

所見　30～35・37号土坑同様、細長い溝状の土坑で、俗に｢芋穴｣と称されることが多い形状の土坑の一つであるが、先述したように36・37号土坑は30～35号土坑に比べてかなり短く、小規模である。36号土坑に比べるとかなり浅いが、しっかりとした掘方を呈しており、断面は、底面が広く扁平な逆台形状を呈している。

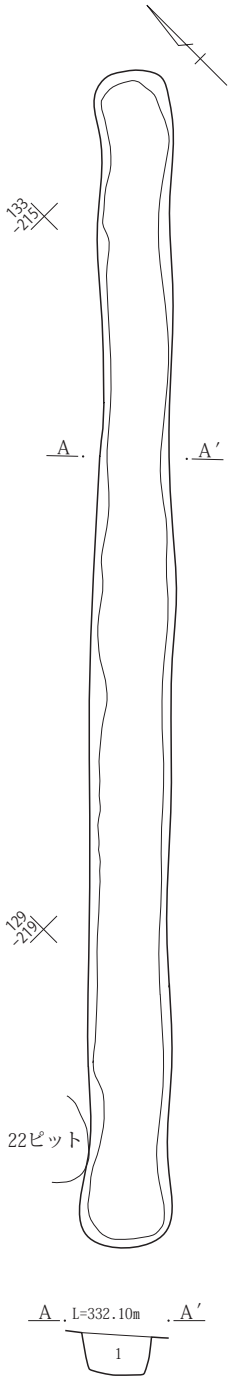
なお、一連の長大な溝状の土坑群の中では最も西側から検出された土坑である。

時期　不明。

1区　33・34号土坑

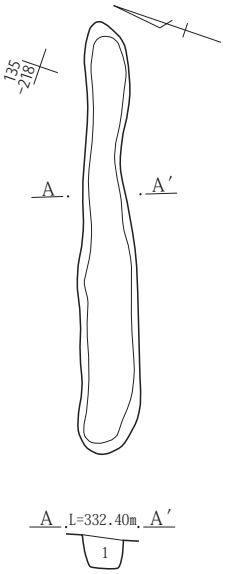


1区　35号土坑



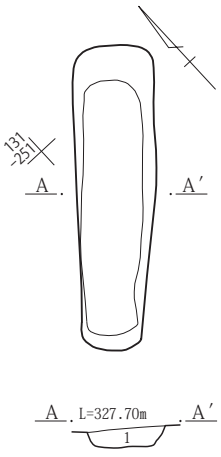
1区　35号土坑
1.暗褐色土　As-B粒子及び橙色粒子を少量含む。

1区　36号土坑



1区　36号土坑
1.暗褐色土　As-B粒子及び橙色粒子を少量含む。

2区1面　37号土坑



2区　37号土坑
1.暗褐色土　As-B粒子及び橙色粒子を少量含む。
サクサクとしている。

0　1：60　2m

第14図　1区33～36号土坑、2区37号土坑

第３項　ピット

ピットは、土坑よりも小規模な穴状の遺構で、用途は特定しがたい。柱穴と考えられるものは、１区から検出された５号ピット以外には１基も存在しなかった。

ピットは、１区から15基、２区から７基の計22基が検出された。土坑同様、遺物の出土は皆無であるため、正確な年代については全く不明である。

ピットは、１区では、中央より西寄りの部分と南寄りの部分から多くが検出されている。北東隅付近からは全く検出されなかった。２区では、調査区の中央付近から多くが検出された。１区、２区ともピットの検出状況には、特段の規則性は存在していない。

５号ピット（第15図、PL.14）

区・面　１区１面

位置　１区の中央から北西寄り。６号ピットの南側に位置する。X＝45136～137、Y＝－86226。

重複　なし。

平面形状　南北に僅かに長い楕円形状を呈する。

主軸方位　N-18°-W。

規模　長径0.39m、短径0.37m、深さ0.62m。

埋土　中央にあたかも柱痕のように橙色粒子とローム土を少量含む暗褐色土が芯状に堆積し、その周囲に橙色粒子とローム土を僅かに含む暗褐色土が堆積する。

遺物　なし。

所見　深くしっかりとした掘方を呈しており、断面は、深い半紡錘形状を呈している。

５号ピットに柱痕状の堆積土が見られることや、５・６・９号ピットは北東-南西方向にほぼ一直線上に並ぶことから、一見、柵であるかのように見えなくもない。しかしながら、それぞれのピットの形状が大きく異なっていることや、柱痕らしき土層が確認できるのは５号ピットのみであること、また、５・６号ピット間と６・９号ピット間とが全く等間隔ではないことなどの理由から、５・６・９号ピットを柵とは看做さなかった。

時期　不明。

６号ピット（第15図、PL.14）

区・面　１区１面

位置　１区の中央から北西寄り。５号ピットの北側、９号ピットの南側に位置する。X＝45138、Y＝－86225～226。

重複　なし。

平面形状　不整円形状を呈する。

規模　径0.25m、深さ0.21m。

埋土　底部から約半分くらいの高さまで橙色粒子を僅かに、ローム土を少量含む暗褐色土が堆積し、その上に橙色粒子を僅かに、ローム土を多く含む暗褐色土と、橙色粒子を少量、ローム粒子を僅かに含む暗褐色土が堆積している。

遺物　なし。

所見　小規模ではあるが、しっかりとした掘方を呈しており、断面は、深い逆台形状を呈している。

時期　不明。

７号ピット（第15図、PL.15）

区・面　１区１面

位置　１区の中央から東寄り。35号土坑の北東側、19号ピットの東側に近接し、５号土坑の南西側に位置する。X＝45133～134、Y＝－86212。

重複　なし。

平面形状　東西にやや長い楕円形状を呈する。

主軸方位　N-70°-E。

規模　長径0.42m、短径0.35m、深さ0.49m。

埋土　底部から約2/3くらいの高さまで橙色粒子を僅かに、ローム土を多く、As-YP粒子を少量含む暗褐色土が堆積し、その上に橙色粒子やローム土を含む暗褐色土がブロック状に堆積している。

遺物　なし。

所見　小規模ではあるが、深くしっかりとした掘方を呈しており、断面は、底面が狭く、深い逆台形状を呈している。

時期　不明。

８号ピット（第15図、PL.15）

区・面　１区１面

位置　１区の西寄り。30号土坑の東側に位置する。X＝45135～136、Y＝－86230。

重複　なし。

平面形状　ほぼ円形状を呈する。
規模　径0.28m、深さ0.10m。
埋土　橙色粒子を僅かに、ローム土を少量含む暗褐色土が主体で、壁際に橙色粒子を僅かに、ローム土を多く含む暗褐色土が斜めに堆積している。
遺物　なし。
所見　小規模で、掘方も浅く、断面は扁平な逆不等辺三角形状を呈している。
時期　不明。

９号ピット（第15図、PL.15）
区・面　１区１面
位置　１区の北西寄り、北壁際。10･11号ピットの西側、６号ピットの北側に位置する。X＝45141、Y＝－86225。
重複　なし。
平面形状　北西-南東にやや長い楕円形状を呈する。
主軸方位　N-55°-W。
規模　長径0.45m、短径0.41m、深さ0.66m。
埋土　不明。
遺物　なし。
所見　深く、しっかりとした掘方を呈しており、断面は縦長のＵ字状を呈している。
時期　不明。

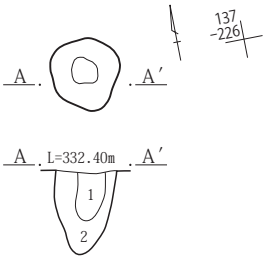
10号ピット（第15図、PL.15）
区・面　１区１面
位置　１区の北西寄り。11号ピットの北東側、１号柵の西側に隣接する。X＝45140～141、Y＝－86223。
重複　なし。
平面形状　ほぼ円形状を呈する。
規模　径0.34m、深さ0.32m。
埋土　不明。
遺物　なし。
所見　しっかりとした掘方を呈しており、断面は底面が狭い逆台形状を呈している。
時期　不明。

11号ピット（第15図、PL.15）
区・面　１区１面
位置　１区の北西寄り。10号ピットの南西側、１号柵の西側に隣接する。X＝45140、Y＝－86223～224。
重複　なし。
平面形状　不整円形状を呈する。
主軸方位　N-8°-E。
規模　径0.28～29m、深さ0.29m。
埋土　不明。
遺物　なし。
所見　しっかりとした掘方を呈しており、断面はＵ字形状を呈している。
時期　不明。

12号ピット（第15図、PL.15・16）
区・面　２区・１面
位置　２区の中央からやや南西寄り。30号ピットの北側、17号ピットの南側に位置する。X＝45117～118、Y＝－86258。
重複　なし。
平面形状　南北にやや長い楕円形状を呈する。
主軸方位　N-24°-E。
規模　長径0.69m、短径0.60m、深さ0.60m。
埋土　底部から約1/4程度まで橙色粒子を僅かに、ローム土を少量含む暗褐色土が堆積し、その上層に褐色土及びローム土を少量含む暗褐色土が堆積する。
遺物　なし。
所見　深くしっかりとした掘方を呈しており、両壁はかなり垂直に近い急角度で落ちている。断面は逆台形状を呈している。
時期　不明。

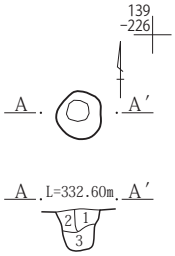
13号ピット（第15図、PL.16）
区・面　２区１面
位置　２区の南端付近、やや東寄り。16号土坑の北東側に位置する。X＝45117～118、Y＝－86252～253。
重複　なし。
平面形状　東西に長い楕円形状を呈する。
主軸方位　N-83°-W。
規模　長径0.77m、短径0.58m、深さ0.44m。
埋土　底部から半分以上の高さまで橙色粒子及びAs-YP粒子を僅かに含み、ローム土を多く含む暗褐色土が堆積し、その上に比較的薄く、黄褐色土を僅かに、橙色土を

１区　５号ピット



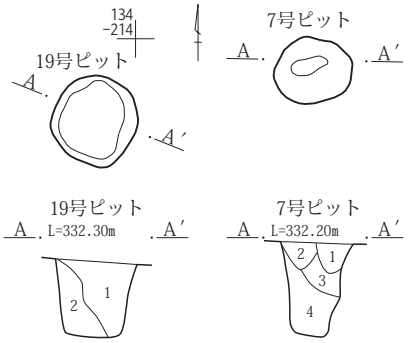
１区　５号ピット
１.暗褐色土　橙色粒子及びローム土を少量含む柱痕状の堆積土。
２.暗褐色土　橙色粒子及びローム土を僅かに含む。

１区　６号ピット



１区　６号ピット
１.暗褐色土　橙色粒子を少量含む。ローム粒子を僅かに含む。
２.暗褐色土　橙色粒子を僅かに含む。ローム土を多く含む。
３.暗褐色土　橙色粒子を僅かに含む。ローム土を少量含む。

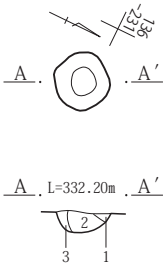
１区　７・19 号ピット



１区　７号ピット
１.暗褐色土　橙色粒子を多く含む。ローム土を少量含む。
２.暗褐色土　橙色粒子及びローム土を少量含む。
３.暗褐色土　橙色粒子及びローム土及び As-YP 粒子を僅かに含む。
４.暗褐色土　橙色粒子を僅かに含む。ローム土を多く含む。As-YP 粒子を少量含む。

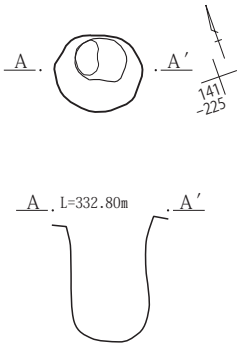
２区　19号ピット
１.暗褐色土　橙色土を少量含む。ローム土を僅かに含む。
２.暗褐色土　橙色土及びローム土を少量含む。

１区　８号ピット

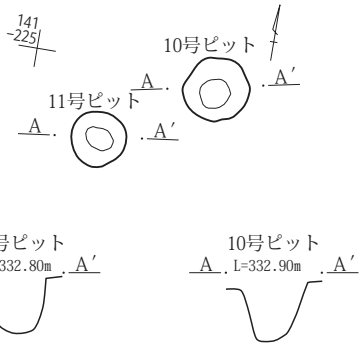


１区　８号ピット
１.暗褐色土　橙色土及びローム土を少量含む。
２.暗褐色土　橙色粒子を僅かに含む。ローム土を少量含む。
３.暗褐色土　橙色粒子を僅かに含む。ローム土を多く含む。

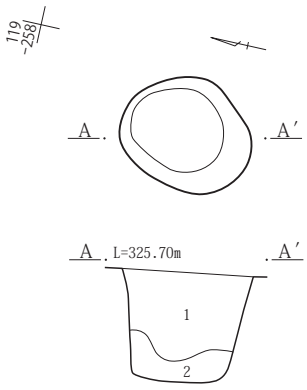
１区　９号ピット



１区　10・11 号ピット

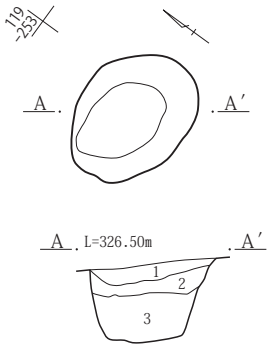


２区　12号ピット



２区　12号ピット
１.暗褐色土　褐色土及びローム土を少量含む。
２.暗褐色土　橙色粒子を僅かに含む。ローム土を少量含む。

２区　13号ピット



２区　13号ピット
１.黒褐色土　橙色粒子を少量含む。
２.暗褐色土　黄褐色土を僅かに含む。橙色土を少量含む。
３.暗褐色土　橙色粒子及び As-YP 粒子を僅かに含む。ローム土を多く含む。

0　1：40　1m

第15図　１区５～11・19号ピット、２区12・13号ピット

少量含む暗褐色土が堆積し、さらにその上に橙色粒子を少量含む黒褐色土が薄く堆積している。

遺物　なし。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、断面は逆台形状を呈している。

時期　不明。

14号ピット（第16図、PL.16）

区・面　２区１面

位置　２区の中央からやや北東寄りの位置。X＝45124～125、Y＝－86250。

重複　なし。

平面形状　北東-南西に長い楕円形状を呈する。

主軸方位　N-20°-E。

規模　長径0.67m、短径0.55m、深さ0.29m。

埋土　底部からほぼ半分程度の高さまで橙色土及びAs-YPを僅かに含み、ローム土を多く含む暗褐色土が堆積し、その上に橙色土及びローム土を含む暗褐色土が堆積している。

遺物　なし。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、断面は逆台形状を呈している。

時期　不明。

15号ピット（第16図、PL.16）

区・面　２区・１面

位置　２区のほぼ中央。17号ピットの東北東側に位置する。X＝45120～121、Y＝－86256。

重複　なし。

平面形状　北西－南東に長い不整楕円形状を呈する。

主軸方位　N-31°-W。

規模　長径0.67m、短径0.52m、深さ0.36m。

埋土　底部からほぼ半分程度の高さまで橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土が堆積し、その上に橙色土を少量、ローム土を僅かに含む暗褐色土が堆積している。

遺物　なし。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、断面は上半分が浅い半円形状を呈しており、中央部分が一段深く凹形に掘り窪められている。

時期　不明。

16号ピット（第16図）

区・面　１区１面

位置　１区の中央から南寄りの位置。X＝45130、Y＝－86220～221。

重複　なし。

平面形状　東西に長い楕円形状を呈する。

主軸方位　N-75°-W。

規模　長径0.56m、短径0.47m、深さ0.38m。

埋土　底部からほぼ半分弱の高さまで橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土が堆積し､その上に橙色土を少量、ローム土を僅かに含む暗褐色土が堆積している。

遺物　なし。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、両壁は急角度に掘り込まれている。断面は逆台形状を呈している。

時期　不明。

17号ピット（第16図、PL.16・17）

区・面　２区１面

位置　２区のほぼ中央。12号ピットの北側、15号ピットの西南西側、18号ピットの東側に位置している。X＝45119、Y＝－86259。

重複　なし。

平面形状　南北に長い楕円形状を呈する。

主軸方位　N-6°-E。

規模　長径0.54m、短径0.43m、深さ0.31m。

埋土　橙色土を少量、ローム土を僅かに含む暗褐色土が堆積している。

遺物　なし。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、北側に向かって次第に深く掘り込まれている。南北方向の断面は逆直角三角形状を呈している。

時期　不明。

18号ピット（第16図、PL.17）

区・面　２区１面

位置　２区の中央から西寄り。12号ピットの西北西側、17号ピットの西側に位置している。X＝45118～119、Y＝－86261～262。

重複　なし。

平面形状　北西-南東に長い楕円形状を呈する。

主軸方位　N-53°-W。
規模　長径1.03m、短径0.79m、深さ0.54m。
埋土　底部に橙色粒子を僅かに、ローム土を多く、As-YP粒子を少量含む暗褐色土が堆積し、その上に橙色粒子及びローム土を少量ないし僅かに含む暗褐色土が堆積し、最上層に橙色粒子を多く、ローム土を少量含む暗褐色土がレンズ状に堆積している。
遺物　なし。
所見　しっかりとした掘方を呈している。中央部分が一段と深く掘り窪められており、断面は漏斗状を呈している。
時期　不明。

19号ピット（第15図、PL.17）
区・面　１区１面
位置　１区の中央からやや東寄り。35号土坑北東端のすぐ西側に隣接する。７号ピットの西側に近接し、３号土坑の南東側、５号土坑の南西側に位置している。X＝45133、Y＝－86213。
重複　なし。
平面形状　北西－南東に長い楕円形状を呈している。
主軸方位　N-18°-W。
規模　長径0.48m、短径0.46m、深さ0.42m。
埋土　橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土が底部まで斜めに堆積した上に橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土が堆積している。
遺物　非掲載ではあるが、埋土中から縄文時代中期後半の土器片が１点、硬質泥岩剥片が１点出土している。
所見　深く、しっかりとした掘方を呈しており、両壁は垂直に近い高い角度で掘り込まれている。断面は上部が僅かに開いた長方形状を呈している。
時期　ふ。

20号ピット（第16図、PL.17）
区・面　１区１面
位置　１区のほぼ中央。36号土坑の南側、21号ピットの北西側に位置している。X＝45132～133、Y＝－86217。
重複　なし。
平面形状　ほぼ円形状を呈している。
規模　径0.37m、深さ0.43m。
埋土　底部から大部分は橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土が堆積しており、その上に橙色土を少量及びローム土を僅かに含む暗褐色土が薄くレンズ状に堆積している。
遺物　なし。
所見　深く、しっかりとした掘方を呈しており、両壁は垂直に近い高い角度で掘り込まれている。断面は上部が僅かに開いた長方形状を呈している。
時期　不明。

21号ピット（第16図）
区・面　１区１面
位置　１区のほぼ中央。35号土坑の北西側、20号ピットの南東側に位置している。X＝45131～132、Y＝－86216。
重複　なし。
平面形状　東西にやや長い楕円形状を呈している。
主軸方位　N-80°-W。
規模　長径0.40m、短径0.32m、深さ0.50m。
埋土　橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土が堆積している。
遺物　なし。
所見　深く、しっかりとした掘方を呈しており、両壁は垂直に近い高い角度で掘り込まれている。断面は上部が僅かに開いた長方形状を呈している。
時期　不明。

22号ピット（第16図、PL.17）
区・面　１区１面
位置　１区の南端寄りのほぼ中央。35号土坑南西端付近のすぐ西側に近接し、23号ピットの東側に位置している。X＝45127～128、Y＝－86219。
重複　なし。
平面形状　南北に長い楕円形状を呈している。
主軸方位　N-10°-E。
規模　長径0.70m、短径0.60m、深さ0.14m。
埋土　橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土が堆積している。
遺物　なし。
所見　底面は平坦ではなく、凹凸が見られる。掘方は浅く、断面は薄く扁平な逆台形状を呈している。

時期　不明。

23号ピット（第16図、PL.17）
区・面　１区１面
位置　１区の南端寄りのほぼ中央。22号ピットの西側に位置している。X＝45127、Y＝－86221～222。
重複　なし。
平面形状　東西に長い楕円形状を呈している。
主軸方位　N-54°-E。
規模　長径0.50m、短径0.44m、深さ0.40m。
埋土　橙色土を少量及びローム粒子を僅かに含む暗褐色土が堆積している。
遺物　なし。
所見　深く、しっかりとした掘方を呈しており、断面は、上面が広がった深い漏斗状を呈している。
時期　不明。

30号ピット（第17図、PL.17・18）
区・面　２区１面
位置　２区南端の中央からやや西寄り、南壁際。12号土坑のすぐ東側に近接している。X＝45113～114、Y＝－86257～258。
重複　なし。
平面形状　東西に僅かに長い楕円形状を呈している。
主軸方位　N-85°-W。
規模　長径0.52m、短径0.48m、深さ0.36m。
埋土　底部から半分以上の高さまで橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土が堆積し、その上に橙色土を少量及びローム土を僅かに含む暗褐色土がレンズ状に堆積している。
遺物　なし。
所見　深く、しっかりとした掘方を呈しており、断面は、上面が広がったやや深いＵ字状を呈している。
時期　不明。

42号ピット（第17図、PL.18）
区・面　１区１面
位置　１区南端の西寄り、南壁際。43号ピットのすぐ西側に隣接している。X＝45126～127、Y＝－86226。
重複　なし。
平面形状　不整円形状を呈している。
主軸方位　N・S-0°-E・W。
規模　径0.35～36m、深さ0.18m。
埋土　橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土が堆積している。
遺物　なし。
所見　やや浅いが、しっかりとした掘方を呈しており、東西方向の断面は逆台形状を呈している。
時期　不明。

43号ピット（第17図、PL.18）
区・面　１区１面
位置　１区南端の西寄り、南壁際。42号ピットのすぐ東側に隣接している。X＝45126、Y＝－86225～226。
重複　なし。
平面形状　北西-南東にやや長い不整楕円形状を呈している。
主軸方位　N-46°-W。
規模　長径0.36m、短径0.34m、深さ0.21m。
埋土　橙色土を少量及びローム土を僅かに含む暗褐色土が堆積している。
遺物　なし。
所見　やや浅いが、しっかりとした掘方を呈しており、東西方向の断面は逆台形状を呈している。
時期　不明。

第４項　遺構外出土遺物

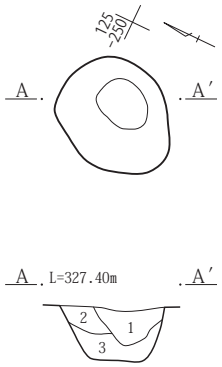
図示した近世の遺構外出土遺物は、１区１面出土の９点（１区１面表土３～11）である（第18図）。近世～近・現代の石製品の出土は皆無であった。

なお、各区１面や表土等から縄文・弥生時代土器も若干出土しているが、それらについては、第２節第５項遺構外出土遺物で取り上げる。

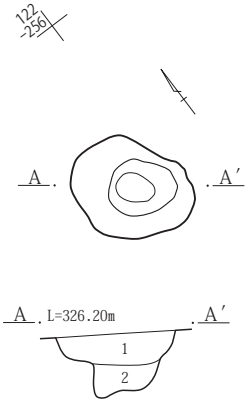
出土遺物の詳細については、遺構出土の遺物と同様、巻末の第４表遺物観察表を参照されたい。

非掲載の遺構外出土の近世～近・現代遺物は、いずれも陶磁器及び土器である。１区１面から43点、２区１面から６点、４区１面から１点で、３区からは近世～近・現代の遺物は全く検出されなかった。なお、非掲載の近世～近・現代出土陶磁器・土器類の点数等については、

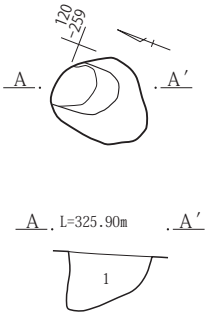
２区　14号ピット



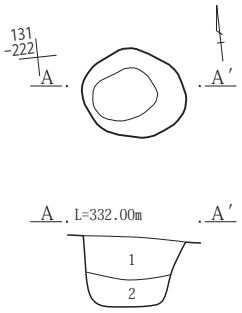
２区　15号ピット



２区　17号ピット



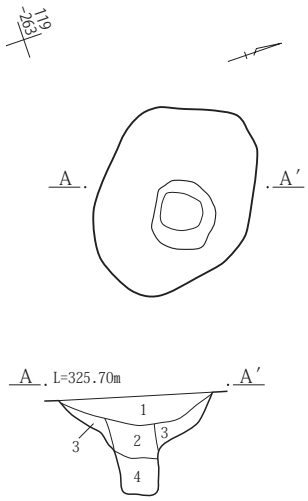
１区　16号ピット



１区　16号ピット
１.暗褐色土　橙色土を少量含む。ローム土を僅かに含む。
２.暗褐色土　橙色土及びローム土を少量含む。

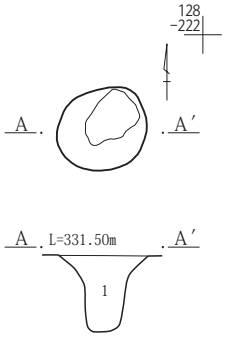
２区　14・15・17号ピット
１.暗褐色土　橙色土を少量含む。ローム土を僅かに含む。
２.暗褐色土　橙色土及びローム土を少量含む。
３.暗褐色土　橙色土及びAs-YP粒子を僅かに含む。ローム土を多く含む。

２区　18号ピット



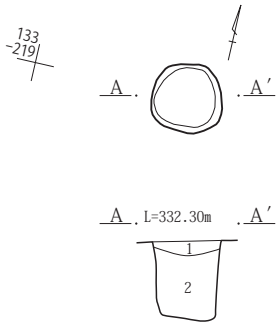
２区　18号ピット
１.暗褐色土　橙色粒子を多く含む。ローム土を少量含む。
２.暗褐色土　橙色粒子及びローム土を少量含む。
３.暗褐色土　橙色粒子及びローム土を僅かに含む。
４.暗褐色土　橙色粒子を僅かに含む。ローム土を多く含む。
As-YP粒子を少量含む。

１区　23号ピット

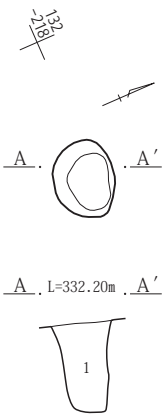


１区　23号ピット
１.暗褐色土　橙色土を少量含む。ローム粒子を僅かに含む。

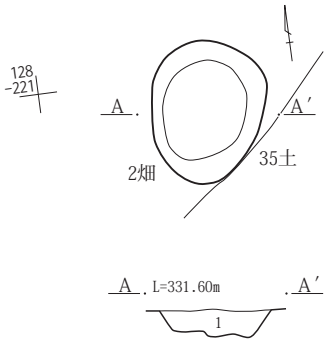
１区　20号ピット



１区　21号ピット



１区　22号ピット

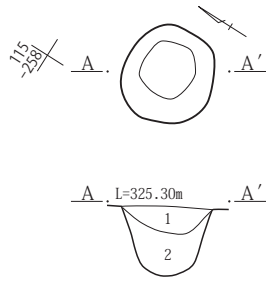


１区　20～22号ピット
１.暗褐色土　橙色土を少量含む。ローム土を僅かに含む。
２.暗褐色土　橙色土及びローム土を少量含む。

0　1：40　1m

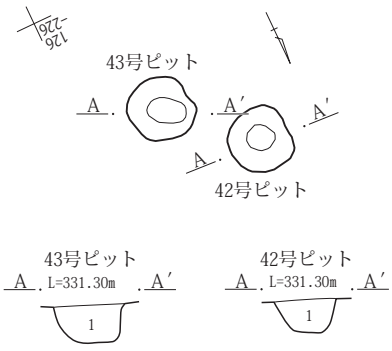
第16図　２区14・15・17・18号ピット、１区16・20～23号ピット

２区　30号ピット



２区　30号ピット
１．暗褐色土　橙色土を少量含む。ローム土を僅かに含む。
２．暗褐色土　橙色土及びローム土を少量含む。

１区　42・43号ピット



１区　42号ピット
１．暗褐色土　橙色土及びローム土を少量含む。

１区　43号ピット
１．暗褐色土　橙色土を少量含む。ローム土を僅かに含む。

0　1：40　1m

第17図　２区30号ピット、１区42・43号ピット

巻末の第５表非掲載近世～近・現代出土陶磁器・土器類集計表を参照されたい。

１区１面(第18図、PL.35)

先述したように、１区１面遺構外出土の土器で、図示、掲載したのは９点(１区１面表土３～11)である。いずれも表土中からの出土であった。

３は17世紀頃の完形の瀬戸・美濃陶器志野皿。内面から高台内を除く体部外面に長石釉。削り出し高台。体部外面に煤が付着。

４は17世紀頃の瀬戸・美濃陶器志野皿1/4片。内面から高台内と高台端部を除く体部外面に灰釉､貫入が入る。削り出し高台。体部外面に炭化物が付着。

５は18世紀頃の肥前陶器陶胎染付碗1/4片。口縁端部下外面に圏線。体部外面に家屋などを描く。体部下位と高台境に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。

６は近世の肥前磁器染付碗二次加工品高台部片。体部外面下位と高台境、高台に圏線。高台脇と高台を細かく叩き出して円盤状に加工。

７は18世紀頃の肥前磁器染付碗体部片。体部外面に二重網目文。

８は18世紀後半～19世紀前半の磁器染付小碗1/4片。口縁端部直下外面と体部下位を圏線で区画し、縦線交叉文と四弁花を描く。体部下位を二重圏線で区画し、連弁文。高台に圏線。高台端部は幅が広い。内面は無文。

９は19世紀前半頃の肥前磁器染付碗口縁部～体部片。口縁端部直下外面と体部下位を圏線で区画し、矢筈文を描く。口縁端部直下内面に二重圏線。

10は17世紀中葉美濃窯連房Ⅱ期に属する瀬戸・美濃陶器水滴か？体部～底部片。首部外面から体部下位に鉄釉。内面および体部外面下位から底部は無釉。底部は回転糸切後に無調整。底部と内面には炭化物が付着。

11は19世紀第２四半期頃の瀬戸陶器練鉢口縁部片。口縁端部は外側に90度傾き、肥厚する。内外面に灰釉、貫入が入る。

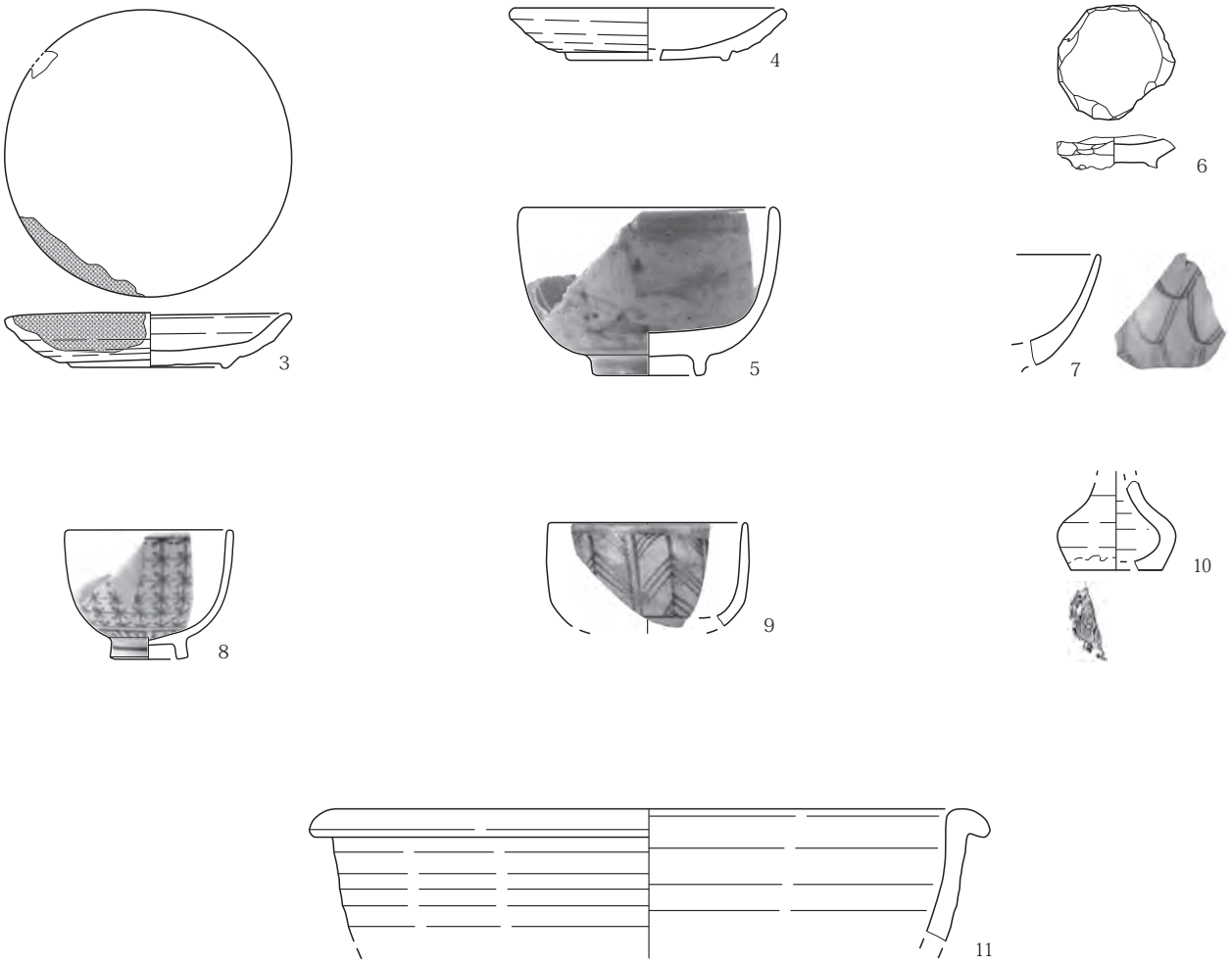
これらの他に非掲載ではあるが､近世国産磁器片４点、近世国産施釉陶器片22点、近世国産焼締陶器片１点、近世在地系その他陶器片１点などが出土している。

２区１面

図示したものはない。非掲載ではあるが、近世国産磁器片１点、近世国産焼締陶器片４点、近世在地系その他陶器片１点が出土している。

４区１面

図示したものはない。



第18図　１区１面遺構外出土近世遺物

第２節　縄文時代の遺構・遺物と弥生時代の遺物

調査区２面から検出された遺構は、いずれも縄文時代の遺構で、縄文時代中期後半及び中期末葉頃の竪穴建物３棟と縄文時代早期の屋外炉１基、他に土坑３基、河道１条であった。

竪穴建物や屋外炉はいずれも最も標高が高い１区から検出された。また、１区からは他に19号土坑が検出されている。

２区からは河道が、４区からは10・11号土坑の２基の土坑がそれぞれ検出された。

３区からは遺構は全く検出されなかったものの、表土から弥生時代前～中期の土器片等が出土しており、調査対象範囲にはかからなかったものの、近隣に弥生時代の遺構が存在していた可能性が高い。

また、２面では、１区遺構外から縄文時代中期土器片39点と石器２点、２区遺構外から縄文時代早～中期末葉の土器片56点・石器１点と弥生時代前～中期の土器片18点、４区遺構外から縄文時代早～前期の土器片17点と弥生時代前期相当の土器片１点が出土している。

なお、１面からの出土遺物ではあるが、１区表土出土の縄文時代中期土器片２点と３区表土出土の弥生時代前～中期頃の土器片20点についても本節で採り上げる。

第１項　竪穴建物

先述した様に竪穴建物は２・３・５号の３棟、いずれも１区の中央部分から東西に並列して検出された。調査対象範囲の中で最も安定した台地上に当たる１区の中央付近に竪穴建物が営まれたのは当然とも言えるが、地形は、概ね、北東側から南西側に向かって緩やかに傾斜しているため、特に建物の南西側や南側の検出状況は良くなかった。

竪穴建物はいずれも縄文時代中期の敷石竪穴建物で、２号竪穴建物は縄文時代中期末葉加曽利E4式期の柄鏡形敷石竪穴建物、３号竪穴建物は縄文時代中期後半加曽利E3式期の敷石竪穴建物、５号竪穴建物は縄文時代中期末葉加曽利E4式期の敷石竪穴建物である。

本遺跡周辺では、本遺跡から南東へ約６～８㎞程度離れた久留馬地区において縄文時代中～後期の敷石竪穴建物が検出されているものの、近辺では全く検出事例が無いため、本遺跡における今回の調査事例が、貴重な新知見となった。

２号竪穴建物（第20～22図、PL.21～24・26・27）

区・面　１区２面

位置　１区の中央からやや西寄りの位置。３号竪穴建物の東、１号屋外炉の北西側に隣接する。X＝45132～135、Y＝－86225～228。

重複　なし。

形状　南北にやや長い隅丸長方形状の主体部の南辺中央に入り口への導入部分が南側に張り出す柄鏡形の敷石竪穴建物であると考えられる。

北から南に向かって緩やかに傾斜する斜面に掘りこまれているため、南辺は後世にかなり削平されており、南辺及び南側入り口部への張り出しは、明瞭には検出できず、南辺のおおよその痕跡程度が推測できたに過ぎない。また、主体部の南西隅部は、本調査着手前に行われた確認調査時の試掘坑によって大きく破壊されており、状況は不明である。

埋土　下層に黄褐色粒子及び橙色土を少量含む暗褐色土が堆積し、その上に橙色粒子及び褐色粒子を僅かに含む黒色土が堆積する。

規模　検出長軸最大幅3.03m、短軸最大幅2.83m、下部構造までの深さ0.18m、床面積7.63㎡。

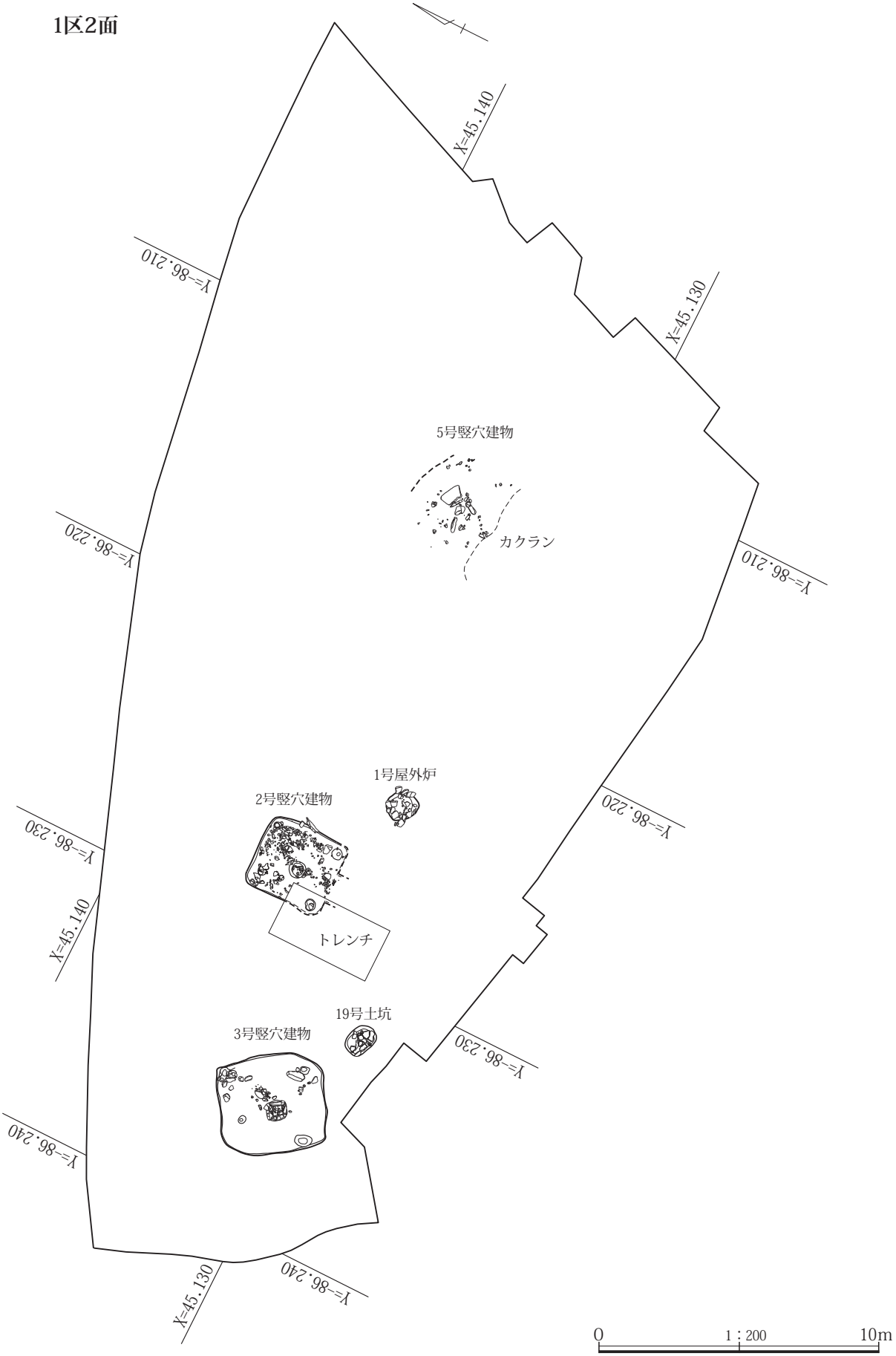
上部構造

（１）主体部　主体部は南北にやや長い隅丸長方形状を呈している。

（２）床面　床に使用される石には、比較的小型の板状礫が多用され、板状礫の間には亜円礫が間詰めされ、敷石の周縁部にも亜円礫が敷かれていたものと考えられるが、敷石の多くは竪穴建物廃棄時に抜き取られ、敷石の残痕が検出されたに過ぎない。実際に検出できた敷石の状態は疎らである。

（３）壁　主体部の壁高は、確認面から0.02～0.06mを測るが、概ね0.02～0.03m前後である。緩斜面に立地する竪穴建物であるため、概ね北側寄りの部分における壁高が高い。

（４）炉　主体部の床面の中央からやや南寄りの位置に、



第19図　１区２面全体図

円形の掘方を有する炉が検出された。南側からは内面上位が被熱した直方体状の炉南側囲石の残骸が検出され、方形に組まれた石囲炉であったと考えられるが、竪穴建物の廃棄時に破壊されており、石の残骸が検出されたに過ぎない状態であった。炉の規模は径約0.40m程度と推測出来る。火床面までの深さは約0.16m程度である。主体部の南端中央から検出された不整五角形状のやや大きく扁平な板状の石は、炉の南側に据えられていた可能性がある。

（５）柱穴　床面調査時に、隅丸長方形状の主体部の四隅から、建物の上屋を支えた柱を建てたと考えられる計４基の柱穴が検出された。

柱穴は概ね不整円形状の平面形状で、径はおよそ0.3～0.4m前後、深さはおよそ0.3～0.75m前後であった。面的な調査が行われる前の試掘の段階で検出されたP4の深さが0.75mと、他の柱穴に比して一段深く検出されたが、P4にて検出された深さが、本建物の柱穴本来の深さであると考えられる。

埋土は、橙色土を少量とローム土を少量ないし僅かに含む暗褐色土をベースとしている。

①P1：北西柱穴。ほぼ円形状。径0.30m、深さ0.31m。埋土は橙色土を少量とローム土を少量ないし僅かに含む暗褐色土。

②P2：北東柱穴。不整円形状。径0.27～0.28m、深さ0.38m。埋土は橙色土を少量とローム土を少量ないし僅かに含む暗褐色土。

③P3：南東柱穴。北東-南西にやや長い楕円形状。長径0.41m、短径0.36m、深さ0.56m。埋土は橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土。

④P4：南西柱穴。北東-南西にやや長い楕円形状。長径0.43m、短径0.36m、深さ0.75m。埋土は橙色土を少量とローム土を少量ないし僅かに含み、As-YPを僅かに含む暗褐色土。

下部構造

（１）主体部　板状礫と亜円礫が敷き詰められたであろう床下には黄褐色粒子及び橙色土を少量含む暗褐色土層が0.04～0.08m堆積しており、それを除去して、下部構造を検出した。主体部は上部構造と全く同規模の南北にやや長い隅丸長方形状を呈している。確認面からの深さは約0.07～0.15mである。

また、床面調査時には検出できなかったP5が建物東辺際南寄りの位置から、さらに南辺中央の張り出し部への接続部分からは対ピット（P6・7）が検出された。

（２）底面　敷石及び敷石下の掘方埋土を除去して底面を検出した。底面は凹凸が甚だしく、特に柱穴及び対ピットの位置、建物中央に位置した炉の下部が不整円形状の大きな窪みとなっている。

（３）炉　炉の掘方は径0.60～0.62m程度、深さ0.10mの不整円形状に掘り窪められており、火床下には軽石を少量含み、固く締まった暗褐色土が堆積していた。

（４）柱穴　床面調査時に検出された建物主体部4隅に掘り込まれたP1～4の掘方埋土の上からも一部、敷石の残骸が検出されたことから、P1～4の立柱後に床面の敷石が施されたものと考えられる。

下部構造調査において南東隅柱穴P3の約0.25m北に位置する東壁際からP5が検出された。他の柱穴であるP1～4と同様の規模であり、しっかりとした掘方を有しているので、P3の掘削以前の段階で機能していた建物本体の南東隅柱穴である可能性も考えられるが、位置的に若干疑問が残らないでもない。

P6・7は建物主体部の南辺に接して検出された。埋土はP1～5とよく類似しているが、下部構造の調査時に初めて検出されたものであり、位置的にみて柄鏡形敷石竪穴建物特有の対ピットと考えられる。

①P5：不整円形状。径0.41～0.43m。深さ0.46m。埋土は橙色土を少量とローム土を少量及び僅かに含む暗褐色土。

②P6：南北に長い楕円形状。長径0.69m、短径0.42m、深さ0.34m。埋土は中央部に柱痕状に橙色土を少量とローム土を僅かに含む暗褐色土が堆積し、その周囲に橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土が堆積している。

③P7：西辺を確認調査時の試掘坑によって大きく破壊されているが、南北にやや長い楕円形状を呈していたものと推測できる。P6よりもさらに南北に長い楕円形状を呈している。長径0.89m、検出短径0.49m、深さ0.43m。埋土は橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土を主体としている。

（５）張り出し部　上部構造では張り出し部は全く検出されなかった。下部構造を調査した段階で、対ピットの存在が確認できたため、初めて張り出し部が存在していた

ことが判明したが、張り出し部の痕跡は対ピット以外に全く検出することができず、規模や構造については全く不明である。

掲載した遺物　出土した土器は１～13の13点を図示した。縄文時代中期末葉の加曽利E4式のものが大部分であるが、僅かながら縄文時代中期後半の加曽利E3式のものと、１点のみ弥生時代前期の土器片が混じっている。

また、石器は下部構造埋土中から出土した14～16の３点を図化、掲載した。

（１）縄文土器　１・２は炉の埋土から出土した。１は縄文時代中期末葉加曽利E4式深鉢の口縁部～胴部片。口縁は横位沈線、胴部は沈線による懸垂文で構成される。胴部は列点を縦位に施文した区画とＬＲを縦位に充填施文した区画で構成される。２は縄文時代中期末葉加曽利E4式深鉢の口縁部～胴部片で、１・３と同一個体。３は埋土中から出土したが、加曽利E4式深鉢の口縁部～胴部片で、１・２と同一個体である。

４～７は建物南部の、南側張り出し部手前の床面からまとまって出土した。同一個体ではない。いずれも縄文時代中期末葉加曽利E4式深鉢片である。４は口縁部～胴部上位片。口縁部は横位沈線、胴部は無節Lを施す。５・６は口縁部片。５は口縁部横位沈線文、胴部ＬＲを縦位施文。６は口縁部横位沈線、胴部ＬＲを縦位施文。７は縄文時代中期末葉加曽利E4式胴部片で、ＬＲを縦位に施文。

８～12は埋土中から出土した土器である。８・９は縄文時代中期末葉加曽利E4式深鉢片である。８は胴部片で、ＬＲを縦位施文。９は口縁部片で、波状口縁部は横位隆線で区画、下位は縦位隆帯で区画し、ＬＲを縦位に充填施文(一部横位施文)。10～12は縄文時代中期後半の加曽利E3式深鉢片である。10は口縁部片で、波状口縁、口縁～胴部に隆線による区画。口縁部に煤状付着物あり。11・12は胴部片で、11は沈線による懸垂文を施し、ＬＲを縦位施文。12はＬＲを縦位、斜位に施文。

（２）弥生土器　13は埋土中から出土した弥生時代前期相当の深鉢の胴部片で、縦位の条痕文。３号竪穴建物出土13、５号竪穴建物出土６と同一個体であると考えられる。

（３）石器　14～16は下部構造埋土中から出土した石器である。14は細粒輝石安山岩製打製石斧片で、側面部の全体に両面加工が認められる。摩滅痕が散在する。表面の先端刃部には摩滅痕より新期に形成された剥離痕が認められる。上側面は折断面であるが一部に摩滅痕が認められこの形態で機能したと考えられる。15は完形の粗粒輝石安山岩製石皿で、表面の中央付近に滑らかな部分が認められる。表裏面と左側面は自然面であり板状節理の露頭から石材を採取している可能性がある。右側面と上下両側面は打割面で構成される。16は緑色片岩製の石皿約1/6片で、内面は全体的に滑らかであり中央付近に特に滑らかな部分が認められる。裏面の中央付近にも特に滑らかな部分が認められる。側面から裏面にかけては滑らかな曲面で構成されるが自然面か整形面であるか判断できない。

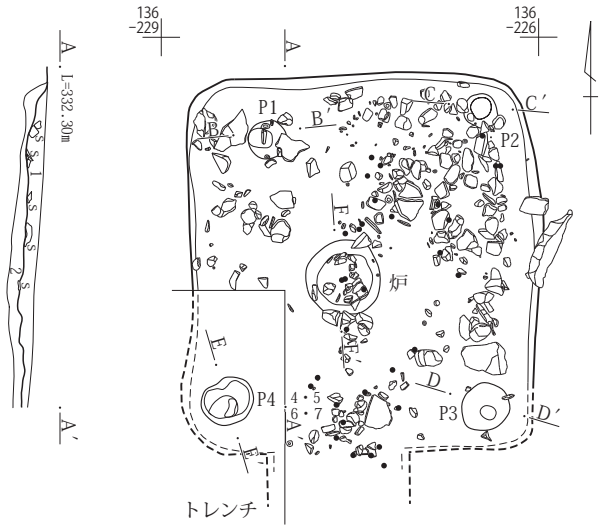
非掲載の遺物　P3埋土中から黒色頁岩及び黒曜石剥片各１点、P4埋土中から黒色頁岩剥片１点、P6埋土中から縄文時代中期後半の土器片２点、珪質頁岩剥片１点、黒曜石剥片２点が出土している。

また、竪穴建物埋土中からは、縄文時代中期後半～中期末葉の加曽利Ｅ3式・Ｅ4式期の土器片３点、型式未詳ながら縄文時代中期後半の土器片26点、黒曜石剥片６点、二次加工のある細粒輝石安山岩剥片が１点、二次加工のある珪質頁岩剥片が１点、二次加工のある黒色頁岩剥片が１点、二次加工のある黒色安山岩剥片が１点、デイサイト凝灰岩製打製石斧片１点、、緑色片岩製石皿片３点、粗粒輝石安山岩製礫片５点出土している。

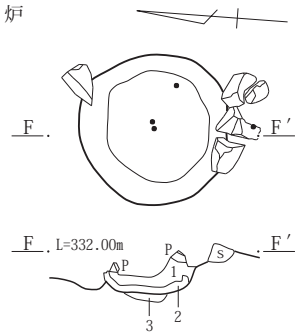
所見　柄鏡形敷石竪穴建物と考えられるが、建物廃絶時に敷石が抜かれ、、炉が徹底的に破壊されているため、敷石はほんのわずかの箇所に、部分的にしか検出されなかった。

床面調査時に検出されたP1～4と下部構造調査時に検出された主体部から南側の入り口に向かう張り出し部の連接部に当たる場所から検出された対ピットであるP6・7が本竪穴建物の柱穴を構成したものと考えられる。

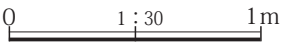
時期　出土した土器から縄文時代中期末葉の加曽利E4式期のものと考えられる。

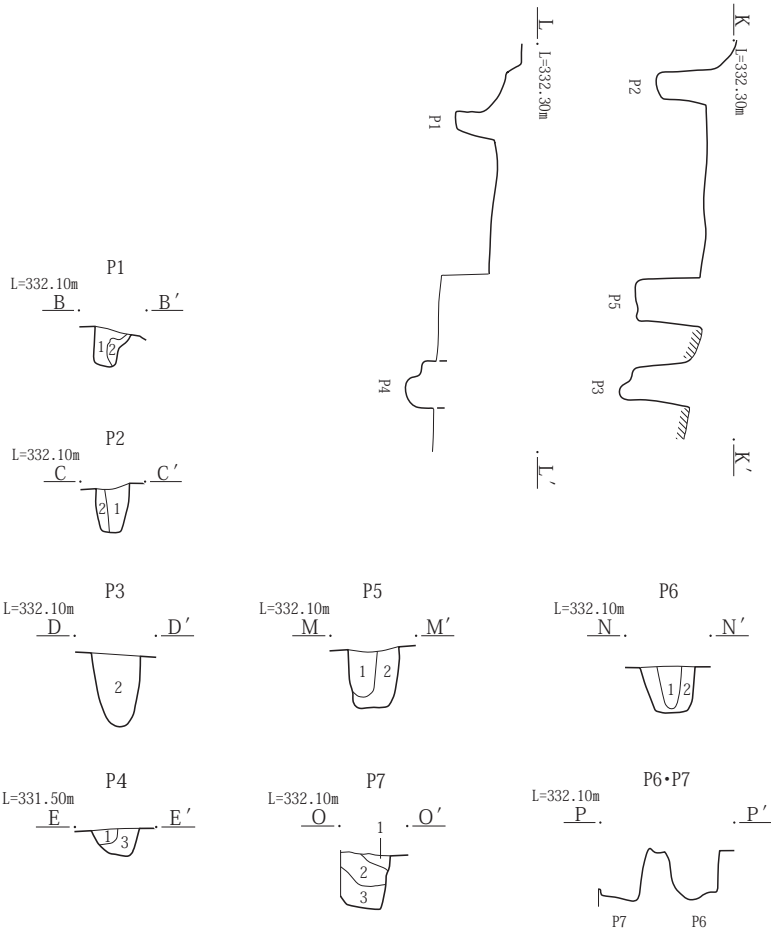


１区　２号竪穴建物Ａ－Ａ′
１.黒色土　橙色粒子及び褐色粒子を僅かに含む。
２.暗褐色土　黄褐色粒子を多く含む。橙色土を少量含む。

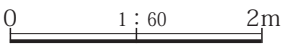


１区　２号竪穴建物炉Ｆ－Ｆ′
１.暗褐色土　橙色土を少量含む。焼土細粒を僅かに含む。
２.火床
３.暗褐色土　パミスを少量含む。固く締まっている。

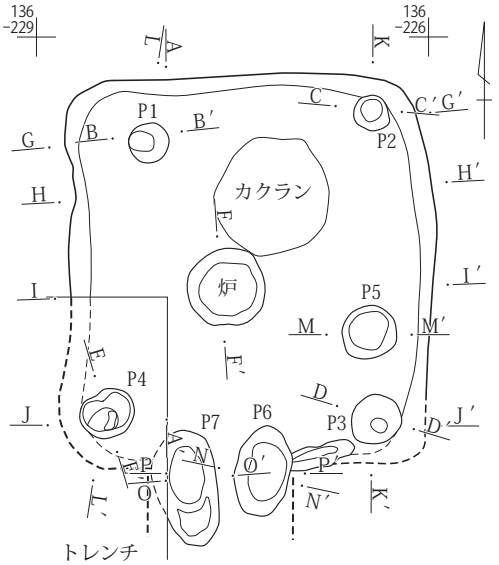


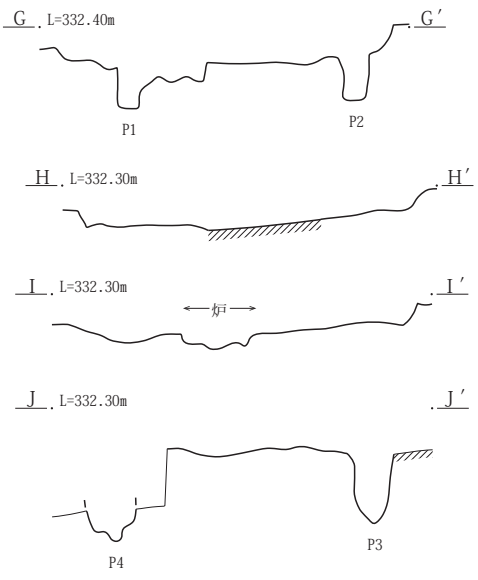


１区　２号竪穴建物ピット１～７
１.暗褐色土　橙色土を少量含む。ローム土を僅かに含む。
２.暗褐色土　橙色土及びローム土を少量含む。
３.褐色土　橙色土及びローム土を少量含む。As-YP粒子を僅かに含む。



下部構造



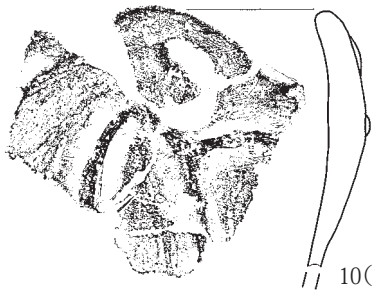


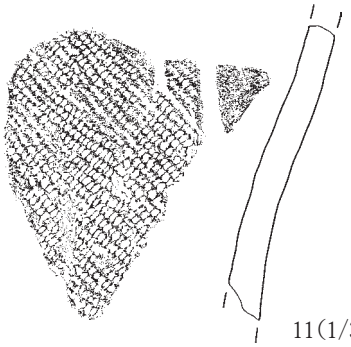
第20図　１区２号竪穴建物

第21図　１区２号竪穴建物出土遺物（１）

8（1/3）

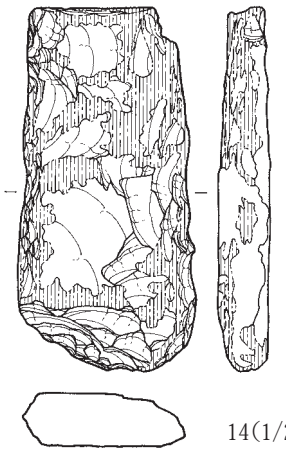
9（1/3）

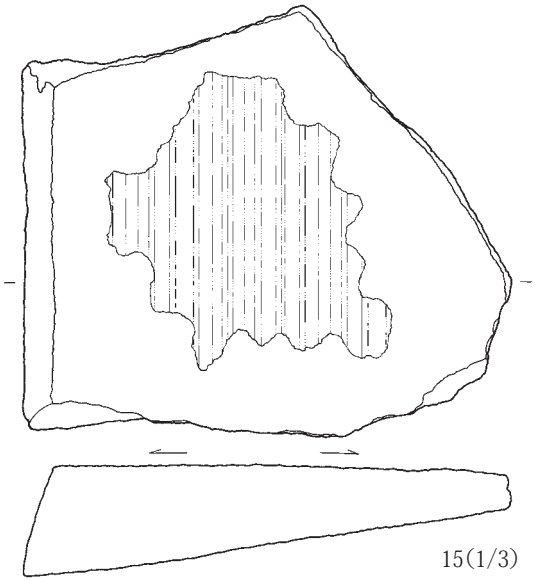

10(1/3)

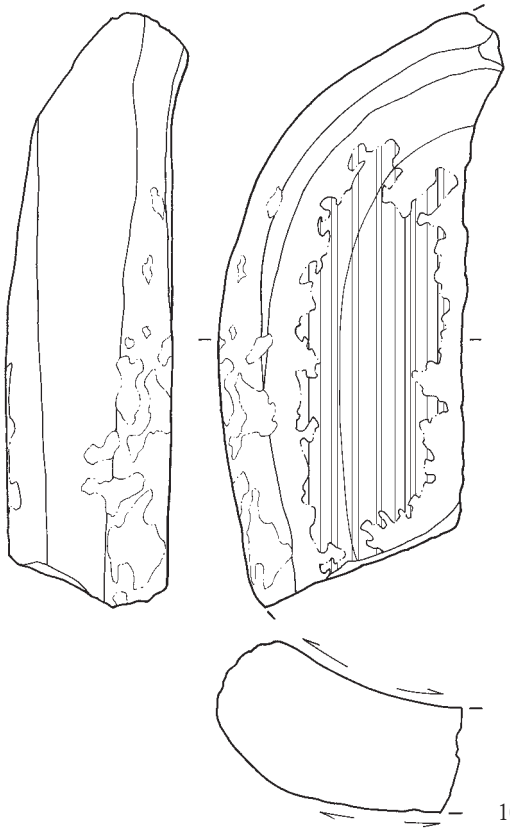

11(1/3)

12(1/3)

13(1/3)


14(1/2)


15(1/3)


16(1/3)

0　1：2　4cm

0　1：3　10cm

第22図　１区２号竪穴建物出土遺物（２）

３号竪穴建物(第23・24図、PL.25～27)

区・面　１区２面

位置　１区の西寄りの位置。２号竪穴建物の西側に位置し、19号土坑の北西側に隣接する。X＝45128～133、Y＝－86233～237。

重複　なし。

形状　北西-南東にやや長い隅丸長方形状を呈する。北東から南西に向かって緩やかに傾斜する斜面に掘り込まれているため、南西辺は後世にかなり削平されている。

床面からは若干の板状礫及び亜円礫群が検出された。それらの上面がほぼ同一の標高であることから、元来は敷石竪穴建物であったと推定される。

主軸方位　N-61°-W。

埋土　下層に黄褐色粒子を少量もしくは僅かに含む暗褐色土が堆積し、その上に橙色粒子及び褐色粒子を僅かに含む黒褐色土が堆積する。

規模　長軸最大幅3.75m、短軸最大幅3.53m、下部構造までの深さ0.64m、床面積11.62㎡。

上部構造

(１)主体部　主体部は北西-南東にやや長い隅丸長方形状を呈している。張り出し部の痕跡は下部構造の調査時においても全く検出されなかったため、柄鏡型の竪穴建物であった可能性は考えにくい。

(２)床面　床に使用される石の検出量は少ないが、比較的小型の板状礫が多用され、板状礫の間には亜円礫が間詰めされ、敷石の周縁部にも亜円礫が敷かれていたものと考えられるが、ほとんどの敷石は竪穴建物廃棄時に抜き取られ、建物の北東と南東の隅部と炉の北東側に部分的に残存しているに過ぎない状態であった。実際に検出できた敷石の状態は極めて疎らである。

ほとんどの敷石を抜き取られた状態で検出された床面の標高は概ね330.90～331.50mと平坦ではない。

(３)壁　主体部の壁高は、確認面から0.01～0.08mを測る。北東から南西への緩斜面に立地する竪穴建物であるため、概ね北東側寄りの部分における壁高が高い。

(４)炉　主体部の床面の中央からやや南寄りの位置に、板状礫が方形に組まれたの石囲炉が検出された。炉の四方を構成する板状礫は、内面の上側が特に被熱されていた。

炉の長軸は建物主体部と同様の北東-南西方向で、内法は長軸最大0.41m、短軸最大0.37m、構築材最上面から火床面までの深さは最深で0.27m、構築材最上面から掘方までの深さは0.31mであった。

火床面は焼けて固く締まっており、火床面の上層には橙色土や焼土粒子を少量とパミスを僅かに含む暗褐色土が堆積していた。また、火床面から炉の掘方底部までの埋土は橙色土を少量と焼土細粒を僅かに含む暗褐色土であった。

(５)柱穴　床面調査時に、隅丸長方形状の主体部の四隅付近から、建物の上屋を支えた柱を建てたと考えられる計４箇所、６基の柱穴が検出された。北西側柱穴は主体部の若干内側に掘り込まれているのに対し、北東隅柱穴と南西隅柱穴は主体部隅もしくは壁際に掘り込まれている。また、北東隅柱穴の位置には連接して３基のピットが縦列しているが、規模・形状から見て北東隅柱穴のみ数度に亘って掘り直されていた可能性が考えられる。しかしながら、P2～4の重複関係は明らかにすることが出来ず、これらの新旧関係は不明である。

柱穴は不整円形状もしくは楕円形状ないし、隅丸長方形状の平面形状で、径はおよそ0.3～0.6m前後、深さはおよそ0.2～0.4m前後であった。

埋土は、橙色土を少量とローム土を少量ないし僅かに含む暗褐色土をベースとしている。

①P1：北西柱穴。東西に長い楕円形状。長径0.30m、短径0.23m、深さ0.27m、埋土は橙色土を少量とローム土を少量含む暗褐色土と橙色土を少量とローム土を僅かに含む暗褐色土とが縦方向に並列して堆積。

②P2：北東柱穴１。北東-南西に長い楕円形状。長径0.53m、検出短径0.25m、深さ0.37m。埋土は中央部に細く柱痕状に橙色土を少量とローム土を僅かに含む暗褐色土が堆積し、その周囲に橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土が堆積している。

③P3：北東柱穴２。北東-南西に長い楕円形状。長径0.25m、検出短径0.15m、深さ0.28m。埋土は橙色土を少量とローム土を僅かに含む暗褐色土と橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土が縦方向に並列して堆積している。

④P4:北東柱穴３。北東-南西方向に長い楕円形状。長径0.25m、検出短径0.20m、深さ0.22m。埋土は橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土。

⑤P5：南東柱穴。北西－南東方向にやや長い隅丸方形状。長径0.33m、短径0.27m、深さ0.28m。埋土は中央部に細く柱痕状に橙色土を少量とローム土を僅かに含む暗褐色土が堆積し、その周囲に橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土が堆積している。

⑥P6：南西柱穴。北西-南東方向にやや長い楕円形状。長径0.62m、短径0.44m、深さ0.20m。埋土は中央部にやや幅広く橙色土を少量とローム土を僅かに含む暗褐色土が柱痕状に堆積し、その周囲に橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土が堆積している。

下部構造

（１）主体部　板状礫と亜円礫が敷き詰められたであろう床下0.03～0.45m下から下部構造を検出した。主体部は上部構造と全く同規模の南北にやや長い隅丸長方形状を呈している。確認面からの深さは約0.15～0.50mである。

底面は比較的平坦で、南東側壁以外の部分の壁際は一段深く周溝状に掘り窪められていた。

また、主体部の南東寄りから南東壁際にかけて、床面調査時には検出できなかったP7～9が北東-南西に縦列して連続して検出された。これらのピット群の新旧関係や用途は不明である。

（２）底面　ごく僅かの敷石と掘方埋土とを除去して底面を検出した。底面は若干の凹凸が認められるものの、概ね標高330.95m前後の平坦な面が形成されていた。

主体部の南西辺、北西辺、北東辺では、壁際に、幅約0.1～0.3m前後、深さ約0.1m前後に周溝状に掘り窪められていた。

（３）炉　炉の掘方は、長径0.84m、短径0.72m、深さ0.18mの北西-南東に長い隅丸長方形状に掘り窪められており、火床下には橙色土を少量と焼土細粒を僅かに含み、固く締まった暗褐色土が堆積していた。

（４）ピット　床面調査時に検出された建物主体南東壁際付近で、P7～9が北東-南西に縦列して連続して検出された。これらのピット群の新旧関係は不明であり、また、位置的にも柱穴とは考えにくい。

①P7：最も北東側に位置する。北西-南東に長い楕円形状を呈する。長径0.47m、短径0.42m、深さ0.25m。埋土は橙色土を少量とローム土を僅かに含む暗褐色土。

②P8：P7・9の中間位位置する。北西-南東に長い不整楕円形状。長径0.68m、短径0.44m、深さ0.41m。埋土は、橙色土を少量とローム土を僅かに含む暗褐色土と橙色土及びローム土を少量含む暗褐色土が縦状に並列して堆積している。

③P9：南東壁際。北西-南東に長い楕円形状を呈する。長径0.54m、短径0.49m、深さ0.25m。埋土は橙色土及びローム土を少量とAs-YP粒を僅かに含む暗褐色土を主体とし、その上の一部に橙色土を少量とローム土を僅かに含む暗褐色土が堆積している。

掲載した遺物　出土した土器は１～14の14点を図示した。縄文時代中期後半の加曽利E3式のものが大部分であるが、縄文時代中期末葉の加曽利E4式の土器片３点と、弥生時代前期の土器片４点が混じっている。

１～９・14が縄文時代中期後半～中期末葉の土器片。10～13が弥生時代前期相当の土器片である。

（１）縄文土器　１～９は竪穴建物埋土中からの出土である。

１～６は縄文時代中期後半加曽利E3式深鉢片。１・４は口縁部片。１は口縁部に横位隆線、胴部は胴部隆線による懸垂文構成、ＬＲを縦位充填施文。４は外反する口縁部。無文。２・３・５・６は胴部片。２・３は共に橋状把手が付され、２はＲＬを斜位に施文。３は逆Ｕ字状沈線で区画しＲＬを縦位充填施文。５は逆Ｕ字状の沈線区画を施しＬＲを縦位に充填施文。６は２本の沈線による懸垂文で区画にＲＬを縦位施文。

７～９は縄文時代中期末葉加曽利E4式深鉢片。７は胴～底部片。外面無文。一部に縄文残存するが摩滅著しく詳細不明。８は底部片。縦位に条線が施される。９は胴部片。条線を縦位に施文。

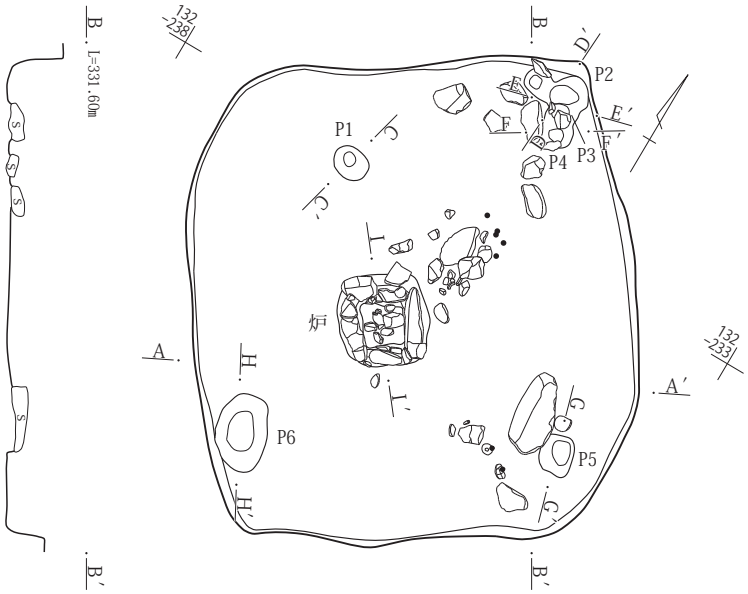
14は竪穴建物下部構造からの出土。縄文時代中期後半加曽利E3式深鉢胴部片。逆Ｕ字状の沈線区画で、区画内にＲＬを充填施文。内面は丁寧な磨きが施されている。

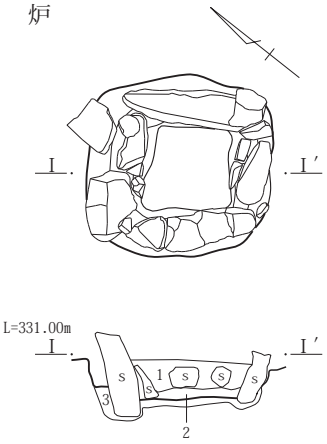
（２）弥生土器　10～13は弥生時代前期相当の深鉢胴部片で、いずれも竪穴建物埋土中からの出土である。

10・11は同一個体。縦位の条痕文が施される。12は底部片で、底部は無文。13は胴部片。縦位の条痕文が施される。２号竪穴建物出土13、５号竪穴建物出土６と同一個体と考えられる。

（３）石器　石器は15・16の２点を図示、掲載した。ともに竪穴建物建物埋土からの出土である。

15は黒曜石製石鏃1/2片で表裏面の全体に面的な二次





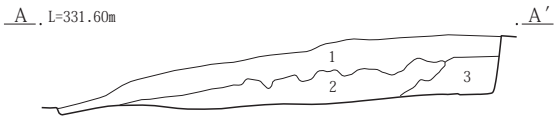
1区　３号竪穴建物炉Ｉ－Ｉ′

１.暗褐色土　橙色土を少量及びパミスを僅かに含む。

２.暗褐色土　火床。焼けて固く締まる。焼土粒子を少量含む。

３.暗褐色土　掘方埋土。橙色土を少量含む。焼土細粒を僅かに含む。

0　1：30　1m



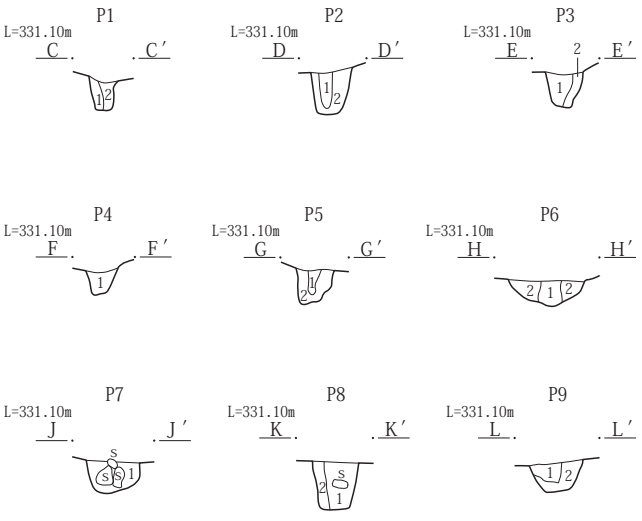
1区　３号竪穴建物Ａ－Ａ′

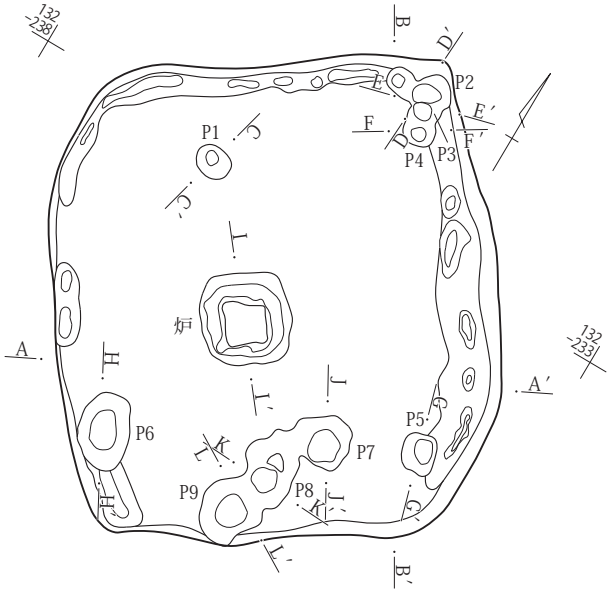
１.黒褐色土　橙色粒子及び褐色粒子を僅かに含む。

２.暗褐色土　橙色土を少量含む。黄褐色粒子を僅かに含む。

３.暗褐色土　橙色土及び黄褐色粒子を少量含む。

下部構造





1区　３号竪穴建物ピット１～９

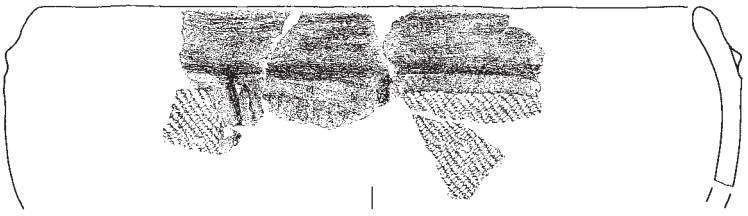
１.暗褐色土　橙色土を少量含む。ローム土を僅かに含む。

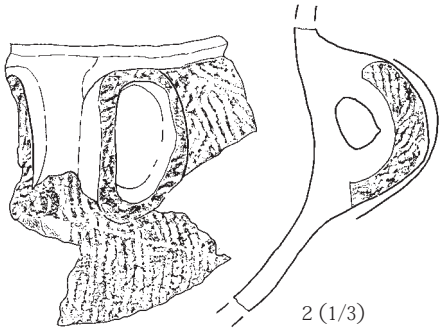
２.暗褐色土　橙色土及びローム土を少量含む。

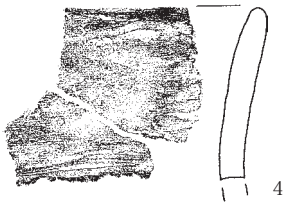
３.暗褐色土　橙色土及びローム土を少量含む。As-YP 粒子を僅かに含む。

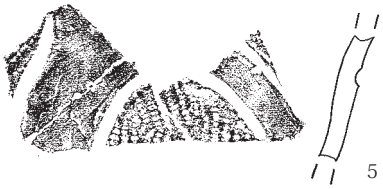
0　1：60　2m

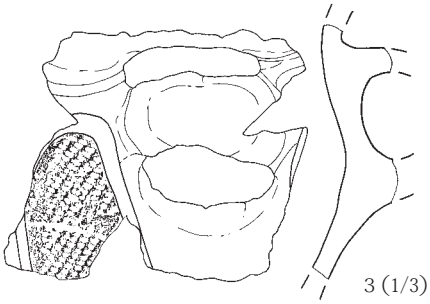
第23図　１区３号竪穴建物


1 (1/4)


2 (1/3)

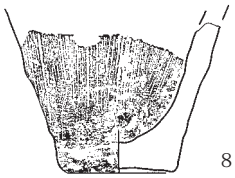

4 (1/4)

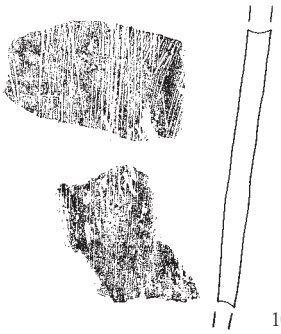

5 (1/3)


3 (1/3)

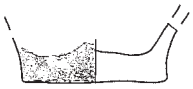
6 (1/3)

7 (1/4)


8 (1/4)

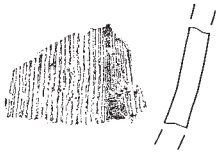

10(1/3)

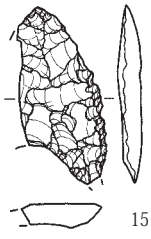
11(1/3)

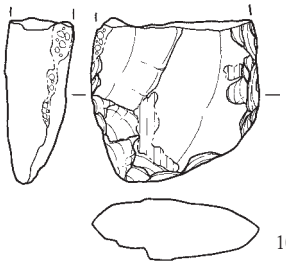

12(1/4)

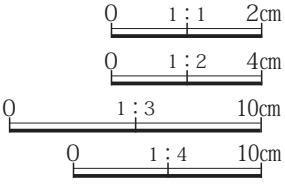
9 (1/3)

14(1/3)


13(1/3)


15(1/1)


16(1/2)



第24図　１区３号竪穴建物出土遺物

加工が認められる。16は細粒輝石安山岩製打製石斧片で、全体的に両面加工が認められる。表裏面の先端付近には摩滅痕が認められる。左右両側辺にはつぶれ痕が認められる。裏面の中央付近には自然面が広く認められ剥片素材と考えられる。表面の中央付近には素材剥片段階の剥離面が認められ主要剥離面と考えられる。

非掲載の遺物　これらの他に、非掲載ではあるが、P7埋土中から黒曜石及びチャート剥片各１点、P8埋土中から黒曜石剥片３点、P9埋土中から黒曜石剥片１点が出土している。

竪穴建物埋土中からは、縄文時代中期後半～中期末葉の加曽利Ｅ3式・Ｅ4式期の土器片12点、型式未詳ながら縄文時代中期後半の土器片14点、弥生時代前期相当の土器片３点、時期不明の土器片１点、黒色頁岩剥片６点、黒曜石剥片16点、黒色安山岩剥片８点、チャート剥片１点等が出土している。

所見　敷石竪穴建物と考えられるが、建物廃絶時にほとんどの敷石が抜かれているため、敷石はほんのわずかの箇所に、部分的にしか検出されなかった。

床面調査時に検出されたP1～6が本竪穴建物の柱穴を構成したものと考えられる。

時期　出土した土器から縄文時代中期後半の加曽利E3式期のものと考えられる。

５号竪穴建物（第25・26図、PL.28・29）

区・面　１区２面

位置　１区の東寄りの位置。X＝45132～136、Y＝－86211～214。

重複　なし。

形状　北から南に向かう緩やかな傾斜地に立地している。北西-南東にやや長い不整隅丸長方形状を呈していたものと考えられるが、主体部は、検出面がそのまま床面という状況であった。南東隅部は攪乱され、破壊されている。

主軸方位　N-60°-W。

埋土　黄褐色粒子を多く、橙色土を少量、ローム粒子を僅かに含む暗褐色土が堆積する。

規模　長軸最大幅3.98m、短軸最大幅3.65m、下部構造までの深さ0.11m、床面積不明。

上部構造

（１）主体部　主体部は北西-南東にやや長い不整隅丸長方形状を呈している。張り出し部の痕跡は全く検出されず、また、炉の北東側に隣接して置かれた扁平な板状礫が、原位置と考えられ、さらに出入り口の方向を示しているものと考えられるので、北東側に入り口を有する竪穴建物であったと考えられる。

（２）床面　確認面がそのまま床面という状況で検出された。床面から検出された石の量は非常に少ないが、炉の北東側に隣接して置かれた大型の扁平な板状礫が原位置にある敷石と考えられ、建物の出入り口の方向を示しているものと考えられる。

検出された床面の標高は、概ね332m前後と平坦である。

（３）壁　主体部では壁は全く検出されなかった。

（４）炉　主体部の床面のほぼ中央からやや南寄りの位置に、角柱状の礫が方形に組まれていたであろう石囲炉の痕跡が検出された。炉の南東側と北東側を構成する角柱状の礫は、原位置もしくはそれに近い位置にあるものと考えられるが、南西側と北西側の囲石は破壊され、建物主体部の床面の南西側から南側にかけての広い範囲に散乱した状態で検出され、原位置からは大きく離れているものと考えられる。囲石はいずれも内面が被熱されていた。

炉の残存状態から、炉の長軸は建物主体部の長軸とは反対に北東-南西方向で、内法は長軸最大約0.5mと推測出来るが、、短軸については推定すらできない状態である。火床面も全く検出できなかった。

（５）柱穴　主体部の調査では柱穴と考えられる様なものを含め、ピットは１基も検出されなかったため不明である。

下部構造

（１）主体部・底面　不明。

（２）炉　炉の掘方は全く検出されなかった。

掲載した遺物　出土した土器は１～６の６点を図示した。縄文時代中期末葉加曽利E4式のものが4点で、大部分を占めるが、縄文時代中期後半加曽利E3式の土器片１点と、弥生時代前期の土器片１点が混じる。

（１）縄文土器　１～３は炉の残骸部分からの出土で、縄文時代中期末葉加曽利E4式深鉢片である。

１は口縁部片。口縁部は横位隆線による区画、橋状把

手にＲＬ、下位にＲＬを横位施文。２は頸部片。横位に隆線が施される。３は胴部片。横位に隆帯が施され、下位に縄文が施文されるが磨滅著しく詳細不明。

４は床面からの出土である。縄文時代中期後半加曽利E3式深鉢の口縁～胴部片。口縁部は隆帯区画と渦巻文、区画内にＬＲを横位に充填施文。胴部は幅広沈線による懸垂文、ＬＲを縦位、斜位に施文。

５は埋土から出土した縄文時代中期末葉加曽利E4式深鉢の胴部片。縦位に沈線が施される。

（２）弥生土器　６は竪穴建物埋土から出土した弥生時代前期の深鉢の胴部片。縦位の条痕文。２号竪穴建物出土13、３号竪穴建物出土13と同一個体。

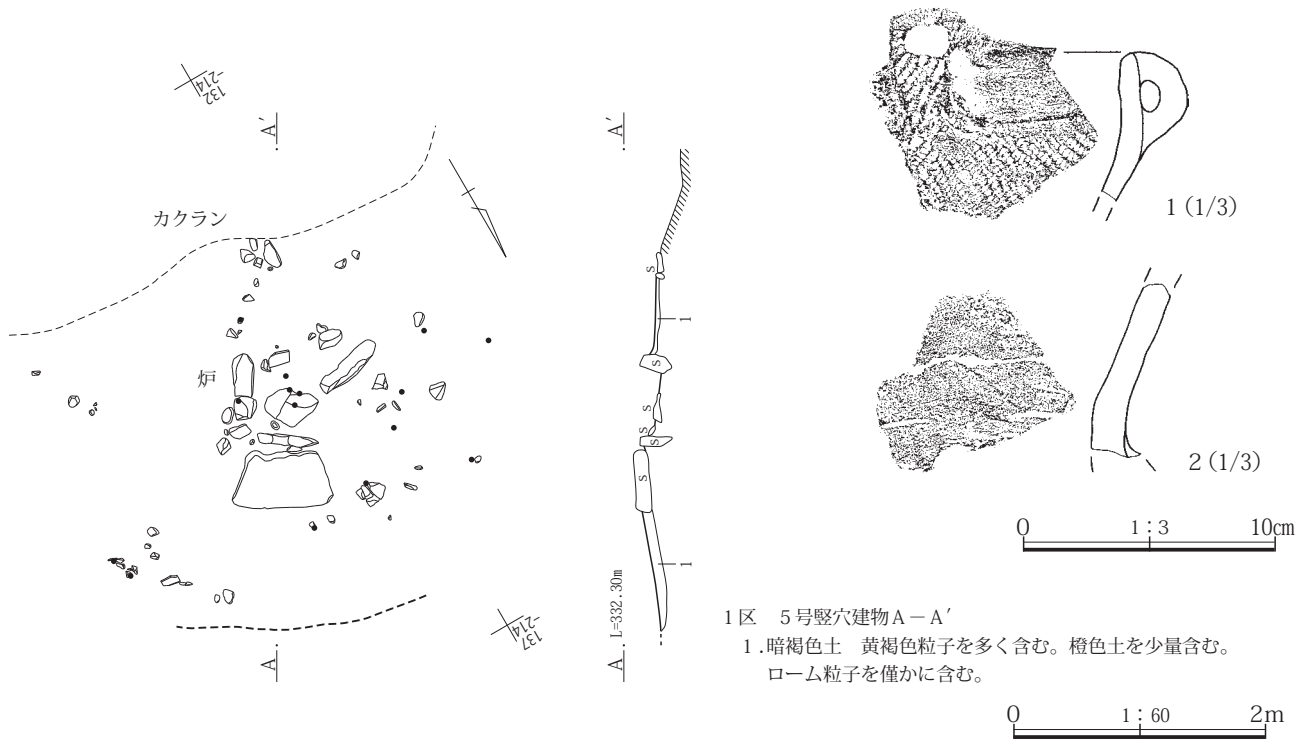
（３）石器　石器は７～９の３点を図示した。いずれも竪穴建物埋土中からの出土である。

７は黒色安山岩製石鏃未成品で、完形である。裏面に素材剥片の主要剥離面が認められ横長剥片を素材とする。表裏面の縁辺部に部分的な二次加工が認められる。表面の一部には自然面が認められ円礫を利用する。８は変玄武岩製の磨製石斧2/3片で、全体的に滑らかであり丁寧に研磨整形される。右側面から裏面にかけては内湾しており細かい凹凸面で構成され敲打により生じたと考えられる。縁辺部には表層的な剥落痕が散在しており敲打で生じた可能性がある。磨製石斧から敲打具に器種変化したと考えられる。９は緑色片岩製の完形の礫石器で、全体的に自然面で構成される。結晶片岩類であり石材産出地を考慮すると人工的に遺跡地に搬入されたと判断できる。全体的に滑らかであり石製研磨具として機能した可能性がある。

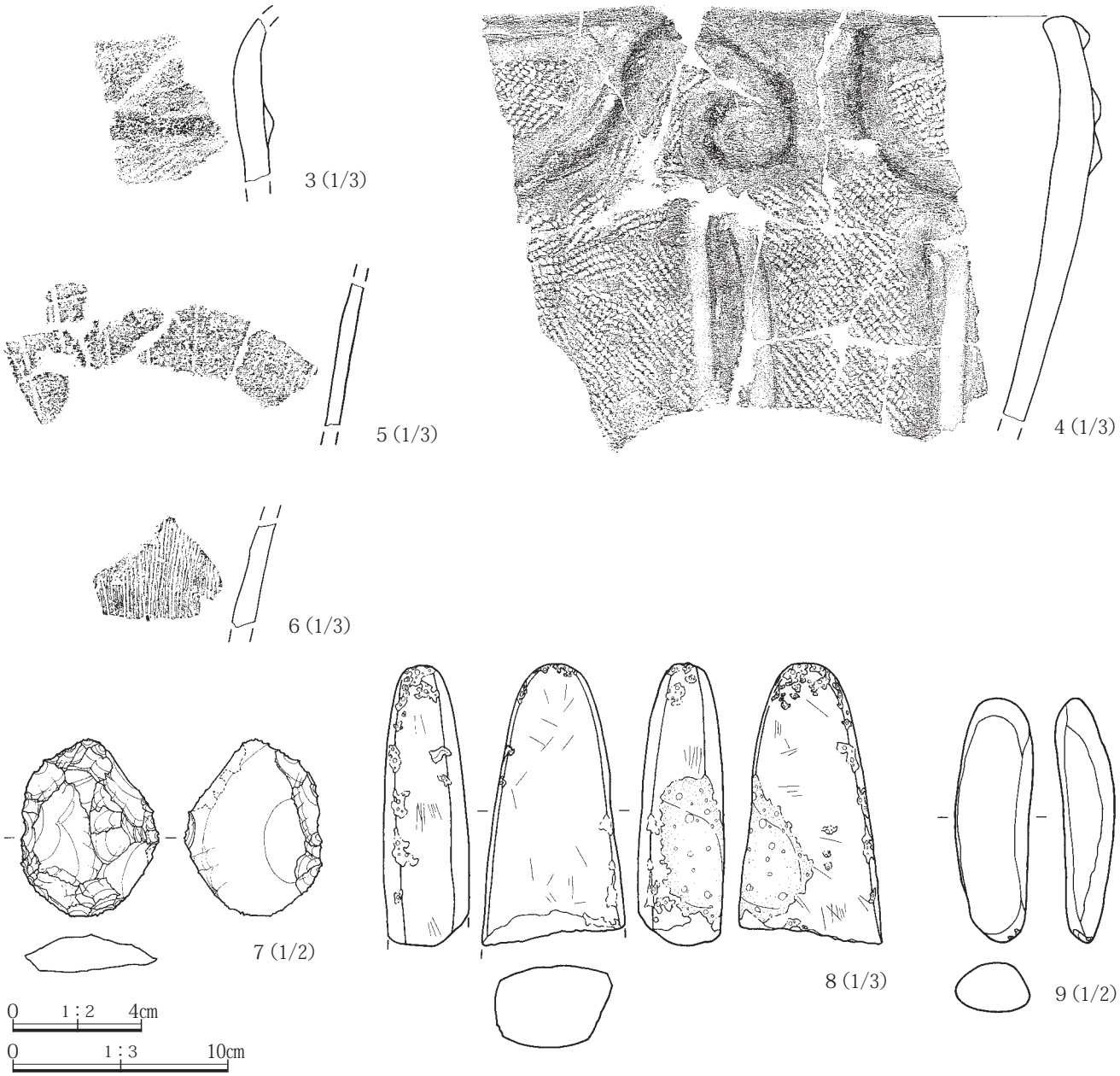
非掲載遺物　これらの他に、非掲載ではあるが、竪穴建物埋土中から縄文時代中期後半～中期末葉の加曽利Ｅ３式・Ｅ４式の土器片が１点、型式未詳ながら縄文時代中期後半の土器片13点、時期不明の土器片10点、黒曜石剥片14点、黒曜石の二次加工がある剥片１点、黒曜石石核１点、粗粒輝石安山岩製不明石器片１点が出土している。

所見　敷石竪穴建物と考えられるが、現存している敷石は炉の北東側にだけ敷かれた、大型で扁平・板状の石１枚のみである。この石は原位置を保っているものと考えられる。もともと敷石この一枚のみであるのか、あるいは他の敷石が完全に抜かれた状態であるのかについては容易には判別しがたいものの、石片の検出状況から見れば、床の全面に敷石が施された状態ではなかったように推測される。

時期　出土した土器から縄文時代中期末葉の加曽利E4式期のものと考えられる。



第25図　１区５号竪穴建物、出土遺物（１）



第26図　１区５号竪穴建物出土遺物（２）

第２項　屋外炉

１区の東寄りから検出された５号竪穴建物と、１区の中央からやや西寄りの位置から検出された２号竪穴建物間から縄文時代早期の屋外炉が１基検出された。本遺跡では唯一検出された屋外炉であるが、規模や形状から19号土坑も屋外炉である可能性が高い。しかしながら、19号土坑は、遺物の出土が皆無であり、時期が特定できない。

１号屋外炉（第27図、PL.29・30）

区・面　１区２面

位置　１区の中央からやや西寄りの位置。２号竪穴建物の南東側に位置する。X＝45131～132、Y＝－86223～224。

重複　なし。

形状・構造　北西-南東にやや長く浅い不整楕円形状の掘方の中に、掘方に沿って円形状に亜角礫が並べられているが、並べ方は非常に雑である。多くの亜角礫は、元来は掘方に沿って斜めに立て並べられていたものと推測できるが、不明瞭の点が少なくない。

主軸方位　N-22°-W。

埋土　黄褐色土。

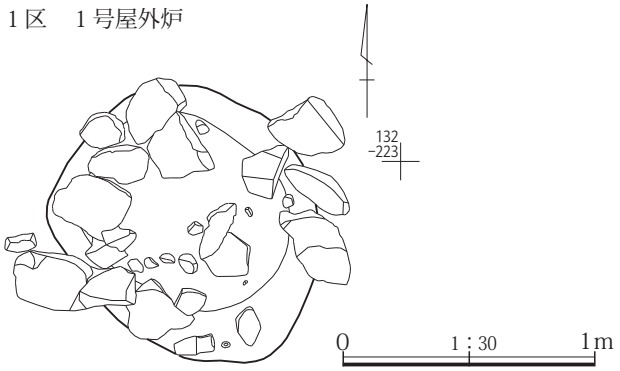
規模　長径1.10m、短径0.98m、深さ0.26m。

遺物　非掲載であるが、埋土中から縄文時代早期条痕文・沈線文系土器片と表裏条痕文・沈線文系土器片が各１点、黒曜石剥片20点、チャート剥片１点出土している。いずれも微細な剥片であり、図示し得なかった。

所見　本遺跡では唯一の屋外炉であり、縄文時代早期の遺物も、本屋外炉以外からは全く出土していない。

本屋外炉の西南西に位置する19号土坑も、構造からみて屋外炉である可能性が考えられる。

時期　出土した土器から縄文時代早期ものと考えられる。



第27図　１区１号屋外炉

第３項　河道

２区からは遺構は検出されなかったが、調査区のほぼ中央を北から南へと流れる河道が検出された。検出層位から縄文時代のものと考えられる。

河道下層からの遺構検出の可能性や遺物等出土の可能性、遺構との重複の有無、遺構との関連等を調べるために北側約2/5に限って確認調査を実施した。

結果的には、調査範囲内において重複する遺構はなく、下層から遺構が検出されることもなく、遺物も全く出土しなかったが、調査区内において最も標高が高く、安定した台地上に立地している東側１区から検出された縄文時代中期の３棟の竪穴建物が営まれた背景として、隣接する谷地を流れる小河川の存在は決して小さくはなかったものと考えられる。

１号河道（第28図、PL.31・32）

区・面　２区２面

位置　２区のほぼ中央部を北から南へと貫流している。X＝45112～131、Y＝－86254～260。

重複　なし。

形状　東岸は緩やかに屈曲し、西岸は部分的にはやや大きく屈曲しているが、蛇行はせず、流れは比較的直線的である。

主軸方位　N-9°-E。

埋土　黄褐色粒子を少量或いは僅かに含み、橙色土とローム土を含む暗褐色土。

規模　検出全長18.60m、幅3.10～5.15m、深さ0.60m。

遺物　なし。

所見　本遺跡で検出された唯一の河道であり、検出層位から見て縄文時代のものに間違いはないが、遺物の出土が皆無であるため、詳細な時期は不明である。

東岸側と西岸側とでは、西側が約１m前後低くなっており、大まかには北東側から南西側へと緩やかに傾斜する地形に開削された小規模な谷部を川が流れている。

時期　縄文時代のものと考えられる。

第４項　土坑

本遺跡から検出された縄文時代の土坑は3基である。４区の北東寄りの位置から検出された10・11号土坑と１区の南西寄りの位置から検出された19号土坑である。

４区10号土坑と１区19号土坑から遺物の出土は皆無であったが、層位や埋土の状態、規模と形状等の状況から縄文時代のものと認定した。

10号土坑（第29図、PL.31）

区・面　４区２面

位置　４区北東寄りの位置、11号土坑のすぐ東側に近接する。X＝45087～088、Y＝－86309～310。

重複　なし。

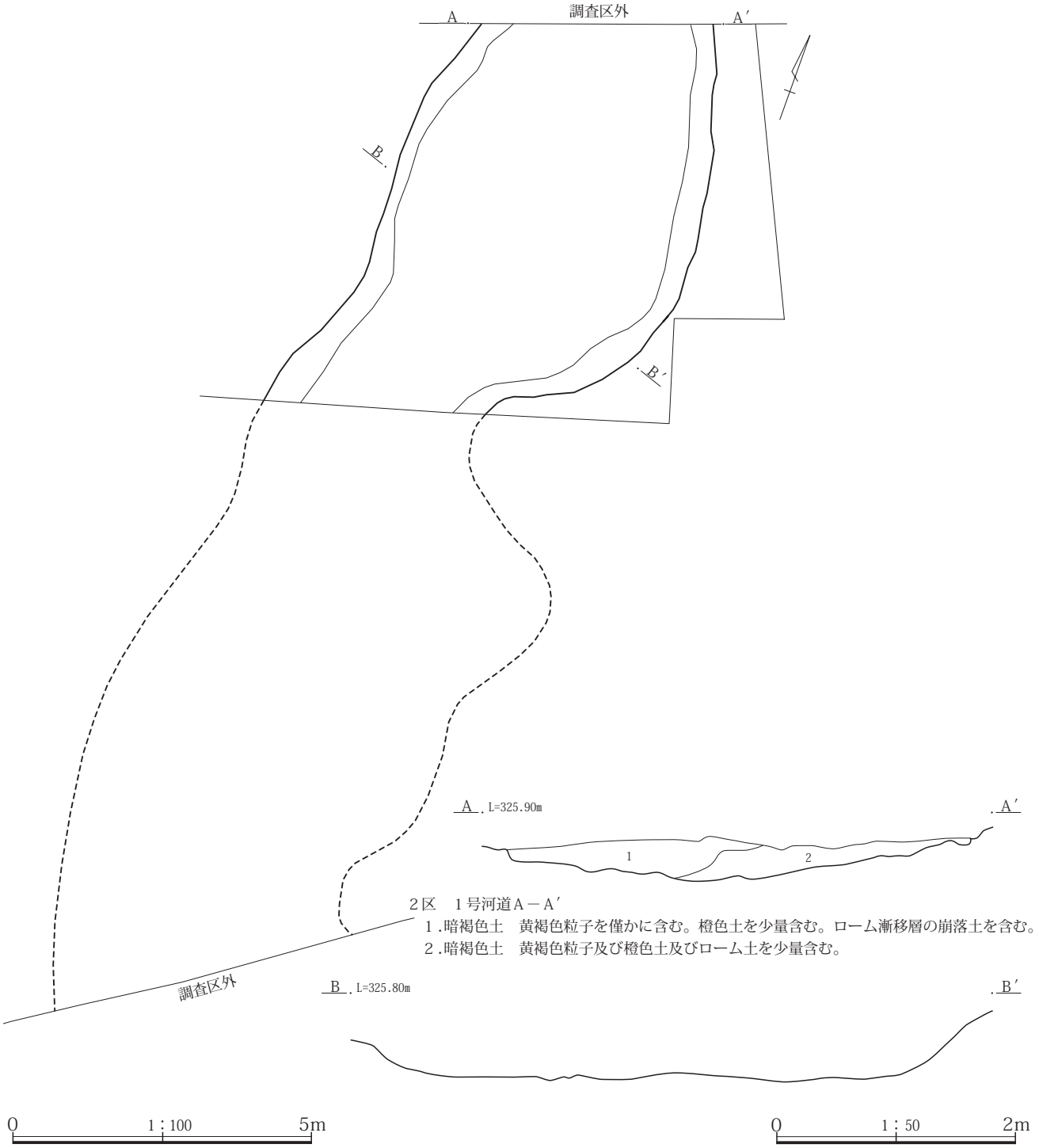
平面形状　東西に長い楕円形状を呈する。

主軸方位　N-67°-W。

規模　長径1.34m、短径1.16m、深さ0.44m。

埋土　底部に黄褐色粒子と橙色土を僅かに含む暗褐色土が塊状に堆積し、それを覆ってローム粒子と褐色粒子を僅かに含む褐色土が大きく堆積している。さらにその上層に薄く褐色粒子を僅かに含む暗褐色土が堆積している。

遺物　非掲載であるが、埋土中から縄文時代早期押型文



第28図　２区１号河道

土器片５点、縄文時代早期表裏条痕文・沈線文系土器片13点、縄文時代早期鵜ヶ島台式土器片１点、型式不明の縄文時代前期土器片14点、縄文時代前期中葉黒浜式土器片２点、型式不明の縄文時代中期後半土器片１点、時期不明の土器片11点と、縄文時代のものと考えられる黒色頁岩剥片３点が出土している。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、底部は平坦ではなく、若干凹凸が見られ、やや波打っている。南東側が一段と深く掘り込まれている。そのため、断面は、底部が一部突出した、深い不整逆台形状を呈している。

時期が判明する土器片39点のうち22点が縄文時代早期の土器片、16点が縄文時代前期の土器片と、縄文時代早期～前期の土器片が纏まって出土しているが、いずれも微細な破片で図示し得なかった。

４区２面の遺構外からは、縄文時代早期の土器片が14点、縄文時代前期の土器片が３点出土していることからも、本遺跡４区周辺において、縄文時代早期～前期の遺構が､他にも存在していた可能性が高いものと思われる。

時期　縄文時代早期。

11号土坑(第29図、PL.31)

区・面　４区２面

位置　４区北東寄りの位置、10号土坑のすぐ西側に近接する。X＝45087～088、Y＝－86311～312。

重複　なし。

平面形状　不整円形状を呈する。

規模　径1.19～1.22m、深さ0.41m。

埋土　黄褐色粒子と橙色土を僅かに含む暗褐色土が、上面から壁に沿って底部にかけて斜めに流入し、さらにその上にローム粒子と褐色粒子を僅かに含む暗褐色土が斜めに堆積した上に、褐色粒子を僅かに含む暗褐色土が堆積している。

遺物　なし。

所見　しっかりとした掘方を呈しており、断面は、深く広い不整逆台形状を呈している。

時期　縄文時代。

19号土坑(第29図、PL.31)

区・面　１区２面

位置　１区南西寄りの位置、２号竪穴建物の南西側に位置し、３号竪穴建物の南東側に隣接する。X＝45128～129、Y＝－86231～232。

重複　なし。

平面形状　北西-南東に長い隅丸長方形状を呈する。

主軸方位　N-71°-W。

規模　長径1.16m、短径0.85m、深さ0.22m。

埋土　暗褐色土を少量含みぼそぼそとした黒褐色土が堆積している。

遺物　なし。

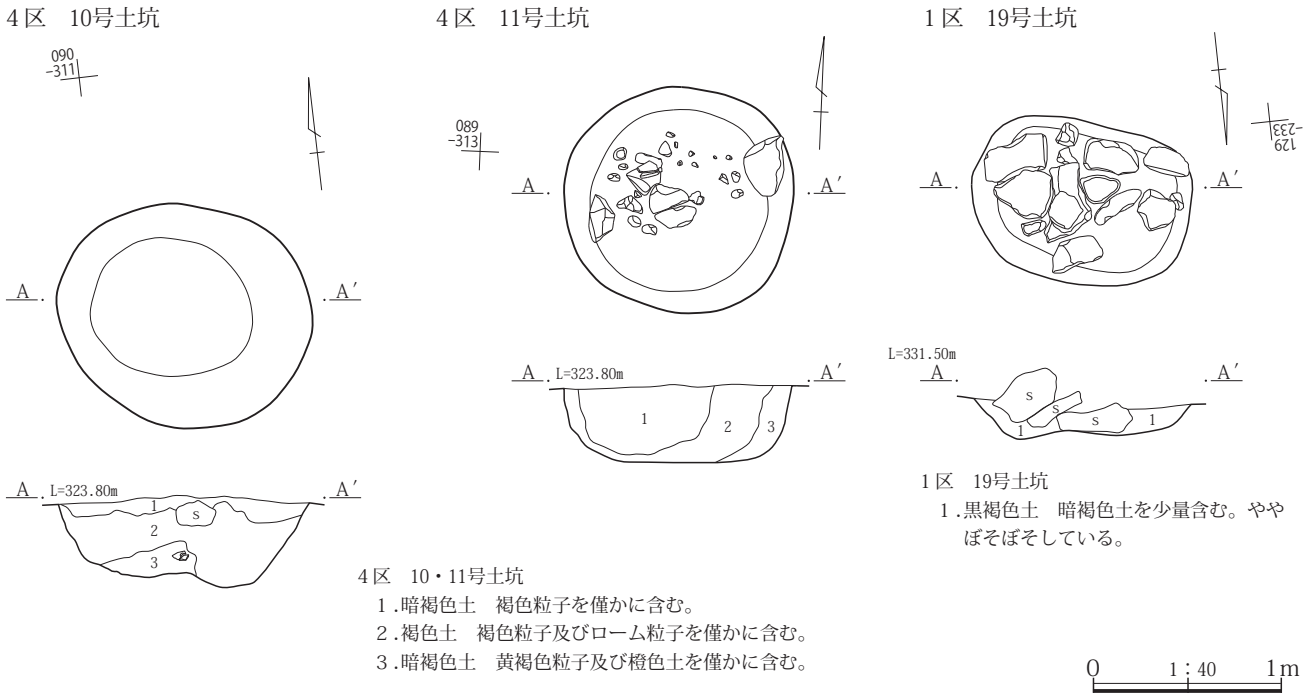
所見　しっかりとした掘方を呈しており、断面は、深く広い不整逆台形状を呈している。

規模・形状から見て屋外炉である可能性が高いが、検出された石に明瞭な被熱痕は認められなかった。

時期　縄文時代。

第5項　遺構外出土縄文・弥生時代遺物

ここでは、各区の縄文時代面＝２面の遺構外から出土した遺物のみにとどまらず、近世面＝１面の遺構外及び表土等から出土した縄文時代の土器・石器及び弥生時代



第29図　４区10・11号土坑、１区19号土坑

の土器について述べる。

遺構外出土の縄文時代土器･石器及び弥生土器のうち、図示、掲載したものは、１区１面表土出土の２点、１区２面出土の41点、２区２面遺構外出土の75点、３区１面表土出土の２点、４区２面出土の18点の計138点である。そのうち、石器は、１区２面出土の２点、２区２面出土の１点のみであり、他はすべて土器である。

個々の遺物の詳細については、巻末の第３表遺物観察表を、また、非掲載遺物の点数等については、同じく巻末の第５表非掲載縄文・弥生土器集計表及び第６表非掲載縄文時代石器・剥片等集計表を参照されたい。

以下に、図示した遺物を中心に、その概要を簡単に記す。

１区１面(第30図、PL.38)

１区１面表土出土の土器で、図示、掲載したのは２点(１区１面遺構外１・２)である。いずれも縄文時代中期末葉加曽利E4式土器片である。

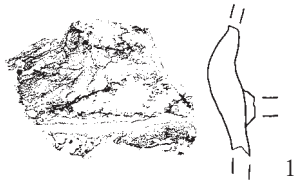
１は深鉢口縁部片で、口縁部は橋状把手、横位に隆線による区画あり。２は深鉢底部片で、無文。

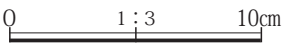
なお、非掲載ではあるが、他に中期の土器片が３点、中期後半の土器片が38点、中期後半～末葉の加曽利E3式期・E4式期の土器片が４点の計46点の土器片が出土している。

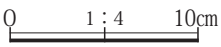
本遺跡では、先述した様に、１区２面２号竪穴建物および５号竪穴建物から加曽利E4式期の土器片が多く出土しており、遺構外からも加曽利E4式期の土器片は多数出土している。それらとの関連で、これらの資料も注目できよう。

１区２面(第31～33図、PL. 39・40)

１区２面遺構外出土遺物については､37点の土器片(１区２面遺構外１～37)と石器片２点(１区２面遺構外38・39)を図示し、掲載した。土器片はいずれも縄文時代中期後半以降の鉢片である。







第30図　１区１面遺構外出土縄文時代遺物

(１)縄文土器　縄文時代中期後半加曽利E1式土器片１点(１区２面遺構外36)、縄文時代中期後半加曽利E3式土器片が13点(１区２面遺構外２・３・６・10・20・23～27･33～35)､縄文時代中期末葉加曽利E4式土器片22点(１区２面遺構外１・４・５・７～９・11～19・21・22・29～32・37)、中期後半としかわからない土器片が１点(１区２面遺構外28)である。やはり加曽利E4式土器片が最も多い。

１・４・５・７～９・11～19・21・22・29～32・37は縄文時代中期末葉加曽利Ｅ4式鉢片で、８が浅鉢片である他はすべて深鉢片である。

１・７・11～13は深鉢口縁部片。１は横位沈線文、下位にＬＲを縦位施文。７は波状口縁で横位に連続刺突文。胴部に逆Ｕ字状の沈線を施しＬＲを充填施文。11は口縁部に横位隆線。胴部に縦位に隆線が施される。12は波状口縁・横位沈線。ＬＲを横位・縦位に充填施文。13は口縁部小突起。胴部は２本の沈線による逆Ｕ字状意匠。ＬＲを施文。29は深鉢口頸部片。横位隆線以下沈線による逆Ｕ字状意匠、ＬＲを充填施文。４は胴部～底部片。沈線による懸垂文が施されＲＬが縦位に施文される。胴部内面に煤状付着物あり。５・９・14・16～19・21・22・30～32は深鉢胴部片。５は２帯構成で、ＲＬを斜位に充填施文。９は２本の沈線による懸垂文を施し、ＬＲを縦位に充填施文。５と14は同一個体とみられる。16は沈線

による懸垂文。ＲＬによる縦位充填施文。17・18・21は沈線による分岐懸垂文。ＬＲによる充填施文。19は胴部下半部片で、18と同一個体とみられる。22は隆線による区画。区画内にＲＬによる斜位の施文と棒状工具による刺突を施す。30は横位流体が付される。31は３本の垂下沈線による懸垂文。無節Ｒ斜位施文。32は沈線による懸垂文。ＬＲ縦位施文。37は底面が丁寧に磨かれている。15は台付深鉢の脚部片。8は浅鉢口縁部片。緩やかな波状口縁。口縁部・横位隆線と突起。胴部・沈線による逆Ｕ字状意匠を区画しＬＲを縦位に充填施文。

２・３・６・10・20・23～27・33～35は縄文時代中期後半加曽利Ｅ3式深鉢片である。６は口縁部片。口縁部には隆帯による楕円・渦巻状区画。胴部にＲＬを横位・斜位に施文。２・３・10・20・23～27・33～35は胴部片。２は波状口縁、隆線による横位区画。下位に平行する２本の沈線で区画しＲＬを斜位に充填施文。３は沈線による懸垂文を施しＬＲを縦位施文。施文後縄文一部撫で消す。10は口縁部に幅広横位沈線による区画。下位に幅広沈線による懸垂文。区画内ＬＲを充填施文。内外面とも丁寧な磨き。20は隆線による逆Ｕ字状区画。区画内にＲＬによる充填施文。23はＲＬによる縦位施文。軟弱な状態での施文の為、粗雑な施文。内部に煤状付着物あり。23～26は同一個体とみられる。27は垂下沈線２条による懸垂文が施され、ＬＲを縦位に充填施文。33は隆帯による区画文構成か。区画内にＲＬを充填施文。外面に煤状付着物あり。34はＬＲを縦位施文。35は沈線による懸垂文。ＬＲによる充填施文。

28は、縄文時代中期後半頃の型式不明の深鉢胴部片。ＲＬを縦位に施文。

36は、縄文時代中期後半加曽利E1式深鉢胴部片。撚糸Ｌ縦位施文。

（２）石器　石器は38・39の２点を図化し、掲載した。いずれも縄文時代中期頃のものと考えられている。

38は縄文時代中期頃のものと見られる黒色安山岩製の凹基無茎鏃2/3片で、表裏面の全体に面的な二次加工の痕跡が認められる。39は縄文時代中期頃のものと見られる変質蛇紋岩製の磨製石斧1/3片で、全体的に非常に滑らかでありわずかに光沢がある。細かい線条痕が僅かに認められる。

（３）非掲載出土遺物　１区２面遺構外出土の非掲載の土器は計259点で、縄文時代早期条痕文・沈線文系土器片４点、縄文時代前期土器片６点、縄文時代前期後半黒浜式土器片２点、縄文時代中期後半土器片199点、縄文時代中期後半～末葉加曽利E2式期・E4式期土器片10点、縄文時代後期土器片１点、時期不明弥生土器片１点、弥生時代前期相当土器片２点、時期不明土器片34点等がある。

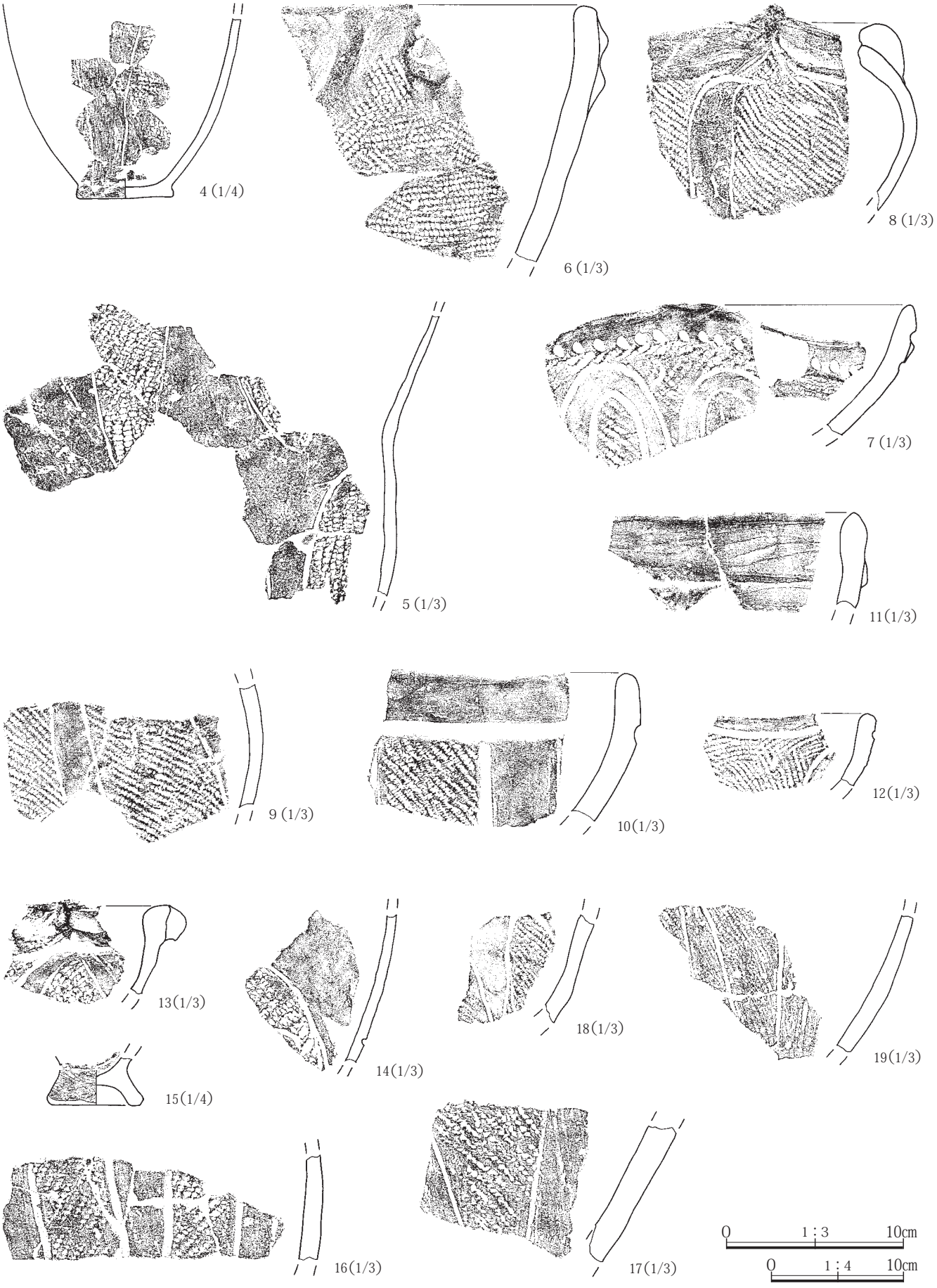
また、１区２面遺構外出土の非掲載の石器は計70点で、黒色頁岩剥片17点、黒曜石剥片41点、黒曜石の二次加工のある剥片１点、黒色安山岩剥片４点、粗粒輝石安山岩剥片１点、チャート剥片３点、粗粒輝石安山岩製磨石片１点、黒色安山岩製楔形石器片２点である。

２区２面（第34～37図、PL.32・41～43）

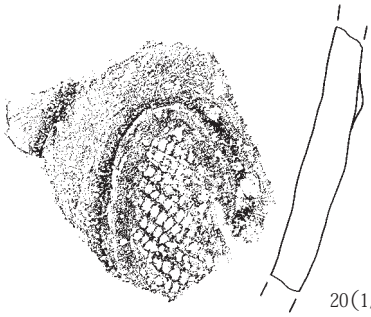
先述したように、２区から検出された縄文時代の遺構としては１号河道が検出されたのみであった。

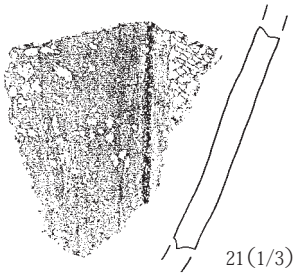
２区２面遺構外出土の遺物については74点の土器片（２区２面遺構外１～74）と石器片１点（２区２面遺構外

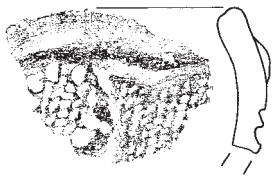
第31図　１区２面遺構外出土縄文時代遺物（１）



第32図　１区２面遺構外出土縄文時代遺物（２）

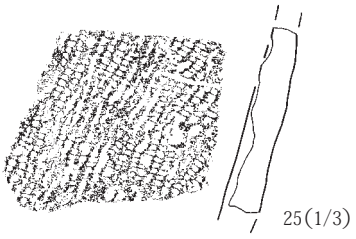

20(1/3)


21(1/3)


22(1/3)

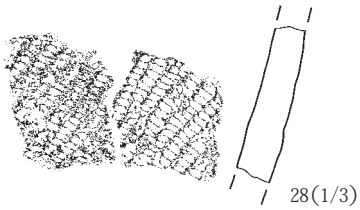
23(1/3)

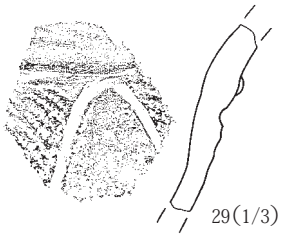
24(1/3)

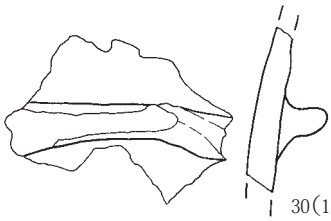

25(1/3)

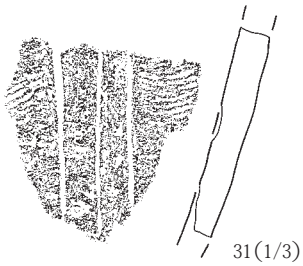
26(1/3)

27(1/3)


28(1/3)

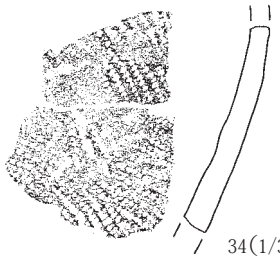

29(1/3)


30(1/3)

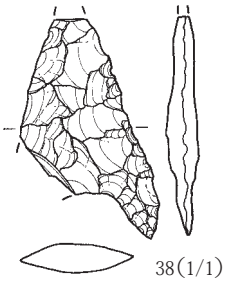

31(1/3)

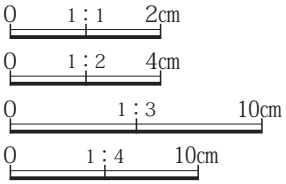
32(1/3)

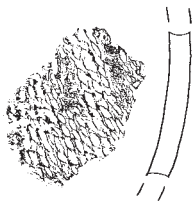
33(1/3)


34(1/3)

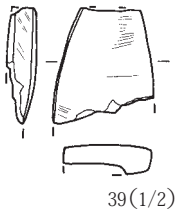
35(1/3)


38(1/1)




36(1/3)

37(1/4)


39(1/2)

第33図　１区２面遺構外出土縄文時代遺物（３）

75)を図示、掲載した。

土器は縄文土器が56点(２区２面遺構外１～56)、弥生土器が18点(２区２面遺構外57～74)である。

(１)縄文土器　縄文土器片はいずれも深鉢片である。早期条痕文系のものが９点(２区２面遺構外44・45・49～55)、早期鵜ヶ島台式のものが２点(２区２面遺構外46・48)、型式不明の早期後半のものが　点(２区２面遺構外47)、前期中葉黒浜式のものが１点(２区２面遺構外８)、中期初頭五領ヶ台２式のものが１点(２区２面遺構外35)、型式不明の中期前半のものが２点(２区２面遺構外37・38)、型式不明の中期後半のものが７点(２区２面遺構外17・18・20・23・32・33・36)、中期後半加曽利E2式期のものが１点(２区２面遺構外25)、中期後半加曽利E3式期のものが13点(２区２面遺構外３～７・10・11・16・19・29～31・34)、中期末葉の加曽利E4式期のものが18点(２区２面遺構外１・９・12～15・21・22・24・29～28・39～43)、他に型式不明で中期とのみわかる土器片が１点(２区２面遺構外２)出土している。

中期後半～末葉の土器片が計40点と圧倒的多数を占めるが、少量ながら早期や前期のものが含まれている点は注目できる。本遺跡において検出された早期の遺構としは、１区２面から検出された１号屋外炉があるが、調査範囲からは縄文時代前期の遺構は全く検出されていない。僅か１点とは言え、縄文時代前期の土器片が出土していることは、周辺部に縄文時代前期の遺構が存在していたことが示唆され、注目される。また、器種はほとんどのものが深鉢である。

１・９・12～15・21・22・24・26・27・29～28・34・39～43は縄文時代中期末葉加曽利E4式深鉢片である。1・22・24・26・27・56は胴部片。１は沈線による懸垂文、無節Ｌを付す。22は沈線が縦位に施されている。24は縦位条線が施される。26は２条の隆線による懸垂文構成。縦位ＬＲを充填する。27はＲＬが縦位に施される。56は沈線による弧状意匠。ＬＲを縦位に充填施文。９・12～15・39～43は口縁部片。９は波状口縁。２条の沈線による円弧状意匠、ＬＲを付す。12は波状口縁、横位隆線と小突起。２条沈線による逆Ｕ字状意匠、ＲＬを充填施文。13は突起を持つ波状口縁で連続刺突文。２条沈線による分岐懸垂文か。ＬＲを充填する。14は縄緩やかな波状口縁で棒状工具による連続刺突文。下位にＬＲを斜位施文。15は緩やかな波状口縁、連続刺突文。下位に横位・縦位の隆線で区画。横位隆線より縦位隆線が派生する。39は波状口縁、口縁部・横位沈線。胴部・逆Ｕ字状意匠を配し、ＬＲ充填施文する。40は２条沈線による弧状意匠、ＬＲを縦位に充填施文。41・42は横位沈線、ＲＬを横位施文。43は沈線による弧状意匠と分岐懸垂文。21は底部片。底面には丁寧な磨きが施されている。

３～７・10・11・16・19・28～31・34は縄文時代中期後半加曽利E3式深鉢片である。３～７・10・11は口縁部片。３は口縁部に横位に沈線。胴部にＲＬを縦位に施文。４は口縁部に隆帯による区画文構成か。区画内摩滅著しく施文原体不明。５の口縁部は無文である。６は口縁部肥厚。幅広横位沈線。７は口縁部に横位隆線。胴部に沈線による懸垂文構成。10は口縁部に横位沈線。地文ＲＬを縦位に施文。11は口縁部に隆帯による楕円区画。16・28～31は胴部片である。16は橋状把手が施され、隆線による区画文構成。28は断面三角形の隆帯を縦位に施す。ＲＬを縦位に施文。29は２沈線による逆Ｕ字状意匠。無節Ｌを縦位充填施文。30・31は線による懸垂文、ＬＲを縦位に充填施文。19は縄脚部片。垂下沈線３条が施される。34は縄隆線による区画文構成か、ＲＬを充填施文。

２は縄文時代中期の型式不明の深鉢胴部片。半裁竹管文を横位に施文。

８は縄文時代前期中葉黒浜式深鉢口縁部片。無節Ｌを縦位・斜位に施文。口縁部条は潰れ。

17・18・20は縄文時代中期～中期後半の型式不明の深鉢底部片。

23・32・33・36～38は縄文時代中期後半頃の型式不明の深鉢胴部片。23はＲＬを縦位・斜位に施文する。32・33・36はＲＬを縦位施文。32・33は同一個体。37は横位沈線による楕円区画、区画内に横位沈線。ＬＲを地文とする。38は沈線が施される。

25は縄文時代中期後半加曽利E2式深鉢胴部片。垂下沈線２条による懸垂文構成か。ＲＬを斜位に施文する。

35は縄文時代中期初頭五領ヶ台2式深鉢胴部片。横位隆帯を施し三角印刻文、ＬＲを施文。下位に縦位沈線、竹管文、ＬＲを施文。

44・45・49～55は縄文時代早期条痕文系深鉢片。44・45は口縁部片。44は無文で、撫でによる整形。45は表裏条痕。49～55は胴部片。49は内外面、縦位・斜位の条痕

文。50は斜位、縦位の条痕文。内面、横位の条痕文。51は横位の条痕文。52は斜位、縦位の条痕文。内面、横位の条痕文。53は表裏に斜位の条痕。54は縦位の沈線文が施される。55は斜位・横位・縦位の沈線。

46・48は縄文時代早期鵜ヶ島台式深鉢口縁部片。46は円形刺突、斜位沈線、縦位の平行沈線。内面、横位条痕。48は縄文時代早期鵜ヶ島台式深鉢口胴部片。47と同一個体である可能性がある。なお、47は縄文時代早期後半頃の型式不明の深鉢口縁部片で、口唇部・棒状工具による刻目あり。口縁部に横位刺突と沈線あり。その下位に斜位沈線と刺突文が施される。

（２）弥生土器　弥生時代の土器は、弥生時代前期のものが９点（２区２面遺構外59～66）、前期相当のものが６点（２区２面遺構外67～71・73）、前～中期のものが３点（２区２面遺構外57・58・74）、年代不明のものが１点（２区２面71）であった。概ね、前期のものと言ってよい。

器種別にみると、深鉢12点、甕４点、壺２点となる。

群馬県内では出土事例が極めてまれな弥生時代前期の土器が纏まって出土したことは特筆に値する。とくに、遺構には伴わないものの、完形壺（２区２面遺構外59）や、深鉢胴部下半から底部にかけての大部分の破片（２区２面遺構外65）の出土は注目すべき事例と言えよう。

59の弥生時代前期完形壺の出土位置はX=45115、Y=-86262で、出土位置の標高はH=325.331mである。口縁・胴部にＬＲ施文がなされ、口縁に対向する２箇所２つの穿孔がある。口縁下に１条の沈線を施されている。底部には木葉痕が付されている。内部の土壌を水洗したが種子や遺物などは全く検出されなかった。

64の深鉢下半部片の出土位置はX=45126、Y=-86262、標高はH=326.227ｍである。深鉢の胴部下半から底部にかけての大部分に相当する。縦位の条痕文を施され、底部には網代痕が明瞭で、内面にはスス状付着物がみとめられたため、委託して年代測定分析を実施した。その結果については後述する。

なお、本遺跡出土の弥生土器としては、縄文時代中期末葉加曽利E4式期と考えられる１区２面２号竪穴建物埋土中から弥生時代前期相当の深鉢胴部破片が１点（１区２面２号竪穴建物13）、１区２面３号竪穴建物埋土中から弥生時代前期相当の深鉢胴部片が4点（１区２面３号竪穴建物10～13）、１区２面５号竪穴建物埋土中から弥生時代前期相当の深鉢胴部片１点（１区２面５号竪穴建物６）が出土しており、さらに３区１面表土からの弥生時代前～中期と考えられる土器片を中心に、弥生時代前期の土器片20点（３区１面表土１～20）が出土していることは、併せて注目できる。

57・58は弥生時代前～中期深鉢口縁部片で同一個体。58は横位平行沈線、地文は細密条痕。

60～66は弥生時代前期深鉢片。64については前述した。60・65・66は底部片。共に底部には木葉痕あり。60は胴部には縦位・斜位の条痕文。61～63・70・71は胴部片。61・63は縦位の条痕文。１区２面３号竪穴建物出土13と同一個体。62は縦位の条痕文。70は横位・斜位の条痕文。71は横位の条痕文。

67は弥生時代前期相当の壺口縁部片。口縁部は平坦である。

68・69・73・74は弥生時代前期相当の甕片。68は口縁部片。外反する波状口縁で、口縁部は無文。胴部はＲＬを横位施文。69・73・74は胴部片。69はＲＬを横位施文。73は斜格子状に条痕が施される。74は３条の平行横位沈線。下位に縄文、摩滅著しく施文原体不明。

72は弥生時代の時期不明の深鉢胴部片。無文である。

（３）石器　図示、掲載した石器１点は縄文時代中期のものと考えられる。完形の黒曜石製凸基有茎鏃である（２区２面遺構外75）。表裏面の全体に面的な二次加工が認められる。表裏面の中央やや下方に素材剥片段階の剥離面が認められる。

（４）非掲載出土遺物　２区２面遺構外出土の非掲載の土器片は計531点で、うち、縄文時代の土器片が322点、弥生時代の土器片が39点、時期不明のものが170点である。縄文時代の土器片は、縄文時代早期条痕文・沈線文系土器片８点、縄文時代早期表裏条痕文・沈線文系土器片13点、縄文時代早期鵜ヶ島台式土器片２点、型式不明の縄文時代中期後半土器片283点、縄文時代中期末葉加曽利E4式土器片13点である。

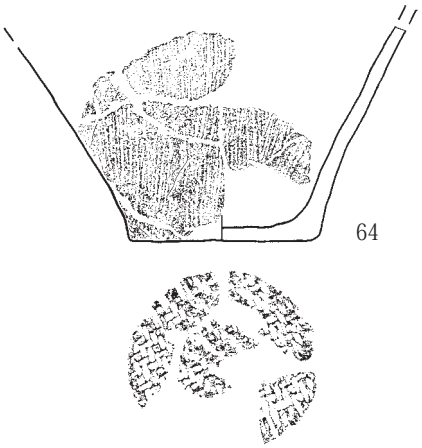
弥生時代の土器片は、39点全点が弥生時代前期相当の土器片であった。

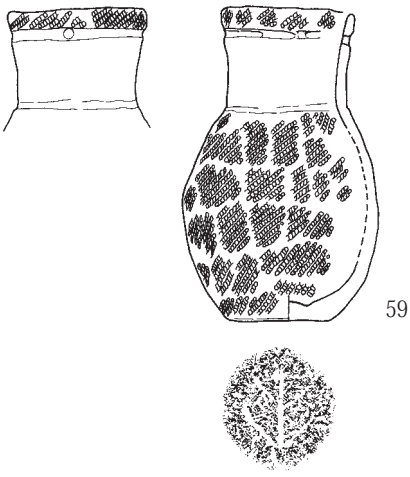
非掲載の石器は66点で、全点が縄文時代のものとみられる。黒色頁岩剥片９点、黒曜石剥片35点、黒色安山岩剥片２点、細粒輝石安山岩剥片２点、珪質頁岩剥片４点、赤碧玉剥片１点、褐色碧玉剥片１点、チャート剥片２点、

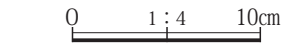
黒曜石製石鏃片２点、黒曜石製石鏃未製品片１点、黒曜石の二次加工のある剥片２点、細粒輝石安山岩の二次加工のある剥片１点、粗粒輝石安山岩礫片４点である。

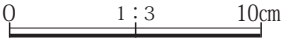
３区１面表土（第38図、PL.44）

３区からは遺構は一切検出されず、調査は実施しなかったが、遺構確認調査の段階で、表土中から２点の弥生土器片が採取された。採取された弥生土器片２点すべてを図示、掲載した。





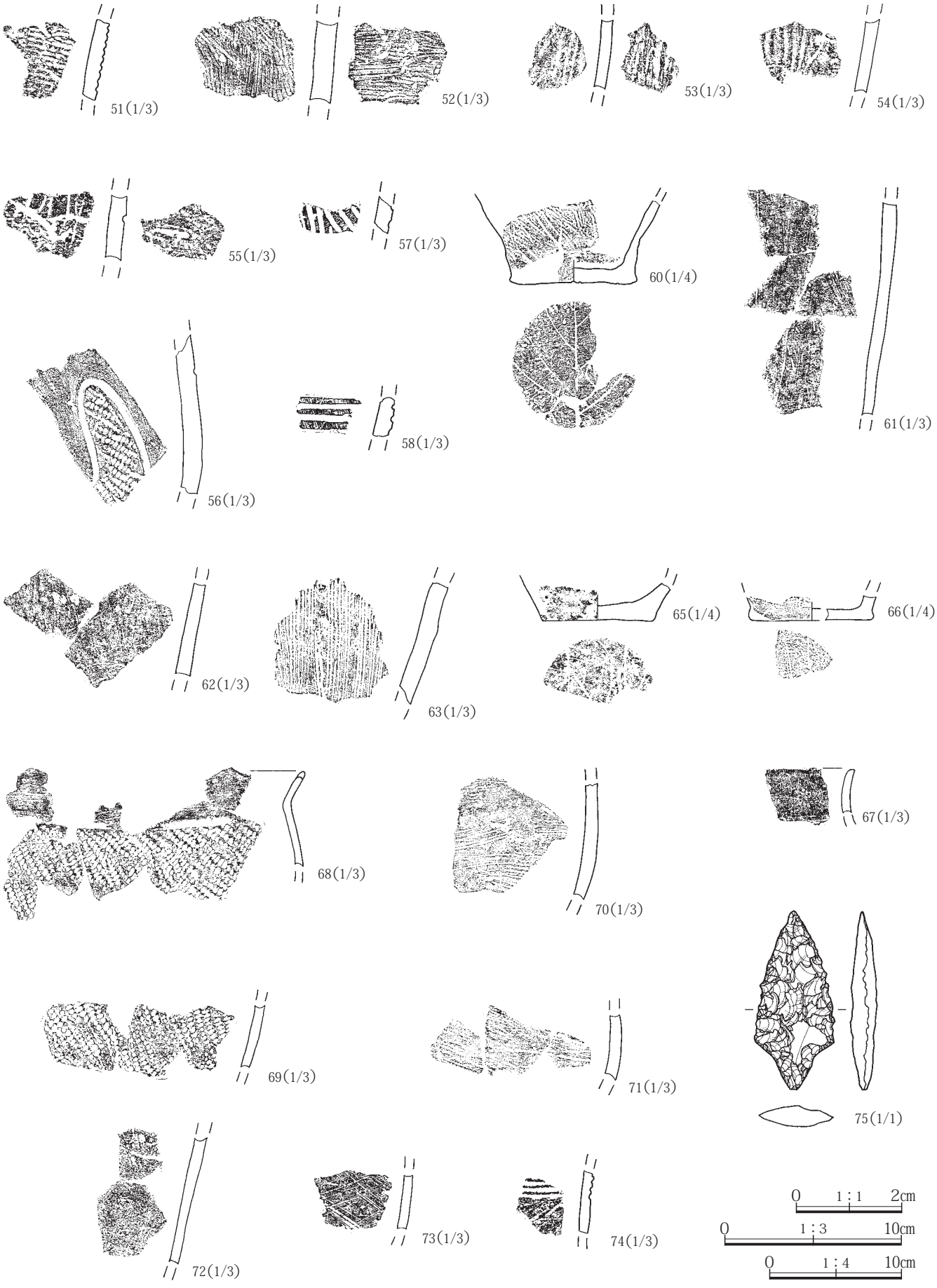




第34図　２区２面遺構外出土弥生時代前期深鉢・小型壺

第35図　２区２面遺構外出土縄文時代土器（１）

第36図　２区２面遺構外出土縄文時代土器（２）



第37図　２区２面遺構外出土縄文時代土器（３）、縄文時代石器、弥生時代土器

(1)弥生土器　３区１面表土から採取された弥生時代の土器片２点のうち１点は(３区１面表土１)が前期～中期の深鉢胴部片であったが、前期か中期か、細かい時期までは絞り込むことができなかった。横位平行沈線が施される。

他に１点(３区１面表土２)、弥生時代中期後半の深鉢の頸～胴部破片が出土した。頸部は７本単位の櫛描簾状文。胴部は斜位の櫛描文。

遺構に伴うものではないが、２区２面遺構外出土の19点の弥生時代前期を中心とする土器と併せて、本県では出土事例が極めて少ない弥生時代前期にかかる土器群の資料として注目できよう。

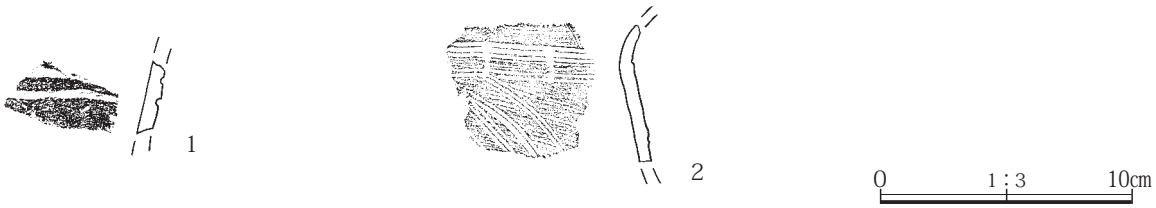
(２)非掲載出土遺物

３区表土出土の非掲載遺物は、土器片３点と、縄文時代のものとみられる黒曜石剥片１点である。

土器片は､型式不明の縄文時代中期後半の土器片２点、弥生時代前期相当土器片１点である。

４区２面(第39図、PL.44)

４区２面から検出された縄文時代の遺構は、調査区の北東寄りの位置から奈東西に近接して検出された10・11号土坑のみであった。このうち11号土坑からは遺物は全く出土しなかったが、10号土坑からは、非掲載ではある



第38図　３区１面表土出土弥生時代土器

が、埋土中より縄文時代早期押型文土器片５点、早期表裏条痕文・沈線文系土器片16点、早期鵜ヶ島台式土器片１点、前期土器片14点、前期黒浜式土器片２点、中期後半土器片１点、時期不明縄文土器片11点が出土した。

本遺跡から出土した縄文土器は、中期のものが圧倒的多数であるにもかかわらず、早期や前期の土器片が少数ではあるが出土している点は注目できよう。

４区２面遺構外出土の遺物で、図示、掲載したものは18点(４区２面遺構外１～18)で、いずれも土器である。17点が縄文時代の土器片、１点が弥生時代の土器片である。

(１)縄文土器　図示、掲載した４区２面遺構外出土の縄文時代土器片17点のうち14点が縄文時代早期の土器片、３点が前期中葉の土器片である。縄文時代早期の土器片が纏まって出土している点は注目される。

先述した様に、４区２面10号土坑からは、非掲載であるが、埋土中から縄文時代のものと考えられる黒色頁岩剥片３点が出土しており、時期が判明する土器片39点のうち22点が縄文時代早期の土器片、16点が縄文時代前期の土器片と、縄文時代早期～前期の土器片が纏まって出土している。

４区周辺には、10号土坑以外にも縄文時代早期～前期の遺構が存在していた可能性が想定できよう。

１～４は縄文時代早期押型文系土器深鉢片で、１が口縁部片、２～４が胴部片である。１は口縁部がほぼ直立し、楕円押型文が施され､、焼成は良好で硬質。２～４はいずれも楕円押型文が施され､内面は丁寧な磨き。３・４は同一個体であると考えられる。

５～13は縄文時代早期条痕文系土器の深鉢胴部片。５は表裏に縦位に条痕。６・７は横位に条痕文が施される。８・９は斜位の条痕文が施文され、口唇部に刻目が施される。10・13は内外面に横位の条痕文。胎土に繊維、石英、雲母等を含む。同一個体。11・12は横位に条痕文が施される。

14は縄文時代早期鵜ヶ島台式深鉢胴部片。横位隆線が２段施される。隆線に刻目。上位は平行する沈線が２条施され斜位沈線が充填される。下位は縦位･斜位に沈線、内面は横位条痕。

15～17は縄文時代前期中葉黒浜式深鉢片。15は胴部～底部片で、羽状縄文。ＬＲとＲＬを横位に施文。16は口縁部片で、ＲＬを横位に施文。17は胴部片で、羽状縄文、上位にＲＬを横位に施文。下位にＬＲを横位に施文。

（２）弥生土器　４区２面遺構外出土の弥生時代土器片は18の弥生時代前期相当の深鉢胴部片１点のみである。内外面に斜位条痕が施されている。

（３）遺構外出土遺物　４区２面出土の土器片で非掲載のものは、時期不明の土器片３点である。

石器は35点である。いずれも縄文時代のものと考えられる。黒色頁岩剥片５点、黒曜石剥片19点、黒色安山岩剥片２点、細粒輝石安山岩剥片１点、ホルンフェルス剥片１点。

第39図　４区２面遺構外出土縄文・弥生時代土器

第４章　旧石器確認調査(第40図・PL.33)

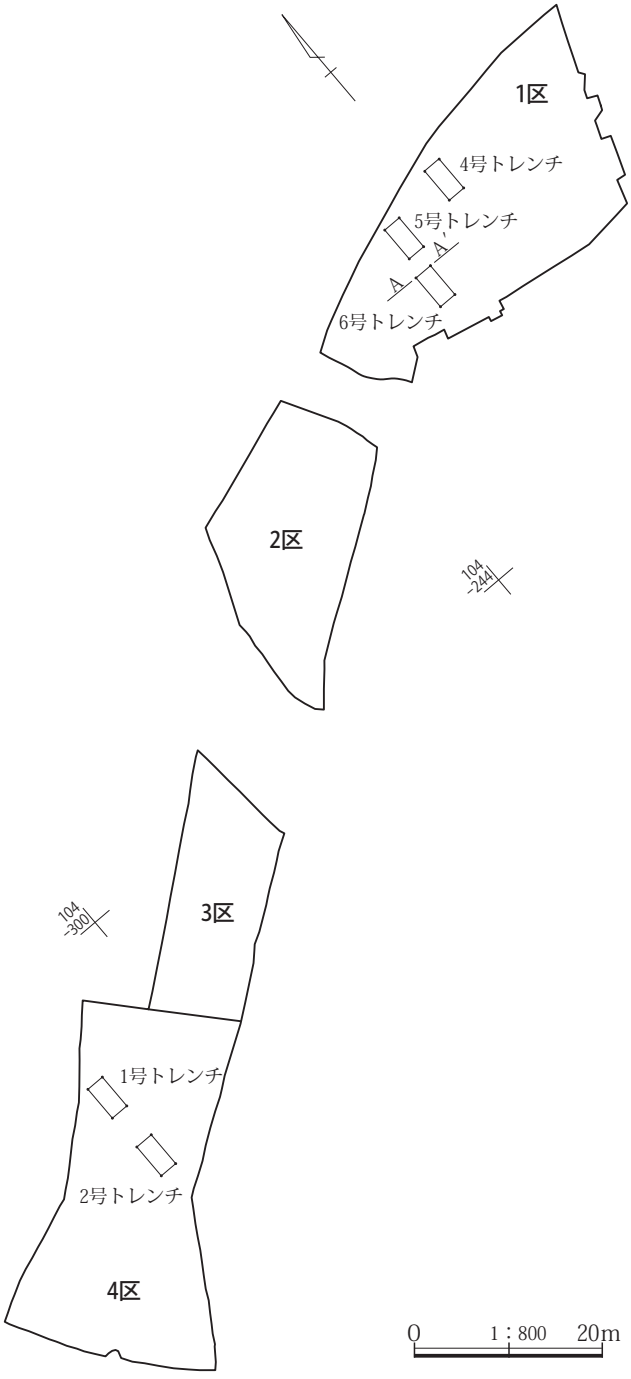
本遺跡では調査区の一部でローム層の堆積が認められたので、ローム層のすべての遺構の調査を終了した後、旧石器時代の遺物の包蔵の有無を確認するために、４調査区中で最も標高が高くローム層の堆積状態が安定して良好である１区で３箇所、また、最も標高が低い４区で２箇所、計５箇所のトレンチを設定し、確認調査を行った。トレンチは、各辺いずれも方位に即し、東西２m・南北４mの南北に長い長方形状に設定した。

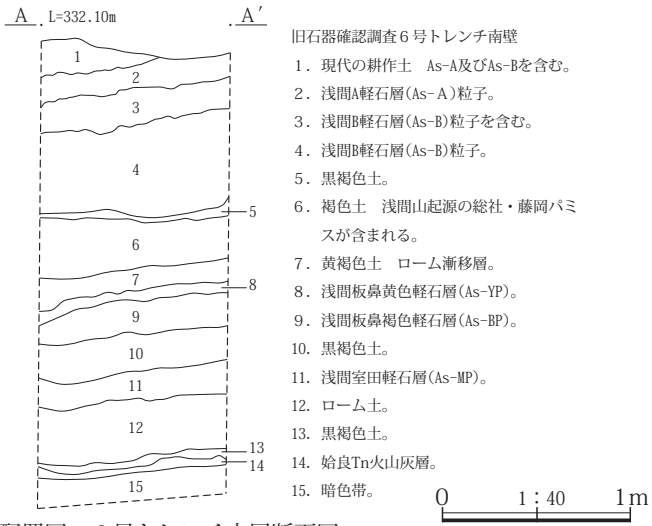
４区に設定した１・２号トレンチは、調査区の中央からやや東寄りの位置に、北側に１号、南側に２号が同一Y軸に縦列に設定した１号トレンチ南辺と２号トレンチ北辺との間隔は4mとした。１号トレンチ北東隅の座標はX=45091・Y=-86132、２号トレンチ北東隅の座標はX=45083・Y=-96312である。４区に設定した１・２号トレンチでは、確認面から約40cm程度掘り下げたところから礫層が検出され、ロームの堆積は確認することが出来なかったので、早々に調査を終了した。

また、１区では、調査区の中央から西寄りの位置に雁行状に４～６号の３箇所のトレンチを配置し、設定した。４号トレンチ北東隅の座標はX=45142・Y=-86222、５号トレンチ北東隅の座標はX=45140・Y=-86229.250、６号トレンチ北東隅の座標はX=45134・Y=-86228である。

旧石器確認調査トレンチ中で最も北東寄りの４号トレンチでは確認面から1.5mの深さまで掘削し、確認面から1.35m前後の深さでローム層を確認した。５号トレンチでは確認面から1.7mの深さまで掘削し、確認面から1.58～1.7m前後の深さでローム面を確認した。、１区では最も南西寄りの位置に設定した６号トレンチでは、確認面から2.5mの深さまで掘削し、確認面から2.25～2.3mの深さで暗色帯を確認した。

いずれも旧石器の出土は全く見られなかった。





旧石器確認調査６号トレンチ南壁
1．現代の耕作土　As-A及びAs-Bを含む。
2．浅間A軽石層(As-A)粒子。
3．浅間B軽石層(As-B)粒子を含む。
4．浅間B軽石層(As-B)粒子。
5．黒褐色土。
6．褐色土　浅間山起源の総社・藤岡パミスが含まれる。
7．黄褐色土　ローム漸移層。
8．浅間板鼻黄色軽石層(As-YP)。
9．浅間板鼻褐色軽石層(As-BP)。
10．黒褐色土。
11．浅間室田軽石層(As-MP)。
12．ローム土。
13．黒褐色土。
14．姶良Tn火山灰層。
15．暗色帯。

第40図　旧石器確認調査トレンチ配置図、６号トレンチ土層断面図

第５章　2区2面遺構外出土弥生時代前期深鉢下半部片放射性炭素年代測定結果

先述したように２区２面64(第34図64)の深鉢の胴部下半から底部にかけての大部分に相当する弥生時代前期土器片は、縦位の条痕文を施され、底部には網代痕が明瞭で、内面には煤状付着物が認められたため、 放射性炭素年代測定を行って自然科学の手法によって土器の年代を調べ、考古学的な方法論によって導き出された土器の年代観とクロスチェックすることによって、出土土器の年代観をより確実にすることを目的に、当該資料の放射性炭素年代測定を　令和元年６～８月にパリノ・サーヴェイ株式会社に放射性炭素年代測定を委託した。

当事業団における数多くの調査事例において、弥生時代前期の土器の出土は初めての事例であり、自然科学的手法によって年代データを得ることは、当該土器の資料的価値をより確実なものとし、学術資料としての重要性を担保するものと考えられるからである。

以下に、令和元年８月に同社より提出された年代測定結果報告書の内容を転載する。

（１）分析方法

土器付着炭化物(No.１)は、状態が良い部分から50mg程度炭化物を削り取り、分析用試料とする。試料は、塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に１mol/L であるが、化学的に脆弱なため、アルカリの濃度を薄めて処理し(AaA と記載)、試料の損耗を防ぐ。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar 社のvario ISOTOPE cube とIonplus 社のAge3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC 社製のハンドプレス機を用いて内径１㎜の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS 専用装置(NEC 社製)を用いて、^{14}C の計数、^{13}C 濃度(^{13}C/^{12}C)、^{14}C 濃度(^{14}C/^{12}C)を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-Ⅱ)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。δ^{13}C は試料炭素の^{13}C 濃度(^{13}C/^{12}C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。

放射性炭素の半減期はLIBBY の半減期5568 年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。

また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、Oxcal4.3(Bronk,2009)、較正曲線はIntcal13 (Reimer et al.,2013)である。

（２）結果・考察

結果を第３表、第41図に示す。土器付着炭化物は試料が脆弱なため、炭素の損耗を防ぐために、アルカリの濃度を薄くしている。同位体補正を行った測定値は、2,345±20BPである。

暦年較正は、大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期(^{14}C の半減期5,730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは、Intcal13 (Reimer etal.,2013)を用いる。2σの値は、calBC477～381 である。

本分析調査で対象とした弥生土器は、発掘調査所見では前期に帰属するとされる。本分析調査で得られた年代値はこれと矛盾しない。

引用文献
Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.
Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL.,Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., HoggAG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., SouthonJR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869–1887.
Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355–363.

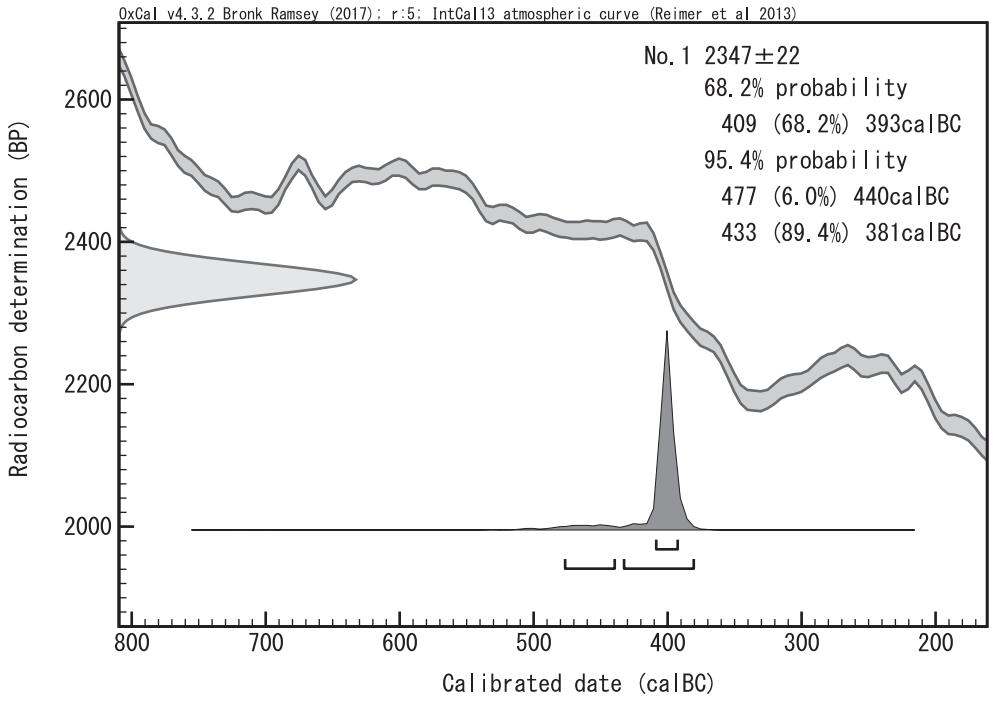
以上のように、自然科学的手法によって考古学的方法論によって、考古学的な手法によって導き出された当該土器の年代観と矛盾しない結果が得られたことで、当該土器の年代を具体的に絞り込むことが可能となり、考古学的方法論によって導き出された年代観を補強する結果となった。このことによって、当該土器の学術資料としての価値をより高め、重要性を担保する結果ととなった。

また、測定対象とした土器そのもののみにとどまらず、本遺跡出土の他の弥生時代前期土器片の年代についても、ある程度、具体的に絞り込むことが可能となった点においても意義が高い調査結果であったと言うことが出来よう。

第３表　放射性炭素年代測定結果

No.	性状	方法	補正年代（暦年較正用）BP	$\delta^{13}C$（‰）	暦年較正年代													Code No.	
					年代値												確率%		
1	土器付着炭化物	AaA（0.1M）	2345±20（2347±22）	-25.10 ±0.51	σ	cal	BC	409	-	cal	BC	393	2358	-	2342	calBP	68.2	YU-9909	pal-12179
					2σ	cal	BC	477	-	cal	BC	440	2426	-	2389	calBP	6.0		
						cal	BC	433	-	cal	BC	381	2382	-	2330	calBP	89.4		

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4）AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
5）暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用
6）暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
7）較正データーセットは、Intcal13を使用。
8）較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、１桁目を丸めていない。
9）統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である



第41図　暦年代較正結果

第６章　調査成果の整理とまとめ

第１節　時期不明の遺構

はじめに

本遺跡の１面から検出された時期不明の遺構は、先述した通り、柵１条、土坑29基、ピット22基である。

天明３(1783)年に起こった浅間山の噴火によって降下したAs-Aの一次堆積は確認できず、表土の下側にAs-Aを多く含む層が存在するのみであり、遺構に伴う同時期の出土遺物が皆無であるため、それらの年代を詳細に絞り込むことは難しいが、表土層下のAs-Aの二次堆積を多く含む層の状況から見れば、それらの多くはAs-A降下前後の時期のものであろうと推測出来る。

１．柵

１区の中央から北西寄りの位置から１条が検出された。北北東-南南西方向の３間の小規模な柵であり、周辺に建物跡などが全く存在しないため、建物などの障壁とは考えにくい。

俗に「芋穴」と称されることが多い長大な土坑が近接して検出されていることからも、この地には元来、畑などの耕地が存在しており、それらを画する柵であった可能性も考えられるが、そうであったにせよ、柵が１条しか検出されなかった点には疑問が残らないではない。

２．土坑

本遺跡で検出された土坑の殆どは、天明３年の浅間山噴火に伴って降下したAs-Aの二次堆積物を多く含む層の下から検出された。中には、埋土中から少量の縄文時代の土器片が出土したような事例も存在しているが、それぞれの土坑の形状や埋土、検出状況等を精査した上で、29基の土坑を近世以降のものとして認定した。なお、先述したように、土坑からの遺物の出土は皆無であったため、遺構の年代を明確にすることはできなかった。

時期不明の土坑は、１区から25基、２区から４基が検出された。である。これらのうち１区からは、30～36号土坑のような、俗に「芋穴」と称されることが多い長大な溝状の土坑が７基検出されている。それらの中でも特に32～36号土坑は、概ね北東-南西方向に長大であるが、規則正しく計画的な配置がなされていたとは考えにくく、ランダムである。

また、検出された土坑はいずれも等高線に沿って規則正しく分布しているわけでもないので、これらの土坑の中には、動物の捕獲を目的とした所謂陥し穴が存在していたとは考えにくい。

これら時期不明の土坑の分布状況には、あまり特徴を見出すことが出来ず、また、それらの用途・機能も、俗に「芋穴」と称されることが多い長大な溝状の土坑以外、全く不明である。

３.ピット

ピットは、土坑よりも小規模な穴状の遺構で、柱穴と考えられるものは、１区から検出された５号ピット以外には１基も存在しなかった。しかも柱穴と考えられるピットは１基のみであるため、建物や柵などの柱穴とは考えにくく、用途や機能については全く不明であると言わざるを得ない。その他の21基のピットの用途や機能についても、同様に全く不明である。

ピットは、１区から15基、２区から７基の計22基が検出された。土坑同様、遺物の出土は皆無であるため、正確な年代については全く不明である。なお、縄文時代のピットは１基も検出されなかった。

ピットは、１区では、中央より西寄りの部分と南寄りの部分から多くが検出され、北東隅付近からは全く検出されなかった。２区では調査区の中央付近から多く検出された。１区、２区ともピットの検出状況には、特段の規則性は存在していない。

まとめ

本遺跡において検出された時期不明の遺構の用途や機能が明瞭なものは、１条のみ検出されたごく短い柵のみで、その柵も何を遮断ないし区画するためのものであったのか全く不明である。

調査対象地は傾斜地であり、水田を作るのであれば当

然のことながら棚田状に造らざるを得ない地形であるが、壇状に形成された平坦面は全く検出されなかったため、この地において水田耕作が行われていたとは考えにくい。

先述した様に、俗に「芋穴」と称されることが多い、細長く長大な溝状の土坑が７基検出されていることから見れば、畑作が行われていた可能性が高いが、畝や柵などの畑の遺構は全く検出されていないため、畑作についても確証はない。

土坑とピットはそれぞれ約20～30基程度検出されたものの、それらに伴って出土した近世の遺物は皆無であり、ごく少量の近世遺物は、いずれも遺構外からの出土であった。本遺跡の地における近世の土地利用の実態については、不明であると言わざるを得ない。

第２節　弥生土器

はじめに

先述したように、本遺跡からは弥生時代の遺構は全く検出されなかったが、縄文時代の竪穴建物から計９点（うち非掲載のもの３点）、２区２面遺構外から計57点（うち非掲載のもの39点）、３区１面表土から３点（うち非掲載のもの１点）、４区２面遺構外から１点の計70点の弥生時代前期～前期相当～中期の土器片が出土した。

群馬県内では出土事例が極めてまれな弥生時代前期の土器が纏まって出土したことは特筆に値する。

１．１区２面出土弥生土器

１区２面から出土した弥生土器片は、いずれも縄文時代中期の竪穴建物埋土中から出土したもので、遺構外から出土した事例は皆無であった。

縄文時代中期末葉加曽利E4式期と考えられる１区２面２号竪穴建物埋土中から弥生時代前期相当の深鉢胴部破片が１点（第22図13）、１区２面３号竪穴建物埋土中から弥生時代前期相当の深鉢胴部片が７点（うち４点を掲載、第24図10～13）、１区２面５号竪穴建物埋土中から弥生時代前期相当の深鉢胴部片１点（第26図６）が出土した。

いずれも竪穴建物の年代観とはかけ離れた時期のものであり、竪穴建物廃絶後の流れ込み、窪地への投棄などの結果によって、偶々それらの竪穴建物の埋土中から出土するに至ったものと考えられる。

２．２区２面出土弥生土器

先述したように、２区２面から検出された遺構は縄文時代のものと考えられる１号河道が検出されたのみであった。

２区２面から出土した弥生土器57点はすべて遺構外からの出土である。完形小型壺１点と土器片56点が出土した。このうち、前章では18点（２区２面遺構外57～74）を掲載した。概ね、前期のものと言ってよい。器種別にみると、深鉢12点、甕４点、壺２点となる。なお、非掲載の弥生土器片39点全点が弥生時代前期相当のものであった。

とくに、遺構には伴わないものの、完形壺（２区２面遺構外59）や、深鉢胴部下半から底部にかけての大部分の破片（２区２面遺構外64）の出土は注目すべき事例と言えよう。

第34図に掲載した２区２面遺構外出土59の弥生時代前期完形壺と、同時期の小型壺としては、安中市注連引原遺跡出土のものがあり、また、通常の大きさの壺としては前橋市大胡金丸遺跡などの類例がある。また、直立気味の口頸部と「棗」形の胴部形状を有するものとしては、縄文の施文はないが、長野県松本市石行遺跡に小型の類品がある。

時期は器形と文様の特徴から、前期～中期初頭に含まれるが、口縁縄文帯が狭い幅で１条沈線によって画され、肥厚しないところから、前期に位置づけたい。

２区２面遺構外64深鉢下半部片（第34図64）　第34図に掲載した２区２面64の深鉢下半部片は、深鉢の胴部下半から底部にかけての大部分に相当するものと考えられる。底部付近の破片であるため器種は「深鉢」と推定したが、壺である可能性も排しがたい。

縦位の条痕文が施され、底部には網代痕が明瞭である。条痕は条の揃った細密条痕ではなく、２～３条が平行する粗く鋭いのが特徴である。

考古学的に、時期は弥生時代前期～中期初頭の範囲に収まるものと考えらえる。

内面には煤状付着物がみとめられたため、令和元年６～８月にパリノ・サーヴェイ株式会社に放射性炭素年代測定を委託した。その結果、BC.477～381年という測定

結果が報告された。考古学的方法によって得られた年代観と放射性炭素年代測定分析で得られた年代値は矛盾しない。この年代は、関東北西部の前期末～中期初頭に位置づけられてきた弥生土器の暦年代推定に有効なデータとなり得る。

なお、この分析報告については第５章にて詳述した。

３．３区１面表土出土弥生土器

３区からは遺構は一切検出されず、遺構調査は実施されなかったが、遺構確認調査の段階で、表土中から３点の弥生土器片が採取された。前章では、採取された弥生土器片のうち２点を掲載した（３区１面表土１・２）。

遺構に伴うものではないが、２区２面遺構外出土の弥生時代前期を中心とする土器と併せて、本県では出土事例が極めて少ない弥生時代前期にかかる土器の資料群として注目できよう。

４．４区２面遺構外出土弥生土器

４区２面遺構外出土の弥生時代土器片は、４区２面遺構外18の弥生時代前期相当の深鉢胴部片１点（第39図18）のみである。

第３節　縄文時代

２面から検出された遺構は、いずれも縄文時代の遺構で、縄文時代中期後半及び中期末葉頃の竪穴建物３棟と縄文時代早期の屋外炉１基、他に土坑３基、河道１条であった。

竪穴建物や屋外炉はいずれも最も標高が高い１区から検出された。また、１区からは他に19号土坑が検出されている。

２区からは河道が、４区からは10・11号土坑の２基の土坑がそれぞれ検出された。

３区からは遺構は全く検出されず、表土から型式不明の縄文時代中期後半の土器片２点と縄文時代のものとみられる黒曜石剥片１点が出土しいたが、いずれも非掲載とした。

１．竪穴建物

先述した様に竪穴建物は２・３・５号の３棟、いずれも１区の中央部分から東西に並列して検出された。調査対象範囲の中で最も安定した台地上に当たる１区の中央付近に竪穴建物が営まれたのは当然とも言えるが、地形は、概ね、北東側から南西側に向かって緩やかに傾斜しているため、特に建物の南西側や南側の検出状況は良くなかった。いずれも縄文時代中期の敷石竪穴建物である。

２号竪穴建物は縄文時代中期末葉加曽利E4式期の柄鏡形敷石竪穴建物で、建物廃絶時に敷石が抜かれ、炉が徹底的に破壊されているため、敷石はほんの僅かの箇所に、部分的にしか検出されなかった。

３号竪穴建物は縄文時代中期後半加曽利E3式期の敷石竪穴建物廃絶時にほとんどの敷石が抜かれているため、敷石はほんのわずかの箇所に、部分的にしか検出されなかった。

５号竪穴建物は縄文時代中期末葉加曽利E4式期の敷石竪穴建物と考えられるが、柄鏡型ではない。現存している敷石は炉の北東側にだけ敷かれた、大型で扁平・板状の石１枚のみである。

本遺跡周辺では、本遺跡から南東へ約６～８㎞程度離れた久留馬地区において縄文時代中～後期の敷石竪穴建物が検出されているものの、近辺では全く検出事例が無いため、本遺跡における今回の調査事例が、高崎市室田地区における縄文時代敷石竪穴建物の調査事例であり、貴重な新知見となった。

２．屋外炉

１区の東寄りから検出された５号竪穴建物と、１区の中央からやや西寄りの位置から検出された２号竪穴建物間から縄文時代早期の屋外炉が１基検出された。

３．河道

２区からは遺構は検出されなかったが、調査区のほぼ中央を北から南へと流れる河道が検出された。検出層位から縄文時代のものと考えられる。

遺物も全く出土しなかったが、調査区内において最も標高が高く、安定した台地上に立地している東側１区から検出された縄文時代中期の３棟の竪穴建物が営まれた背景として、隣接する谷地を流れる小河川の存在は決して小さくはなかったものと考えられる。

４．土坑

本遺跡から検出された縄文時代の土坑は３基である。４区の北東寄りの位置から検出された10・11号土坑と１区の南西寄りの位置から検出された19号土坑である。４区11号土坑と１区19号土坑から遺物の出土は皆無であったが、層位や埋土の状態、規模と形状等の状況から縄文時代のものと認定した。

まとめ

本遺跡から検出された縄文時代の遺構は少なかったが、これまで周辺地域では検出事例がなかった敷石竪穴建物が3棟や縄文時代早期の屋外炉が検出されたことは、当該知己における縄文時代の様相を明らかにする上で、重要な資料を得ることが出来た。

出土した遺物の年代は縄文時代中期後半～末葉のものが多かったが、早～前期のものも出土しており、周辺には、幅広い縄文時代の遺構や遺物包含層の展開が想定出来るようである。

まとめ

中室田岩城遺跡は、高崎市の周知の埋蔵文化財包蔵地H32遺跡の範囲に含まれ、縄文時代及び中世・近世の遺物散布地とされてきた。

今回行われた発掘調査は、道路建設に伴う調査であるため、調査対象地は北東―南西方向に細長い総延長約150m・幅約10～22m・面積3,187㎡の包蔵地内におけるごく限られた範囲内であった。調査成果は、従来、周知の包蔵地として認定されてきた内容と概ね合致するものであったが、遺構には伴わなかったものの、従来は認知されていなかった多量の弥生土器片の出土は、周知の埋蔵文化財包蔵地としての認定案件をより深めることとなった。

群馬県内では出土事例が非常に少ない弥生時代前期の土器片がこれほどまとまって出土した事例はなく、地域の歴史を紐解く上でも、本県における考古学上の知見としても、新たに重要な要素が得られたことになる。とくに、その内の１点の内面に土器使用時に付着したものと見られる煤状付着物が明瞭に存在していたため、放射性炭素年代測定を実施したところ、考古学的方法論によって導き出された年代観と全く矛盾ない分析結果が得られ、試料となった土器そのものの年代を、より具体的に絞り込むことが可能になったことの意義は高い。示された年代は、試料となった当該土器にとどまらず、本遺跡から出土した弥生時代前期及び前期相当の土器の年代観にも一定の指標と、確実性を付与するものであり、本遺跡出土土器の考古学的資料としての価値や評価を担保するものであり、関東北西部における弥生時代前期末～中期初頭に位置づけられてきた土器の暦年代推定の極めて有効なデータとなり得るものである。

今回の調査対象範囲において、弥生時代の遺構は全く検出されなかったが、元来、弥生時代の遺構が存在していたにもかかわらず、後世に削平や攪乱を受けて完全に破壊されてしまったか、あるいは調査区周辺に弥生時代前期の遺構が存在していた可能性が想定出来よう。

遺跡の所在地は、北東側から南西側の岩城川に向かって傾斜する地形であり、最も標高が高い１区北東隅付近の標高は333.8m、調査区内で最も標高が低い４区南西隅付近の標高は322.0mで、調査区内における標高差は

11.8mに及んでいる。このため、居住域の展開や水田耕作には、あまり適さない地形であったと考えられる。

実際、竪穴建物は縄文時代中期の３棟が僅かに検出されたに過ぎず、一般的には竪穴建物の検出事例が極めて多い古墳時代後期や平安時代のものが１棟も検出されなかったことは、調査対象地が、その当時の人々にとって、生活拠点としての居住地には適していなかったことを物語っているように思われる。

また、耕地の遺構も全く検出されなかった。耕地としては、適地とは言い難いものの、水田はともかくとして、畑作は決して不可能な地形と言うほどではなく、畑作がなされていた可能性は全く否定できない。しかしながら、畑の畝や柵などの遺構は全く検出されなかった。また、狩猟用の所謂陥し穴の検出も皆無であった。結局のところ、調査対象地は、人間の生活域・生産域としてあまり利用する価値に乏しい場所であった時期が長かったのかもしれない。

時期不明の遺構、縄文時代の遺構とも、１区の検出遺構数が最も多く、２区・４区では遺構は疎らにしか検出されていない。最も標高が高く、安定した台地上である１区に遺構が集中し、縄文時代の竪穴建物や屋外炉が検出されるのは当然であろう。

傾斜度が高い３区からは、時期不明の遺構も縄文時代の遺構も検出されなかった。また、３区に次いで傾斜度が高く、また、調査対象箇所の中では最も標高が低い４区でも縄文時代の土坑が２基しか検出されなかったのも、地形の状況から見れば当然のことと言えよう。

いずれにしても、本県では、弥生時代前期の土器が、完形品の壺（２区２面遺構外59・第34図59）や下半部の大部分が復元出来た深鉢（２区２面遺構外64・第34図64）などの重要な事例を含みつつ、これほど纏まって出土した事例はなく、本発掘調査の実施によって、周辺地域の歴史を考察する上で、新たに、重要な資料が加えられることになったことの意義は高いものと考えられる。

第４表　遺物観察表

１区５号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(mm、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第９図 PL.35	1	縄文土器 深鉢	1区5号土坑埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/明赤褐	胴部下半・沈線による懸垂文構成。ＬＲを縦位充填施文。	縄文中期後半 加曽利E3式

１区９号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(mm、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第10図 PL.35	1	縄文土器 深鉢	1区9号土坑埋土 口縁～胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/灰褐	口縁部・横位沈線。胴部・縦位に条線を施す。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第10図 PL.35	2	縄文土器 深鉢	1区9号土坑埋土 口縁～胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/灰褐	口縁部・横位隆線を施し、下位に縦位隆線で区画しＬＲを施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式

１区26号土坑出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(mm、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第12図 PL.35	1	縄文土器 深鉢	1区26号土坑埋土 底部破片	口 底	— 78	高 —	— —	粗粒、白・黒色粒/普通/鈍い褐	底部・無文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第12図 PL.35	2	縄文土器 深鉢	1区26号土坑埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/明褐	沈線によるＵ字状区画、区画内にＬＲを斜位施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式

１区１面表土出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(mm、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第30図 PL.38	1	縄文土器 深鉢	1区表土 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒、白色粒/良好/鈍い赤褐	口縁部・橋状把手、横位隆線による区画。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第30図 PL.38	2	縄文土器 深鉢	1区1面表土 底部破片	口 底	 90	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/明褐	底部・無文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第18図 PL.35	3	瀬戸・美濃 陶器 志野皿	1区表土 完形	口 底	11.5 6.3	高 —	2.3	夾雑物微量//灰	内面から高台内を除く体部外面に長石釉。削り出し高台。体部外面に煤が付着。	17世紀
第18図 PL.35	4	瀬戸・美濃 陶器 皿	1区表土 1/4	口 底	(11.0) (6.6)	高 —	2.1	夾雑物微量//灰白	内面から高台内と高台端部を除く体部外面に灰釉、貫入が入る。削り出し高台。体部外面に炭化物が付着。	17世紀
第18図 PL.35	5	肥前陶器 陶胎染付碗	1区表土 1/3	口 底	(10.4) 4.5	高 —	6.8	夾雑物微量//灰白	口縁端部下外面に圏線。体部外面に家屋などを描く。体部下位と高台境に圏線。内面は無文。高台端部を除き内外面に透明釉、貫入が入る。	18世紀
第18図 PL.35	6	肥前磁器 染付碗二次加工品	1区表土 高台部	口 底	 (3.4)	高 —		夾雑物なし//白	体部外面下位と高台境、高台に圏線。高台脇と高台を細かく叩き出して円盤状に加工。	近世
第18図 PL.35	7	肥前磁器 染付碗	1区表土 体部破片	口 底		高 —		夾雑物なし//白	体部外面に二重網目文。	18世紀
第18図 PL.35	8	磁器 染付小碗	1区表土 1/4	口 底	(7.3) (3.4)	高 —	5.6	夾雑物なし//白	口縁端部直下外面と体部下位を圏線で区画し、縦線交叉文と四弁花を描く。体部下位を二重圏線で区画し、連弁文。高台に圏線。高台端部は幅が広い。内面は無文。	18世紀後半～19世紀前半
第18図 PL.35	9	肥前磁器 染付碗	1区表土 口縁部から体部破片	口 底	(8.1)	高 —		夾雑物なし//白	口縁端部直下外面と体部下位を圏線で区画し、矢筈文を描く。口縁端部直下内面に二重圏線。	19世紀前半
第18図 PL.35	10	瀬戸・美濃 陶器 水滴	1区表土 体部から底部	口 底	 (3.7)	高 —		夾雑物微量//灰	首部外面から体部下位に鉄釉。内面および体部外面下位から底部は無釉。底部は回転糸切後に無調整。底部と内面には炭化物が付着。	17世紀中葉 美濃窯連房Ⅱ期
第18図 PL.35	11	瀬戸陶器 練鉢	1区表土 口縁部破片	口 底	 (27.3)	高 —		夾雑物微量//灰白	口縁端部は外側に90度傾き、肥厚する。内外面に灰釉、貫入が入る。	19世紀第2四半期 瀬戸窯第3段階第10小期 練鉢C類

１区２号竪穴建物出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(mm、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第21図 PL.36	1	縄文土器 深鉢	1区2号竪穴建物炉埋土(№11) 口縁部～胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/橙	口縁部・横位沈線、胴部・沈線による懸垂文で構成。胴部・列点を縦位に施文した区画とＬＲを縦位に充填施文した区画で構成。	縄文中期末葉 加曽利E4式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(mm、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第21図 PL.36	2	縄文土器 深鉢	1区2号竪穴建物 炉埋土(No.11) 口縁部～胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/橙	1・3と同一個体。	加曽利E4式
第21図 PL.36	3	縄文土器 深鉢	1区2号竪穴建物 埋土 口縁部～胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/橙	1・2と同一個体。	加曽利E4式
第21図 PL.36	4	縄文土器 深鉢	1区2号竪穴建物 南部床直(No.6) 口縁部～胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/橙	口縁部・横位沈線、胴部・無節Lを施す。	加曽利E4式
第21図 PL.36	5	縄文土器 深鉢	1区2号竪穴建物 南部床直(No.6) 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/橙	口縁部・横位沈線文、胴部・ＬＲを縦位施文。	加曽利E4式
第21図 PL.36	6	縄文土器 深鉢	1区2号竪穴建物 南部床直(No.6) 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/褐灰	口縁部・横位沈線、胴部・ＬＲを縦位施文。	加曽利E4式
第21図 PL.36	7	縄文土器 深鉢	1区2号竪穴建物 南部床直(No.6) 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/褐灰	ＬＲを縦位施文。	加曽利E4式
第22図 PL.36	8	縄文土器 深鉢	1区2号竪穴建物 埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/橙	ＬＲを縦位施文。	加曽利E4式
第22図 PL.36	9	縄文土器 深鉢	1区2号竪穴建物 埋土 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/黒褐	波状口縁部・横位隆線で区画、下位は縦位隆帯で区画しＬＲを縦位に充填施文(一部横位施文)	加曽利E4式
第22図 PL.36	10	縄文土器 深鉢	1区2号竪穴建物 埋土 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/黒褐	波状口縁、口縁～胴部に隆線による区画。口縁部にスス状付着物。	加曽利E3式
第22図 PL.36	11	縄文土器 深鉢	1区2号竪穴建物 埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒、白色粒/良好/灰褐	沈線による懸垂文を施し、ＬＲを縦位施文。	加曽利E3式
第22図 PL.36	12	縄文土器 深鉢	1区2号竪穴建物 埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/橙	ＬＲを縦位、斜位に施文。	加曽利E3式
第22図 PL.37	13	弥生土器 深鉢	1区2号竪穴建物 埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒/良好/鈍い黄橙	縦位の条痕文。3号竪穴建物出土13、５号竪穴建物出土6と同一個体。	弥生前期相当
第22図 PL.37	14	石器 打製石斧	1区2号竪穴建物 土坑1No.16	長 幅	— —	厚 重	— 96.3	細粒輝石安山岩//	側面部の全体に両面加工が認められる。摩滅痕が散在する。表面の先端刃部には摩滅痕より新期に形成された剥離痕が認められる。上側面は折断面であるが一部に摩滅痕が認められこの形態で機能したと考えられる。	縄文時代中期末葉
第22図 PL.37	15	石器 石皿	1区2号竪穴建物 土坑1No.6 完形	長 幅	17.1 19.3	厚 重	4.4 2068.5	粗粒輝石安山岩//	表面の中央付近に滑らかな部分が認められる。表裏面と左側面は自然面であり板状節理の露頭から石材を採取している可能性がある。右側面と上下両側面は打割面で構成される。	縄文時代中期末葉
第22図 PL.37	16	石器 石皿	1区2号竪穴建物 土坑1No.9 1/6	長 幅	(23.4) (11.2)	厚 重	(7.2) 1997.4	緑色片岩//	内面は全体的に滑らかであり中央付近に特に滑かな部分が認められる。裏面の中央付近にも特に滑かな部分が認められる。側面から裏面にかけては滑かな曲面で構成されるが自然面か整形面であるか判断できない。	縄文時代中期末葉

1区3号竪穴建物出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(mm、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第24図 PL.37	1	縄文土器 深鉢	1区3号竪穴建物 埋土 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/良好/鈍い褐	口縁部・横位隆線、胴部・胴部隆線による懸垂文較正、ＬＲを縦位充填施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第24図 PL.37	2	縄文土器 鉢	1区3号竪穴建物 埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/良好/褐	橋状把手を付し、ＲＬを斜位に施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第24図 PL.37	3	縄文土器 鉢	1区3号竪穴建物 埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白・黒色粒/良好/鈍い赤褐	橋状把手を付す。逆Ｕ字状沈線で区画しＲＬを縦位充填施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第24図 PL.37	4	縄文土器 深鉢	1区3号竪穴建物 埋土 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白・黒色粒/良好/橙	外反する口縁部。無文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第24図 PL.37	5	縄文土器 深鉢	1区3号竪穴建物 埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒、白・黒色粒/良好/橙	逆Ｕ字状の沈線区画を施しＬＲを縦位に充填施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第24図 PL.37	6	縄文土器 深鉢	1区3号竪穴埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒、白色粒/良好/明赤褐	２本の沈線による懸垂文で区画にＲＬを縦位施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第24図 PL.37	7	縄文土器 深鉢	1区3号竪穴建物 埋土 胴部～底部破片	口 底	 75	高 —	— —	粗粒、白・黒色粒/普通/橙	胴下半～底部、外面無文。一部に縄文残存するが摩滅著しく詳細不明。	縄文中期末葉 加曽利E4式

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(mm、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第24図 PL.37	8	縄文土器 深鉢	1区3号竪穴建物 埋土 底部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒、黒色粒/普通/橙	胴部・縦位に条線を施す。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第24図 PL.37	9	縄文土器 深鉢	1区3号竪穴建物 埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白・黒色粒/普通/橙	条線を縦位に施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第24図 PL.38	10	弥生土器 深鉢	1区3号竪穴建物 埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒/良好/鈍い黄橙	縦位の条痕文を施す。	弥生前期相当
第24図 PL.38	11	弥生土器 深鉢	1区3号竪穴建物 埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒/良好/鈍い黄橙	縦位の条痕文を施す。10と同一個体。	弥生前期相当
第24図 PL.38	12	弥生土器 深鉢	1区3号竪穴建物 埋土 底部完存	口 底	— 78	高 —	— —	粗粒/涼子/鈍い黄橙	底部無文。	弥生前期相当
第24図 PL.38	13	弥生土器 深鉢	1区3号竪穴建物 埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒/良好/鈍い黄橙	縦位の条痕文。２号竪穴建物出土13、５号竪穴建物出土６と同一個体	弥生前期相当
第24図 PL.38	14	縄文土器 深鉢	1区3号竪穴建物 下部構造(№2) 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/良好/褐灰	逆Ｕ字状の沈線区画、区画内にＲＬを充填施文。内面丁寧な磨き。	縄文中期後半 加曽利E3式
第24図 PL.38	15	石器 凹基無茎鏃	1区3号竪穴建物 埋土 1/2	長 幅	(2.3) (1.1)	厚 重	0.3 0.7	黒曜石//	表裏面の全体に面的な二次加工が認められる。	縄文時代中期後半
第24図 PL.38	16	石器 打製石斧	1区3号竪穴建物 埋土	長 幅	(4.3) (4.4)	厚 重	(1.7) 43.1	細粒輝石安山岩//	全体的に両面加工が認められる。表裏面の先端付近には摩滅痕が認められる。左右両側辺にはつぶれ痕が認められる。裏面の中央付近には自然面が広く認められ剥片素材と考えられる。表面の中央付近には素材剥片段階の剥離面が認められ主要剥離面と考えられる。	縄文時代中期後半

１区５号竪穴建物出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(mm、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第25図 PL.38	1	縄文土器 深鉢	1区5号竪穴建物 炉(№4) 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/良好/鈍い褐	口縁部・横位隆線による区画、橋状把手にＲＬ、下位にＲＬを横位施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第25図 PL.38	2	縄文土器 深鉢	1区5号竪穴建物 炉(№5) 口頸部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/鈍い褐	横位に隆線を施す。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第26図 PL.38	3	縄文土器 深鉢	1区5号竪穴建物 炉(№5・14) 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/鈍い褐	横位に隆帯を施し、下位に縄文施文するが磨滅著しく詳細不明。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第26図 PL.38	4	縄文土器 深鉢	1区5号竪穴建物 床面(№7) 口縁～胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒、白・黒色粒/普通/鈍い褐	口縁部・隆帯区画と渦巻文、区画内にＬＲを横位に充填施文。胴部・幅広沈線による懸垂文、ＬＲを縦位、斜位に施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第26図 PL.38	5	縄文土器 深鉢	1区5号竪穴建物 埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/明赤褐	縦位に沈線を施す。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第26図 PL.38	6	弥生土器 深鉢	1区5号竪穴建物 埋土 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒/良好/鈍い黄橙	縦位の条痕文。２号竪穴建物出土13、３号竪穴建物出土13と同一個体。	弥生前期相当
第26図 PL.38	7	石器 石鏃未成品	1区5号竪穴建物 埋土 完形	長 幅	6.4 4.2	厚 重	1.2 29.6	黒色安山岩//	裏面に素材剥片の主要剥離面が認められ横長剥片を素材とする。表裏面の縁辺部に部分的な二次加工が認められる。表面の一部には自然面が認められ円礫を利用する。	縄文時代中期末葉
第26図 PL.38	8	石器 磨製石斧	1区5号竪穴建物 埋土 2/3	長 幅	(13.0) (6.6)	厚 重	(4.0) 549.9	変玄武岩//	全体的に滑らかであり丁寧に研磨整形される。右側面から裏面にかけては内湾しており細かい凹凸面で構成され敲打により生じたと考えられる。縁辺部には表層的な剥落痕が散在しており敲打で生じた可能性がある。磨製石斧から敲打具に器種変化したと考えられる。	縄文時代中期末葉
第26図 PL.38	9	石器 礫	1区5号竪穴建物 埋土 完形	長 幅	7.5 2.5	厚 重	1.3 44.6	緑色片岩//	全体的に自然面で構成される。結晶片岩類であり石材産出地を考慮すると人工的に遺跡地に搬入されたと判断できる。全体的に滑らかであり石製研磨具として機能した可能性がある。	縄文時代中期末葉

１区２面遺構外出土縄文時代遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(mm、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第31図 PL.39	1	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/褐灰	口縁部・横位沈線文、下位にＬＲを縦位施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第31図 PL.39	2	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白・黒色粒/普通/明赤褐	波状口縁、隆線による横位区画。下位に平行する２本の沈線で区画しＲＬを斜位に充填施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第31図 PL.39	3	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白・黒色粒/普通/褐灰	沈線による懸垂文を施しＬＲを縦位施文。施文後縄文一部撫で消す。	縄文中期後半 加曽利E3式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(mm、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第32図 PL.39	4	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部～底部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白・黒色粒/普通/赤褐	沈線による懸垂文を施しＲＬを縦位に施文する。胴部内面に煤状付着物あり。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第32図 PL.39	5	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、黒色粒/普通/暗赤褐	胴部・２帯構成、ＲＬを斜位に充填施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第32図 PL.39	6	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 口縁部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白・黒色粒/良好/鈍い褐	口縁部･隆帯による楕円･渦巻状区画。胴部にＲＬを横位･斜位に施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第32図 PL.39	7	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 口縁部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白・黒色粒/良好/鈍い橙	波状口縁で横位に連続刺突文。胴部に逆Ｕ字状の沈線を施しＬＲを充填施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第32図 PL.39	8	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 口縁部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/普通/鈍い橙	緩やかな波状口縁。口縁部・横位隆線と突起。胴部・沈線による逆Ｕ字状意匠を区画しＬＲを縦位に充填施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第32図 PL.39	9	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、黒色粒/普通/鈍い橙	２本の沈線による懸垂文を施し、ＬＲを縦位に充填施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第32図 PL.39	10	縄文土器 浅鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	細粒、白色粒/良好/黒褐	口縁部・幅広横位沈線による区画。下位は幅広沈線による懸垂文｡区画内ＬＲを充填施文｡内外面とも丁寧な磨き。	縄文中期後半 加曽利E3式
第32図 PL.39	11	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 口縁部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	細粒、白色粒/良好/赤褐	口縁部・横位隆線。胴部に縦位に隆線を施す。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第32図 PL.39	12	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 口縁部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	細粒、白色粒/良好/鈍い赤褐	波状口縁・横位沈線。ＬＲを横位・縦位に充填施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第32図 PL.39	13	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 口縁部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	細粒、黒色粒/良好/赤褐	口縁部・小突起。胴部・２本の沈線による逆Ｕ字状意匠。ＬＲを施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第32図 PL.39	14	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、黒色粒/普通/暗赤褐	５と同一個体	縄文中期末葉 加曽利E4式
第32図 PL.39	15	縄文土器 台付深鉢	1区2面遺構外 脚部破片	口 — 底 68		高 — —	— —	粗粒、黒色粒/良好/橙	脚部	縄文中期末葉 加曽利E4式
第32図 PL.39	16	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/普通/鈍い赤褐	沈線による懸垂文。ＲＬによる縦位充填施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第32図 PL.39	17	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒/普通/橙	沈線による分岐懸垂文。ＬＲによる充填施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第32図 PL.39	18	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	細粒/良好/赤褐	沈線による分岐懸垂文。ＬＲによる充填施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第32図 PL.39	19	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	細粒/良好/赤褐	胴部下半。19と同一個体。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第33図 PL.40	20	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/普通/鈍い黄橙	隆線による逆Ｕ字状区画。区画内にＲＬによる充填施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第33図 PL.40	21	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白・黒色粒/普通/鈍い褐	隆線による懸垂文。ＲＬによる充填施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第33図 PL.40	22	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白・黒色粒/普通/灰褐	隆線による区画。区画内にＲＬによる斜位の施文と棒状工具による刺突を施す。	縄文中期後半 加曽利E3式
第33図 PL.40	23	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/普通/鈍い橙	ＲＬによる縦位施文。軟弱な状態での施文の為、粗雑な施文。内部に煤状付着物あり。	縄文中期後半 加曽利E3式
第33図 PL.40	24	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/普通/鈍い橙	23・25と同一個体	縄文中期後半 加曽利E3式
第33図 PL.40	25	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/普通/鈍い橙	24と同一個体。付着物が一部残る。	縄文中期後半 加曽利E3式
第33図 PL.40	26	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/普通/鈍い橙	25と同一個体。内部にスス状付着物。	縄文中期後半 加曽利E3式
第33図 PL.40	27	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	細粒、黒色粒/良好/鈍い赤褐	垂下沈線２条による懸垂文を施し、ＬＲを縦位に充填施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第33図 PL.40	28	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	細粒、白・黒色粒/普通/鈍い褐	ＲＬを縦位に施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第33図 PL.40	29	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 口頸部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/普通/赤褐	横位隆線以下沈線による逆Ｕ字状意匠、ＬＲを充填施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第33図 PL.40	30	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/普通/鈍い褐	横位流体を付す。	中期後半
第33図 PL.40	31	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/普通/浅黄橙	３本の垂下沈線による懸垂文。無節Ｒ斜位施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第33図 PL.40	32	縄文土器 鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/普通/灰褐	沈線による懸垂文。ＬＲ縦位施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第33図 PL.40	33	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白・黒色粒/普通/灰褐	隆帯による区画文構成か。区画内にＲＬを充填施文。外面に煤状付着物あり。	縄文中期後半 加曽利E3式
第33図 PL.40	34	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/普通/鈍い褐	ＬＲを縦位施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第33図 PL.40	35	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/普通/鈍い黄橙	沈線による懸垂文。ＬＲによる充填施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第33図 PL.40	36	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、繊維/良好/明赤褐	撚糸Ｌ縦位施文。	加曽利Ｅ1式
第33図 PL.40	37	縄文土器 深鉢	1区2面遺構外 底部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/良好/明赤褐	底面、丁寧な磨き。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第33図 PL.40	38	石器 凹基無茎鏃	1区2面遺構外 2/3	長 (2.9) 幅 (1.8)		厚 0.4 重 1.6		黒色安山岩//	表裏面の全体に面的な二次加工が認められる。	縄文時代中期
第33図 PL.40	39	石器 磨製石斧	1区2面遺構外 1/3	長 (3.1) 幅 (2.7)		厚 (0.8) 重 9.2		変質蛇紋岩//	全体的に非常に滑らかでありわずかに光沢がある。細かい線条痕がわずかに認められる。	縄文時代中期

遺物観察表

２区２面遺構外出土縄文時代遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(㎜、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第35図 PL.41	1	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/鈍い橙	沈線による懸垂文、無節Ｌを付す。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第35図 PL.41	2	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、石英/普通/鈍い赤褐	半裁竹管文を横位に施文。	中期
第35図 PL.41	3	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白・黒色粒/普通/鈍い橙	口縁部・横位に沈線。胴部・ＲＬを縦位に施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第35図 PL.41	4	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/鈍い黄橙	口縁部・隆帯による区画文構成か。区画内摩滅著しく施文原体不明。	縄文中期後半 加曽利E3式
第35図 PL.41	5	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/鈍い褐	口縁部・無文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第35図 PL.41	6	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/鈍い橙	口縁部・肥厚。幅広横位沈線。	縄文中期後半 加曽利E3式
第35図 PL.41	7	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/鈍い橙	口縁部・横位隆線。胴部・沈線による懸垂文構成。	縄文中期後半 加曽利E3式
第35図 PL.41	8	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒、繊維/良好/鈍い赤褐	無節Ｌを縦位・斜位に施文。口縁部条は潰れ。	縄文前期中葉 黒浜式
第35図 PL.41	9	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/鈍い黄橙	波状口縁。２条の沈線による円弧状意匠、ＬＲを付す。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第35図 PL.41	10	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/褐灰	口縁部・横位沈線。地文ＲＬを縦位に施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第35図 PL.41	11	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白・黒色粒/普通/鈍い褐	口縁部・隆帯による楕円区画。	縄文中期後半 加曽利E3式
第35図 PL.41	12	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒、黒色粒/良好/赤褐	波状口縁部、横位隆線と小突起。２条沈線による逆Ｕ字状意匠、ＲＬを充填施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第35図 PL.41	13	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/良好/鈍い褐	突起を持つ波状口縁で連続刺突文。２条沈線による分岐懸垂文か。ＬＲを充填する。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第35図 PL.41	14	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/鈍い橙	緩やかな波状口縁で棒状工具による連続刺突文。下位にＬＲを斜位施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第35図 PL.41	15	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/鈍い橙	緩やかな波状口縁、連続刺突文。下位に横位・縦位の隆線で区画。横位隆線より縦位隆線が派生する。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第35図 PL.42	16	縄文土器 鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/褐灰	橋状把手を施し隆線による区画文構成。	縄文中期後半 加曽利E3式
第35図 PL.42	17	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 底部破片	口 底	— 58	高 —	— —	粗粒、白・黒色粒/普通/鈍い黄橙	底径58㎜。	縄文中期後半
第35図 PL.42	18	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 底部破片	口 底	62	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/鈍い黄橙	底径62㎜。	縄文中期後半
第35図 PL.42	19	縄文土器 台付深鉢	2区2面遺構外 脚部破片	脚 高	20	高 —	— —	粗粒、白・黒色粒/普通/鈍い橙	垂下沈線３条を施す。	縄文中期後半 加曽利E3式
第35図 PL.42	20	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 底部破片	口 底	— 72	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/鈍い橙	底径72㎜。	縄文中期後半
第35図 PL.42	21	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 底部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/良好/明赤褐	底面、丁寧な磨き。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第35図 PL.42	22	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/橙	沈線を縦位に施す。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第35図 PL.42	23	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/橙	ＲＬを縦位・斜位に施文する。	縄文中期後半
第35図 PL.42	24	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/鈍い橙	縦位条線を施す。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第36図 PL.42	25	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/浅黄橙	垂下沈線２条による懸垂文構成か。ＲＬを斜位に施文する。	縄文中期後半 加曽利Ｅ２
第36図 PL.42	26	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/橙	２条の隆線による懸垂文構成。縦位ＬＲを充填する。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第36図 PL.42	27	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/鈍い橙	ＲＬを縦位に施す。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第36図 PL.42	28	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/浅黄橙	断面三角形の隆帯を縦位に施す。ＲＬを縦位に施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第36図 PL.42	29	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/浅黄橙	２条沈線による逆Ｕ字状意匠。無節Ｌを縦位充填施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第36図 PL.42	30	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒、白色粒/良好/鈍い褐	沈線による懸垂文、ＬＲを縦位に充填施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第36図 PL.42	31	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒、白色粒/良好/浅黄橙	沈線による懸垂文。ＲＬを縦位充填施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第36図 PL.42	32	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒、白色粒/良好/褐灰	ＲＬを縦位施文。	縄文中期後半
第36図 PL.42	33	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒、白色粒/良好/褐灰	32と同一個体。	縄文中期後半
第36図 PL.42	34	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/良好/褐灰	隆線による区画文構成か、ＲＬを充填施文。	縄文中期後半 加曽利E3式
第36図 PL.42	35	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/良好/赤褐	横位隆帯を施し三角印刻文、ＬＲを施文。下位に縦位沈線、竹管文、ＬＲを施文。	縄文中期初頭 五領ヶ台2式
第36図 PL.42	36	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/良好/鈍い赤褐	ＲＬを縦位施文。	縄文中期後半

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(㎜、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第36図 PL.42	37	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、結晶片岩/良好/鈍い赤褐	横位沈線による楕円区画、区画内に横位沈線。ＬＲを地文とする。	縄文中期前半
第36図 PL.42	38	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、チャート/良好/赤褐	沈線を施す。	縄文中期前半
第36図 PL.42	39	縄文土器 鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白・黒色粒/良好/褐灰	波状口縁、口縁部･横位沈線。胴部･逆Ｕ字状意匠を配し、ＬＲ充填施文する。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第36図 PL.42	40	縄文土器 鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒、チャート/良好/褐灰	２条沈線による弧状意匠、ＬＲを縦位に充填施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第36図 PL.42	41	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒、白色粒/良好/浅黄橙	横位沈線、ＲＬを横位施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第36図 PL.42	42	縄文土器 鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒/良好/鈍い橙	横位沈線、ＲＬを横位施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第36図 PL.42	43	縄文土器 鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒/良好/鈍い橙	沈線による弧状意匠と分岐懸垂文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第36図 PL.42	44	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/普通/鈍い黄橙	無文。撫でによる整形。	縄文早期条痕文系
第36図 PL.42	45	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/褐灰	表裏条痕。	縄文早期条痕文系
第36図 PL.42	46	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、結晶片岩、繊維/普通/褐灰	円形刺突、斜位沈線、縦位の平行沈線。内面、横位条痕。	縄文早期後葉 鵜ヶ島台式
第36図 PL.42	47	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、繊維/普通/明褐	口唇部・棒状工具による刻目。口縁部に横位刺突と沈線。その下位に斜位沈線と刺突文を施す。	縄文早期後半
第36図 PL.42	48	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、繊維/普通/明褐	47と同一個体の可能性あり。	縄文早期後葉 鵜ヶ島台式
第36図 PL.42	49	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒/普通/明赤褐	斜位の条痕文。	縄文早期条痕文系
第36図 PL.43	50	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、石英、繊維/普通/明赤褐	内外面、縦位・斜位の条痕文。	縄文早期条痕文系
第37図 PL.43	51	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、石英、繊維/普通/明赤褐	横位の条痕文。	縄文早期条痕文系
第37図 PL.43	52	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒/普通/鈍い赤褐	斜位、縦位の条痕文。内面、横位の条痕文。	縄文早期条痕文系
第37図 PL.43	53	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、繊維/普通/赤褐	表裏に斜位の条痕。	縄文早期条痕文系
第37図 PL.43	54	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒/普通/赤褐	縦位の沈線文を施す。	縄文早期条痕文系
第37図 PL.43	55	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒、繊維/良好/鈍い赤褐	斜位・横位・縦位の沈線。	縄文早期条痕文系
第37図 PL.43	56	縄文土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	細粒/良好/鈍い橙	沈線による弧状意匠。ＬＲを縦位に充填施文。	縄文中期末葉 加曽利E4式
第37図 PL.43	57	弥生土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒/良好/鈍い黄橙	58と同一個体。	弥生前～中期
第37図 PL.43	58	弥生土器 深鉢	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒/良好/鈍い黄橙	横位平行沈線、地文は細密条痕。	弥生前～中期
第34図 PL.43	59	弥生土器 壺	2区2面遺構外 完形	口 高	55 123	底 —	40	粗粒/良好/鈍い橙	小型壺。口縁・胴部にＬＲ施文、口縁に対向する2か所2つの穿孔部､口縁下に1条の沈線を施す。底部に木葉痕.内部の土壌を水洗したが遺物なし。X=45115､Y=-86265出土。H=325.3321m。	弥生前期
第37図 PL.43	60	弥生土器 深鉢	2区2面遺構外 底部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒/良好/鈍い橙	胴部、縦位・斜位の条痕文。底部、木葉痕。	弥生前期
第37図 PL.43	61	弥生土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒/良好/鈍い黄橙	縦位の条痕文。1区2面3号竪穴建物出土13と同一個体。	弥生前期
第37図 PL.43	62	弥生土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/良好/鈍い橙	縦位の条痕文。	弥生前期
第37図 PL.43	63	弥生土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒/良好/鈍い黄橙	縦位の条痕文。3号竪穴建物出土13と同一個体。	弥生前期
第34図 PL.43	64	弥生土器 深鉢	2区2面遺構外 胴下半部～底部破片	口 底	— 96	高 —	— —	粗粒/良好/赤褐	縦位の条痕文を施す。底部・網代痕。内面ス状付着物・年代測定分析実施。X=45126、Y=-86262出土。H=326.227m。	弥生前期
第37図 PL.43	65	弥生土器 深鉢	2区2面遺構外 底部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、小礫/普通/橙	底部、木葉痕。	弥生前期
第37図 PL.43	66	弥生土器 深鉢	2区2面遺構外 底部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/普通/褐灰	底面、木葉痕	弥生前期
第37図 PL.43	67	弥生土器 壺	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/良好/鈍い黄橙	口唇部・平坦。	弥生前期相当
第37図 PL.43	68	弥生土器 甕	2区2面遺構外 口縁部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/良好/明黄褐	外反する波状口縁。口縁部･無文。胴部･ＲＬを横位施文。	弥生前期相当
第37図 PL.43	69	弥生土器 甕	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/良好/明黄褐	ＲＬを横位施文。	弥生前期相当
第37図 PL.43	70	弥生土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、白色粒/良好/橙	横位・斜位の条痕文。	弥生前期相当
第37図 PL.43	71	弥生土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒、黒色粒/良好/橙	横位の条痕文。	弥生前期相当
第37図 PL.43	72	弥生土器 深鉢	2区2面遺構外 胴部破片	口 底	— —	高 —	— —	粗粒/良好/鈍い黄橙	無文、時期不明。	弥生

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(mm、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第37図 PL.43	73	弥生土器 甕	2区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒/良好/褐灰	斜格子状に条痕を施す。	弥生前期相当
第37図 PL.43	74	弥生土器 甕	2区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/良好/鈍い黄橙	３条の平行横位沈線。下位に縄文、摩滅著しく施文原体不明。	弥生前～中期
第37図 PL.43	75	石器 凸基有茎鏃	2区2面遺構外 完形	長 3.4 幅 1.5		厚 0.5 重 1.7		黒曜石//	表裏面の全体に面的な二次加工が認められる。表裏面の中央やや下方に素材剥片段階の剥離面が認められる。	縄文時代中期

３区１面表土出土弥生時代遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(mm、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第38図 PL.44	1	弥生土器 深鉢	3区1面 表土 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/良好/褐灰	横位平行沈線を施す。	弥生前～中期
第38図 PL.44	2	弥生土器 深鉢	3区1面 表土 頸部～胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、黒色粒/良好/褐灰	頸部・７本単位の櫛描簾状文。胴部、斜位の櫛描文。	弥生中期後半

４区２面遺構外出土縄文弥生時代遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(mm、g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第39図 PL.44	1	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 口縁部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/良好/鈍い赤褐	口縁部・ほぼ直立。楕円押型文、焼成良好で硬い。	縄文早期押型文系
第39図 PL.44	2	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/良好/鈍い赤褐	楕円押型文。内面、丁寧な磨き。	縄文早期押型文系
第39図 PL.44	3	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/良好/鈍い赤褐	楕円押型文。内面、丁寧な磨き。	縄文早期押型文系
第39図 PL.44	4	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/良好/鈍い赤褐	楕円押型文。内面、丁寧な磨き。３と同一個体。	縄文早期押型文系
第39図 PL.44	5	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、繊維/良好/明赤褐	表裏に縦位に条痕。	縄文早期条痕文系
第39図 PL.44	6	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/良好/赤褐	横位に条痕文を施す。	縄文早期条痕文系
第39図 PL.44	7	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、石英・金雲母/普通/鈍い橙	横位に条痕文を施す	縄文早期条痕文系
第39図 PL.44	8	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/普通/明赤褐	斜位の条痕文を施文する。口唇部に刻目を施す。	縄文早期条痕文系
第39図 PL.44	9	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 口縁部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、白色粒/良好/赤褐	斜位の条痕文を施文する。口唇部に刻目を施す。	縄文早期条痕文系
第39図 PL.44	10	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、繊維・石英・金雲母/普通/明赤褐	内外面に横位の条痕文。胎土に石英、微細な雲母を含む。13と同一個体。	縄文早期条痕文系
第39図 PL.44	11	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、石英・金雲母/普通/鈍い橙	横位に条痕文を施す。	縄文早期条痕文系
第39図 PL.44	12	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、石英・金雲母/普通/鈍い橙	横位に条痕文を施す。	縄文早期条痕文系
第39図 PL.44	13	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、繊維/普通/鈍い赤褐	内外面に横位の沈線文。胎土に繊維・石英・雲母を含む。	縄文早期条痕文系
第39図 PL.44	14	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、石英/普通/鈍い赤褐	横位隆線を２段施す、隆線に刻目。上位は平行する沈線を２条施し斜位沈線を充填する。下位は縦位・斜位沈線、内面は横位条痕。	縄文前期後葉 鵜ヶ島台式
第39図 PL.44	15	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 胴部～底部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、繊維/普通/赤褐	羽状縄文。ＬＲとＲＬを横位に施文。	縄文前期中葉 黒浜式
第39図 PL.44	16	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 口縁部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、繊維/良好/褐灰	ＲＬを横位に施文。	縄文前期中葉 黒浜式
第39図 PL.44	17	縄文土器 深鉢	4区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒、繊維/良好/灰褐	羽状縄文、上位にＲＬを横位に施文。下位にＬＲを横位に施文。	縄文前期中葉 黒浜式
第39図 PL.44	18	弥生土器 深鉢	4区2面遺構外 胴部破片	口 — 底 —		高 — —	— —	粗粒/良好/鈍い橙	内外面に斜位条痕を施す。	弥生前期相当

第５表　非掲載近世～近・現代陶磁器・土器類集計表

出土位置	近世								近現代				計	
	国産磁器		国産施釉陶器		国産焼締陶器		在地系その他		陶磁器		土器類			
	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g
1区1面遺構外	4	40	22	320	1	80	1	2	14	102	1	40	43	584
2区1面遺構外	1	2	0	0	4	50	1	10	0	0	0	0	6	62
4区1面遺構外	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	0	0	1	5
計	5	42	22	320	5	130	2	12	15	107	1	40	50	651

第６表　非掲載縄文・弥生土器集計表

調査区	面	出土遺構等	縄文										弥生		時期不明	合計
			押型文	条痕文・沈線文系	表裏条痕文・沈線文系	鵜ヶ島台式	前期	黒浜式	中期	中期後半	加曽利Ｅ３・４	後期	弥生	弥生前期相当		
1区	1	5号土坑埋土								1	1			1		3
1区	1	6号土坑埋土								1						1
1区	1	8号土坑埋土		1												1
1区	1	9号土坑埋土								3						3
1区	1	17号土坑埋土								1						1
1区	1	26号土坑埋土								1						1
1区	1	27号土坑埋土								1						1
1区	1	19号ピット埋土								1						1
1区	1	遺構外							3	38	4					
3区	1	表土								2				1		3
1区	2	遺構外		4			6	2		199	10	1	1	2	34	259
1区	2	2号竪穴建物埋土								26	3					29
1区	2	2号竪穴P6埋土								2						2
1区	2	3号竪穴建物埋土								14	12			3	1	30
1区	2	5号竪穴建物埋土								13	1				10	24
1区	2	1号屋外炉埋土		1	1											2
2区	2	遺構外		8	13		2			286	13			39	170	531
4区	2	10号土坑埋土	5		16	1	14	2		1					11	50
4区	2	遺構外													3	3
		合計	5	9	30	1	16	2	0	342	29	0	0	42	195	671

「前期」、「中期」、「中期後半」は詳細な分類が困難なもの。時期不明は小破片であるため分類が不可能なもの。

第７表　非掲載縄文時代石器・剥片等集計表

区	面	遺構名	石材	種類	点数	総重量(g)	遺構の年代	遺物の年代
1	1	9号土坑	硬質泥岩	剥片	1	27.0	近世	縄文時代
1	1	9号土坑	粗粒輝石安山岩	礫片	1	1.4	近世	縄文時代
1	1	27号土坑	黒曜石	剥片	3	0.4	近世	縄文時代
1	1	19号ピット	硬質泥岩	剥片	1	46.0	近世	縄文時代
1	1	遺構外	黒色頁岩	剥片	2	10.5	近世	縄文時代
1	1	遺構外	黒曜石	剥片	51	45.8	近世	縄文時代
1	1	遺構外	砂岩	剥片	1	6.6	近世	縄文時代
1	1	遺構外	ホルンフェルス	剥片	2	16.4	近世	縄文時代
1	1	遺構外	変質玄武岩	剥片	1	78.6	近世	縄文時代
1	1	遺構外	黒曜石	異形石器片	1	1.3	近世	縄文時代
1	1	遺構外	粗粒輝石安山岩	不明石器片	1	68.0	近世	縄文時代
1	2	2号竪穴建物埋土	黒曜石	石鏃片	1	0.7	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	2号竪穴建物埋土	細粒輝石安山岩	二次加工のある剥片	1	42.2	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	2号竪穴建物埋土	珪質頁岩	二次加工のある剥片	1	47.5	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	2号竪穴建物埋土	黒色頁岩	二次加工のある剥片	1	72.0	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	2号竪穴建物埋土	黒色安山岩	二次加工のある剥片	2	81.0	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	2号竪穴建物埋土	黒曜石	剥片	6	7.7	縄文時代中期末葉	縄文時代

非掲載石器集計表

区	面	遺構名	石材	種類	点数	総重量(g)	遺構の年代	遺物の年代
1	2	2号竪穴建物埋土	デイサイト凝灰岩	打製石斧片	1	23.8	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	2号竪穴建物埋土	緑色片岩	石皿片	3	449.2	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	2号竪穴建物埋土	粗粒輝石安山岩	礫、礫片	5	2280.4	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	2号竪穴建物Ｐ3	黒色頁岩	剥片	1	12.3	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	2号竪穴建物Ｐ3	黒曜石	剥片	1	0.1	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	2号竪穴建物Ｐ4	黒色頁岩	剥片	1	3.1	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	2号竪穴建物Ｐ6	珪質頁岩	剥片	1	2.7	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	2号竪穴建物Ｐ6	黒曜石	剥片	2	4.6	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	3号竪穴建物Ｐ7	黒曜石	剥片	1	0.1	縄文時代中期後半	縄文時代
1	2	3号竪穴建物Ｐ7	チャート	剥片	1	0.3	縄文時代中期後半	縄文時代
1	2	3号竪穴建物Ｐ8	黒曜石	剥片	3	0.2	縄文時代中期後半	縄文時代
1	2	3号竪穴建物Ｐ9	黒曜石	剥片	1	0.3	縄文時代中期後半	縄文時代
1	2	3号竪穴建物埋土	黒色頁岩	剥片	6	77.6	縄文時代中期後半	縄文時代
1	2	3号竪穴建物埋土	黒色安山岩	剥片	8	137.8	縄文時代中期後半	縄文時代
1	2	3号竪穴建物埋土	黒曜石	剥片	16	18.4	縄文時代中期後半	縄文時代
1	2	3号竪穴建物埋土	チャート	剥片	1	0.1	縄文時代中期後半	縄文時代
1	2	5号竪穴建物埋土	黒曜石	剥片	14	10.6	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	5号竪穴建物埋土	黒曜石	石核	1	5.9	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	5号竪穴建物埋土	黒曜石	二次加工のある剥片	1	1.1	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	5号竪穴建物埋土	粗粒輝石安山岩	不明石器片	1	224.7	縄文時代中期末葉	縄文時代
1	2	1号屋外炉埋土	黒曜石	剥片	20	6.3	縄文時代早期	縄文時代
1	2	1号屋外炉埋土	チャート	剥片	1	0.2	縄文時代早期	縄文時代
1	2	遺構外	黒色頁岩	剥片	17	291.7	縄文時代	縄文時代
1	2	遺構外	黒曜石	剥片	41	22.7	縄文時代	縄文時代
1	2	遺構外	黒色安山岩	剥片	4	51.2	縄文時代	縄文時代
1	2	遺構外	粗粒輝石安山岩	剥片	1	0.3	縄文時代	縄文時代
1	2	遺構外	チャート	剥片	3	3.9	縄文時代	縄文時代
1	2	遺構外	粗粒輝石安山岩	磨石片	1	374.9	縄文時代	縄文時代
1	2	遺構外	黒色安山岩	楔形石器片	2	11.1	縄文時代	縄文時代
1	2	遺構外	黒曜石	二次加工のある剥片	1	5.7	縄文時代	縄文時代
2	2	遺構外	黒色頁岩	剥片	9	79.5	縄文時代	縄文時代
2	2	遺構外	黒曜石	剥片	35	33.7	縄文時代	縄文時代
2	2	遺構外	黒色安山岩	剥片	2	3.5	縄文時代	縄文時代
2	2	遺構外	細粒輝石安山岩	剥片	2	3.1	縄文時代	縄文時代
2	2	遺構外	珪質頁岩	剥片	4	22.1	縄文時代	縄文時代
2	2	遺構外	赤碧玉	剥片	1	3.2	縄文時代	縄文時代
2	2	遺構外	褐色碧玉	剥片	1	10.8	縄文時代	縄文時代
2	2	遺構外	チャート	剥片	2	4.0	縄文時代	縄文時代
2	2	遺構外	黒曜石	石鏃片	2	1.3	縄文時代	縄文時代
2	2	遺構外	黒曜石	石鏃未製品片	1	1.9	縄文時代	縄文時代
2	2	遺構外	黒曜石	二次加工のある剥片	2	8.1	縄文時代	縄文時代
2	2	遺構外	細粒輝石安山岩	二次加工のある剥片	1	27.9	縄文時代	縄文時代
2	2	遺構外	粗粒輝石安山岩	礫片	4	99.5	縄文時代	縄文時代
3	1	遺構外	黒曜石	剥片	1	0.1	縄文時代	縄文時代
4	2	10号土坑埋土	黒色頁岩	剥片	3	72.7	縄文時代	縄文時代
4	2	遺構外	黒色頁岩	剥片	5	63.1	縄文時代	縄文時代
4	2	遺構外	黒曜石	剥片	19	16.4	縄文時代	縄文時代
4	2	遺構外	黒色安山岩	剥片	2	14.4	縄文時代	縄文時代
4	2	遺構外	細粒輝石安山岩	剥片	1	43.0	縄文時代	縄文時代
4	2	遺構外	ホルンフェルス	剥片	1	5.7	縄文時代	縄文時代
4	2	遺構外	黒曜石	二次加工のある剥片	3	27.8	縄文時代	縄文時代
4	2	遺構外	珪質頁岩	二次加工のある剥片	1	133.9	縄文時代	縄文時代
4	2	遺構外	黒色頁岩	二次加工のある剥片	1	21.7	縄文時代	縄文時代
4	2	遺構外	細粒輝石安山岩	石核	1	183.5	縄文時代	縄文時代
4	2	遺構外	珪質頁岩	石核	1	428.0	縄文時代	縄文時代

写 真 図 版

1 .調査区から東側施工済み箇所を望む(西から)

2 .調査区周辺風景(北から)

PL.2

1 .調査着手前(東から)

2 .調査着手前(西から)

1．1区東半部1面全景(北東から)

2．1区西半部1面検出状況(南から)

PL.4

1．2区1面検出状況1（南から）

2．2区1面検出状況2（西から）

1．3区南東部1面検出状況1（西から）

2．3区南東部1面検出状況2（北から）

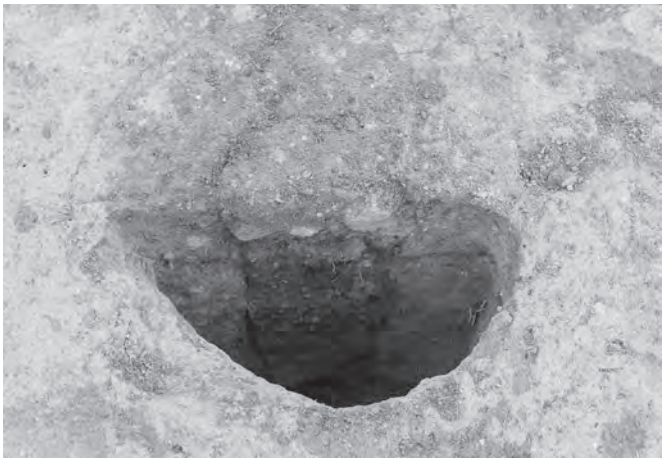
PL.6

1．4区1面検出状況1（東から）

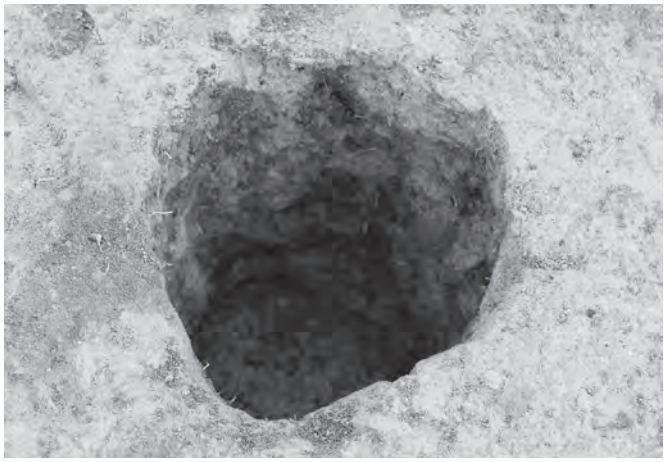
2．4区1面検出状況2（南から）

1．1区1号柵全景(南から)

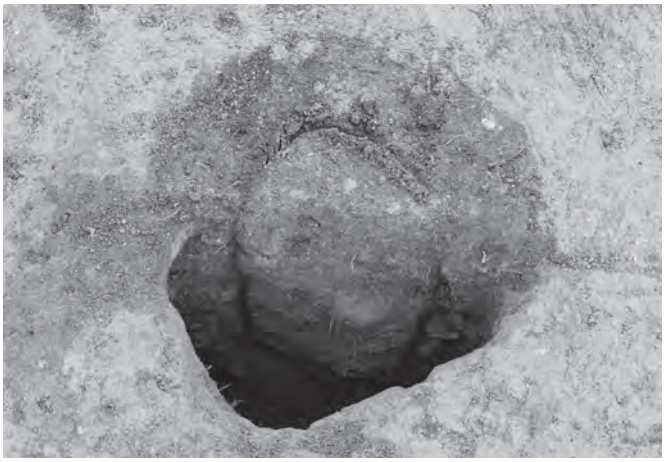
2．1区1号柵ピット1全景(南から)



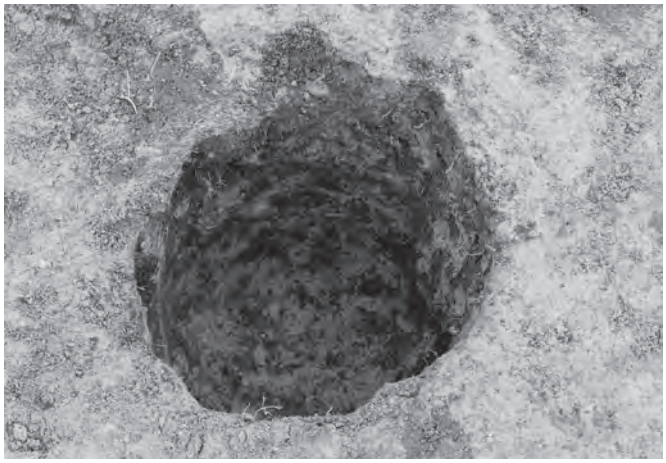
3．1区1号柵ピット1土層断面南B-B′(南から)



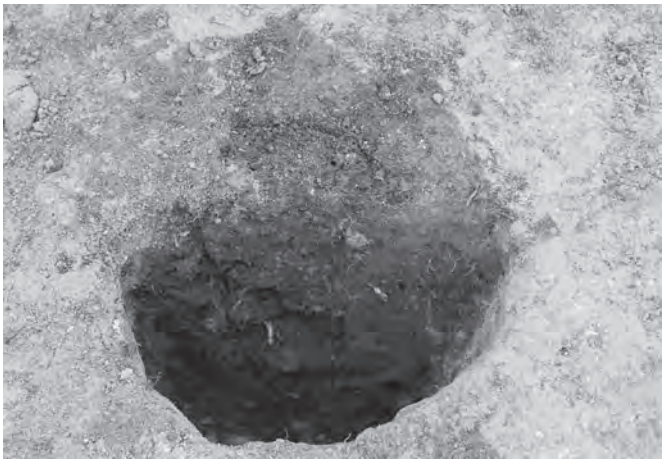
4．1区1号柵ピット2全景(南から)



5．1区1号柵ピット2土層断面C-C′(南から)

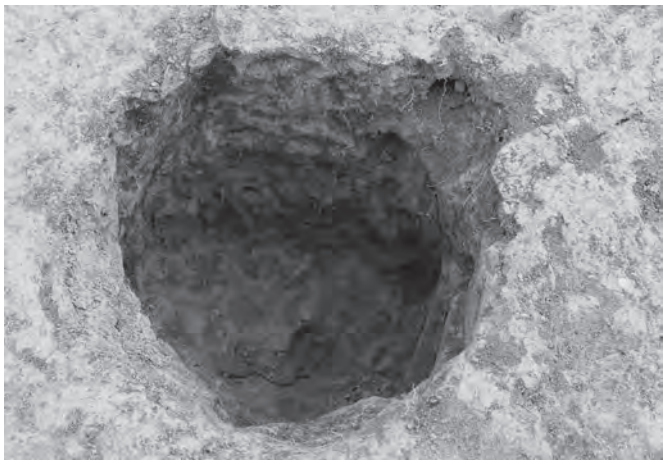


6．1区1号柵ピット3全景(南から)

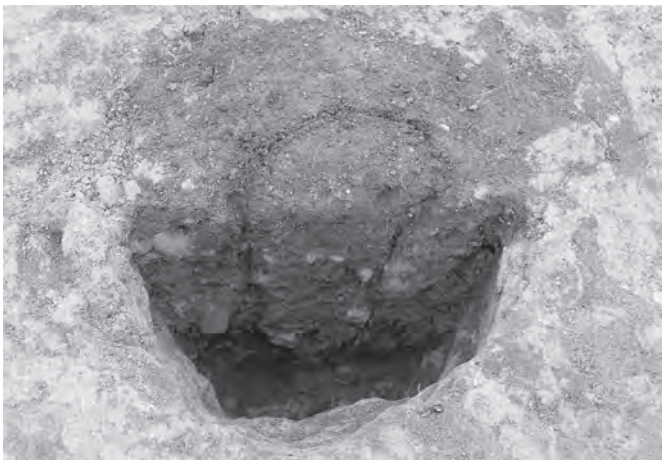


7．1区1号柵ピット3土層断面D-D′(南から)

PL.8



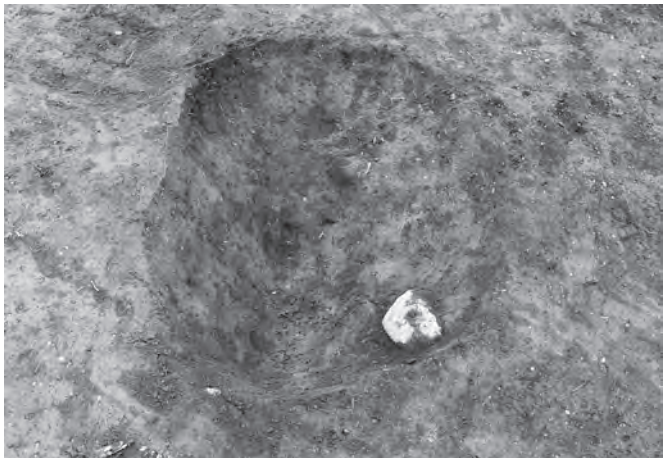
1．1区1号柵ピット4全景(南から)



2．1区1号柵ピット4土層断面E-E′(南から)

3．1区1号土坑全景(西から)

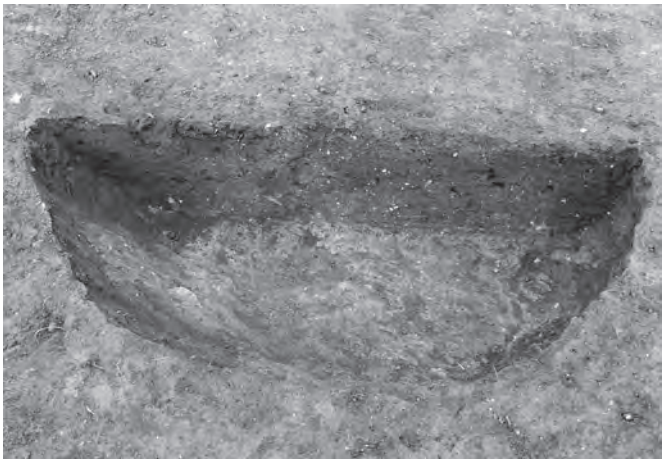
4．1区1号土坑土層断面A-A′(西から)



5．1区2号土坑全景(南西から)

6．1区2号土坑土層断面A-A′(南西から)

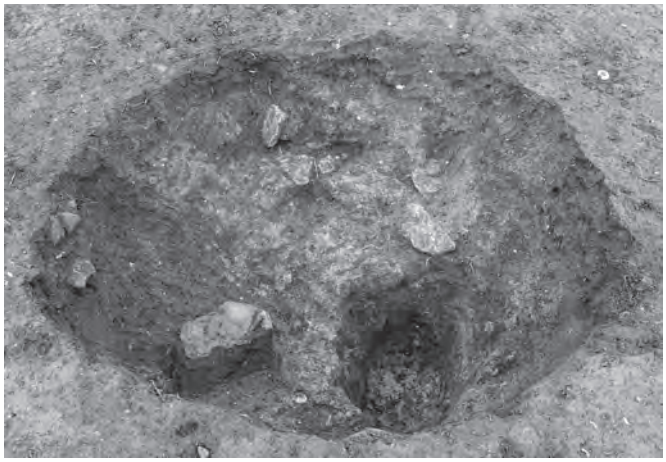
7．1区3号土坑全景(南から)



8．1区3号土坑土層断面A-A′(南から)

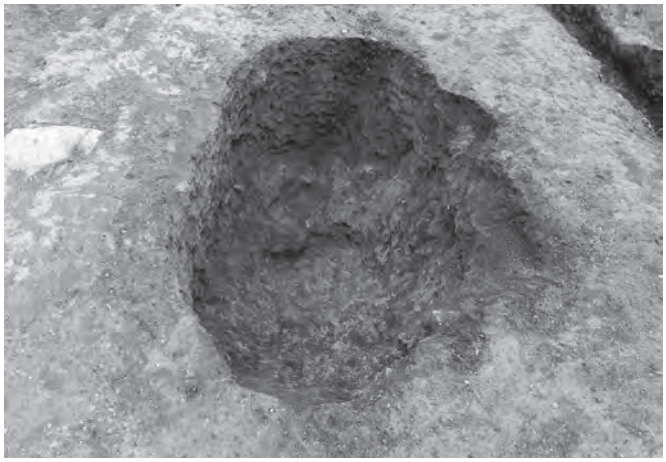
1．1区4号土坑全景(東から)

2．1区4号土坑土層断面A-A′(西から)



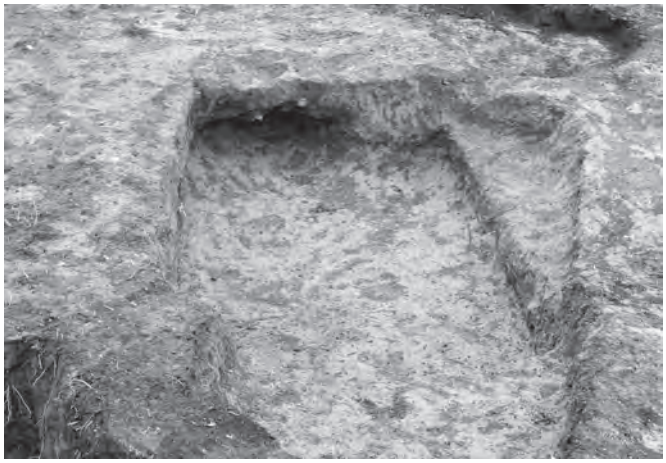
3．1区5号土坑全景(南から)

4．1区5号土坑土層断面A-A′(南から)



5．1区6号土坑全景(南西から)

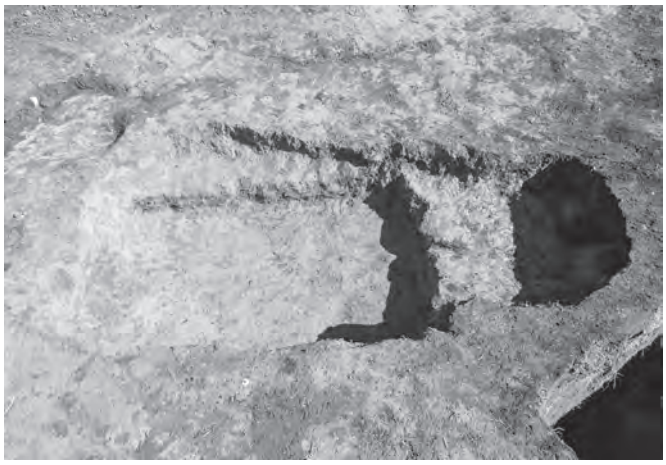
6．1区6号土坑土層断面(西から)



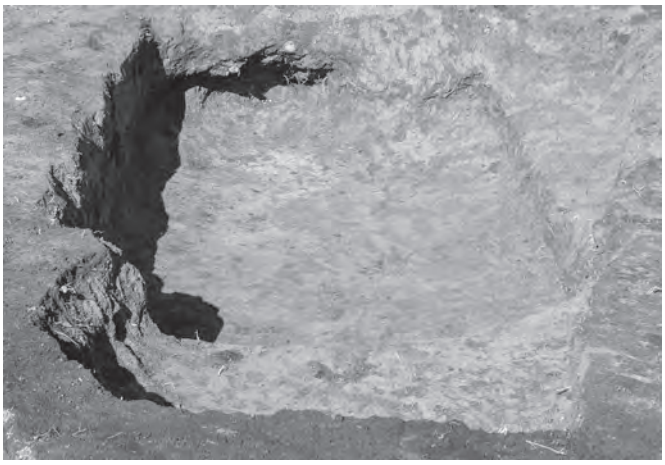
7．1区8号土坑全景(南東から)

8．1区8号土坑土層断面(北西から)

PL.10



1．1区８・９号土坑全景(南西から)

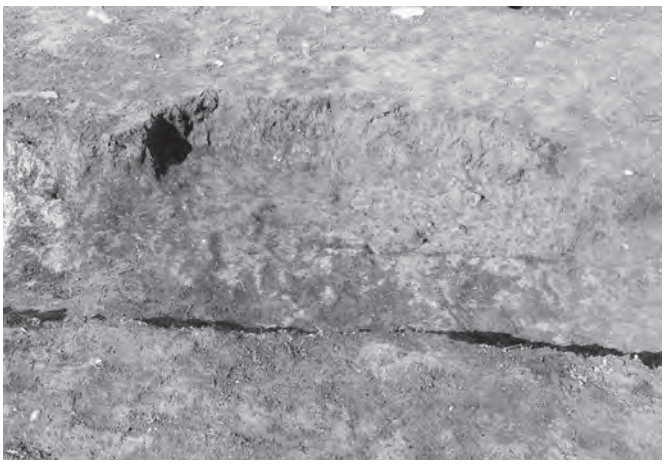


2．1区８・９号土坑全景(南東から)

3．2区12号土坑全景(西から)

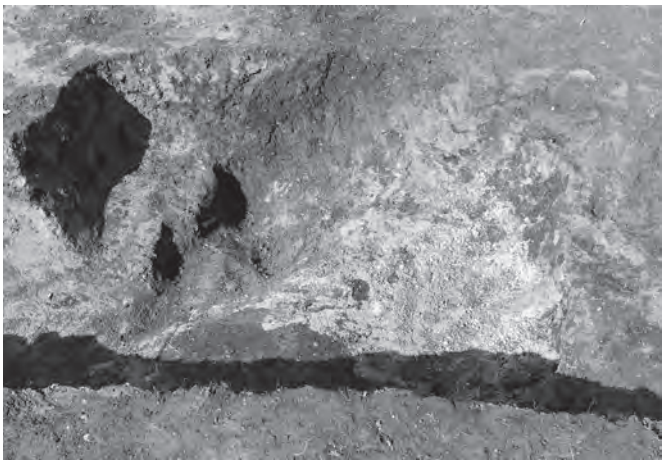
4．2区12号土坑土層断面A-A′(北から)

5．2区13号土坑全景(北から)



6．1区14号土坑全景(南から)

7．1区14・15号土坑土層断面A-A′(南から)

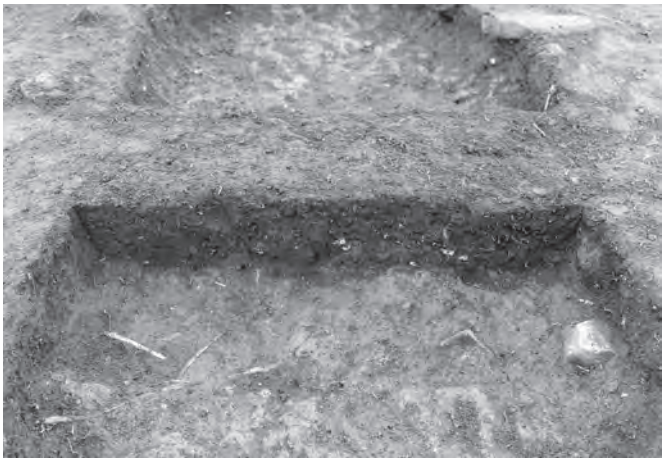


8．1区15号土坑全景(南から)

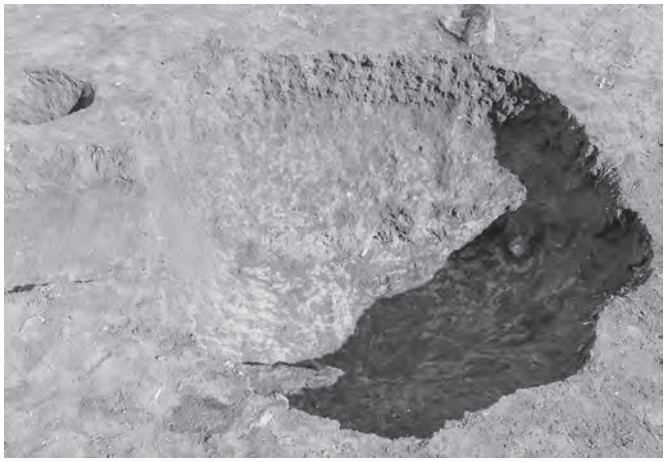
1．2区16号土坑全景(西から)

2．2区16号土坑土層断面A-A′(西から)

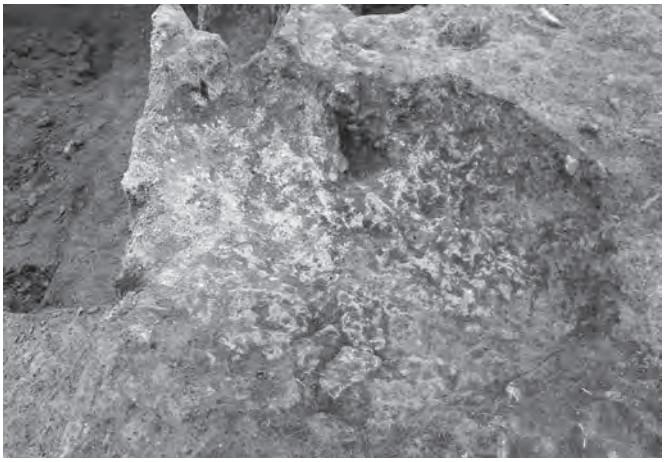
3．1区17号土坑全景(南から)



4．1区17号土坑土層断面A-A′(東から)



5．1区21号土坑全景(南から)



6．1区25号土坑全景(南から)

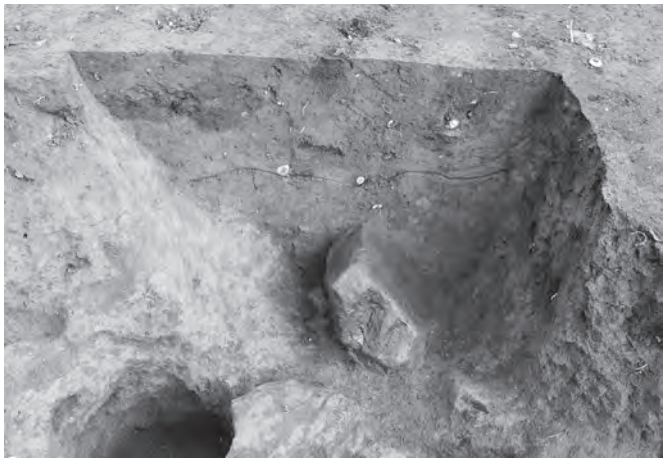
7．1区25号土坑土層断面A-A′(東から)

8．1区26号土坑全景(南から)

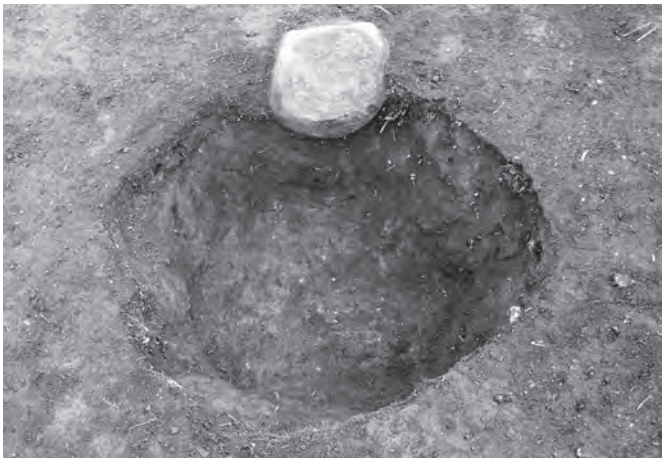
PL.12

1．1区26号土坑土層断面A-A′（西から）

2．1区27号土坑全景（西から）

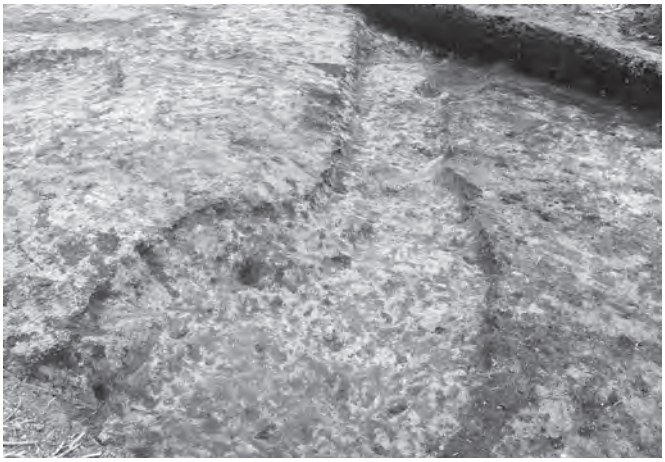


3．1区27号土坑土層断面A-A′（西から）



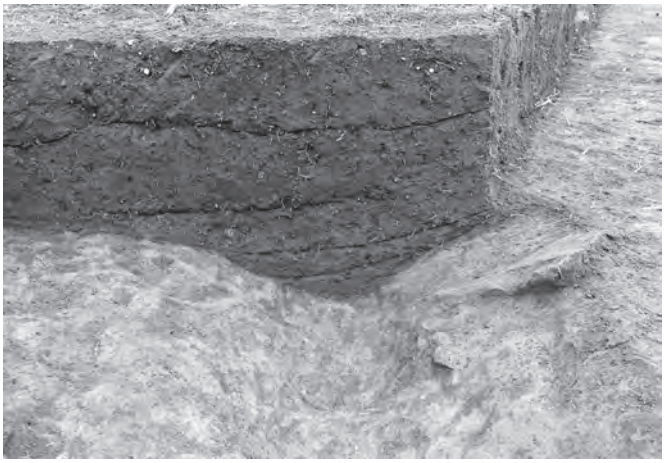
4．1区29号土坑全景（南から）

5．1区29号土坑土層断面A-A′（北から）



6．1区30号土坑全景（南から）

7．1区31号土坑全景（北西から）



8．1区31号土坑土層断面A-A′（北西から）

1．1区32号土坑全景(南西から)

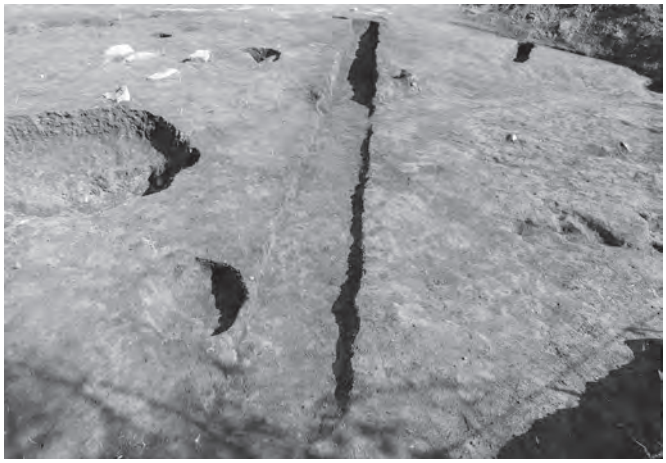
2．1区32号土坑土層断面A-A′(南西から)

3．1区33号土坑全景(南西から)

4．1区33号土坑土層断面(南西から)

5．1区34号土坑全景(西から)

6．1区34号土坑土層断面(西から)



7．1区35号土坑全景(南西から)

8．1区35号土坑土層断面A-A′(南西から)

PL.14

1．1区36号土坑全景(西から)

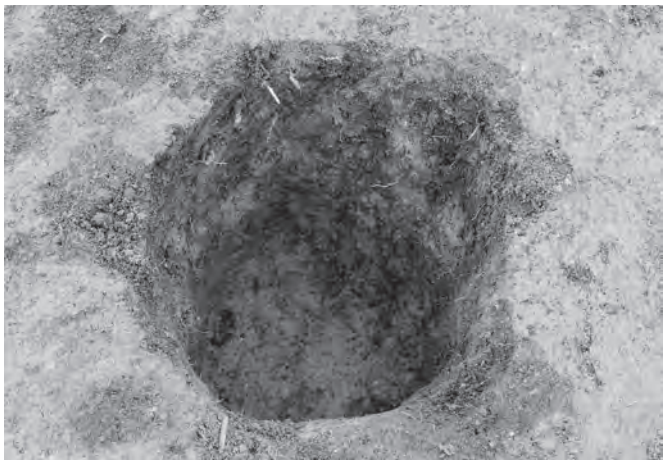
2．1区36号土坑土層断面A-A′(西から)

3．2区37号土坑全景(西から)

4．2区37号土坑土層断面A-A′(南西から)

5．1区5号ピット全景(南から)

6．1区5号ピット土層断面A-A′(南から)

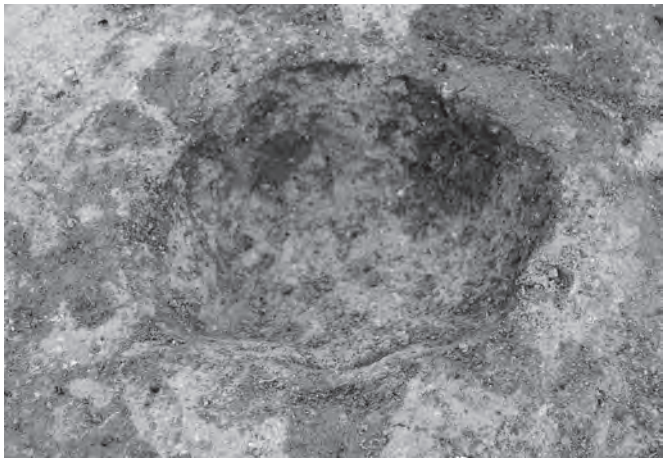


7．1区6号ピット全景(南から)

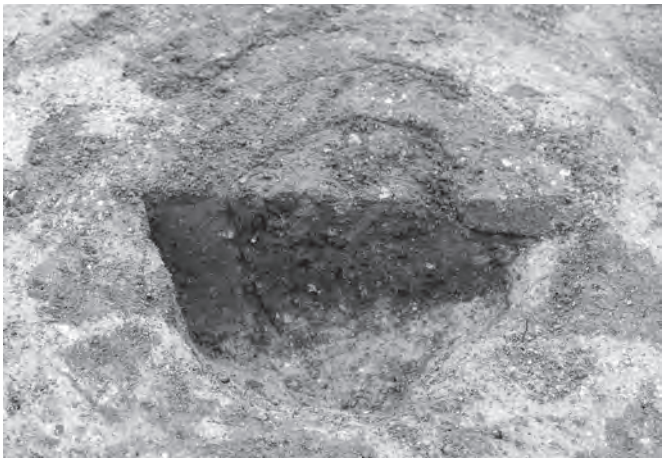
8．1区6号ピット土層断面A-A′(南から)

1．1区７号ピット全景(南から)

2．1区７号ピット土層断面A-A′(南から)

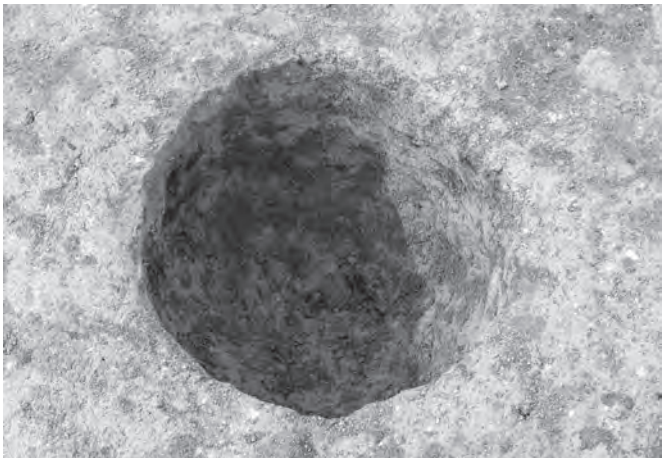


3．1区８号ピット全景(南から)

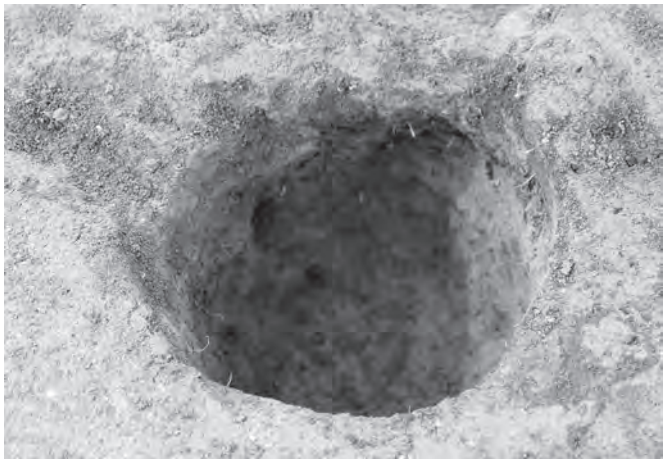


4．1区８号ピット土層断面A-A′(東から)

5．1区９号ピット全景(南から)



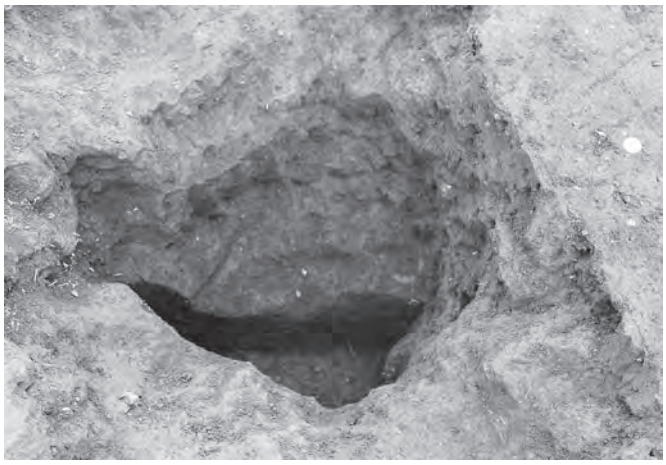
6．1区10号ピット全景(南から)



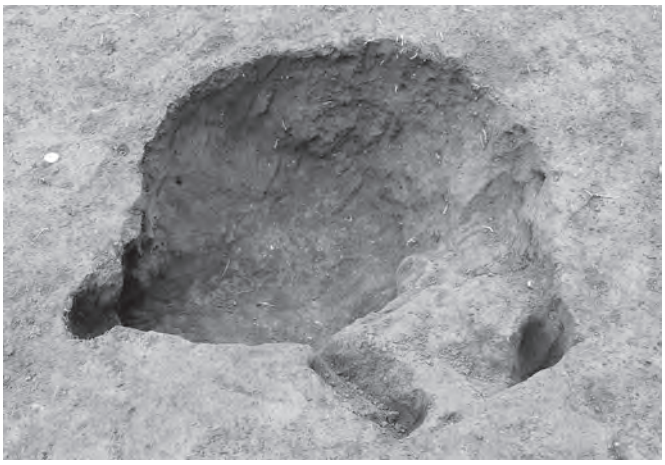
7．1区11号ピット全景(南から)

8．2区12号ピット全景(西から)

PL.16

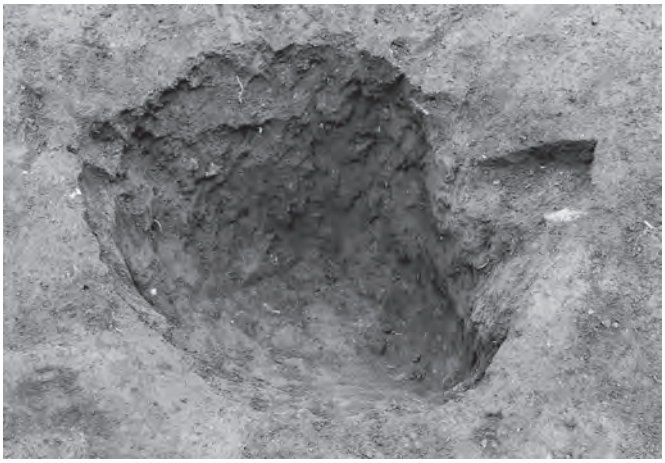


1．2区12号ピット土層断面A-A′（西から）



2．2区13号ピット全景（西から）

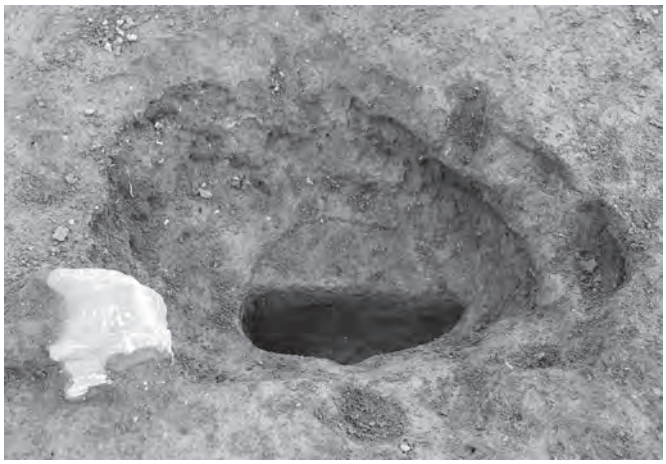
3．2区13号ピット土層断面A-A′（西から）



4．2区14号ピット全景（西から）

5．2区14号ピット土層断面（西から）

6．2区15号ピット全景（西から）



7．2区15号ピット土層断面A-A′（南西から）

8．2区17号ピット全景（西から）

1．2区17号ピット土層断面A-A′（西から）

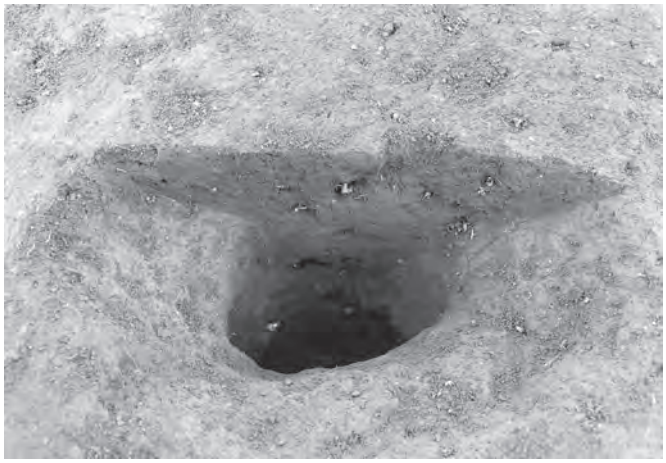
2．2区18号ピット全景（南から）

3．2区18号ピット土層断面A-A′（東から）

4．1区19号ピット土層断面A-A′（南から）

5．1区20号ピット土層断面A-A′（南から）

6．1区22号ピット土層断面A-A′（南から）

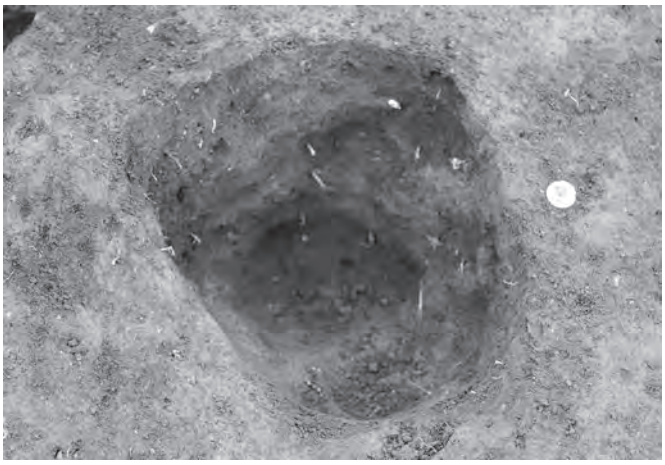


7．1区23号ピット土層断面A-A′（南から）

8．2区30号ピット全景（西から）

PL.18

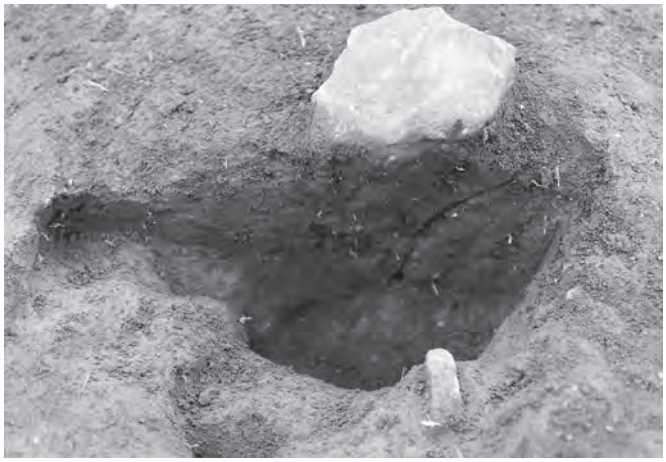
1．2区30号ピット土層断面A-A′（西から）



2．1区42号ピット全景（北から）

3．1区42号ピット土層断面A-A′（北から）

4．1区43号ピット全景（北から）



5．1区43号ピット土層断面A-A′（北から）

1．1区南半部２面検出状況１（北から）

２．1区南半部２面検出状況２（北西から）

PL.20

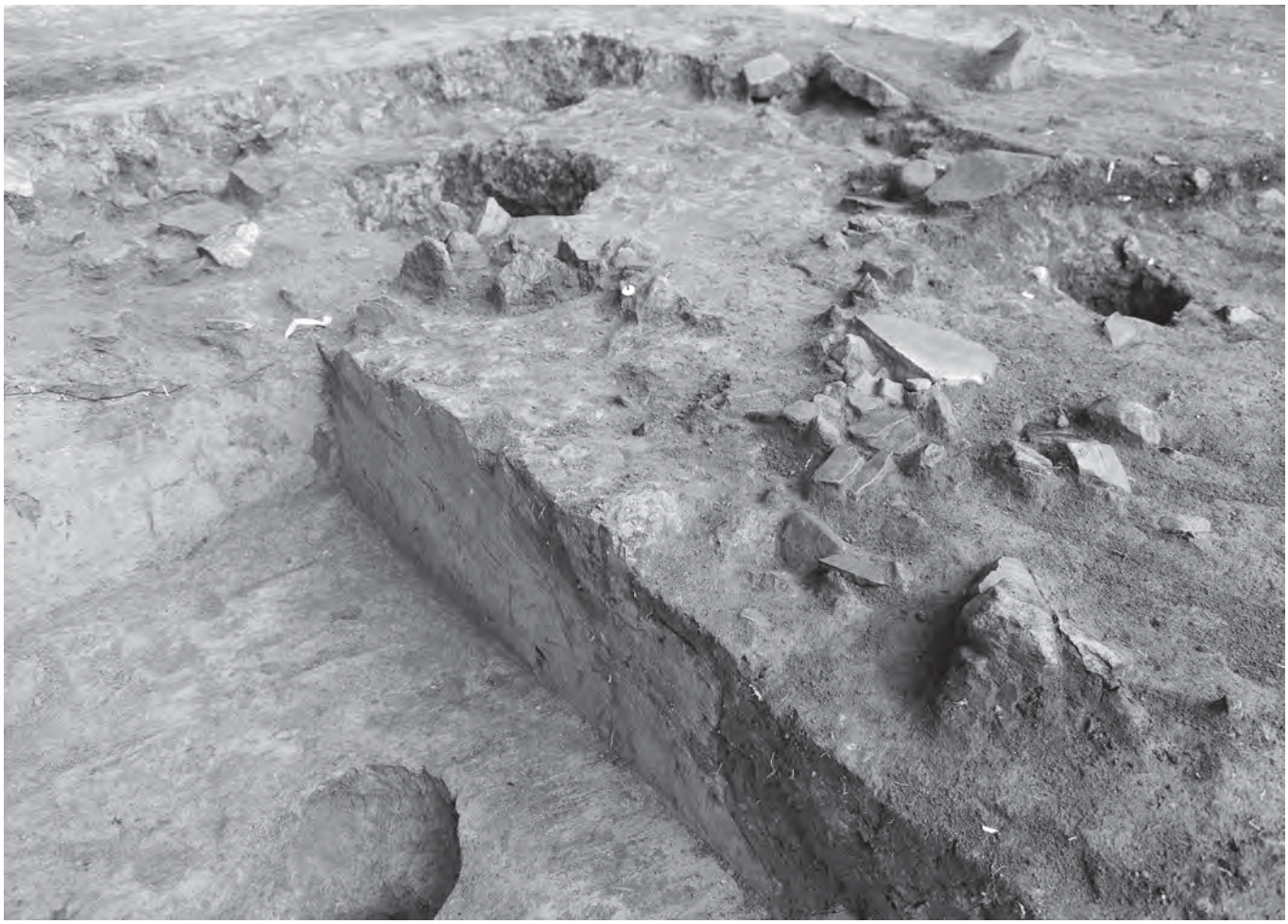
１．１区南半部２面検出状況３（西から）

２．４区２面検出状況（東から）

1．1区２号竪穴建物全景（南から）

2．1区２号竪穴建物敷石検出状況１（東から）

PL.22

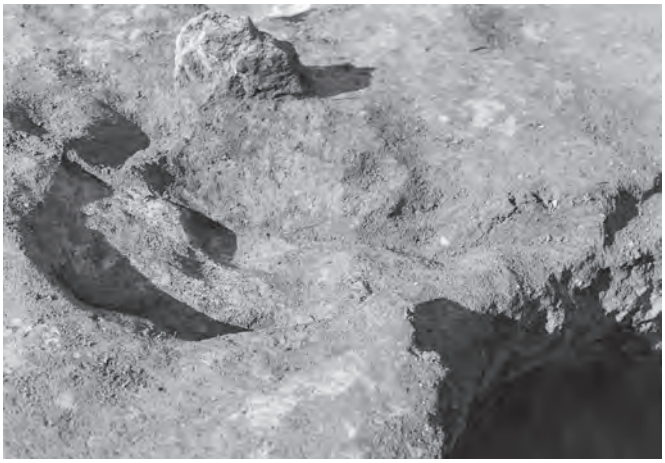


1．1区2号竪穴建物敷石検出状況2（南西から）

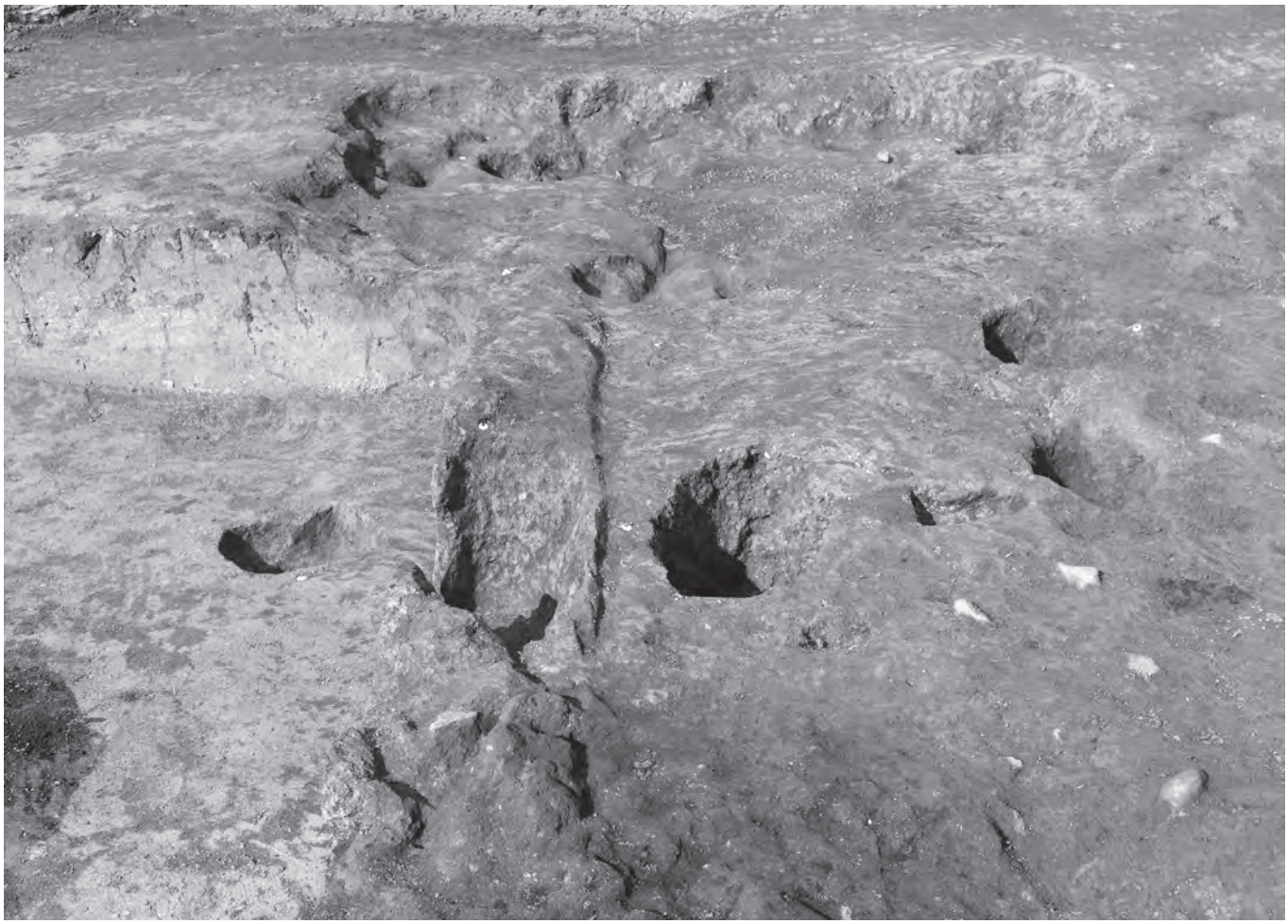
2．1区2号竪穴建物土層断面A-A′（西から）

3．1区2号竪穴建物炉全景（東から）

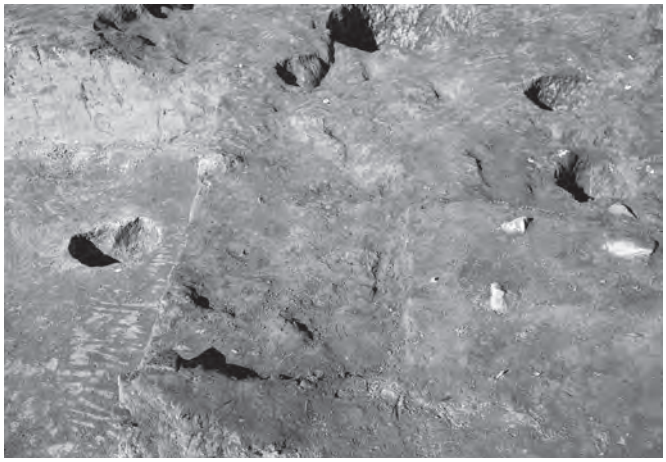
4．1区2号竪穴建物炉土層断面南西F-F′（東から）



5．1区2号竪穴建物炉下層土層断面F-F′（東から）

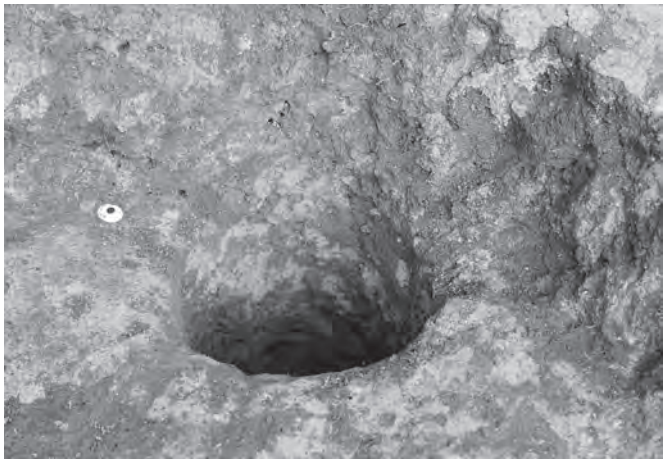


1．1区２号竪穴建物下部構造全景(南から)



2．1区２号竪穴建物炉掘方全景(南から)

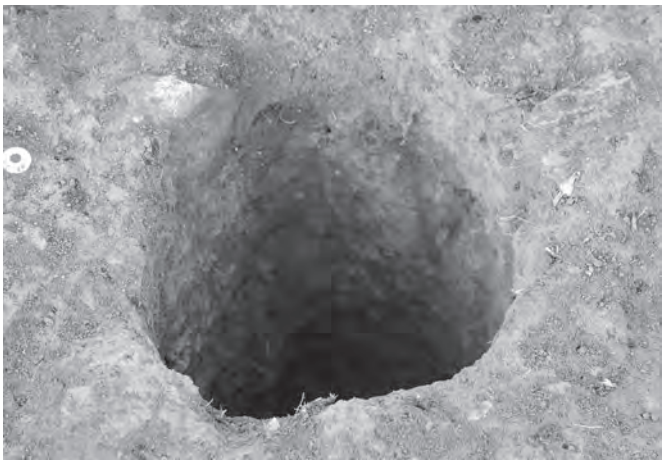
3．1区２号竪穴建物ピット１土層断面西B–B′(南から)



4．1区２号竪穴建物ピット２全景(南から)

PL.24

1．1区2号竪穴建物ピット2土層断面C-C′（南から）



2．1区2号竪穴建物ピット3全景(南から)

3．1区2号竪穴建物ピット3土層断面D-D′（南から）

4．1区2号竪穴建物ピット4全景(南から)

5．1区2号竪穴建物ピット4土層断面E-E′（西から）

6．1区2号竪穴建物ピット5土層断面M-M′（南から）

7．1区2号竪穴建物ピット6土層断面N-N′（南から）

8．1区2号竪穴建物ピット7土層断面(西から)

1．1区3号竪穴建物全景(南から)

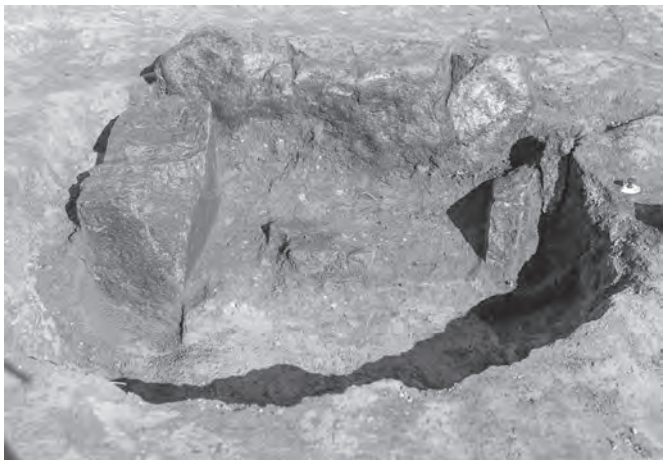
2．1区3号竪穴建物土層断面A-A′(北から)

3．1区3号竪穴建物炉全景(西から)

4．1区3号竪穴建物炉全景(南から)

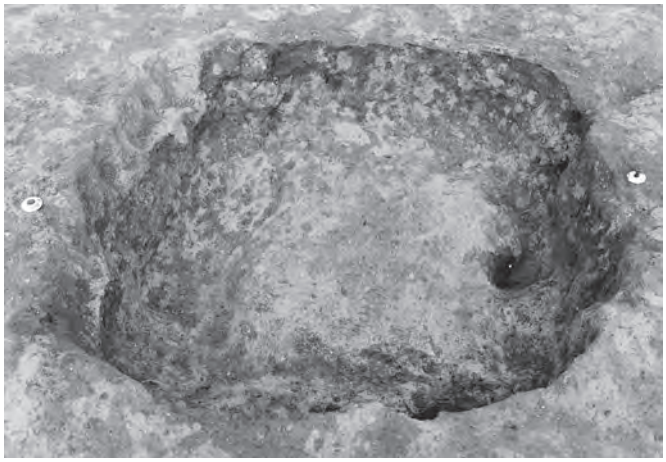
5．1区3号竪穴建物炉土層断面I-I′(西から)

PL.26

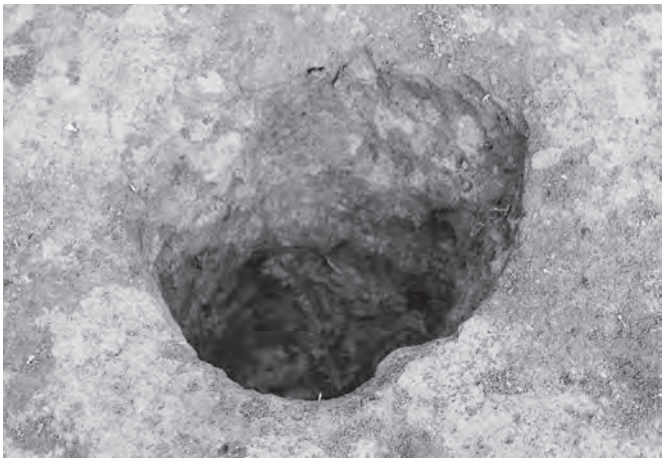


1．1区３号竪穴建物炉掘方土層断面I-I′（西から）

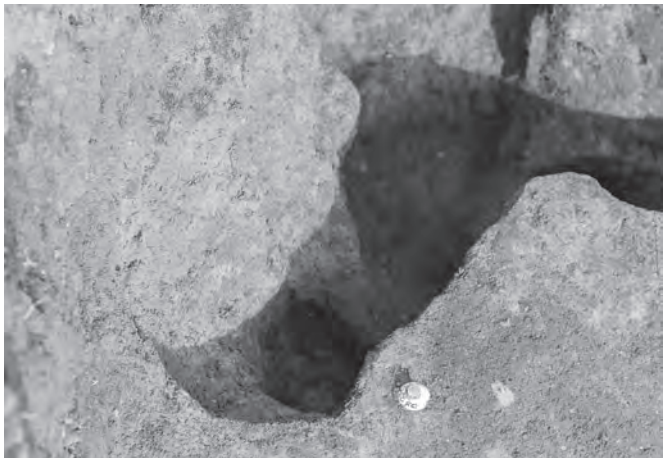
2．1区３号竪穴建物炉解体状況（西から）



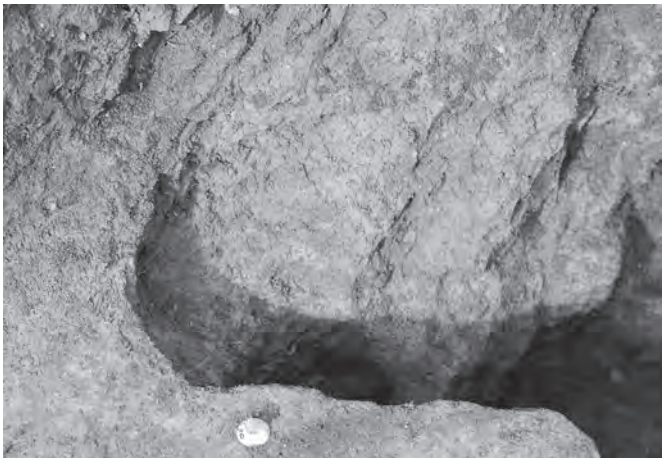
3．1区３号竪穴建物炉掘方全景（西から）



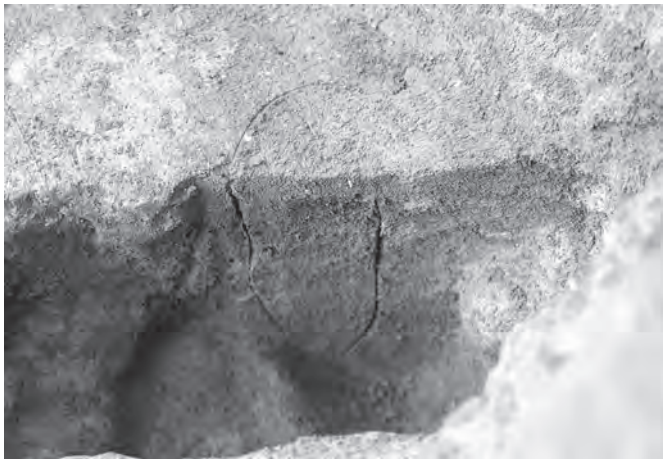
4．1区３号竪穴建物ピット１全景（西から）



5．1区３号竪穴建物ピット２全景（西から）



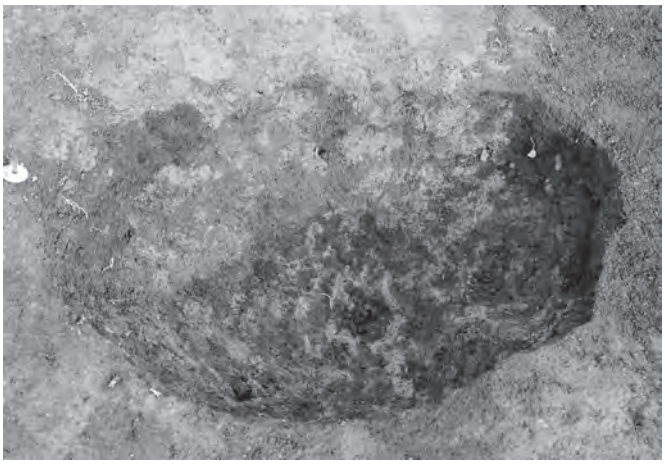
6．1区３号竪穴建物ピット２全景（南から）



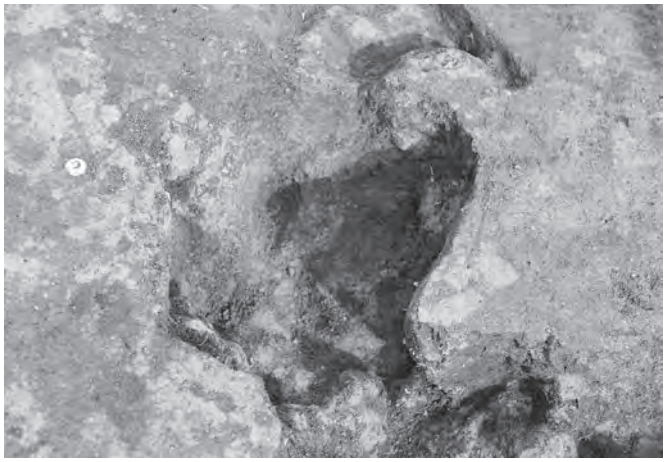
7．1区３号竪穴建物ピット２土層断面D-D′（東から）

8．1区３号竪穴建物ピット３・４全景（西から）

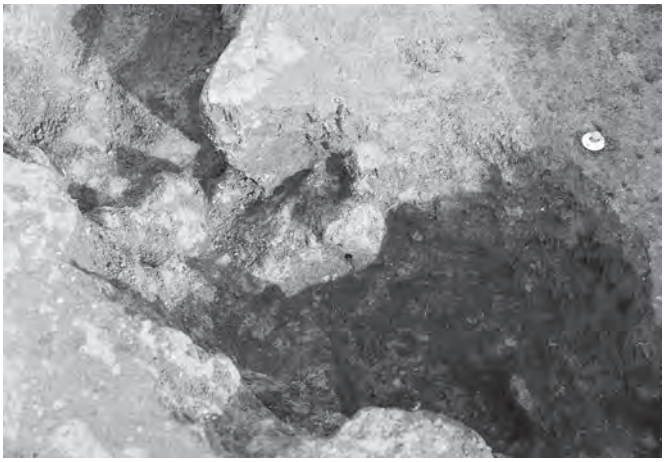
1．1区３号竪穴建物ピット５全景(西から)



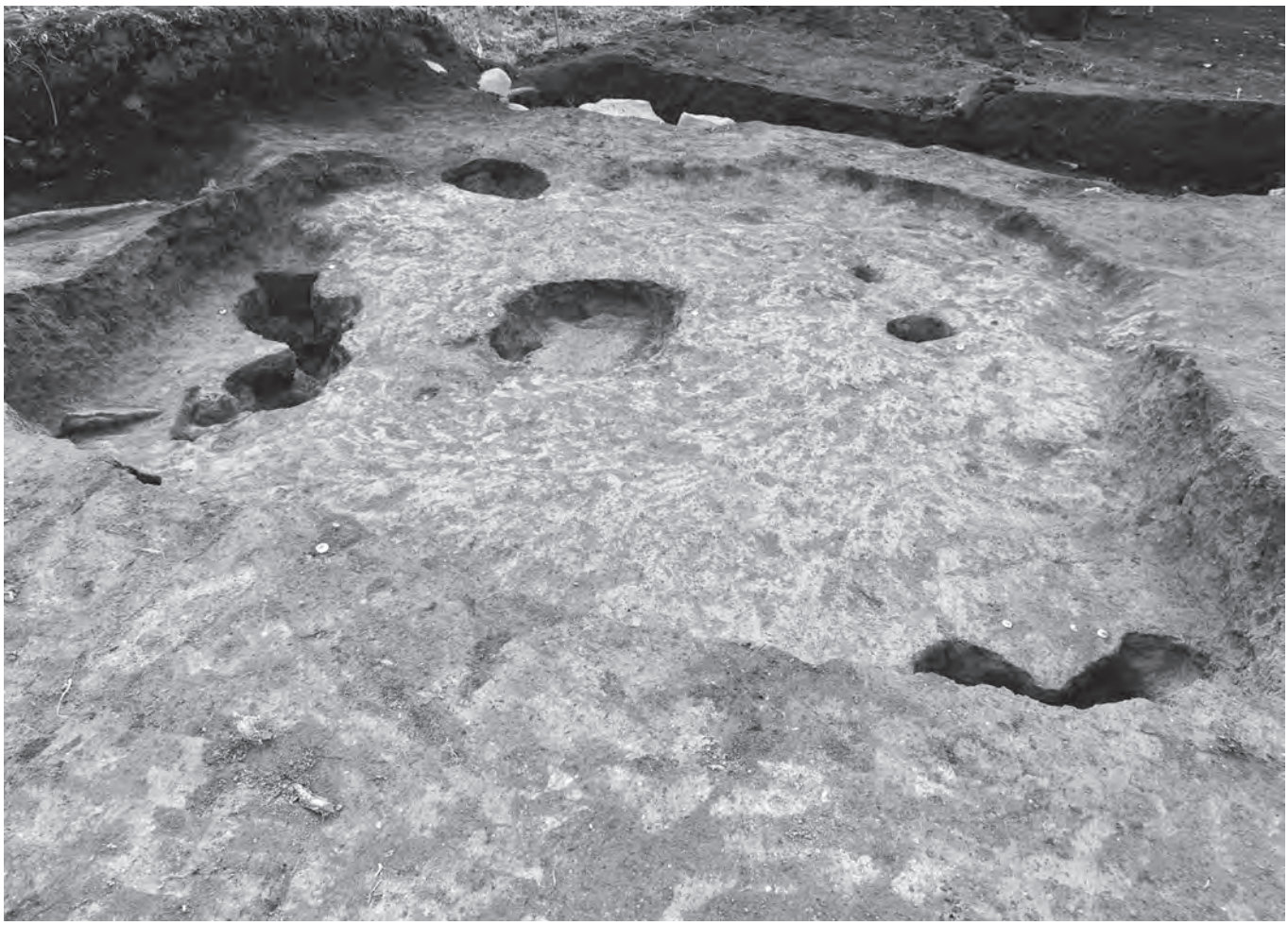
2．1区３号竪穴建物ピット６全景(西から)



3．1区３号竪穴建物ピット７全景(西から)



4．1区３号竪穴建物ピット８全景(西から)



5．1区３号竪穴建物下部構造検出状況(東から)

PL.28

1．1区5号竪穴建物全景（南から）

2．1区5号竪穴建物炉周囲全景1（西から）

3．1区5号竪穴建物炉周囲全景2（南から）

4．1区5号竪穴建物炉周囲全景3（南から）

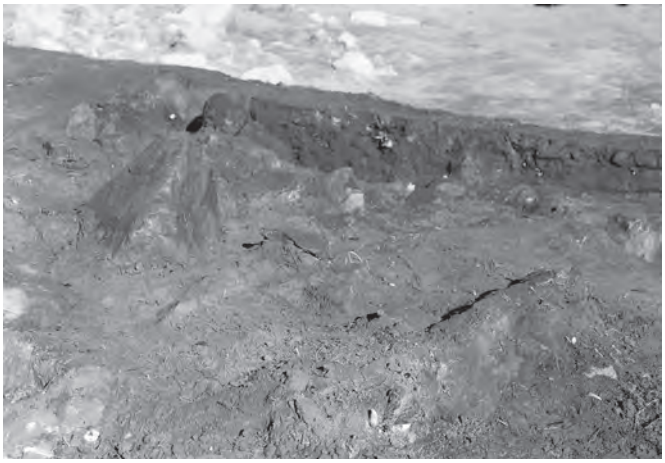
5．1区5号竪穴建物遺物出土状況（南から）

1．1区５号竪穴建物炉、敷石検出状況(東から)

2．1区５号竪穴建物炉土層断面(東から)

3．1区５号竪穴建物炉掘方全景(東から)

4．1区１号屋外炉検出状況１(西から)



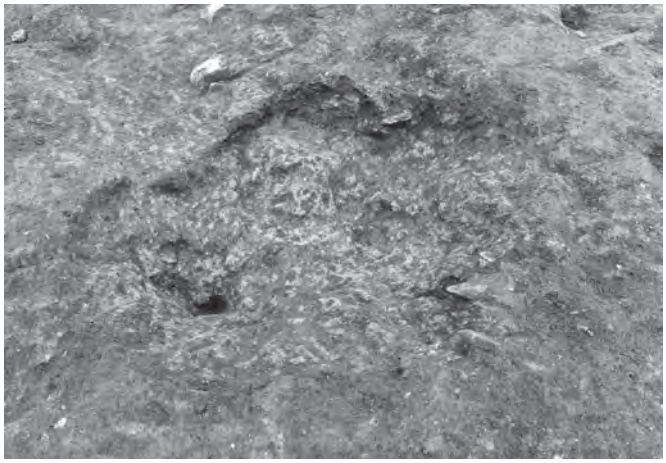
5．1区１号屋外炉検出状況２(西から)

PL.30

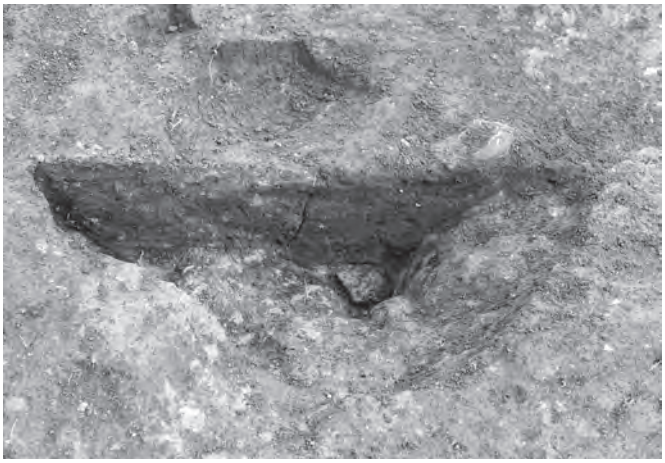
1．1区1号屋外炉全景(南から)

2．1区1号屋外炉土層断面(東から)

3．1区1号屋外炉解体状況(南から)



4．1区1号屋外炉掘方全景(西から)

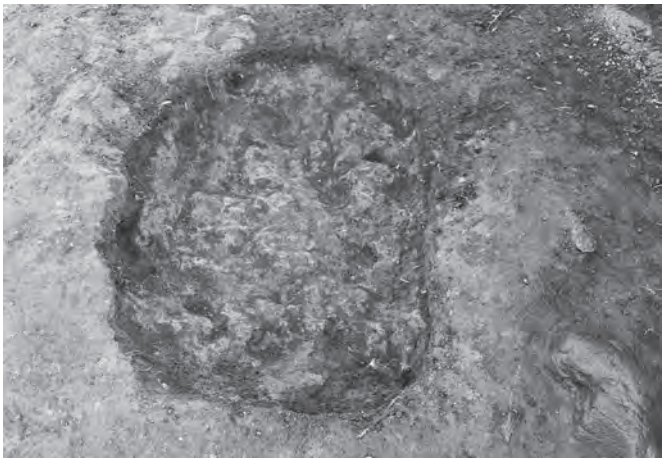


5．1区1号屋外炉掘方土層断面(南西から)

1．4区10号土坑全景(西から)

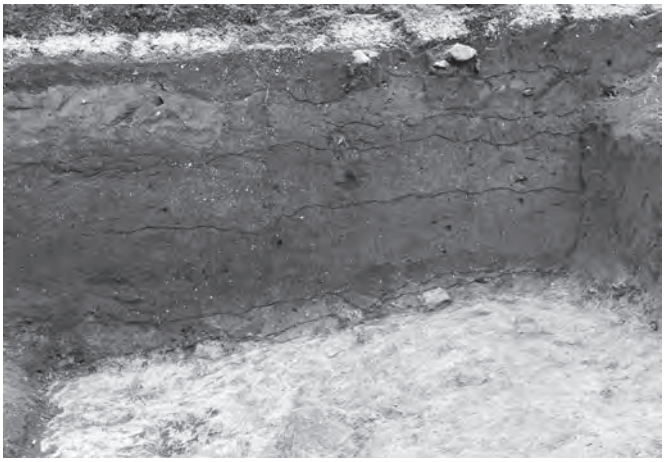
2．4区10・11号土坑土層断面A-A′(南から)

3．4区11号土坑全景(南から)



4．1区19号土坑全景(西から)

5．1区19号土坑土層断面A-A′(北から)



6．2区1号河道土層断面A-A′(南から)

7．2区1号河道河床検出状況1(北から)

8．2区1号河道河床検出状況2(西から)

PL.32

1．2区1号河道全景(南から)

2．2区弥生時代前期壺型土器出土状況(西から)

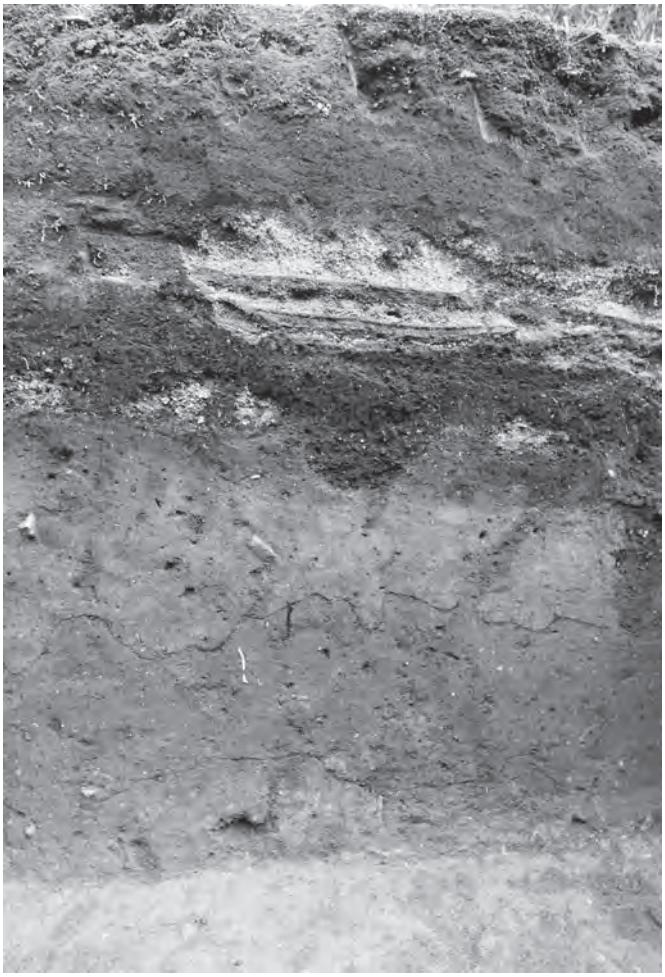
1．1区旧石器確認調査4号坑(南から)

2．1区旧石器確認調査5号坑(南から)

3．1区旧石器確認調査6号坑(南から)

4．4区旧石器確認調査1号坑(東から)

5．2区北壁土層断面(南から)

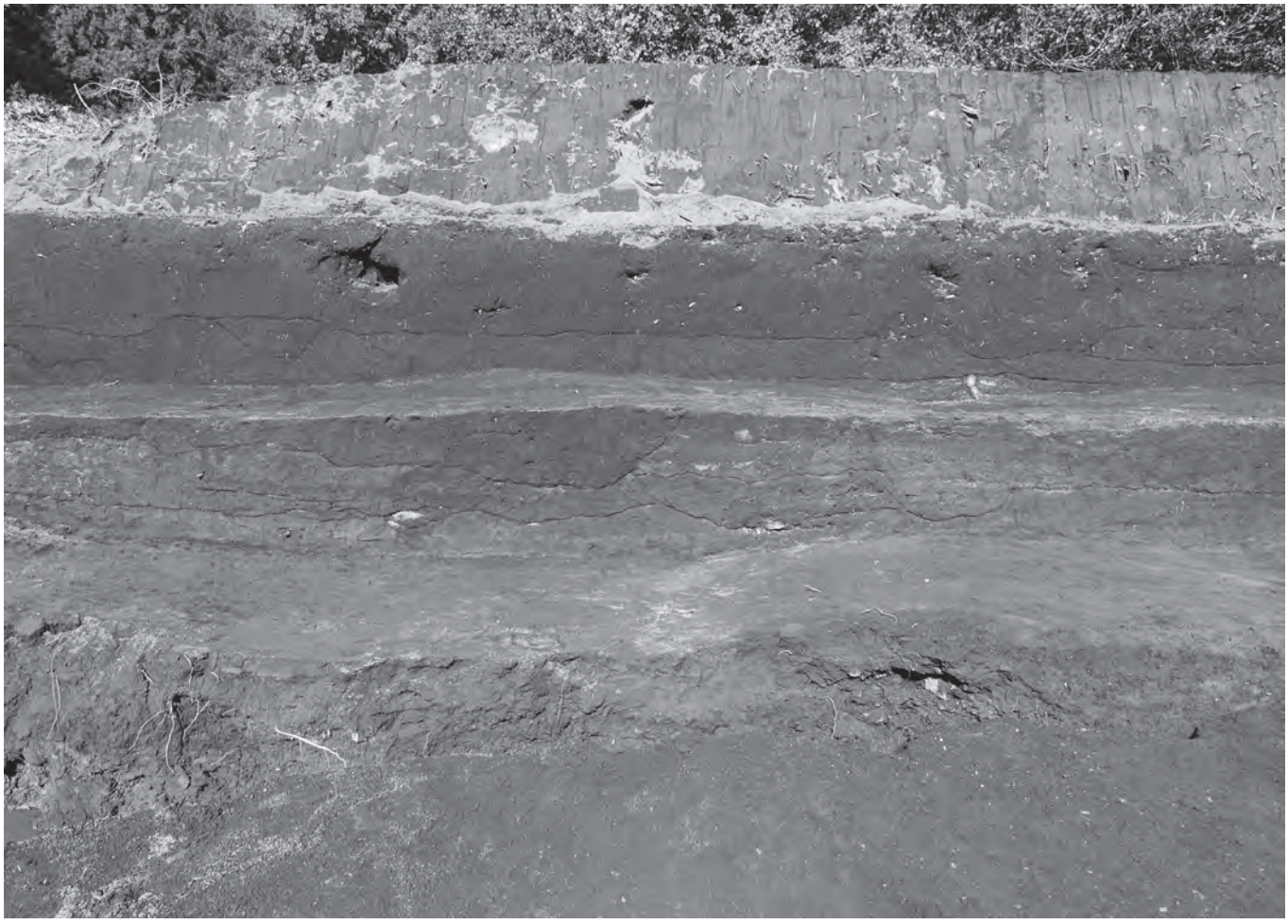


6．2区南壁土層断面(北から)

PL.34

1．1区東壁土層断面(西から)

2．4区南壁土層断面(北から)

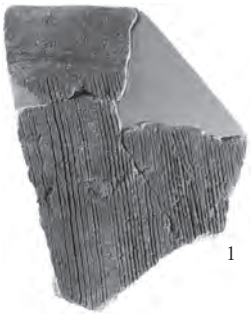


3．3区北壁土層断面(南から)

1区5号土坑

1

1区9号土坑


1

2

1区26号土坑

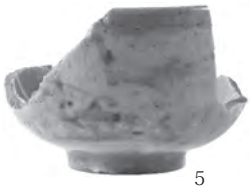
1

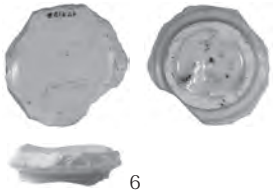
2

1区1面遺構外

3

4


5


6

7

8

9

10

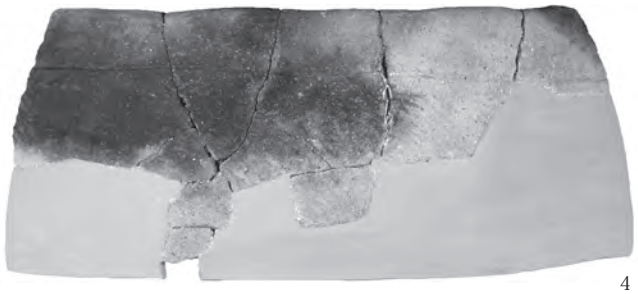
11

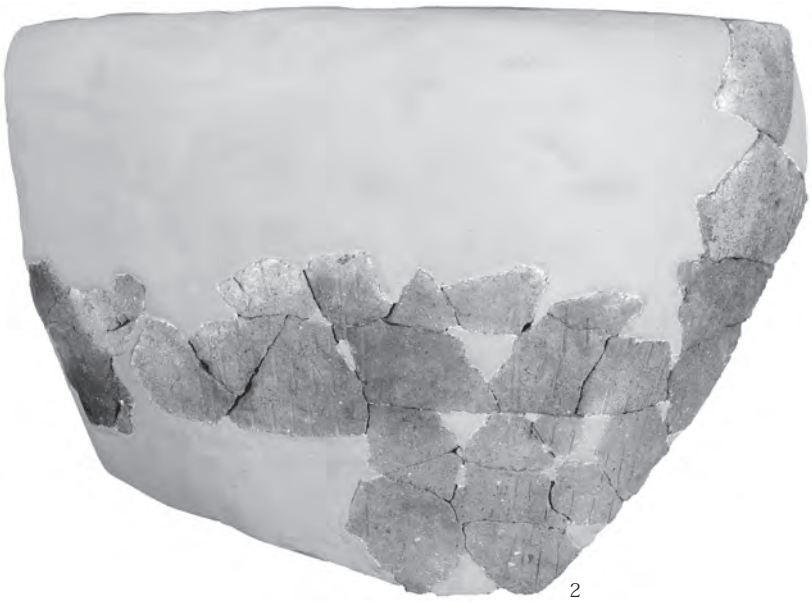
1区5・9・26号土坑出土遺物、1区1面遺構外出土近世遺物

PL.36

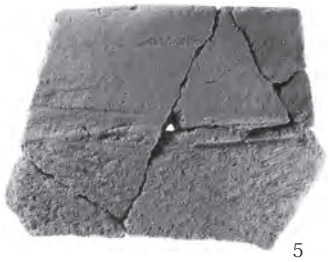
1区2号竪穴建物（1）

1


4


2

3


5

6

7

8

9

10

11

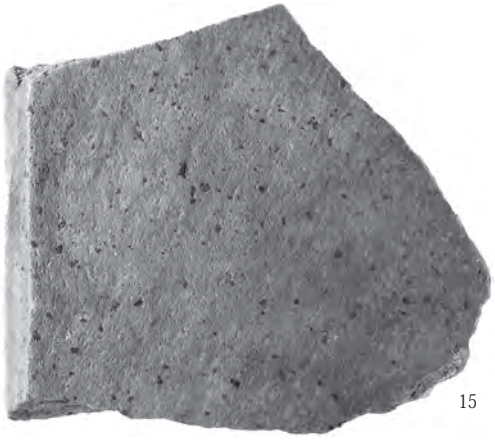
12

1区2号竪穴建物出土遺物（1）

1区2号竪穴建物（2）

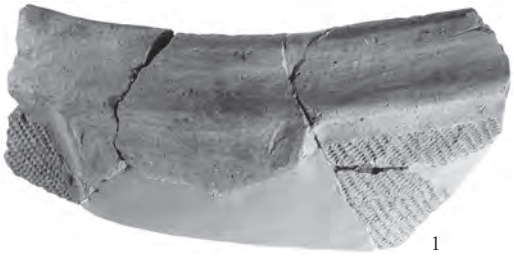
13

14


15

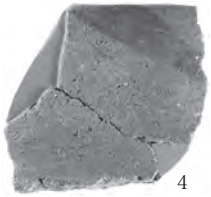
16

1区3号竪穴建物（1）


1

2

3


4

5

6

7

8

9

1区2号竪穴建物出土遺物（2）、3号竪穴建物出土遺物（1）

PL.38

1区3号竪穴建物（2）

10

11

12

13

14

15

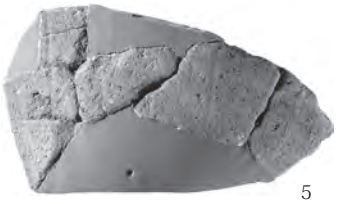
16

1区5号竪穴建物

1

2

3


5

6

4

7

8

9

1区1面遺構外

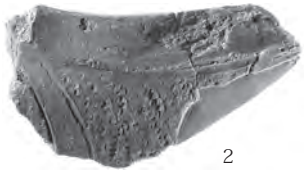
1

2

1区3号竪穴建物出土遺物（2）、5号竪穴出土遺物、1面遺構外出土縄文時代遺物

1区2面遺構外(1)

1


2

3

4

5

6

8

7

9

10

11

12

13

14

15

16

17

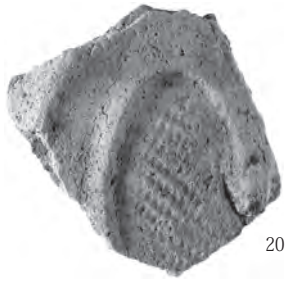
18

19

1区2面遺構外出土遺物(1)

PL.40

1区2面遺構外（2）


20

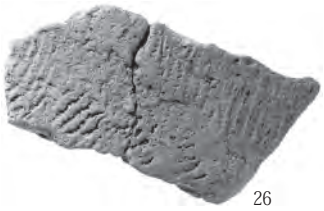
21

22

23

24

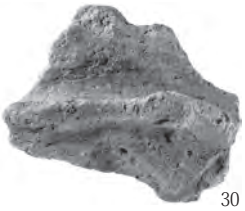
25


26

27

28

29


30

31

32

33

34

35

36

37

38

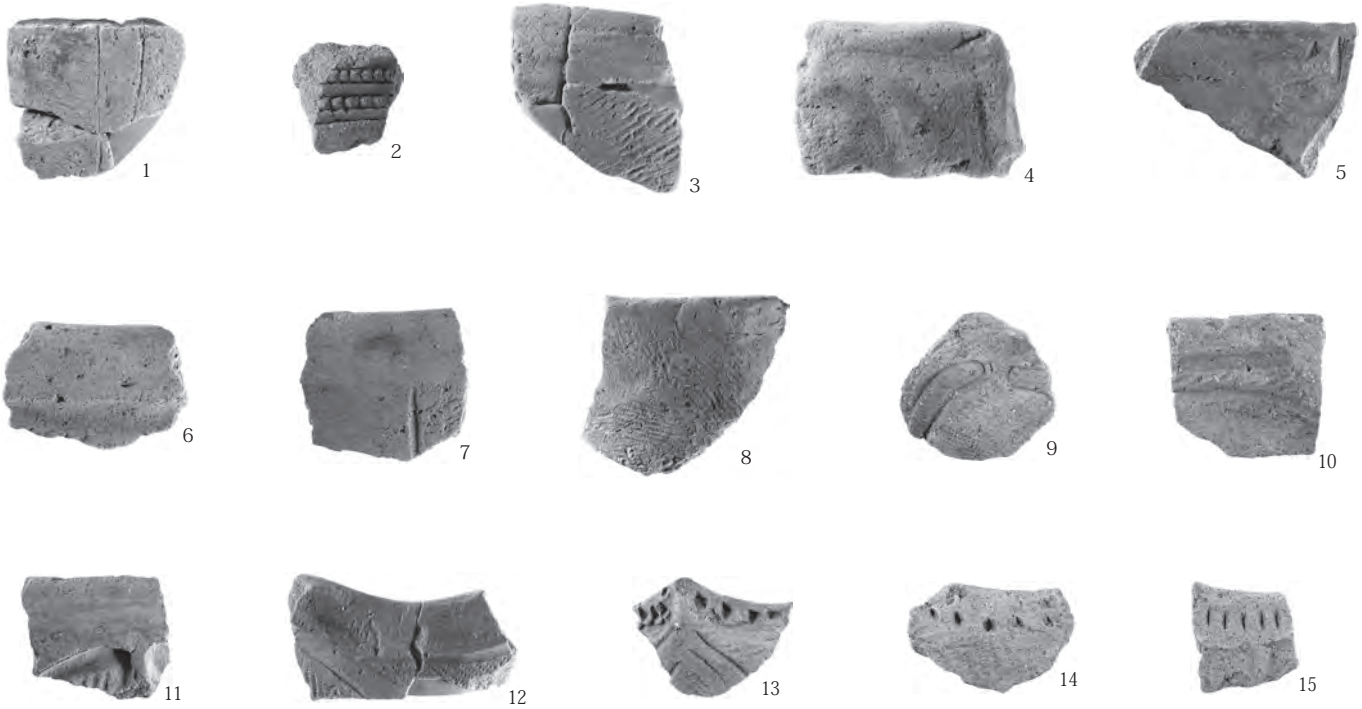
39

1区2面遺構外出土遺物（2）

2区2面遺構外(1)

64

59


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15

2区2面遺構外出土遺物(1)

PL.42

２区２面遺構外（２）

16

17

18

19

20

21

22

23

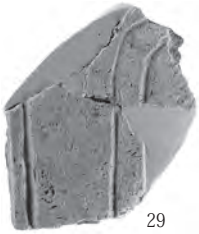
24

25

26

27

28


29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

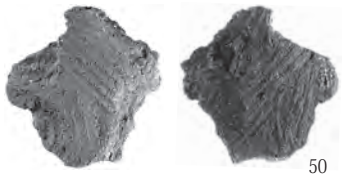
47

48

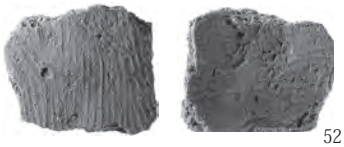
49

２区２面遺構外出土遺物（２）

2区2面遺構外（3）


50

51


52

53

54

55

57

58

56

60

61

62

63

65

66

67

70

68

71

72

73

74

75

69

2区2面遺構外出土遺物（3）

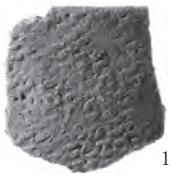
PL.44

3区1面表土

1

2

4区2面遺構外


1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

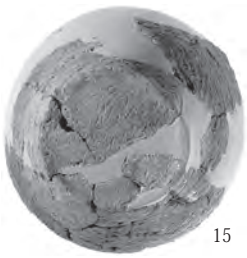
11

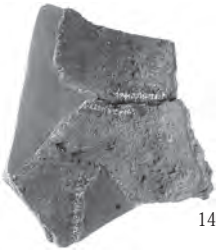
12

13

16

17


15


14

18

3区1面表土、4区2面遺構外出土遺物

報告書抄録

書名ふりがな	なかむろだいわきいせき
書　　名	中室田岩城遺跡
副 書 名	榛名南麓２期地区農山漁村地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	659
編著者名	高島英之
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20191126
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住　　所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	なかむろだいわきいせき
遺 跡 名	中室田岩城遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしなかむろだまち
遺跡所在地	群馬県高崎市中室田町
市町村コード	10202
遺跡番号	1405
北緯(世界測地系)	36.40308702
東経(世界測地系)	138.8718879
調査期間	20181001-20181130
調査面積	3,187
調査原因	道路建設
種　　別	集落
主な時代	縄文時代早・中期、時期不明（近世以降？）
遺跡概要	縄文時代早期－屋外炉１＋土坑１、縄文時代中期－竪穴建物３、縄文時代－土坑２＋河道１、時期不明－柵１＋土坑29＋ピット22
特記事項	高崎市室田地区で初めて検出された縄文時代中期の敷石竪穴建物、群馬県内では出土事例がまれな弥生時代前期の完形の壺と弥生時代前～中期の土器片約30点が出土した。
要　　約	群馬県南西部に位置する高崎市中室田町において、榛名南麓２期地区農山漁村地域整備事業に伴って平成30年度に調査された中室田岩城遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。遺跡は群馬県中西部に聳える榛名山の南麓を北西から南東に流れる碓井川の北側に位置しており、碓井川の支流で室田台地の間を南流する岩城川東岸の台地上に立地している。上面からは時期不明の柵１条、土坑29基、ピット22基が、下面からは縄文時代早期の屋外炉１基と土坑１基、縄文時代中期の竪穴建物３棟、縄文時代の土坑２基などが検出された。縄文時代中期の竪穴建物３棟は敷石竪穴建物と考えられる。高崎市室田地区においては初めての縄文時代の敷石竪穴建物の検出事例として注目される。また、遺構は検出されなかったが、群馬県内では出土事例が少ない弥生時代前期～中期の土器が、完形の壺１点を含めて約30点出土していることも特筆される。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第659集

中室田岩城遺跡

榛名南麓２期地区農山漁村地域整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

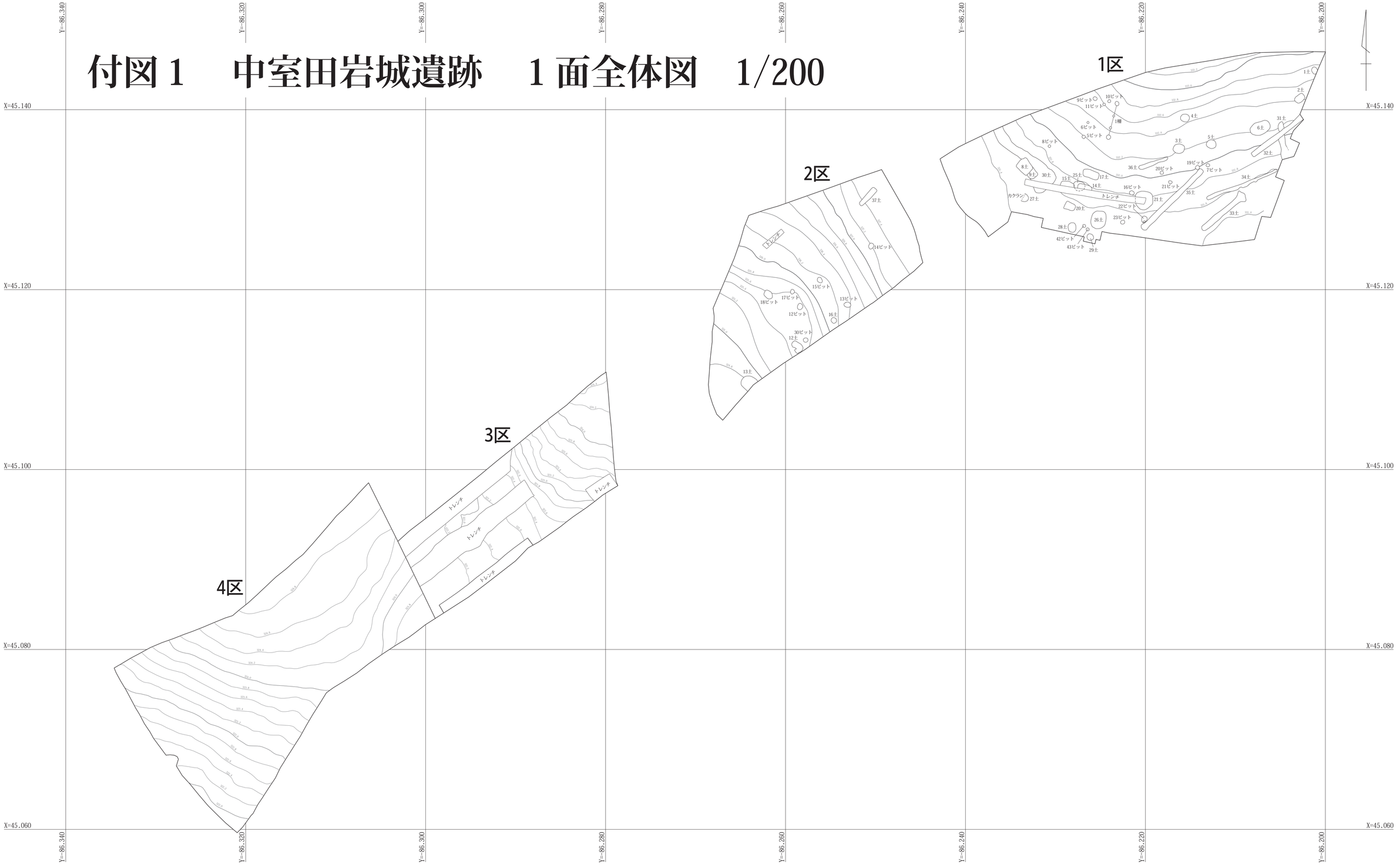
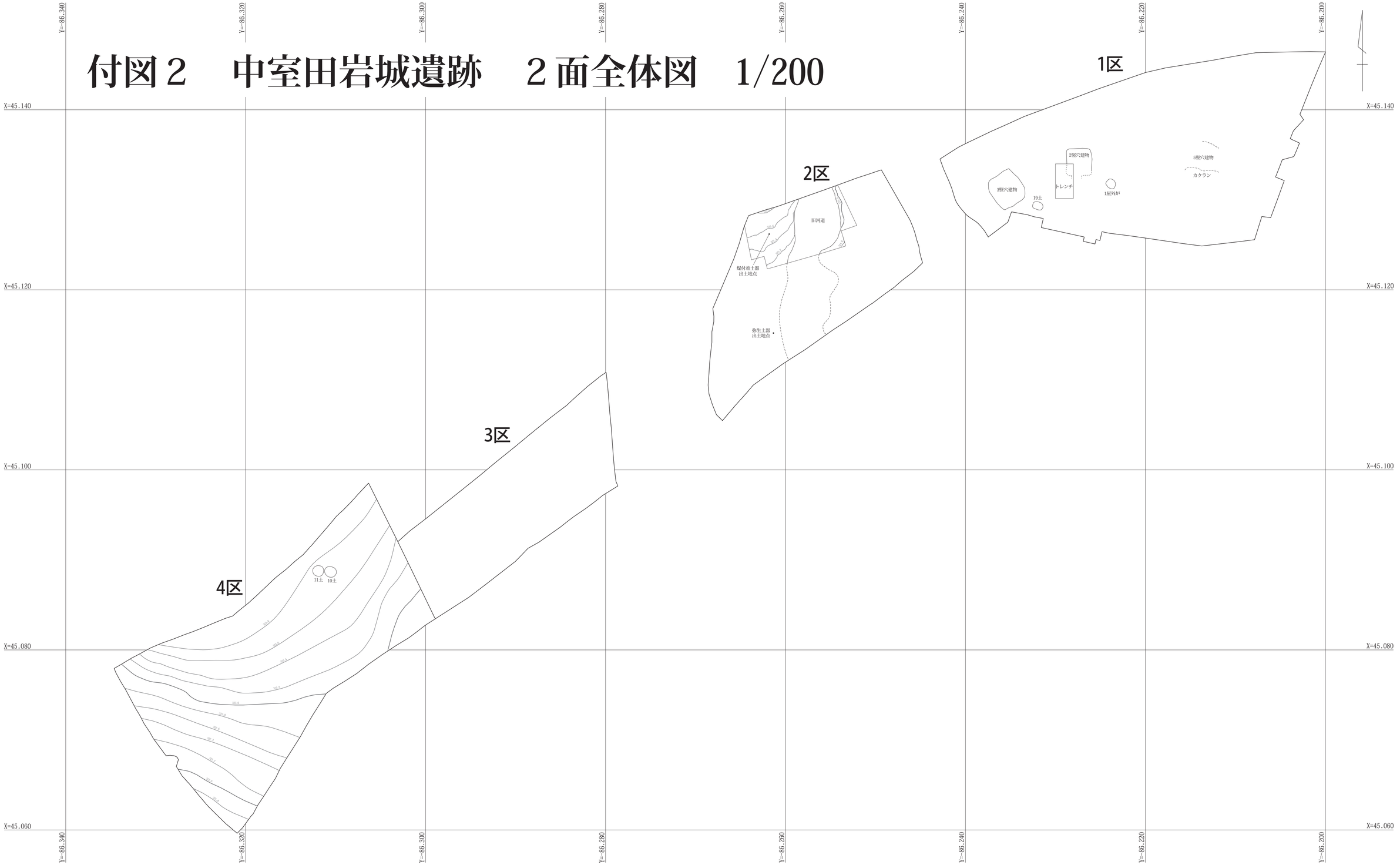
令和元(2019)年11月22日　印刷
令和元(2019)年11月26日　発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
電話(0279)52-2511(代表)
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印刷／第一印刷株式会社

付図１　中室田岩城遺跡　１面全体図　1/200



付図２　中室田岩城遺跡　２面全体図　1/200